吉川英治歴史時代文庫 56

新・平家物語（十）

吉川英治歴史時代文庫 56

新・平家物語(十)

一九八九年 八 月十一日第一刷発行
一九九二年十二月十六日第七刷発行

著者――吉川英治
発行者――野間佐和子
発行所――株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
郵便番号一一二―〇一
電話 編集部 〇三―五三九五―三五〇五
販売部 〇三―五三九五―三六二六
製作部 〇三―五三九五―三六一五

印刷――凸版印刷株式会社
製本――株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えします。
定価はカバーに表示してあります。

Printed in Japan ISBN4-06-196556-5

吉川英治歴史時代文庫

56

平家物語（十）

講談社

目　次

新・平家物語

（十）

一門都落ちの巻（つづき）

ただよう平家

海ばらは、いちめん、雲母の霧だった。

明るいが、青いやみである。一条の潮路だけが、月光を溶かし、燿々と銀波をそよぎ立てている。

寿永二年の、その夜は、九月十三夜の月。

幾十艘とも知れぬ帆船の黒い翼が、外洋の響灘から、海峡へはいって来た。——いうまでもなく、長門の赤間ケ関と、豊前の門司ケ関とが対い合っているあの水路の島々を縫い、北々東へ舵を取って来たものである。

中でも大きな船影は、あきらかに軍船であった。胴ノ間を楯でかこみ、屋形、幕囲い、櫓には、汐見武者の影がじっと小手をかざしている。

六連ノ島々も、遠い後ろになると、船団の速度も帆布も急にたるんでいた。そして長い磯波をすそとした豊前の陸影が、右舷に、近々と見えている。

「おう、月のかなたは長門の国、ここは豊前の山蔭の磯ぞ。門司ケ関もほど近そうな」
「なに、柳ノ浦へ、はや着くのか」
身は横たえても、馴れない浪枕に、寝もやらずにいたらしい人びとは、それと聞くや、みな、むくむくと身を起こした。
左馬頭行盛、薩摩守忠度、武蔵守知章、能登守教経など三、四十名の公達武者が、幕を一つに、雑魚寝していたのである。
「いやいや、ここはもう豊前なれど、柳ノ浦へは、まだ間がある。夜の白むまでは、なおお横になって、眠っておられたがよろしかろう」
山鹿秀遠の弟、山鹿六郎正遠が、人びとのあせりを諭した。
六郎正遠は、九州の山鹿一族である。兄秀遠とともに、落人船の船列に乗りわかれ、水路案内を勧めていたのだった。その正遠の言では、信じないわけにゆかない。
だが、たれも再び横になろうとはしなかった。どの顔も、まだ追われているような敵中の眼をそのまま持っている。
「浪枕とは、よくいうたもの。去ぬる七月、都を落ちてより、西海のあなたこなたを、ずいぶん漂い巡ったが、いまだに、船の上ではよう寝馴れぬ……」
どこかで、ひとりごとめいたつぶやきがしたのへ、たれか、相づちを打つ声もする。
「……そうだ。柳ノ浦とやらへ着いたら、欲も得もない、ただ土へ背をつけて、眠れるだけ眠りたいのう」

すると、べつな一人が、
「いや、そことて九州のうち、落ち着くまもなく、博多、大宰府、松浦などの敵勢が、前にも増して、襲せて来ようぞ。しょせん、物具解いて、休むひまもあるまい」
　と、なげいていった。
　みな、黙ってしまった。
　たった一つの欲望——眠る——ということすら今はままにならないのかと。
　つい、ふた月ほど前の、西八条や六波羅の暮らしなどは、もう遠い遠い過去のかなたにかすんでしまい、疲れきった肉体とこの渺々とした西海の夜景のなかでは、思い出そうとしても思い出せないほどである。
「今さらいうも効いないことだが、なぜ内大臣の殿（宗盛）には、都落ちの前に、もっと早く、院後白河を、平家方へ取り籠めておこうとはなされなかったのか。……返す返すも、それだけが、不覚よ。くちおしいことではあった」
　若い行盛と教経とのあいだで、ついまた、その愚痴が、くり返された。
　幼い天皇は、自分らの中におつれ申しあげて来たが、かんじんな法皇後白河を、逸したために、以後、どれほど不利を招いたことか。平家の禍いとなったことか。はかりしれない。ゆうべからの、この九州落ちも、そのためである。
　いや、都を落ちてから、かくも漂泊また漂泊の流亡をたどって、いまだに居着く地を得られないのも、みな、その一つの手違いにあったといっても過言ではない。

そしてそれは、ただ一人の総領殿（宗盛）のせいである。言語道断な手抜かりとも、情けない暗愚とも、いいようのない失策だった。お人が好いゆえなどと、あきらめてはいられない。
「よく、総領のなんとやら俗に申すが、こうなっても、内大臣の殿のお姿には、さして窶れも痩せもみえぬ」
「こよいとて、船屋形にはいったまま、深々と、よう眠ってござるがの。歯がゆいことだ」
「まるで、野猪か陽溜りの犬のように」
いまいましさが、ついその人への、口汚い誹りにもなるのだった。
すると、すみの帆柱の下で、
「左馬殿、能登殿、ちとお口が過ぎよう。鄙に下ればとて、余りに、鄙びた戯れ口は申されぬもの」
と、静かにたしなめる人がある。
背を帆柱にもたせて、居眠るごとく眼をふさいでいた平大納言時忠だった。
そのわきの帆綱を積んだ所には、一門の中の最年長者、修理大夫経盛が、体も心も綱の山にあずけてうつ伏していた。すぐ側の時忠の声に、ふと、翁の仮面のような眉を上げたが、興もなげに、また、折り曲げた両肱の中にその面を埋めてしまった。

事、ことごとく志に違う——とは、都を離れてからの、一門平家のすがただった。
初め、平家が西走の目標地としては、
(筑紫の大宰府へこそ)
と、たれにも考えられたことだった。
(九州こそは、平家恩顧のともがらも多く、頼むべき、有縁の豪族もある地なれば
——)
と、一路筑紫へ、下ったのである。
主上安徳、おん母建礼門院のお二方を奉じ、三種の神器をも擁して臨むからには、当然、九州土着の武族は挙げてこれをお迎えし、大宰府に内裏を造営して、たちまちに、〃筑紫の都〃が出現しよう、と考えたのだ。
後白河のあがきも、源氏の攻勢も、九州までは、届きえまい。その間に、後図をめぐらし、*捲土重来の日を、悠々、養うこともできる。
宗盛、経盛、時忠などの分別も、公達や侍ばらの夢もみな、それには一致していた。
ところが、行き着いた大宰府では、夢は事々に、破られた。
豊後の国司、刑部卿三位頼資などは、
(大宰府に内裏を造営しまいらすなど、思いもよらぬ)
と、まっ先に反対をとなえ、
(都より院の御飛脚な降って、平家一門は、すでに位階官職も召し解かれたる浪人な

れ、構えて、寄せつけるな、九州の内より追い出し候え、との御諚なるに）

と、国中へ布告して、亡命平家への協力を、陰に陽に、牽制した。

このため、初めは、天皇守護に傾いていた緒方党、松浦党、戸次党、臼杵党など、つぎつぎに離脱してゆき、一門流離の人びとは、今さらのように、

（あわれ、ここも頼みがたき世間のうちか）

と、世情のきびしさに、おののいた。

だがここに、ただ一人、太宰権少弐原田種直だけは、清盛の在世中から歿後も、その志操に、すこしも変るふうがなかった。

こんども、都落ち以来、一門の中にあって、つねに苦憂をともにし、九州は自分の郷国でもあるので、率先主上の御案内を勤めて来たわけであったが、郷党たちの意外な反撥に出会ったので、

（畏れ多けれど、ぜひなき儀、このうえは、一時、わが家を、仮の行宮になし給え）

と、自分の館を、主上以下、供奉の面々に提供して、おのれは附近のいぶせき田舎寺に移っていた。

主上さえそんな有様なので、一門の公卿、武将、女房たちは、土民の家々へ住み別れたものの、暮らしのみじめさ不自由さ、いうまでもない。

そのうえ、豊後の国司頼資は、弟の野尻次郎惟村を、使いに立てて、再三、

（どうか、九州の外へお立ち退きねがいたい。ぜひなくば、弓矢をもって、追っ立て参

らすやも知れまい）

と、いわせた。

よいほどに、あしらっておいたが、ついに平大納言時忠が、自身、惟村に会って、最後的な答えを与えた。

（一天の下、いずこに内裏をおかれようと、指図はまたぬ。そも、御辺の兄、頼資とは、何人なるか。もとは大納言忠教が子、平家のおすすめにて、豊後の国司になった者ではないか）

これは、たしかである。

惟村も一言もない。

総じて、国司の頼資ばかりでなく、九州平氏と目されていた人びとの多くは、たいがい清盛の在世時代に、領地を得たり職についたり、清盛のために、官途にのぼった人たちである。

かつて、清盛も若年中は、ここの太宰大弐を勤めたことがあり、またたびたび、九州の反乱騒ぎで、兵を送ったこともある。後に、福原と宋国との貿易が盛んになってからは、なおさらその往来は密接になり、大宰府とか博多の港は、一時、平家の分家の府といってよいほどだった。

だからこの地方の、原田種直も、緒方惟義も、小松殿（重盛）とは姻戚をむすび、菊池、松浦の諸党も同様に、あかの他人ではない。おのおの、何かのかたちで、平家とは

深く結ばれて来たのである。

(さるを、昔は昔、今は今と、いかに利ばかりの思慮とは申せ、鼻豊後が申し条、余りにも憎てい至極。——われら、九州を立ち退くなど、思いもよらず、弓引くならば引いてみよ。——きっと思い知らせんずと、立ち帰って、鼻豊後に申すがよい)

時忠は、いかめしくいい懲らして、惟村を追い返した。

〝鼻豊後〟というのは、頼資のあだ名である。「——コノ人、極メテ鼻ノ大キカリケレバ」と当時のものにも見えるし、また尊大な国司振りの陰口にもなっていたらしい。

鼻豊後は、大いに怒った。

そしてついに、酸鼻なる大宰府攻めが決行されたのである。

緒方三郎惟義を大将とし、野尻惟村兄弟、ほか郷党をかりあつめ、大軍をすすめて、大宰府を襲撃した。

何しろ、流亡早々である。まだ武備というほどな武備もない。

幼い主上、女院、二位ノ尼、そのほか、たくさんな女房や女童もつれていることではあったし、「すわ」と筑前、豊後の境まで防ぎに向かった味方の——左中将清経、源大夫判官季貞、摂津判官守澄なども、たちまち、打ち破られて帰ったので、眼もあてられない混乱となった。

(さしもの天満天神も、弓矢の頼みにはならぬ)

恨めしげに、一門は、大宰府を去る覚悟をきめた。幼い主上と御母と、二位ノ尼だけ

を、手輿に乗せまいらせる。そして、あとの女房や女童たちは、袴の裳をくくって、兵のあいだを、ともに馳けるもあり、馬上の人に抱えられて行くのもあった。

内大臣の殿と仰がるる宗盛以下、きのうまでの、*卿相雲客も、わら沓、わらんじを穿き、指貫（袴）の端を高く取って、われ先にと、野や山を落ちて行くのであった。

夜もとおして、箱崎（博多湾）の海まで出たが、ここはなお鼻豊後の国庁に余り近い。

その日は、大風雨になったので、一日中、箱崎八幡の神殿や森蔭にひそみ、次の日からさらに、香椎、宗像、垂水越えと、逃げられるかぎり逃げのびて行った。

このあいだの艱難は、言語に絶するものがあった。肌着の下まで雨に濡れ、飢え、疲労、悪路、追われる不安など、殿上に生まれた身には、どれ一つといえ、初めて知る辛さでないものはない。

――が、幸いにも、筑前遠賀郡の山鹿兵藤次秀遠という者があって、部下千余騎をつれ「お味方に参ったり」と、途に迎えて、平家一門とその同勢を、山鹿の城へ匿まった。

一時、蘇生の思いをしたものの、山鹿も決して安全ではない。まもなく、敵の来襲が聞こえた。前にもました大軍だという。

山鹿秀遠は、遠賀川の川尻、芦屋の浦に、数十艘の船を仕立てた。そして弟の正遠とともに二人して水路案内をつとめ、

（門司ケ関まで落ち給わば、周防、長門の輩も馳せつけ、四国、淡路のお味方とも、結

ぶことができまする。ひとまず、豊前の柳ノ浦まで、おん供いたしましょうず。――後の計はそのうえにて）

と、全平家の運命を乗せて、海上へのがれ出たのであった。

といっても、主上、女院、一門の人びと以下、将士は三千足らずであった。福原を出た後も、次第に兵は減るばかりだったし、大宰府で四散した味方も、海と陸とに、ちりぢりのまま、その消息も、さだかでない。

（せめて、柳ノ浦では、離散した味方をまとめ、また、新たな味方へも呼びかけ、再起の軍を立て直さねば）

と、今はただその程度が、わずかに、つなぎうる一縷の希望だった。

宇佐祈願

十三夜の月は、晃として、まだ海峡の上にあるし、潮流のせいか、船あしも、遅々と、はかどらない。

さっき、平大納言時忠に、たしなめられた公達武者の一かたまりは、また、眠ったように黙りあっていた。

しかし、眠ったのではない。やがて一人が、眼を上げて、あたりを見まわすと、ほかの眸も、みな物思わしげに、かなたを見て、

「また、お苦しみのような……？」

と、つぶやいた。

船屋形の帳のうちから、しきりに、幼い主上のコンコンと咳込むお声がもれていたのである。

先ごろの風雨に打たれ給うて、幼帝は、すっかり、お風邪を引きこんでしまわれた。毎夜、きんきんと尖ったお咳に苦しまれるため、おん母の建礼門院までが、寝不足になり、傷々しいほど、母子ともに、お窶れだった。

「こよいは、わけて、おひどいようだの。船の上では、どうお手当の術もないし」

「この潮風と、波の上に、夜どおし、お冷えになっては無理もない」

「まして、都の宮居におわせば、珠の台、錦の御帳、風にも当てじと侍かれ給う玉体を」

「ああ、辛い」

たれかが呻くようにいった。

「――それにつけ、われら平家が、盛り返して、力を持たねば、どうにもならぬ。……よしや柳ノ浦に一時の安さは得られても、しょせん、安住の地ではないし」

「よくいうた。もうお互いの中の愚痴や不足はいい合うまい。幼いみかどを奉じて、ふたたび都へ還る日のために戦おう。一念、それひとつに」

「……うむ」

と、無言に近いうなずきを、すべての顔がしめしていた。

いつか、みかどのお咳もやんで、舳(みよし)が切る波の音、風が掠(かす)める帆たけびだけが、船上の人影の上をうしろへ越えてゆく。

すると、船屋形に隣りしている囲(かこ)いの内から、内大臣(おおい)の殿(との)の子息、右衛門督清宗(うえもんのかみきよむね)が、ここへ来て、

「こよいは、九月十三夜。父の宗盛殿も、何がな眠れぬままに夜を更(ふ)かしております。……で、どなたなりと、これへ御返歌ありたしと、申しておりますが」

と、懐紙(かいし)に書いた和歌の一首を、大勢の中へ示した。

「どれ、見せさせ給え」

と、好きな道とて、薩摩守忠度(さつまのかみただのり)が、すぐ手にとって、月の光に読みあげた。

うち解けて
寝られざりけり梶(かぢ)まくら
こよひの月の
行方見んとて

「時忠が、御返歌申そう。……たれか、旅硯(たびすずり)を持ち給わぬか」

平大納言時忠が、筆をとって、

君住めば
ここも雲ゐの月なれど
なほ恋しきは　都なりけり

「それがしも、一首」

と、次に修理大夫経盛が、おなじく、さらさらと筆を走らせた。

恋しとよ
去年（こぞ）のこよひの夜もすがら
月見し友の思ひ出られて

また、左馬頭行盛は、

名にしおふ
秋の半ばも過ぎぬなり
いつより露の
霜とかはらむ

と、それぞれ、想（おも）いの墨を、懐紙に滲（にじ）ませた。

忠度（ただのり）も、筆を持って、苦吟の容子（ようす）だったが、変り果てた平家のすがたといい、身一つ

の現実といい、想いは、余りに多すぎる、深刻すぎる。

「………」

帳然と、かれは、筆を措いてしまった。

帆ばしらの下から、その態をながめていた時忠が、

「忠度どの、いかが召された。一門のうちでも、御辺は聞こゆる歌詠みの一人。かの俊成卿が御門下でもおわすに」

と、いった。

「いや、どうも、まとまりがつきませぬ……」と、忠度は、月を仰ぎながら白々と自嘲をうかべて、「いくさには敗れても、歌心までは敗れまじと、思うていましたが、やはり人間とは、意気地のないものとみえまする。歌らしき歌も出ません」

「それは、名歌をと、望むからであろう。歌人ならぬ身、お気がるで、よいのではないか。時忠すらいたしたのに、御辺が詠み出ぬ法はない」

余りに、せがまれるまま、忠度も、

月を見し去年の今宵の
友のみや
都にわれを
おもひ出づらむ

と、したためた。

詠むも詠まぬも、何か、心のほぐれを覚えた。人びとは、救いをえたように、興じ合った。

九月十三夜は、ほどなく明けて、朝雲の下に、家まばらな漁村と、白波をつらねた浜べが見渡された。

豊前大里ノ庄、柳ノ浦であった。

世上のうごきは微妙である。

赤間ケ関と門司ケ関との交通路では、その微妙なものが、よくわかる。

「なんの、都は乱脈だ。その後のひどさは、話にもなんにもならぬ。木曾源氏とやら、朝日将軍とやらが、都の主になって、平家と入れ代ったが、今では、以前の方がましだった。平家の世ごろが恋しいと、肚のなかではみな思っている」

そうした旅人の声。

船人たちのうわさ。

また、じっさいに、摂津、和泉、播磨あたりから、逃げ下って来た武族が、周防、長門には、充満していた。

長門の国は、新中納言知盛の領土でもあった。――目代の紀光季は、はやくから領海の大船小船をあつめ、また、兵船の新造にもかかりながら、それらの〝下り平家の徒

党〟をもって、一軍を編成していた。

「主上、女院、御一門の方々にも、柳ノ浦に、しばし仮御所をしつらえて、おんとどまりの由」

こう、水門守の通報をうけると、光季は、三十幾艘の大船をつらねて、すぐ、柳ノ浦へ渡ってゆき、主人の知盛に会ってすすめた。

「ここも仮の内裏なら、いっそのこと、九州をお離れあって、屋島に内裏を置かれてはいかがでしょう。――柳ノ浦では、守るに地の利も悪く、またおそらくは、緒方、松浦、鼻豊後などの襲せ来ること、絶ゆる間もございますまい」

光季は、さらに、都の木曾勢の不人気なことや、上下の乱脈ぶりや、それにつれて、山陽、四国、そのほか、島々の武族までが、にわかに、平家方へ傾いて来た情勢の変化などを訴えて、

「もし、屋島へお渡りとあらば、それらの豪族どもも、こぞって、参陣いたしましょうし、菊池大夫胤益も、阿波民部田口成能も、ただちに、屋島内裏の御造営を奉行し、一族をひきいて、守護しまいらせんと申し合わせておりまする」

「そうか」

知盛は、西走以来、初めての明るさを、胸にもった。

今にして思えば、そもそもの西国落ちが、その足踏みを、過っていたと思う。

西八条、六波羅をみずから焼き、福原をも焼き払って、一門、海上へ漂い出たため、

さしも、清盛以来、平家とは浅くない縁故や領国関係の輩まで、その敗亡を、徹底的なものと解してしまったのである。

——で、西海は平家の地盤なのに、新たな勢力の参加もなく、筑紫の果てまで落ちのびなければならなかったのは、返す返すも無策であった。

すぐ、一門の人びとを会して、知盛もまた、屋島行宮への渡御を、献言した。

「屋島なれば、守るにもよく、力を蓄えて、都へ出ずる日をうかがうにも便」

たれにも、異存はなかった。

そしてこの日をさかいに、流離の平家一門の旗にも、夢ふたたびの希望がつよく打ち出され、「いつかは、都へ」の可能性が、大きく信念づけられた。

宇佐行幸。

七日の全軍参籠。

それを果たすと、平家は九州を離れた。

龍頭鷁首のお座船を中央に、大小数百艘の船列が、瀬戸内へはいり、東上して、やがて四国の屋島の浦曲に深くかくれ込んだ。

——ちょうど、そのころ、都の方では。

新皇太子の践祚にからんで、院と義仲の反目が表面化していたのである。そして公卿側の策に乗った義仲は、

「平家の討伐を、叔父行家にさせては」
と、都をあとに馳け出し、播磨の国今宿に陣し、後続の味方を待ちながら、一方、山陽から四国のうごきを、探らせていた。
この月は、閏だった。
十月という月が、二度かさなる。
義仲は、およそ、ひと月ほどを、播磨に過ごした。疾風迅雷は、かれの姿だし、性格だったが、滞陣して、杯をもつと、戦いも忘れたかのようなかれになった。
「愉しまなくて、なんの生まれたかいがあろう。愉しむためにこの世はあるのだ。愉しむために戦いもしているおれぞ」
酔うと、山吹のひざを枕として、土地の遊女や処女たちを、まわりに侍らせ、こう、放言してはばからない。
――なぜか、かれは、享楽に性急だった。
自己の短命を、予知する心が「いのち短し……」と、愉しみを、急ぎぬくのか、また、絶えずそうしていなければ淋しくて堪らない例の孤独性が、させているのか、とにかくかれの生命のはためきは、今をかぎりと燃えに燃える油脂に富む木のようであった。
この火に、燃やされる女性たちも、一つの焔となって、心も肉体も、気みじかに、燃焼しきらないわけにゆかない。

山吹がその対象のよい例である。

かの女の習性と豊麗な肉づきも、わずかな年月に、開花を見せ、またまもなく熟れきって、もう女の褪せを思わせる朝さえあった。女性の色香の泉も、そう無限ではない、かの女ですら疲れるのだった。

「おれは、いつ死ぬかわからぬ」

義仲は、よく不吉を口にした。好んでいう風さえあった。

「ええ、そのときは、山吹も御一しょに、死にまする」

「よすがいい。おれは、うれしくもなんともない。という意味は、それゆえ、おれの好きにさせておけと申すのだ」

いいながら、山吹には、足腰を揉ませ、腕には、ほかの遊女を抱いて見せたりするのである。

山吹は怒りもしないで、

「葵さまでさえなければ……」

と、義仲の耳へ顔をつけていった。

すると、義仲は、

「なに葵。ああそういう女もいたの。だが近ごろ、義仲の瞼から消えぬのは、そんな病み女ではない。関白家の姫君よ。しかも、まだ見ぬ姫君だ。……見たと思うたのは、無念や簪玉の侍女であったという。それよりさらに美しい姫かと思えば、見ぬ恋もしよう

ではないか」
妄念のように、かれはいった。
播磨へ下向して以来、山吹は、何度おなじこの妄言を聞かされたことだろうか。
とこうする間に、屋島の平家は、俄然、勢力をもり返していた。山陽八箇国を始め、南海の紀伊、淡路、讃岐、阿波、伊予、土佐の国々の武族も、船をつらね、部下をひきいて、屋島へ馳せ加わってゆく者が絶えないと、義仲の陣所へも、頻々たる報らせであった。

水島合戦

屋島の平家が、内裏の造営や防備をいそいで、その後、日ごとに勢威を盛り返しているという報は、幾度となく、義仲も耳にはしていた。しかし、
「さしたることかは」
と、そのため、かれの眉が驚きをうけたような容子は一度もない。
「都をすら、戦わずに捨てて逃げた平家が、島籠りなどして、烏合の衆をあつめたところで、何するものぞ」
これは近ごろ、かれの平家観の根底をなしていた。入洛する木曾軍のまえに、一矢もむくわず都落ちした平家のもろさ、余りな弱さが、先入主から抜けないのだった。

で。——なおかれは、自身、播磨の陣を進めようとはせず、ひとまず、それへの手当てとして、矢田判官代義清と、海野弥平四郎幸広の二将に、兵五千ほどをさずけて、

「備前、備中を押し下し、兵船をととのえて、屋島の巣を、焼き払って来い」

と、事もなげに、命令した。

もっとも、義仲自身が、容易に播磨から西へ出ないのは、留守にして来た都の不安や、院の政情にも、多分な気がかりがあったにもよるのである。

もし、都の留守のまに、頼朝の上洛が実現されたり、叔父行家の策動など見えたら、いつでも、一鞭、駒をめぐらして、京へ引っ返して行かねばならない。その気構えもあって、常に後ろ髪を引かれている義仲でもあった。

命をうけた義清、幸広の二将は、

「では、御先陣を承って」

と、これもまったく平家を見くびって、残党掃討ぐらいな気勢で出発した。

——その後。閏、十月一日。

備中玉島の西、水島ノ渡しの合戦で、木曾勢が大敗北をうけたのは、木曾の将兵が、余りにも、「平家弱し」と、初めから呑んでかかったためである。

「木曾来る」

と知って、逸早く、屋島を発し、水島ノ渡しにそれを迎え撃ったのは、新中納言知盛と、能登守教経の数千騎だった。

もとより、主幹は水軍である。数百艘の船隊を組織し、木曾が、玉島附近に、船をあつめて、屋島へ渡るしたくをしていた出端を突いて、水陸からそれを包囲し、完膚なきまでの撃滅を加えたのだった。

このときの平家軍は、戦いもせず都落ちした脆弱な一門の兵とは、思えないほど、打って変った強さであった。

船から馬を上げて、水島のうしろへ迂回して出た教経も、兵船をよせて、木曾の正面へ向かった知盛も、ひとしく、大音声で、味方の兵をはげました。

「いかに、随参の面々、さきには、四囲の情勢やむなく、北国の木曾ずれに、惜しくも、都を明け渡したが、もとよりわれらの心外たるはいうまでもない。いまこそ、無念を打ち晴らせや。さきの辱をそそげや人びと」

屋島平家のうちには、山陽、四国、瀬戸内の新手が多く加わっていたが、かつての、富士川や倶利伽羅などを転戦してきた都以来の将士もまた少なくはない。

敗退に敗退をかさね、無念を呑んだまま、今日にいたったそれらの面々が、

「ござんなれ、木曾」

と、必死を見せたのも当然だった。

それに反して、木曾源氏は、これまでの破竹の軍の面影もなかった。

海野弥平四郎幸広がまず討たれ、大将の矢田判官代義清も、討死をとげた。そして、残余の兵も、玉島から万寿方面へなだれてゆく途中、高梁川の上下で、そのほとんど

が、捕われたり、討たれてしまった。

知盛や教経など、平家の将士は、この快勝を獲たあと、手をとりあって泣いた。源氏の蜂起を見て以来、諸州にわたる戦いで、平家が勝ったのは、初めてである。北陸の合戦よりは、規模は小さいが、かの倶利伽羅谷に、あえなく埋もれた無数の味方の怨霊にたいして、一片の手向けはなしえたものと、涙をおぼえたものであろう。

同時に、平家といえ、あながち、すべてが、柔弱ではない。時と地の利をえて、心を結べば、源氏をも破りうるという自信も、つよめたことであった。

水島の大敗は、義仲の酔いを醒ました。

「なになに。海野も討死し、矢田も最期をとげたとか」

よほど意外だったらしい。

しかし、ひとたび起てば、天性の風雲児だ。

女色や杯や、あらゆる未練にも、心を引かれている義仲ではない。

「行平、陣立ち触れせよ。余田次郎は、荷駄を組ませろ。すぐ立つぞ。おれが駈け向かって、小癪な敵を、みじんにして見しょう。公卿とも武者ともつかぬ一門を、数珠つなぎとして、都への土産に、しょっぴいて帰ろうぞ」

あたりを叱咤して、物具を着込みながらも、いいつづけるのだった。

すさまじい闘志である。この性格で、旗挙げから今日まで、戦えば勝ち、攻むれば陥

し、およそ、敗戦を知らないかれだった。海野や矢田の部将が、負けたのはふしぎでならないし、もとより、自身の行く前に、何が待とうと、恐れてはいない。
「そうだ、行平。――成澄を呼べ、倉光次郎成澄に、これへと申せ」
何を思い出したか、宇野行平へ、いいつける。
行平はすぐ馳けて、倉光成澄の幕へ、
「お召しだ、はやくござれ」
と、つたえた。
その成澄が、眼のまえに来て、ひざまずくと、義仲は早口に、こういった。
「さきごろ、そちがおれに、そっと、すすめたことがあろうが」
「は。妹尾殿の儀でございまするか」
「そうよ、妹尾がことだ。――あれほどに、妹尾も申し、そちも良策と考えるなら、今し、おれも備中へ下るところ。ひとつ、かれの申す献策を、用いてみようか」
「秘策なれば、いずれとも、殿御一存によることですが」
「よし。やらせてみよう。妹尾の申すがごとく、土地のことに詳しい地侍を集合し、義仲が参るまでに、合戦の下拵えもし、屋島へ攻め渡る船、船夫なども集めておくがよい」
「では、お先へ」
「おお、すぐ立て」

何事か、こう、義仲の命をうけた成澄は、自陣へ帰ると、それを友の妹尾太郎兼康にささやき、手勢わずか五十騎ほどを連れただけで、兼康とともに、備中へ、先発した。

この妹尾太郎兼康は、古くからの、小松殿（重盛）の家人で、いわば歴乎とした平家中での平家侍である。

ところが、維盛について、北陸へ従軍し、倶利伽羅敗戦のおり、木曾の手に、生け捕られていた。

——とは知らず、平家方には、もっぱら、「妹尾殿、討死——」といううわさが信じられ、かれもまた、恥ずかしいのか、義仲の内に生かされて、都へ来ていても、以前の知り人へは、便りも顔出しもしなかった。

そして今度は、また、義仲の手について、播磨まで、来ていたのである。

その播磨の陣の一夜。

妹尾兼康は、北陸以来、わが身を預けられている倉光次郎成澄にむかって、

「すでに、御存知でしょうが、備中の妹尾ノ庄こそ、それがしの古里の地にござりまするが」

と、前提して、

「もし、この兼康に、わずかな日と、身の自由とを、おゆるしあらば、郷土妹尾に先駆けして、以前の友や、一族を糾合し、兼康こそは、死すべかりしを、木曾殿のお情けにて、かくは無事に帰って候うぞや——と触れまわし、千、二千の兵はいわずもがな、

船、糧食の集めから、万端の戦拵えまで、よろしきように、致しおきまするが、この儀、大将軍にまで、そっと、お願いおきくださるまいか」
と、切なる言であり、献策であった。
「……なるほど」
と、成澄も耳をかたむけた。
それというのも、北陸以来、主命によって、虜将の兼康を、自分の手に預かっているうちに、つくづく「さすが、よい侍ではある」と、心から兼康の人物に、傾倒していたせいもあった。
成澄の弟、三郎成氏も、虜将の監視役でありながら「じつに良いお人だ」と、兼康の人柄には、心服していた。そして、そのことは、義仲の耳にも入れ、義仲もいつか、かれが虜将たることさえ、忘れていた。
「……ふウむ。備中の妹尾ノ庄は、兼康が生まれ故郷か。はあて？　……その献策は、どうしたものだろう」
「死すべき身を、生かしおかれた御恩報じに、その一と働きを……と申しておりますが」
「だが、檻の虎を、わざわざ、虎の棲む野へ来て放してやるようなものでもあるな」
「もとより、かれ一人は放しませんし、また、それを望んでいる兼康でもございませぬ」

「そちが付いて参るのか」
「兼康は一人、われらは、数十騎で」
「ま。考えておこう」
――その時は、義仲も、すぐ同意はしなかった。幾ぶんの危惧は感じていたのである。
それを急にいま思い出して「兼康が策を、用いてみよう。すぐ、おれに先立って、備中へ行け」と、いい出したのは、ただ心境の変化というだけのものではない。
水島ノ渡しにおける味方の思わざる惨敗。海野、矢田の二将の討死といったような衝動が、すくなからず、義仲のあせりを誘い、そして、手近な一策を、まず無方針に選ばせたものにちがいなかった。

虜囚の将

播磨を先に立った軽騎五十余の将士は、夜も日も急いで、斑鳩、若狭野を過ぎ、やがて播磨と備前の境、船坂山へかかった。
――とふもとから、歩騎、入り交じって、百人ほどの地侍がのぼって来た。
「おう、お父上ではありませぬか」
その中でも、肥え太った一人の若者が、馬を降りていった。

「――倉光殿」と、妹尾兼康は、それに答えるよりも先に、連れ立っている倉光次郎成澄をかえりみて、

「途々も、おはなし申しあげておいたが、これが、伜の小太郎宗康です。……やよ宗康、虜囚の父が、年来、お世話にあずかった倉光殿は、こなたのお方ぞ。ようお礼申せよ」

と、中に立っていった。

途中から、使いは先に走らしてあった。兼康の嫡子小太郎が、ここまで、迎えに来たのは、片時もはやく父の無事を見たいがための人情であろう。むりはない。当然でもある。と、成澄はうなずいた。

「たくましげなる御子息よ。――して、備前、備中辺の敵の様子は」

「やがて、ゆるりと、お告げいたしましょうず」

小太郎宗康は、馬上へ返って、答えながら、

「先に、お飛脚を賜うてより、すわや兼康殿のお帰りか、御無事でありしかと、郎党どもが、いやもう、待ちかねておりまする。――で、ふもとの三石の亭にて、こよい、倉光殿がお疲れも、いささかお慰め申さんものと、酒肴などととのえ、他の一族どもも、お待ち申しておりますので」

「ほ。それは、それは」

「木曾殿の御下向と聞くからに、平家にたいし、多年、こころよからぬ輩、不平の者ど

もなんど、みな、時こそ来ると、こよいの亭に、ひそと寄り合うことになっております。――と申すも、備前は、先ごろより院の宣文によって、新宮十郎行家殿が所領と変りましたれば、それへの外聞（がいぶん）も、はばからねばなりません」

「いかにも、備前は、ついこのごろ、行家殿が所領となったな。――国府の代官は、もう来ておるのか」

「わずか、ひと月ほど前に、さきの目代（もくだい）と代って、新たな代官が、任地に着いたばかりでありまする」

「わが大将軍の叔父御なれど、行家殿は、背とも腹とも分からぬお人なのだ。気をつけねば、何を都へ沙汰されるかもしれぬ」

「心得ておりまする。……その辺も、よう考えての末、こよいのお迎えは、わざと、三石（みついし）の一族の者の亭にいたしたわけです。何とぞ、そこでは、心おきなく、おくつろぎを」

小太郎宗康の案内で、同勢は、やがて三石（みついし）の宿（しゅく）の、古めかしい門へはいった。

土豪の家とみえ、内は広い。

馬ぐるみ三、四百人の同勢は、らくにはいれるほどな広場や長屋や厩（うまや）もある。

その夜は、酒もりとなった。

幾日かを、ほとんど、急ぎ通して来たさいでもあり、土着の素朴らしい人びとの歓待ぶりに、倉光成澄も家来たちも、心をゆるして、大いに酔い、前後不覚に寝込んだので

ある。

——が、朝までの間に、倉光次郎成澄を始め、部下の木曾武者五十人は、ひとりも生き残っていなかった。

すべて、殺害されたのだった。寝首をかかれたわけである。妹尾兼康やその郎党たちの、初めからの謀計だったのはいうまでもない。

そして、北陸以来の虜囚の鎖を断った妹尾兼康は、やがて備中妹尾ノ庄の館に籠って、平家の赤旗をひるがえして、

「兼康こそは、今日、生きて国元へ帰ったるぞ。木曾殿に囚われたりとて、志は、むかしに変る兼康ではない。われと思わん者は集まれ。長年の平家の恩顧に応えまいらせて、木曾将軍の下向にむかい、矢一つなりと射かけんと思う者は、これへ来れ」

と、近郷の四隣へ布令た。

数日のまに、風をのぞんで集まる者、二千余人にのぼった。

けれど、もとより正しい武装も訓練もあるわけの者どもではない。在郷の地侍や、無職の徒や、以前は平家のそれがしに雑色勤めしていたが、いまは老いぼれて田舎にいる、というような者たちだった。

それらの老若が、柿直垂の紐をつめたり、葛布の小袖を東端折り（尻はしょり）にしたり、破れ具足を着こんだりして、ともかくも、山刀や狩弓などを打物とし、

「妹尾の殿が、帰らしゃった」

「兼康殿は、生きてござったぞ」
と、寄って来たのだった。兼康には人望もあったとみえる。
「木曾将軍の旗を見ぬまに、まず、眼のまえの源氏を屠れ」
小太郎宗康は、先頭に立った。そしてこの二千余人が、押し襲せた先は、妹尾から遠くない国府の庁であった。そこには新宮十郎行家の家臣が赴任していた。
行家の家臣たちは、一戦も交えず、庁の代官所を捨てて、都をさして、逃げ走った。
この人びとが、途中で、義仲の軍に出会い、備前の情況を訴えたので、義仲は初めて、異変を知った。
「さては、妹尾にたばかられしよ。おのれ、どうしてくりょう」
いうまでもなく、かれは激怒して、
「義仲が、この手で、八つ裂きにしてやる」
と、自身、軍の先鋒に立とうとした。
すると、今井兼平が、
「だから、いわないことではないのです。兼平は、何度、お諫め申したか知れません。それを、倉光兄弟の言にまかせて、余りにも、虜囚の将を、お手ぬるい扱いですましておられたゆえ、ついにこんな大事をひき起こしてしまったのです」
そういって、
「――が今さら、地だんだふんで、朝日将軍ともあるおん身が、みずから、妹尾の地侍

や百姓兵を相手に、物々しゅう馳け入るのも、世の笑い草でしょう。兼平におまかせおきください」
「あいや兼平殿。それがしは、なんといわれても、その先陣を望みたい」
「おう、倉光殿の御舎弟、三郎成氏殿か。もっともだ。御辺こそ、真っ先に進め。兼平は、二陣につづこう」
　われも、われも、と行きたがる者は多い。
　結局、今井四郎兼平を主将に、倉光三郎成氏が副将となって、三千余騎が、
「思い知れ、妹尾」
と、一陣の風となって、先へ急いだ。

　妹尾勢は、備前福林寺縄手（岡山市・西北）に濠を掘り、防柵をめぐらし、
「木曾、来らば」
と、かためていた。
　そして一方、屋島の平家へ、使いをやり、情況を、連絡していた。
　やがて、木曾勢は、ここへ迫った。
　今井兼平は、敵の柵や濠を見て、
「こんな児戯にひとしい物を築いて、木曾のおれどもを防ごうとは」
と、大いに笑った。

事実、山岳そだちのかれらの眼には、これまで、越えて来た山陽道の山でも谷でも、その嶮峻に、こたえたような所は一箇所もない。

まして、藪山の高さや、雑木の柵や、池みたいな濠などは、なんの障碍にも見えなかった。「踏みつぶせ」という兼平の号令一下に、木曾、北陸の兵は、猿のように、搦め手をやぶり、火をかけて、防塞の中の敵を追い出した。

その夜へかけて、この辺から、板倉川のほとりまで、一帯の乱軍となった。

妹尾兼康は、討たれ、子息の小太郎宗康も斬り死にした。――がまた、倉光三郎成氏も、さきに果てた兄成澄のあとを追ってこの戦で死んだ。

総じて、この一戦の始末は、なんとなく、以後の乱麻な人心と闘争の烈しさを奏で始めているかのように、凄惨なものであった。

しかし、義仲が、備前にはいってから後は、ほとんど、戦らしい戦もなかった。

たまたま、物見同士の小ぜりあいが、あちこちの浦べや田舎町であったと聞くほか、平家の兵の影も見あたらない。

「屋島平家は、栄螺であろうか。ふたを閉じて、出ても来ぬ」

義仲は、そういって笑った。

かれはその本陣を、万寿ノ庄（岡山県倉敷市）において、さすが細心に、日夜、物見を放っていた。

しかし、さきには水島ノ渡しに、その水軍を現わしたという敵の知盛も、教経の軍

も、海を渡って、屋島へ帰ったのか、浦には、鷗が見られるだけだった。

義仲は、その水島へも、また味野や琴浦の辺りまでも、おりには、部将をつれて、巡視に出かけた。

瀬戸の海は、いつも静かである。そこの島々や、対岸四国の一端へは、手も届きそうに思える。――けれど、およそ、どこの浦々にも、海人舟、釣り舟のほか、大きな船は、一つもなかった。浦人に問えば「――屋島の御所へ、召されまいて」と、きまって答える。

「これやだめだ。こちらからは、攻めては行けぬ。船がなくては」

水軍の必要を、義仲は、今ほど痛切に感じたことはない。自己の知識と、武力の限界を、知ったのである。信濃や北陸の戦いでは、考える要もなかった問題が、ここでは、第一義になってくる。

馬を乗せ、楯を乗せ、大兵とその軍糧を乗せうるほどな船は――と思うと、義仲には、頭だけの、想像さえもつかなかった。山岳地帯や荒野の出没なら、また知識なら、およそ人後に落ちるかれではないが、瀬戸内ほどな、静かな海でさえも、海を前にしては、茫然と、なす術もない眸である。

「まず、大船を造らせねばなるまい。すぐれた水夫舵取もおらねばだめだ。それと、この長い浜べや岬の海ぎわに、物見や守りもおかねばなるまいし」

ここで、そういう気長な策を取っていたら、都の留守が、どうなるか？

義仲の肚は、それも、気が気でないのであった。

すると、案の定。

閏、十月の半ばごろ、在京の樋口次郎兼光から、早馬が来て、

（――その後、十郎行家殿のおんうごき、事々に不審のみ多く覚え候う。かたがた、院中のたれかれとも結びあい、殿を、さまざまに讒奏ありとも、もれ聞こえ候うなれ。平家へのおん軍、しばし、さし措かせ給うて、いそぎ、馳け上らせ給え。もし、時おくれては、大事に及ばんも計り知れ申さず……云々）

という書面だった。

こんな報らせが、きょうはあるか、あすは来るかと、心に病んでいたときでもある。

義仲は、今井四郎兼平、その他の部将をあつめ、

「屋島攻めは、来年にする。それよりは、虫の知らせだが、留守の都に、何事か不吉が起こっているぞ。すぐ陣払いせよ。そして、都へ引っ返すのだ」

樋口の書状は、打ち明けなかった。

感情的には、平家の者以上、憎い行家だが、叔父ではあるし、味方のうちでも重きをなす大将である。ここで味方割れをもらすのはよくあるまい。そう、考えたのは、義仲として当然だった。

従って、兼平をはじめ、部将たちは、義仲の意中を怪しみもし、いろいろに疑ったが、その陣払いも、

「急げ」
ということなので、異議をいっているいとまもない。
それと、退陣は、進軍よりもむずかしい。混乱をみせると、敵に、追撃の虚を与えるからだ。
「なんの、屋島とは、海をへだてているゆえ、そのような惧れはない」
部将たちは、危ぶむ兼平にたいして、その点、口をそろえていっていた。
けれど、このことは、どうもれたか、早くも屋島に察知されたとみえ、先行した物見の報らせによると、平家の新中納言知盛、本三位中将重衡、侍大将の越中次郎兵衛盛嗣、*悪七兵衛景清、上総五郎兵衛忠光などのひきいる軍勢が、大水軍を組んで、播磨の室山（室津の背後）にあがり、
（木曾が退き道を断って、一人も都へ返すまいぞ。わけても、木曾次郎義仲の首をこそ、討ちもらすな）
と、さかんな戦気のもとに、陣を布いているとのことであった。
高取峠まで来て、それを聞いた義仲は、にわかに、道をかえて、龍野路をまわり、平家のほこ先をかわして、からくも月の半ば過ぎ、都へたどり着いた。
前後、さんざんな態たらくであり、路傍で見ている庶民の間にも、
「木曾殿は、大負けに、負けて逃げ帰られたそうな」
と、陰口が立つほどだった。

義仲の気性として、われながら見すぼらしいこの帰京が、どんなに、かれの自負心を不愉快にしていたかしれまい。

どやどやと、混み入るように、六条の館へはいるやいな、樋口次郎兼光を前にして、

「そちの書状は見たが」

と、留守のねぎらいをいうでもなく、すぐその飛脚の件を、問いただした。

「――叔父御が、この義仲を讒したとか、何事やら企んでおるとか、それは一体、いかなるわけだ。とかく、あの跛行殿のこと、ありそうには思わるるが、何か、しかとした証拠でもつかんでおるのか」

「なかなか」

と、兼光は、慎重であった。

「われら如きへ、うかと、尾をつかませるような行家殿ではございませぬ。したが、御帰洛あって、ここ幾日かを、黙って、御覧じてあれば、行家殿の異心も、院のいぶかしげなる装いも、お分かりになろうかと存じまする。生なか、それがしが推量などを、お耳に入れますよりは」

「いや、もとよりおれは短気者だ。胡散なる跛行殿や院の気配を知りつつ、知らぬげに、四日も五日も黙ってはおられぬ。……そうだ。かく義仲が帰洛したことは、叔父御とて、存じおらぬはずはあるまいに、姿も見せぬは、いぶかしい」

「おそらく、意外な余りに、ただ、おののいておられるものでございましょう」

「すぐ、呼びにやれ。萱ノ御所へ」
「病を申し立てて、参られぬかもしれませぬ」
「ともかく、使いをやってみろ。火急、義仲が話したい儀もあれば、病も押して、罷れと申しつかわせい」
すぐ、法住寺殿の一隅、萱ノ御所へ、六条からの使いが急いだ。
その使いが、帰って来たのは、思いのほか、早かったが、しかし、
「新宮行家殿には、昨夜、殿が御帰京あるよりも先に、都を立って、西国へ馳け向かわれた由にござりまする。——平家討伐のためと触れて兵もひきいて行かれたそうです」
と、案外な答えであった。
「なに、おれと入れ代りに、西国へ出向いたと？」
何か、狐にでもつままれているような義仲の顔つきである。西国なら播州路を通っているはず。その播州路で行き合ってもいないのだ。
それも一人二人の数ならともかく、軍勢と軍勢とが、見そびれるわけはない。どこまでも、人をたぶらかす跛行殿かと、かれは、いまいましげに、あらぬ所を睨めすえていた。

瞋恚の帳

この六条の木曾館は、もう家庭が家庭ではなくなっている。本陣かといえば、本陣らしい秩序さえ今はない。朝から晩まで、ただ武者ばらがわめきあい、武者ばらが出たりはいったりしている塒に過ぎないのだと、巴には、思われた。

「いったい、何を目がけて、何が欲しゅうて、この都へは、上ったのであろ。あまたな人びとの命を失うたり、身の運命を賭けてまで」

巴は、悔いずにいられなかった。

そして一途に幼少から「平家をたおし、源氏を興せ」と教えられて、それが自分にも良人にとっても、この世で、人としての最高な事業であり、生きがいでもあるかのように思い込んできたことが、

「おもえば、浅慮な……」

と、今は吐息になるのであった。

しみじみ、都暮らしの嫌厭につつまれると、かの女の瞼には、乗鞍や駒ヶ嶽などの、ふるさとの山野が描き出されてくる。そして、

「ああ、帰りたい。木曾谷の家が恋しい」

とする悔いに似た思いに、矢もたてもなくなるのだった。

かの女のふるさとには、猪、狼、熊、そのほかの野獣や猛禽のたぐいが、人の数よりも多く棲んでいる。けれど、都の人間たちの中に住むよりは、なおどれほど安心か知れないように思われた。

山犬防ぎの石塀(いしべい)や、荒土で塗り囲まれた丸木造りの家ではあっても、そこの大きな炉(ろ)には、ともかく信じあえる人と人とが寄っていた。みな素朴であり、あたたかな心はもっていた。

なるほど、都のにぎわいは、聞きしにまさるほどであり、衣冠の往来やら、御所や公卿の住居や寺塔なども、およそ、眼を驚かすばかりだが、住む人びとの肚ぐろさには底の知れないものがある。残忍なこと、欲の深いこと、悪智恵に富むこと、木曾の狼(おおかみ)の比ではない。

「秋の夜、冬の夜の炉をかこみ、あの、ふるさとの人たちの中で、わが子の義高をそばにおいていたころの身は――」

と、その幸福さを、あらためて、かの女は振り返るのであったが、ふとまた、鎌倉の質子(ちし)となっている子の義高のうえへ想いを馳(は)せると、

「義高は、どうしていやるか。義高も、さぞ、この母に会いたがっておいやろうに」

と、母情の悶(もだ)えも加わって、悩みはなお、深まるのだった。

――もし鎌倉の頼朝と戦う日になれば、当然、こなたから渡してある質子(ちし)の一命は断たれるであろう。

良人の義仲は、今や、血まなこの人である。それをも忍ぶ気でいるのかもしれない。けれど巴(ともえ)には、考えるさえ耐え難いことだった。母として、今の危機を、どう、よそに見てはいられよう。日ごとに研(と)がれつつある鎌倉方と木曾方との険悪な情勢は、いわば

その一刻一刻が、わが子の義高の生命(いのち)をちぢめているものではあるまいか。
ゆうべも、それを考えて、かの女は眠りもしなかった。
急に、備中の陣から帰洛して以来、良人の義仲は、おととい も、きのうも、院参(いんさん)して、何か、事態はいよいよむずかしくなって来たらしい。世間でも、六条の武者ばらの間でも、
(鎌倉殿の上洛は必定だ)
と沙汰されていたし、昨今の声は、それに輪をかけて、
(いやいや、すでにもう、鎌倉殿の弟、蒲(かば)の冠者(かじゃ)範頼(のりより)、源九郎義経などの軍勢が、続々、海道を上って来るということだぞ)
とまで、あらしのように、いい噪(さわ)がれているのである。
——今は覚悟をきめなければならない。
そのことについて、巴は、惑っているのではなかった。むしろ、良人の義仲の方が、こうなってからは、何か頼りのない良人に見えてならなかった。
院中の様子も、鎌倉方との逼迫(ひっぱく)も、ほとんど、巴には何も語らないし、帰館すれば、酒に浸って、大酔の果て、山吹(やまぶき)の腕(かいな)に正体もなく寝てしまう良人であった。
思い余って、巴は、それらの憂いを、けさ、一室のうちで、義仲に話しかけた。
義仲は、けさも院参の装いをしていたが、出はなをかの女のあらたまったことばに挫(くじ)かれて、その眉を、ぴりとさせると、

「なに、覚悟をしておきたいと、覚悟なら、いつでもしておくがいい」
と、かんで吐き出すようにいい、
「院、鎌倉、叔父行家など、三方からこの義仲を、苦境に立たせんとしている今のいきさつなど、どう、そなたに、相談(はか)ってみたところで、女の思慮には及びもせぬことなのだ。いってむだ、聞いてもむだ。そんなひまなど、おれにはない」
まったく、そのことに、つきつめている義仲の語気であった。
あらあらと、室の簾(れん)を排して出て行きかけたが、そこからまた内の巴を振り向いて、いい捨てにいって、出て行った。
「ややもすれば、義高義高と申すが、おれにとっても、義高はわが子だ。なんで、可愛くないことがあるものか。――というて、頼朝には負けられぬ。負けたがさいご、義仲の首も獄門、義高も生かしておかれぬにきまっておる。いや巴、そういうそなたの一命もないのだぞ。義高にかこつけて、悋気(りんき)を申すならよいが、頼朝との戦いを、おれにさせぬためなれば、むだなことだ。止(よ)せっ、二度とはいうな」
義仲の心は、どうあろうとも、義仲の正妻は自分以外の者ではない。
葵(あおい)ノ前(まえ)や、山吹とは、立場がちがう。自分は、義仲の育ての親中原兼遠のむすめである。嫡子まである夫婦なのだ、正室なのだ。
巴は、みだれかけると、いつも、自分へ意識づけた。「かりそめの遊(あそ)び女(め)や妾(しょう)ではな

い。正妻は、正妻らしゅうしていなければなるまい。良人のためには、じっと、忍んでいましょう」と。

今も、そうだった。

しかられながらも、良人の牛車を送り出して、そして、物思わしげな姿を、奥へ運んで来ると、幾つもの局の一間のうちから、

「巴さま、巴さま」

と、糸のような細い声がした。

そこは、葵ノ前の局とは分かっていたが、わざと。

「たれですか。わらわを呼ぶのは」

「葵です……」と、すがるように、人を恋うて、

「すこし、おはなし申したいことがありまする。うす暗い病間などへ、気味がお悪いでしょうが、ちょっと、枕辺まで、おはいりくださいませぬか」

ひところの葵とちがい、声も哀れげにいうのである。

巴ははいって、かの女の病床のわきへ、そっとすわった。蔀をおろしてあるので、昼も夜のような部屋だった。帳の蔭に、白い夜具と、かの女の黒髪だけが見えた。やがて、ここの暗さに眸が馴れて来てから、やっと、蠟のような顔が、枕の上から自分を見て、しいて微笑を作っているのが分かった。

「どうですか、御気分は」

「巴さま。葵は、もう起きられないかもしれません。……このごろ、猫間殿が、都一の名医じゃというて、お連れして来てくれた医師は、癒るといってくれましたが」
「では、そのように、お力を落すこともなかろうに」
「でも。猫間殿の連れて来た医師では、何やら、頼りにも思えませぬ。猫間殿も、風変りなお人ですし、そのお医師も、へんに不愛想な」
「典医寮の者ですか」
「いいえ、町医者です。阿部麻鳥とかいう……」
「ならば、よく聞く名ではないか。上手だから、有名なのでしょう。癒るといったのでしょう、そのお医師は」
「ええ、診ることは、上手でした。わらわが胸に思っていた通りをいいあてたのです。……これはただの破傷風ではない。もとは矢傷だが、矢じりに、毒草の汁でも塗ってあったものかと」
「毒矢であったのか」
「そればかりではありませぬ。傷口をあらためて、あらふしぎ、これは武者矢とも思えぬ、半弓の矢よ。――ともつぶやきました」
「え。半弓の」
「巴さま。半弓を持つ者は、木曾の女兵だけでございましょう。その女兵までが、合戦の渦に巻きこまれたのは、倶利伽羅のほかにはありませぬ。この葵が、射られたのは、

倶利伽羅でした。その夜は、たしか、あの山吹も戦場に出ていて」

「……？」

巴は、室のまわりを見まわした。

妻戸の蔭か、簾の外に、あの勘のよい山吹が、聞き耳をたてていそうな気がしたのである。

葵も、うわ眼づかいを、枕ごしにうごかしながら、静脈のあらわなその手をさし伸ばして、巴の手をかたく握った。

「わらわは、仕返しされたのです。口惜しゅうございまする」

「葵御前。めったなことは、いわぬがよい」

「ええ、人には申しませぬ。けれど、巴さまも、お気をつけなされませ。怖ろしい女性はあの山吹です。次には、あなた様をも失うて、殿の正室になろうなどと考えていない限りもありません」

「やめて給も、もう、そのようなことは」と巴は、うるさげに笑い消して——「きのうきょうのむずかしさ。殿の御運命すら、おぼつかのう見ゆるのに」

「ほんに……。鎌倉勢の駒の音が、都をさして上って来るのが聞こえまする。……こうしていても、わかります。……御合戦の日は遠くない」

「東には鎌倉、西には平家。それさえあるに、内輪では、十郎行家殿の表裏やら、院の法皇のお憎しみ……。殿おひとりへ、まるで八方攻めの今のかたちではないか。殿がお

可哀そうでならぬ。殿の大酒も御放埒も、お胸のうちを察しれば、むりもなやと、思われて」
「どうやら、修羅は、近づいておりまする。殿も、それを御承知ゆえの乱酒でございましょう。ああ、お可哀そうな殿。……巴さまも、そうお思いなされますか」
「妻ですもの」
「お願いです。もしもの日には、どうぞ、殿の御馬前で、ともに、葵を死なせてくださいませ。巴さまとて、殿と御一しょのお覚悟でございましょうが」
葵は、これをいいたかったにちがいない。
いい終わると、夜具の下へ手をひいた。そして、病人がひとりして愉しむときの、あの遠くを見るような眼をしてニッと白い唇の端で笑った。
——と、室の外で、
「巴さま。ちょっと、お越しくださいませ。おそれ入りますが、お急ぎ給わりませ」
と、あわただしげに、侍女たちの呼ぶ声がした。

質子消息

今しがたのことである。
楯親忠の郎党らが、今暁、仁和寺の附近で捕まえたという一人の旅の男を、高手小手

に縛めて、六条畷に近い大竹藪のうちへ、しょっぴいて行った。
そこの竹林へ連れ込まれた者は、たいがい、二度と出て来ることはなかった。わけて今の縄付きは、鎌倉方の密偵とののしられていた様子からも、当然、いつものように、すぐ首を打ち落されるにきまっている。
いったい、仁和寺附近では、よく同様な〝怪しき者〟が捕まった。それというのも、仁和寺境内の常磐井殿という一院に、池大納言主従が住んでいたからである。
身は清盛の義弟であり、平家のうちでも上位にある池殿が、一門都落ちの途中からひとり引っ返して、常磐井殿に潜伏していたことは、世にかくれないことであり、世の批判のまととなっていた。
臆測にすぎないが、世間のいうところに従えば、
(もともと、池殿と鎌倉殿とは、今日あることを予見して、密かな約を交わしておられた)
と、もっぱら、信じられている。
そして、なお、
(鎌倉殿からは、東国へ下り給えと、池殿へお勧めであるそうな)
(いやまだ、当分は下られまい。――池殿がああしておられるのは、いわば鎌倉の眼になって、都の様子を、いちいち、東国へ報らせるお役のためでもある。さすれば、鎌倉勢が上洛を見る日までは)

(そうか。道理で院と常磐井殿の間にも、よくお使いが交わされているしの)
(院のみか、鎌倉方との、お飛脚の遣り取りも、なかなか、人目につくほどとやら。……いやもう、世間が、こう乱脈になると、人心もなお種々なものよ。たれが何を考えているやら、神仏でも分かるまいぞ)
といったようなことも、そこの一郭を繞って、あらわに取沙汰されていたのだった。
そして、そこへの注意を怠らないものに、木曾方の見張りもあった。
義仲は、楯親忠に命じて、
(うさんなやつと見たら、容赦なく引っ捕えてみろ)
と、通路に眼をくばらせていた。
今暁、捕まった男も、鎌倉の密書でも持っているかと道で検めをうけたのだ。
ところが、すきを見て逃げ出したのみか、逃げながら何か丸めた紙つぶてを、渓流へ投げ捨てたなどのことが、いやがうえにも、疑いを濃くした。そして、ここの大竹藪まで、追っ立てられて来ると、
「さっ、それへ直って、首を伸ばせ」
と、縄付きのまま突きとばされたものだった。
男は、もう、もがいてはいない。ぼくぼくな黒土の上へ、神妙にすわった。
辻冠者みたいな、汚い布直垂は着ているが、きっと、振り仰いだ三十がらみの引き緊った面構えは、ひとかどの胆っ玉をしめしていた。

「ちっ、木曾の山猿めらが、見つけない人間でも見たように、何を、仰々しげに騒ぐか。ばかっ。斬るなら早く斬れ」
「いったな。よしっ、ぶっ斬ってやる」
大長柄の刃を、男の顔の前へ見せて、斜めに振りかぶった武者が「くわっ」と、気をふくみかけると、
「あっ、待て」
と、二つの眼が、肩ごしに、武者を仰いだ。
「なに、待ってくれと。ざまを見さらせ。やはり死ぬのは辛かろうが」
「いや、おれはいいが、なんじらの覚悟はどうだ。もし、おれの首を打てば、すぐその後で、うぬらの首も落ちるのだぞ。それさえ知らぬ様子だから、念のため、訊いてつかわすのだ」
「ば、ばかを吐ざけ。鎌倉から紛れ込む怪しいやつは、見つけ次第、その場で首を打てとのおいいつけは受けたが、首を打って、落度といわれるはずはない」
「だが、首もさまざま、おなじ鎌倉衆でも、おれの首は値が違う。なんとなればだ。やい、そこのやつらも、耳の穴をかっ穿じって聞けよ」
東国者ではないと初めにはいい張っていた男だが、今は東国弁まる出しである。すわり直して、あたりを睨めまわした。
「いまは実をいおう。おれは鎌倉殿の侍所、和田義盛殿の下で、西浦七郎というが、日

ごろは、ここの質子殿の守りに立つ番士のひとりだぞ」
「ここの質子殿とはなんだ」
「知らぬのか。あきれた無知なやつらだ。ここのとは、木曾殿御夫婦のことよ。質子殿とは、さきに木曾殿から鎌倉殿にあずけられた人質の一子義高殿をいうのだわ。うぬが主君の御嫡子が身上もわきまえぬとは、いやはや、暢気な家来もあったものだ。それでは、質子殿の大事なお言伝てを承って来たこのおれを、おん母の巴殿へも黙って、打ち首にもしかねまい――」
　ここでニッと見せた微笑は、木曾武者の間に、かれが狙った心理的効果をもったことは間違いない。
　かれらの顔と顔は、急に何やらささやき始め、そして中の三、四名が大竹藪の小道を斜めに、あわてて馳けて行った。――晩秋の明るい空と、六条館の大屋根の線とが、細かな竹叢の葉の積みかさねられた道のかなたに見えていた。

　熟れ柿は、まだ幾つかこずえに残っている。そのまっ赤な実に、ひる下がりの陽が照り返っていた。
　巴は、小机にむかい、蔀ごしに、見るともない眸を、柿の色へやって、筆の手を頬のあたりへ休めていた。
　さっきから、細々と、義高への便りを書いていたのである。

急に、それを書き出したのは、意外な伝手を得たからだった。——葵の部屋にいたところを、侍女たちの声に呼ばれて、何事かと自分の室へ帰ってみると、楯親忠の部下が庭先に平伏していて「——一応、お耳に入れねば」と、大竹藪の首斬り場から、急に訴えに来ていたのだった。

「えっ、義高の身近に仕える男とかや？」

わが子の名が、その男の口からいわれたということだけでも、かの女には、路傍の者とはおもえなかった。

「斬ってはならぬ——」

と、ためらいなくいい渡し、そのうえ、

「縛めを解いて、ここへ連れて来て給も。義高の起き臥しの様子も知りたい。義高への便りもその者に頼みたい。ゆめ、あらあらしゅう扱うなや。ともあれ、早うここへ連れて来やれ」

と、いいつけた。

一存では計りかね申すといって、武者らは、楯親忠へ告げに行ったらしい。午を過ぎてから、親忠自身が、その男を連れて来た。

待ちかねていた巴は、

「そなたは、和田殿の手の者、西浦七郎といやるか。義高の母は、わらわぞ。……して、義高は、その後も、つつがなく暮らしていましょうか。鎌倉殿の御夫婦には、お気

に入られているか、それとも、疎まれておりはせぬか。また幼少から、あのお子には、胸痛みを急に起こす持病があったが、鎌倉へ行った後は、お体など、どんな様子であろ。――背は伸びられたか。――常のお食事はどのような?」

などと、たてつづけに、それからそれへ訊くことは、すべて、わが子の消息についてのことばかりだった。

捕われてきた人間は、いま、良人の義仲が敵国視している鎌倉武士の一人であるということなど、忘れはてている容子なのである。

西浦七郎にも、母があるにちがいない。巴が子を思う切々の情にはいたく打たれたらしい。

それからかれの態度は、いかにも、坂東武者らしい素朴さの中にも、礼儀正しい慎みをもち、知るかぎりのことを、巴に語った。

それによると、

「――義高君は、さすが木曾殿の御嫡男と、上にも下にも、賞められ者でおわされまする。御懸念のお体のお弱さは、ぜひもございませぬが、それでも、鎌倉へお移りあったころからみれば、ずんと、大人びてもまいられ、一しお御成人にございまする」

とあって、巴の眉も、ほっと開いたように見えた。

七郎は、なお、

「決して、義高君の朝夕については、御心配はいりません。鎌倉殿お夫婦にも、わがお

子の如くおん眼をかけられ、わけても、御息女の大姫君には、お年もあまり違わぬ義高君とて、親を離れて、遠く一人でお預けの身の上となられている義高君を、たいそう、憐れがって、何かと常にお睦まじいようでもございますから」
　と、つぶさに、いい足した。
　巴は、かれを前にして、見栄もなく泣きぬれた。
　ややあって、かの女から、
「七郎とやら、義高への母の便りを頼むが、それを携えて、鎌倉へ立ち帰って給もるまいか」
　といえば、もとより望むところと、七郎は、
「かしこまってござりまする。さっそくに、お認めくださりませ」
　と、よろこんで答えた。
　それから巴は、めんめんと、母のおもいを、文にした。しかし、頼朝夫婦がこれを読むことも意識しなければならなかった。
　また、それだけではなお足らない気もして、女は女同士と、頼朝の妻政子へも、べつに一書をしたためた。ねんごろに、愛育の恩を謝し、このうえともおん情けをもって、お慈みを賜わりますように——と祈るような気もちでそれを書き終わった。
　暗い霧をふくんだ灯が、所々に、不気味な滲みを赤く都の夜の顔へ出していた。

こぼれ墨に似た夜の中の人影は、たいがい白い刃物をひっさげた武者だった。いつもの景色だが、町の者は、掃き寄せられた落葉か町のくずみたいであった。路地の軒下や市の隅に、さむざむと、飢えの寄りかたまりを作っているだけにすぎない。
「……なんじゃろ。今夜の武者のうごきは」
「さては、東国の頼朝殿の家来衆が、もう、襲って来たかな？」
「うんにゃ、それほどたくさんな兵でもないし、散り散りばらばらの浮き腰だよ」
「分かった、分かった。いま、あっちで聞いて来たぞ」
「おう、どう分かった」
「今夜、西からみだれ入って来た兵は、いつぞや、木曾殿と入れ代りに、平家追討に下った新宮十郎行家殿の兵じゃそうな」
「それがどうして帰って来たのか。――まだ、ものの十日とも経ぬうちに」
「室の山で、大敗けに敗けて逃げ帰って来たのじゃというげな」
「また、敗けたのか」
「大将の行家殿も、わずかな家来を連れただけで、さすが、大路を馳けるのはまが悪いのか、河原渡しに、九条の端れから、七条大和口へ越えて、こっそり、萱ノ御所へ戻ったということぞい」
「やれやれ、よく敗けては帰るこった。このぶんではやがて平家衆に押し返されようがの。いっそ、平家衆が、まいちど都へ還ればよい」

「ところが、それは望みもえない。いちど都を捨てた平家には、民を治める能も信望もない。木曾は眼に見た通りよ。そこで、新たな光は、東から来る。東国の頼朝殿こそ、そのお人だ。なんじらの待つ者だ。双手を上げて迎えよ、と今もこの先の辻で、演舌していた坊さまがあったぞい」
「ははあ、それはいつもの大坊主であろ」
「そうじゃ、高雄の文覚上人」
「あんなことをいい歩いて、よく捕まらぬのう。木曾衆など、あの上人の口にかかっては、まるで木っ葉じゃ。いまにも滅ぶようにいう」
「高雄の上人でのうても、木曾に代る者なら、平家でも鎌倉でもよいがといわぬ者はない。こんな世では、おらどもの仕事はなし、商いはならず、飢え死ぬしかないわ」
「ああ、早う東国の光とやらを見たいものだ。やがて冬にはいったら、おらどもはいったい何を食うて生きるのか。草も枯れ、雪も降り積んで来ように」
　暗い夜霧のじめじめした底に、こうした町の声がおののいている中だった。――一群の武者を前後にしたがえた木曾殿の牛車も、あらあらと車の輪音をたてて、六条の門へ帰って行った。
　院の政治的な方向は、一日ましに、義仲にとって、不利な傾きへ来ているらしい。
　わけて、ここ数日は、その険悪さを、急にしていた。備中から帰洛以来、かれの院参は、ほとんど、毎日のことといってよい。そして終日、院中に頑張っていた。政庁の小

細工や、側近のうごきを、暗に牽制もし、ある意味では、威嚇もしていた。
けれど、殿上のことに通じていないかれにとっては、政治的な関与も監視も、いたずらに自己の疲労を求める以外の何ものではない。
六条の私邸へ帰ると、その鬱気と、疲労がいちどに出て、
「酒」
座につくやいな、求めずにいられなかった。
山吹に酌をさせ、大きな杯を二つ三つ傾けてから、ようやく、左右の諸将へ口をひらくのが常だった。
「きょうの院参をかぎりに、義仲も肚をすえた。はや二度と院へ罷ることはあるまい。木曾一党、ここは再度、旗挙げの義を固め直す秋だが、こよいは顔もそろうておらぬ。それの評議はあすといたそう。あす、午ノ刻、義仲の股肱たる者はみなここへ寄り合えと触れておけ」
悲壮な語気である。
何か、さいごの段階へ来たな、とは感じるものの、諸将には、院中のことはわからない。
楯親忠は、いささかでも、そうした義仲の心を慰めるつもりで、嫡子義高の消息が、鎌倉方の一人の男の口から、かなり細かに分かったということを、ありのまま、耳に入れた。

「ふうむ、そうか……」と、それはそのまま聞いていたが、巴が、その西浦七郎という男に、書面を託して、放してやったと聞くと、

「ばかなやつ」

俄然、ふきげんになって、

「なんで、そんな甘い母の便りなどが、義高の手に渡されるものか。併せて、頼朝の室政子へも書状をやったとは、敵に卑屈を見するものだ。――頼朝はこの義仲を殺さんとしている敵ではないか。――すでに今日、院ノ庁にとどいた早文によれば、頼朝の弟九郎義経なるものが、従者七百騎をつれ、表面は、税物の上納なりと称えて、伊勢へはいったということだ。――税物の上納使などとは、取るにも足らぬ偽り事、それなん、都へ攻めのぼる鎌倉勢の瀬踏みでなくてなんぞ」

きゅっと、朱い唇をゆがめると、唇の線は、大杯の縁に見えた。

「ば、ばかな女よ。この期に、義仲の弱みを頼朝に見するなど、言語道断。巴をよべっ。巴を」

諸将は、立ちかねた。

白々と、ただ義仲の激色を、なだめかねているだけだった。

すると、山吹が、義仲をながし眼に、

「わたくしが、および申して参りましょう」

事もなげに、奥へ立って行った。

嬲られ孤児

山吹は巴の部屋の外に立った。しばらく中をうかがってから、「巴さま」と、簾の内をのぞいて伝えた。
「すぐお越しください。殿がお召しなされます。こよいは、特にごきげんが悪うございますゆえ、お急ぎなされませ」
「たれですか。そんな所で、立ったまま、ものをいうのは」
「山吹です」
「ものを知らぬ女子ではある。ここは女兵の屯ではないぞや。無礼であろう」
「なんですって――」山吹は、声をふるわしながら、簾の内側へはいってすわった。そして、几帳の側に鏡を立てて、浴後の夜化粧をしていた巴の横顔を睨めつけながらいい返した。
「無礼とは、あなたのことではありませんか。鏡に向かって、黛など描きながら、殿のおことばを、そら耳に聞いたりしていて」
「おだまり」
巴は黛をおいて、こっちへ、向き直った。
「さきほど、御帰館をお迎えしたとき、こよいはもう寝みますと、わが良人には、お断

り申しあげてある。……夜ごとの御大酒、身も世も忘れた御放埒。巴には、見ておられませぬ。そなたのような、女雑兵のお相手がちょうど似つかわしかろ」

「よくも、仰っしゃいました。覚えておいで遊ばせ」

睨めすえたままの紅い眼じりから、きらきらと涙を見せ、山吹は、負けずに挑んだ。

「わたくしを、伊那の女雑兵と、おさげすみなされますか。……ならば、あなただって、たかの知れた中三殿のお子。木曾の山家娘でございましょう。どこが、どれほど、違うのですか」

「違いますとも」

巴は、いつになく、憎悪の色をつつまなかった。

「わらわは木曾殿の正室、もともと、そなたたちのように閨のお相手だけをする伽女とは違う。北陸の陣では、軍の旅と、ゆるせぬ無礼もゆるしていたが、都では、ちと思い上がりも慎むがよい」

「正室様。ほほほほ。そんなものと肩を並べようとは思いもしませぬ。伽女と仰っしゃいますが、伏木の御陣までは、わたくしは、何も知らない処女だったのです。御無体は殿のお仕業。こんな身になったのも、殿がわたくしの運命をこうしたのです。ゆめゆめ、あなたの御身分に取って代ろう野心ではありません。……ただ、山吹も女でございますからね、それだけはお覚えおきくださいませ」

「女であったら、どうしやるか」

「自分の女を捧げた男を。……ああ、どういおう……。その憎いような可愛い男は、きっと、自分のものにし切ってみせるというだけのことです。わたくしにだって、そうする自由はあるわけですから」

「ほんに、葵がいったように、そなたという女は怖ろしい牝獣ではある。殿に代って、巴が暇を出します。このお館にはおけぬ。どこへなと出て行くがよい」

「お気のどくですが、ちと僭上でございましょう。いくら正室様でも、そんなことは、殿のお心にあることで、あなたのおさしずには任されません。わたくしは、たれよりも殿に愛されておりまする。殿はいつも仰っしゃいます。山吹よ、わしの側を離れるなよ、そなたがのうては淋しいぞと」

「下女﨟」

巴にしては、めずらしい感情と一しょに、つと、起って、

「さまでいうなら、殿のおん前へ来たがよい。殿を前に、そなたへ、暇をいい渡してあげる。――倶利伽羅では、半弓の矢に毒を塗って、葵ノ前を、人知れず射たであろうが、巴は、そのような策に乗りませぬぞ。さ、わらわとともに来たがよい」

巴が伸ばした手を、山吹はつよく振り払った。語意を成さない上わずった声だった。そして牝鹿のような迅さで、簾の外へ出たが、その弾みに、巴の肩へ、ぱらと、簾が外れて落ちた。

廊を走って、元の酒席へ戻って来た山吹は、人びとのてまえもなく、義仲のひざへ凭

れかかって、わっと、身もだえして泣いた。
「や。何事か？」
と、並居る諸将は、茫然、眼ばかりのような顔をそろえてしまった。
しかし、巴は姿を見せなかった。というのは、おりもおり、中門の武者たちから館の内へ、
「院のお使いの両所が、渡らせられて候うぞ」
という声が伝わり、取次ぎの侍が、すぐ義仲へそれを告げていたからであった。
「なに、院のお使いだと。両所とだけでは分からぬ。たれとたれとが来たのか。もいちど、問い直して来い」
院、と聞くだけで、もう硬直を見せる義仲だった。あたかも敵国の人間を待つかのような語気である。
それに、酒気もあったので、ひざを濡らしている山吹の体を、「うるさいっ」と、突き放すやいな、
「女﨟っ、何を泣き吠えるぞ。ばかっ」
としかりとばして、大股に、客殿の方へ出て行った。
使者は、院の近臣高階泰経と、静賢法印の二人だった。
義仲は、ひとりで会った。

もちろん、武家の慣いで、客殿の外には、伏せ武者が、内を要心していたにちがいない。

が、夜はおそいし、灯は少なく、それに相互が、きのうきょうの、研がれた感情の裡にある。ことばの前に、まず、凄気が漂った。

「義仲に御用はないはず。さるを、かかる深夜に、お使いとは？」

酔ってはいるが、切り口上に義仲の方から口を切った。いや、酔をかくすために、かえって、ことばが、そうなるのかも分からない。

「さ……。その儀ですが」

と、静賢は、僧侶だけに、ともあれ、義仲の気もちを先に柔らげようとした。

「――今夕、木曾殿御退出の後、院には、いたく御宸念をわずらわし給うて、なお、あれからも、諸卿をとどめおかれ、さまざま、御談合の態でおざった。やはり院の頼みと思し召すは、木曾殿のほかにはないのでのう」

「法印」

「は」

「院のお使いが、世辞追従をならべに来たわけではあるまい。余事は無用、御諚のみを、仰せられい」

「では、訊ね申すが」

代って、泰経が口をひらいた。

「こよい、御辺が六条へ立ち帰ると間もなく、洛中に軍馬の動きが見ゆるとて、怪しからぬ沙汰を、院へ告げ参る者もあるが、そも、何ゆえのお支度ですか。きっと、所存を確かめ参れとの、御命(ぎょめい)でありまする」

「ははは、そのことか。ならば、お答えは後として」

義仲は、開き直った。

「——時により、武家が兵馬をうごかすのは、その家職だが、聞くところによれば、ここ数日の間に、院におかせられても、密かに、大和、河内、丹波あたりの武者を召して、法住寺殿(ほうじゅうじでん)の内へ隠しおかるるそうな」

「あ。何者がそのような虚説を」

「いや、虚説ではない。たしかめてある。義仲は、都の守護職。盲目(めしい)ではおざらぬよ。——疑わしくば、いちいち名をあげてみようか。兵庫頭(ひょうごのかみ)章綱(あきつな)、河内守仲信、源蔵人(げんのくろうど)仲兼(なかかね)、七条信清、紀伊範光(きいのりみつ)、左馬頭(さまのかみ)資時(すけとき)など、ひそかに、郎従をつれ、ゆゆしげなる装い(よそおい)して、昨夜も一昨夜も、院に近い森や御所の内へかくれた。まだまだ、ほかにも、多くの武者を召されたにちがいない」

「…………」

「武門にもあらぬ院の御所へ、何事なあって、さように兵をお集めあるか。——察するに、不意を突いて、この義仲を討たんずるお考えに相違あるまい。いや、そうだ。——義仲もそれゆえ、不時の備えを、命じおいたまでのこと」

「や。それは曲解です。邪推と申すもの」
「何が、邪推」
「なるほど、武者どもを召されたのは事実ですが、それは一昨日、今熊野の参籠から御帰還のみぎり、路次の守りを仰せつけられた者どもで、いわば儀仗の兵馬にすぎぬ」
「なぜ、木曾の警固はおきらいあるか」
「供奉には、序列、故実もあれば」
「ま、そんな詮議は、どうでもよい。院の御信頼は、義仲になく、鎌倉の頼朝にあることだけは、はや確かなのだ。迂愚な義仲にも、それだけは読めておる。これ以上、何をかいおう」
沈黙がつづいた。救いのない対峙だった。泰経は苦りきったまま、
「では、その通りを、木曾殿の御返答として、院へ奏聞申しあげてもよろしかろうの」
と、念を押して立ちかけた。
勝手に、といわぬばかりな義仲の嘯きである。泰経は、帰った。帰るしかなく立ち帰った。
けれど、法印の静賢は、あとに残って、なお義仲と、個人的にはなしこんでいた。
この静賢は、大夫坊覚明の知りあいであった。義仲とは、入洛以来、昵懇にしていた。これまでにも、何か事がむずかしくなると、いつもこの僧が、なだめ役に立ち、院と六条の間を、往来していた。

「はて、あいにくよの。大夫坊覚明は、伊勢へ向かって、おらぬそうな。……こういう時に、覚明が不在とは、辻明りがありながら、風に消されているようなものじゃ。木曾殿の御内にとって、覚明こそは、まこと、辻明りともいえるお人なのに、なんで、遠くへお遣わしなされたか」

「………」

酔をつき抜けた義仲の面は蒼白にまでなっていた。そうした相手の眉などには無頓着なつぶやきに似ていながら、静賢の言は、義仲の胸を、ひしひし打った。静賢は、この未成熟な、まだ大人でもない青年でもない一個の男の感じやすい点を、よくのみこんでいるらしかった。そのまれなる長所も極端なる短所も、ややもすると、孤独な淋しさに囚われがちな影をも、見ぬいている風であった。

「……のう木曾殿、御辺の癇癖も無理はない。都が、御辺を翻弄し、試し抜くのじゃよ。御辺は、竹を割ったような御気性ではあるが、都に生き抜くことは、やさしゅうない。都の営み、院中の政事、人のつきあい、なべて裏と表のあることよ。せっかく、戦には勝ちながら、可惜、都に敗れ召さるなよ」

利不利を説くにしても、静賢がいうと、どこかに、情味があり、あたたかさを、感じさせるのであった。

義仲も、この僧には、反抗したことがない。ないばかりか、その夜も、いつか首を垂れて、別人のように、かれの言に、聞き入っていた。

地下の父母のことをいわれ、世間の愛で育てられて来た身上をいわれ、また、妻や子のことなどいわれると、義仲は、うつむいたきりの鼻すじから、ぽたぽたと、ひざへ雫するほど、意気地なく涙をこぼした。

そしてやがて、崩れるように、両手をつくと、

「まこと、御不審の通り、六条へ寄り合えと、こよい将士へ布令ましたが、夜明け次第、兵を解いて、ふたたび、院を脅かし奉るような儀はいたしませぬ」

と、自分の非をみとめ、

「あすも、平常のごとく院参して、身に叛意なきことを、明かし立てまする」

と、素直に詫びた。

義仲のこういう一面を、なぜ人はいわないのか。法皇も、院の諸卿も見てやらないのか。静賢は、さきに帰った泰経が、義仲にとって不利な奏上をしないうちにと、馬を借りて、飛ばして帰った。――院中のすべてが、今のように、義仲を白眼視したままでは、ついには、大事に及ぶであろうと憂えて急いだ。

御簾一重

たれがいい出したのか、月の初め、義仲がまだ備中の水島で苦戦していたころからである。都では、妙な流言が行われていた。

（木曾殿は、鎌倉殿の上洛を必至と見、さきに、平家の宗盛が仕損じたような轍を踏まじと、今からその備えに、密々、手まわしをしておるらしい）
これだけでは、なんの意味か、明らかでない。
けれど、公卿には、すぐ分かった。
平家都落ちの前例があるからである。
あのさい、後白河の法皇は、一門都落ちの当夜まで、真の御態度は、明かされなかった。
いや、人のよい宗盛を、うまうまと、あざむき給うて、真際に突然、お行方をくらましてしまったのである。平家にとって、致命的な失策だったのは、いうまでもない。
義仲も、もちろん、それは聞いている。
そして、かれの立場は、ちょうど今、さきの平家一門の立場と似ていた。
ひとたび、頼朝の軍勢を迎えるとなれば、とても、都では守りえない。それはかつて、木曾が平家を追い落したのと、おなじ理である。
では、都を退いて、どこへ拠るか。
義仲の地盤は、北陸から信濃につよい。北陸までは、鎌倉の勢力も及んでいない。
で、たれの臆測に始まったものか、
（必定、木曾殿は、後白河の法皇を拉して、北陸へ落ちる考えでおるに違いない）
と、信じられた。

義仲自身は、そんなことを、かつて人に口外した覚えはない。
が、よくよく考えてみると、叔父の新宮十郎行家と、酒を酌んでいたとき、行家が例の智謀を誇って、
(万一のときには、北陸へ拠って、いったん、頼朝に都を明け渡しても、院のお身がらを拉して、われらの陣中に擁し奉れば……)
というような奇略をささやいたことがある。つまりいい出したのは、叔父行家だ。
してみると、それを院中のたれかに、義仲の企みかのようにもらした人間も、ひょっとしたら、あの行家ではあるまいか。
(そうだ――)と、思い当ってくる。
義仲は、備中水島から帰るやいな、行家を、面詰して、ばあいによってはと、ある決意をさえ、胸に抱いていたのだった。
ところが、その行家は、かれの帰洛と入れちがいに、播州路へ出発し、「平家追討のため」と称して、意識的に、義仲を避けまわっている。
義仲は、院参のうえ、そのことについて、
(何者のいいふらしやら存ぜぬが、近ごろ、義仲の心事を忖度し、しいて悪しざまなる風評が聞かれ申すが、さような謀略は、義仲の露だに思うところではおざらぬ。まこと、迷惑千万)
と、弁解した。そしてなお、

（もしまた、たれから聞いたなどと、たしかにいいうる証人があるなれば、その者を、義仲の面前へお引き据えあれ）

と、声を大にして迫った。

いつものことだが、こうなると、諸卿は色を失い、法皇のお心まで騒がせたあげく、

（決して、院中のたれひとり、さような儀は、疑うてもおらぬ。おそらく、*口さがなき凡下どもの辻ばなしにすぎまい。法皇におかせられても、ただただ、御意外そうな御気色に仰がれる）

と、打ち消した。

（いや、御信用なくば、それでよいのです）

義仲は、深くも追究しなかった。火元は、身内の叔父だからである。

が、その後もまた、おもしろくない問題が耳にはいった。それも、かれが水島合戦の留守中にあったことで、聞き捨てにならじと、かれは怒った。

――というのは、東海、東山の諸国へ、公然と、次のような院宣が降されていたことが分かったのだ。文の要旨は、

（近年、世乱に乗じて、社寺、王家、公卿などの領より上すべき貢税が怠りがちになっているが、納税の義務を違背してはならぬ。もし命に服さぬ者があれば、頼朝の手をもって、きっと、処罰させるであろう）

と、いう意味のものである。

これで見ると、法皇の御信任は、頼朝にあって、頼朝こそ、院の御親兵ということになる。

反対に、義仲は、あってないようなものだ。いや、義仲への不信任状を、諸国へ配布されたものといえなくもない。

この件でも、義仲は、

(いかなる落度ゆえに、義仲を排して、特に、頼朝をお用いあるか)

と、諸大臣に迫り、納言、参議、たれかれなくつかまえては、その返答を迫った。

かれらは、義仲を見ると、逃げまわるだけだった。答えに窮して「一に叡慮にあるところで、われらは、あずかり知らぬ」という。

義仲は、やりばのない憤怒をつつんで、ついに直々、法皇の座下にぬかずいた。そして、精いっぱいな怨みをもって、こう奏した。

(ことば巧みに、ものの申せぬ質ゆえ、礼を失するやも知れませぬが、ただ、率直に愚存を申しあげまする。義仲は、法皇にたいし奉って、二つの怨みがございます。一つは、陽に義仲をあやなし給いながら、陰には頼朝を召されていることです。二には、諸道への貢税の宣に、頼朝の名をあげ給うて、この義仲は無視せられておられることです。こう二つは、なんとも、肚にこらえかねまする。……そも、法皇の御本心のあるところは、義仲か頼朝か。いずれに、御信任をおかせられておるのでしょう。次第によっては、義仲も、かかる都に、恋々たる者ではございませぬ。あからさまに、叡慮のまこ

とを、仰せ聞けくださいまし)

声に、血が交じっているようだった。涙こそ、こぼさないが、感情の波の中に、やっと、身の慎みを、支えているような姿であった。

その若い未熟さを――そして玉簾の下に不馴れな身を曲げている一個の野性を――後白河は始終、にんまりと、ながめておられた。何か、憐れむべきものでも見るように、張りのある銀杏のようなおん瞼を半眼にして見くだしておられるのだった。

「…………」

それきりである。

待てど待てど、なんの仰せ出でもない。御簾一重は、べつな国のようである。

義仲は、どうにも、身をもてあましてしまった。

お答えがないので、継ぐことばも、見出せないのだった。

といって、座を立つこともできない気がする。義仲の心が義仲をしばりつけていた。

おそろしいほど長い空間が、ひとり悶えを、余儀なくさせた。

「は、は、は、は」

ようやく、お声がひびいた。そして人なみ以上大きくて柔軟なそのお体を、やや斜めに向けられて、かたわらの参議通親へ、

「何か、木曾が、思いちがいをしておるらしいの。あとで、おことからよう説いてやるがよい。木曾は都の守護をかね、かつは平家追討の命を受けておるはずの者。朝廷とし

ても、なんで、おろそかに思おうぞ。木曾のひがみよ。木曾は、都言葉にも馴れおるまい。木曾の耳にも、よく得心のまいるようにはなしてやれい」
仰っしゃったかと思うと、もうお姿の影は、御簾の裡になかった。

これまでと、思ったのである。
再び院参はすまいと、腹に誓って、帰ったのだった。
しかし、静賢法印に、なだめられて、
「いや、おれも悪い……」
義仲は思い直した。そして次の日は、兵の集まりを解き、わざと牛車で院参した。
院は、静かである。何事もうかがわれない。
ただ気になるのは、行家の行動だった。室の山で大敗して、都へ逃げ返っているはずだが、住居にもいないようだし、院のうちにも姿は見えない。
「おれを避けて、どこぞに悄気ているものとみえる。自分の智恵にも、智恵負けするくせに、なお負け足りず、戦に出れば、必ず敗れるという叔父だ。取るにも足らんが、毎度の堪忍も、くせになる。今度ばかりは引っ捉えて……」
ひそかに、その機を狙っていた。
しかし、よく腹を立てるが、冷却しやすいのも、かれの怒りの特徴であった。いつか、叔父のことなど、念頭になくなっていた。日のたつにつれ、より以上なことが、烈

しい風速で、かれを襲っていたからである。
一軍をさずけて、伊勢方面へ派遣した大夫坊覚明からは、
（――鎌倉殿の弟、九郎殿の一行は、人数六百余、すでにこの地に着かれたれど、さしたる動きも候わず）
と、早馬があった。
けれど二、三日たつとすぐ、九郎義経の伊勢入国に刺激されて、土地の侍たちが、鈴鹿山を切りふさぎ、木曾勢に向かって、合戦を挑んでいる――という続いての飛脚だった。
また。
美濃方面の別軍からは、もっと重大な情報があった。――頼朝自身、数万騎をひきいて、鎌倉を立ち、足柄を西へ越えたというのである。
次便には、なお、
（頼朝は、遠州辺に軍を駐め、しばらく、上洛の機をうかがうらしいとのうわさ）
と、ある。
平家は、西の山陽から。鎌倉勢は、東から。――それさえ刻々、義仲の首の輪をしめつけてくる感じなのに、十一月にはいると、南都の僧兵がうごき出し、叡山の様子も、怪しげに見え始めた。
まだ、鬨の声こそあげないが、みな、自分に叛く者であることを、義仲は知ってい

た。なぜならば、南都へは、さきに、義仲から同心せよという使者を出している。しかし反応は、逆だった。あきらかに、敵意をしめし、院へ、歩み寄っていた。

果たして、それから間もなく、

「奈良の僧正が、石川判官代義兼の兵とともに、院の御所へはいった」

と、物見の知らせがあり、また、

「叡山の座主明雲も、仁和寺の法親王も、何事にや、それぞれ、常住の寺を去って、院中に楯籠ったらしい様子」

という風聞である。

でも、まだ義仲は、それが院の重大な御決意を示す要害の手始めとも思わなかった。

——でかれは、西へも東へも、また南へも、手持の兵を続々派して、ただ遠くにのみ備えていた。

そして、院へ対しては、

「いたずらに、聖聴を驚かし奉るのではおざらぬ。しかし、世上の騒がしさ、なんとも奇怪に存じますゆえ、守護として、念のために」

と、各所に、兵を配置し始めた。もちろん、院の御所への通路も、十一月九日限り遮断した。

すると、それに酬いるかのように、法皇は、義仲を召されて、

「再々、申し渡してあるに、なぜ和殿は、言を左右にして、西下せぬか。都の路次や、

美濃、伊勢ばかりへ兵を送って、平家へ向かっての軍を進めぬぞ、平家追討こそ、任ではないか」

と、右大弁兼光をもって、きつい御譴責を降した。

義仲は、その場合でない旨を、抗弁して、

「どうしても、即刻、平家追討を行えとの御命なれば、一族の志田義広を、さし向けんと存じまする。——鎌倉方のいぶかしき動きの止まぬかぎり、義仲は、都を離れるわけにはまいらぬ。義広へ、追討の役、仰せ付けねがいまする」

と、強くいい張った。

右大弁兼光も、また頑として、

「さような、わたくし事の願いは、お聞き届け相なるまい。何かと、和殿に対する世上の疑惑もかずかずのおりなれば、その明かし立てのためにも、平家追討に向かわれるがよい」

と、かれの請いは、取り上げられる風もない。

町の様相は、すでに、あるものを感じとっている。この日あたり、辻々は、事実上、戦になったような騒ぎを描き出していた。——それを見つつ六条へ帰ってゆく義仲のあたまも、もう、自身が合戦の中にあるのとおなじ錯覚に陥ちていた。

「戦えば、おれは勝つ。きっと勝つのだ。信濃、北陸、斬り従えて来たおれではないか。——何を院の公卿ばらに、こうまで、男を下げたり、みじめに弄ばれて」

ひどく、自分が、憐れに思えた。
眠っていた本質のものが、ぼつ然と、血に醒めた。九十日のあいだ、檻の中を余儀なくされていた野性であろう。からからと、かれは笑いたくなった。院も公卿も、何ものぞと、いいたげな眉となった。
「やいっ、車を止めろ。たれぞ、馬を貸せ、馬を」
もどかしい牛車を飛び出すと、かれは、郎従の馬を取って跨がった。そして、赤い夕映えの下に、右往左往する人影を割って、六条の方へ一気に馳けた。

冠放棄

出たときは、いつものように衣冠束帯で院参したはずの義仲だった。それが、牛車もどこかへ打ち捨て、身装もそのまま、馬を飛ばして帰って来たので、六条館の家臣たちは、
「すわ、おあるじの身に、何事かあったるぞ」
と、とたんに立ち騒いだ。無言のまま奥へはいってゆく義仲の背を、落ち着かない眼で見送り合った。
義仲は、まっすぐに奥へ歩いた。しかしすわりもしないのである。腕拱いて、寝殿のまん中に突っ立ったきり、何も見えない夜の大庭へ向かって、二つの眼をすえていた。

「…………」
なおまだ、かれの重大な動意は、決意の一歩前にあった。それを重大だと反覆してみる理性の皮膜を、断ちのこしていた。
うつろな眼は、それの迷いを語っている――。
さいごの帰着を、自分の中でなく、外のやみへ、放心状態にまで、さがし求める眼なのである。破局的な自暴を思いながらも「待て」と惑い、「しばし……」と踏み切りえないものがあった。
朝廷。
絶対者。
この国の伝統とその組織への反逆。
荒ぶる血の中にさえ、それは眼を閉じきれない根づよさをもっていた。罪の意識がへバリついて、ただちに全盲にはなりきれない。
「…………」
すると。――かれの網膜に無数な白い妖虫にも似た光が掠め出した。それが暗天からチラチラと斜線の縞を降らして来ると、見るまに、かれの凝視する世界は白々と斑な夜に変ってきた。
雪だった。ことしの初雪である。
風を伴った雪片が、階の下からも吹きこんで来、義仲の袂や肩を散り旋った。針毛を

立てた羆のように、かれの眸は上へつり上がった。そして廂の燈籠や室内の燭までが妖しげな明滅を描くにつれ、その眼も異様な光を、さまよわせて、
「山吹、山吹っ」
突然、辺りを振り向いて呼んだ。
壁代を後ろにして、巴がすわっていた。さっきからのことである。かの女は良人の帰館を迎えたとき、すでに常ならぬ様子に気づいて、たれをも退け、ひとりそこにいたのであった。
「山吹は参っておりませぬ。巴は、これにおりますが」
「巴……おう巴か。たれでもよい」
「どうぞ遊ばしましたか」
「どうもせぬ。鎧櫃を出せ。おれの大鎧を」
「え、お身支度をかえられまするか」
「そうだ。——こんな物を纏うているから義仲が義仲でなくなってしまう。四位下左馬頭の衣冠などは、殿上に並べば端の端くれなる者よ。そして、一にも二にも席順だ。位階が低うては、ものさえいえぬ」
「またも院の御所になんぞおもしろからぬお兆しでも」
「いや、日々の堪忍は、もう終わった。いつまで古池の公卿蛙に、そうそう、愚弄されていられるものか。今にして、この義仲にも思い当ってくるぞ。以前、平相国清盛も、

院に対しては、しばしば癇癖を発し、兵馬の鉄鎚を下したと申すことだ。――げに清盛がやったのも無理はない」

「無理がないとの仰せは」

「清盛の仕方がわかるということだ。かかるうえは、兵馬にものをいわせ、位階官職の任免もなしうる力を自分に持たねば、まことには、都にはいったかいもない。四位ずれの仕着せを賜うて、骨抜き同様にされ、公卿の末座に据えおかれるなど、ば、ばかな骨頂だわ。ばか気たこの道化衣裳よ」

義仲は、顎を上げ、自然、恐い顔をしながら冠の紐をむしり切った。そして巴の方へ、

「着馴れた物をこそよ。はやく鎧を持って来い」

と、冠をほうり投げた。

かの女が侍女たちにそれを抱えさせて来る間に、義仲は、着ている直衣も大口の袴も、引き裂くように体から剝ぎ捨てていた。まるで狂児の仕グサである。だが巴は、駒王丸のむかしからそんなことも見馴れていた。今さら、良人が発狂したかなどと疑いもしていない。ついに来るべきものが来たらしい、と密かな戦慄を胸に抱いたのみであった。

――者ども、弓に弦を張れ、長柄の刃をあらためよ。

足ごしらえはよいか。
内仕えの侍どもも、すべて身をよろい、草鞋を穿きしめろ。
館の内も、土足のままの往来、苦しゅうない。
こよいからは、この六条の家は、ただの陣屋ぞ。几帳も絵ぶすまも、取っ払え。
義仲たりとも、鎧を解いては寝ぬぞ。面々もその心得のもとに、陣屋の四門を結びかためよ。雪ともなったるゆえ、夜更けなば寒からん。大篝を諸所に焚いて、兵を凍え屈ますな。四時に、番を代えて眠り、組をかえて起き出でよ。
「――わかったか。わかったかっ、者ども」
降り盛って来た雪のどこかで、こう、義仲の大声が、さっきから、館の内外を、震わしていた。
樋口兼光、今井兼平、根井小弥太、楯親忠を始めとし、小諸忠兼、保科四郎、余田次郎など、呼びたてられた人びとは、義仲の声がする寝殿の広床をさして馳け集まり、
「そも、いずこへの御出勢か」
と、頭上に下る命を待った。
けれど、すぐ邸外へ出馬する風はない。義仲は、よろい櫃に腰をすえ、酒甕を運ばせて、
「雪だ。雪こそはなつかしい。都へはいったのは、七月のころ。上洛以来、久しぶり故郷の友に出会った気がするぞ。おれども源氏はみな雪国育ち。さあ、酌み合え酌み合

え。おれも酌む」
と、杯をとった。
そして、義仲は、
「もう、およそは察したろうが、坐して自滅を待つよりは……」
と、肚を割って一同へ告げた。
法皇の御所を襲撃して、側近の諸公卿を殺し、後白河を一時他所へ幽閉しまいらせたうえで、次の――対鎌倉、対平家などの――策を講じようというのである。
「えっ、院の御所へ」
たれの面も、さすが、さっと白けわたるおののきへ、義仲は、
「それしかないのだ。それしか、木曾がここを切り抜ける道はない」
といい切り、何者の異議もゆるさないとする悲調と威圧をこめて、なお激越にいいつづけた。
「上洛の当初には、あれほどにまで、木曾を頼みに思し召すと称しながら、すぐ裏では、行家ごときを近づけ給うて、事々におれを忌み遠ざけ、また頼朝には、密使を通わすなど、院中の機関は、まったくひとを愚弄するもの。――なおもって、我慢ならぬは、堂上の公卿ら皆、おれども人間は、公卿のために生きている者かのように心得ていることだ。武者が命を賭けて戦った功などは、飼鶏の蹴合いほどにも見ていない。鶏合わせ同様に、おれと平家、おれと頼朝、おれと行家などをカケ合わせ、血みどろな飛毛

の闘いを桟敷にいてながめ、勝ち鶏の賭物だけを取ろうというのだ。——義仲、その手は食わん。かれも人なら、おれどもも人。おのれが生きる道をえらぶになんのはばかりやある」

雪はひょうひょうと、雪の声をもってきた。

その妖しい光の旋舞は、かれの網膜から頭のうちにも、狂おしい幻覚を描くのではあるまいか。

強烈な感傷の語は、部下の将士の血をかき乱さずにはいない。加うるに酒気もあり、かれらの群れからも、院への罵声や、無念泣きの咽びが起こった。それはお互いに奔激を助け合う波の作用に似ている。

はやくも、根井小弥太が、

「お肚をすえられた以上、事もれては一大事。われらがまず数百騎をもって、十郎行家殿の居所を囲み、あの跛行殿をひっ捕えて参りましょうず」

と叫んだ。

「よく申した小弥太。叔父にはあれど院方に媚びて木曾を自滅にみちびかんとする悪叔父。首にして持ち帰るも仔細ないぞ。すぐ行け」

義仲が、許容すると、それこそ一大事であるとして巴の兄、樋口次郎兼光が、あわてて止めた。

「いや、お待ちください。小弥太殿もしばらく待て」

「樋口。なぜ止める」
「先刻からの仰せ、今は御無理とも存じません。けれど、われから軽率な手出しは、いかがあろうか。武力に出る以上、しかと勝算を持たいでは」
「勝目がないと、和殿は見るのか」
「行家殿や院の御所を攻めるには、不足もありますまい。したが、鎌倉方には勝てず、平家勢にも勝てませぬ」
「あははは。なんと、樋口にも似ぬ弱音を」
「では烏滸ながらお訊ねしますが、殿には、在京のお味方が今、どれほどあると思し召すか」
「ううむ。……大和、伊勢、美濃、諸所へ向けて、だいぶ兵も散らしたが、なお洛中の兵は、二万騎はくだるまい」
「それが、かなしいかな、四千騎にも足りませぬ」
「……どうして？」
「備中お引き揚げのさい、すでに途中において逃散の兵も多く出、かねて洛中守護のため、丹波口、山科口、淀口などに立たせおいた屯々の兵も、いつか、あらまし逃げ散ってしまいました」
「そ、それを承知で、和殿輩は、ただ見ていたのか」
「いえいえ、いかに防ごうにも、人の離反は、水が引くのにも似て、どうにも手だてが

ありませぬ。かつまた、西の平家は都への糧道を断ち、東の海道とて、おなじことで、洛中の食物は日々細り、そう大勢で食うほどもないので」
「なくば、寺社、民家、どこの土倉からでも」
「なんで、今ごろそんな隠し稲がありましょうぞ。田のうちに皆、食い尽しておりました。頼む一路は、北陸のみですが」
「さればこそ、院の法皇を、おれどもの陣中に擁して、その北陸へ、ひとまず落ちのびんと思うのだ」
「さは申せ、その北陸さえも、今は、おぼつかない頼みではありますまいか。かの加賀の住人、富樫泰家ごときも、一族部下をひきつれ、無断、都を退去しておりまする」
「なに、富樫も失せたか」
「いや、失せたのは、よい方です。信濃源氏の判官代村上三郎の如きは、寝返って、院の人数に加わっておりまするし」
「…………」
義仲は黙った。唖然たる態である。どうしてそう人が自分を離れて行くのか、自身には解けないような顔だった。
——一時は無慮六万とみられた木曾軍だが、樋口のことばが事実とすれば、在京の兵わずか四千という現実も認めないわけにはゆかない。
さらに、兼光が諫めることには、

「ここにはおりませぬが、かねて、大夫坊覚明が、殿へおすすめしておいた遠謀に従い、十日ほどはなおこのままの陣となしおき給い、やがて、奥州藤原秀衡の反応と、屋島の平家からの返答をお待ちあっては、いかがでしょうか。そのうえにて、さいごの断を取り、一去、北陸へ移るも、遅くないかと存じまする」

というのであった。

雪泥

このさい、みちのくの大勢力、藤原秀衡がうごくとすれば、天下の趨勢は、また予断をゆるさない。

すくなくとも、現状の義仲にとり、事ははなはだおもしろくなってくる。

――それを誘うことが一つ。

また、もう一策は。

源氏平家の族称などの体面や行きがかりを捨て、屋島にある平家と和睦することだ。

これが成れば、鎌倉の頼朝は、その出はなを打ちくだかれ、当分はまず東国の限られた地に、かがんでいるしか策はあるまい。

頼朝のそれを見れば、秀衡は、なお積極に出て来るだろう。北寒の僻地から、暖地の関東へ伸び出たいとする意欲は、奥州藤原氏の本能である。

──遠くはあるが、日数はかかるが、ともかく、極力呼びかけるべきであると、あらゆる手段と好条件をもって、義仲はすでにこの九月ごろに、第一の使いを派し、第二の使いを送り、第三の使いを、みちのくへ、急派していた。

すべて、大夫坊覚明の献策だった。

が、覚明の真意では、より以上、義仲と平家との和睦に期待したのである。──院中の謀や、行家の二心や、鎌倉の進出などを、一挙に抑える手は、それしかないと、義仲へすすめたのだった。

が、義仲は渋った。今さら、平家へ和を請うなどはと、心外に思った。しかしかれの位置は、袋の鼠である。日ましに、ひもは締められてゆく。それをも忍ぶ以外はない余儀なさを、ついにはかれも覚って来た。

鏡師に命じ、一尺の大鏡を造らせ、背面のまわりには、八幡のお使いを象徴した鳩の模様を毛彫に彫らせ、中央に細密な文字で、「長く和して、ともに、聖帝に仕えん」という意味の誓文と月日を刻ませた。

使者をえらんで、それを屋島の平家へ、送ったのだった。

諾か、拒否か、平家からはまだ返辞がない。

もっとも、屋島内裏へ、それが届いたかと思われるころ、一方、単独で都を出た行家は、室の山で平軍と戦っていた。そして、さんざんに敗けて帰った。──これと義仲の申し入れとが、在屋島の一門評議のうえに、どういう齟齬や矛盾を与えたか、そこのと

ころは不明である。少なくも、和議成立の支障になったことは疑いない。

それにせよ、拒否なら拒否の返牒があろう。まだ望みを断つには早いと、樋口兼光は、思うのだった。

主君義仲は「生きる道はこれしかない」と、院の御所の襲撃をさけんだが、兼光は、「大夫坊がいい残したその策一つ」と恃んでいる。

その見込みもまた破れたら、それはそれまでのことだ。打開の余地はまずあるまい。主君と立てた妹婿――そして幼少から一つ木曾の山野で育った宿縁の人――義仲とともに死んでやろう。そう思慮もしたうえで諫めたのであった。

不承不承には見えたが、義仲も、

「では、樋口が諫めにまかせ、あと十日を、この陣構えのまま、見ていようか」

やっと、得心の色だった。

夜半になり、雪は小やみになったが、わずかな間に、温かそうな厚みをもった白雪が、木々にも、大屋根にも積もっていた。そして雲間の薄いところには月かと思われる真珠色の光があった。世が平和ならば、かかる夜、おれも巴の笛に、葵の舞でも見ようものを、と義仲はふと思った。

「……いや、葵はまだ病の床だった」

思わぬではないが、思うことをかれは努めて避ける風だった。あの細殿の前を通っても、かの女の帳をのぞいてやったこともない。

「そうだ、かかる夜、あの姫君は、どうしているやら？　……。関白殿の冬姫という御息女は」

なぜか、突然と、それを思い出した。

雪、月、そして自然、花を連想したものか。

いやいや、かれ自身はその心理を知っている。

運命の危殆、激情の起伏、どういう状態にあっても、冬姫の面影は、かれの胸に住んでいた。

「いつかは、遂げん」と、その恋にいいつづけて来た。兵馬の乱を思い立てば、すぐ、乱に乗じてそれを果たそうと考え、むしろ恋が、盲目的な暴挙へかれを駆り立てるほどだった。

——巴は、諸将の座の上にいて、兄兼光の諫言をともに聞いていたが、そのため、良人が沈み出したものかと見て、義仲のそばへ寄ってゆき、

「お酌ぎいたしましょう」

と、酒の瓶子を持った。

「巴か」

「はい」

義仲は、冬姫の幻想と、巴の顔とを、重ねて見ながら、そのうえにも、なおあらぬ眸で、

「山吹はどうした。姿が見えぬが」
と、あたりを見まわした。
「そのことは、宵にも申しあげましたが」
「何かいったか、おれに」
「山吹は、もう、ここにおりませぬ」
「おらぬがゆえに訊くのだ。どうしたのか」
「葵御前と烈しい口争いをした末、わらわにまで、慮外を申しますゆえ、殿に代って暇を出しました」
「館から追い出したのか」
「殿のおんためにもならず、しょせんは、毒になる女。武者に命じて、羅生門の西へ追いやりました。お怒りでございましょう。さだめし、巴の仕方を、女の嫉妬と、お憎しみでもございましょう。巴を、どのようにも、御打擲くださいませ」
「ふウむ……。よく、素直に出て行ったの、あの女が」
義仲の苦笑は、巴にも、ほかの諸将にも、案外だった。その処置を怒る容子もなく、手の大杯を傾けて、眉が隠れるばかり仰いで飲んだだけであった。
「ゆうべの雪に紛れて、池殿一家が京外へ脱け出されたそうな」
「さては、鎌倉方を頼んで」

「いうまでもなかろう。かねてそのことは、頼朝殿のしきりなおすすめであったとか、うわさにも聞こえていたことだし」

「うわさが、まことになったわけだの」

「これで、京の物騒も、いよいよ、ただ事ではなくなったわい。さいごの悪日へ来たらしいぞ。池殿一家が、鎌倉殿のふところへ逃げ行かれたのは、何よりもその証拠ではあるまいかよ」

めずらしいほどきょうは暖かく、太陽もらんらんとして、雪のあしたの雪を解かすに急だった。

その代りに、町はひどい雪ぬかるみである。牛車も輿も歩けたものではない。ただ、今なお洛中を去らない浮浪者の群ればかりが、どこからともなく、虱のようにはい出していた。そして空き館や社寺の門前に陽なたぼっこして、どうでもよい世の流れをながめ愉しむかの如く、ホカホカ顔をそろえている。

池殿失踪の早耳は、この中での興味だった。

いや、前々からもう、それは世間注視の的だった。――でけさの風聞によると、池大納言頼盛以下、子の為盛、仲盛、妹婿など一家郎従の数十人は、仁和寺附近の隠れ家を出、昨夜、降りしきる雪のうちに、鎌倉殿を恃んで、東国へ逐電したというのである。

ただ、そのさいに、たった一名だけ、主家の行を離れて、西へ去った者があって、それがたれだったかは、当時、話題にのぼらなかったが、やがて後に、池家譜代の老臣、

弥兵衛宗清だったことが分かった。
いざ立たん、という真際に、その宗清は、主人頼盛にむかって、
(御奉公も、これまで、どうかお暇を下し賜わりませ)
と申し出た。
(なぜ、儂とともに、東国へ行くのをきらうぞ。──都に残れば、かならず、兵乱を見、われらも、義仲のため、みなごろしの目に会おうに)
と、頼盛は、びっくりして、家に久しいこの忠実な老臣の乞いを、思いかえさせようとした。
宗清は、涙をこぼして、
(若年から君のお側えに仕えて来た身として、お別れしたくないのはやまやまですが、生じ、もののふの道を過たずに通って来た宗清は、あと生きたところで十年か十五年、生涯の歩みを、ここで曲げたくございません。……どうか、わたくしの晩節と思し召して、わがままをおゆるしくださいませ)
と、いった。
意味は、言外にある。
はっと、頼盛も胸を打たれ、主従、無言のまま涙になってしまった。
世間の批判は、頼盛にきびしい。かれにも、聞こえていないわけはない。
敗亡の一門を見捨て、ひとり都に居残られた卑劣なお方、恥を知らぬお人、不人情な

池殿と、あらゆる辛い風当りである。

要するに、命惜しさのため、同族たる平家一門を、敵に売ったという非難だ。

かたちは、そうなっている。世間が誹るのはむりでない。

けれど、頼盛には、理由もあることだった。弁解の余地は、山ほどもある。――清盛在世中からの内輪の揉事だの、妻と八条女院、女院と後白河との関係だの、ゆく末、平家のためを思うがゆえにしたことだの、かずかずな素因と誤解とが、こぐらかって、心ならずも、こうなって来た孤独である。――しかしこの孤独を、たれも、憐れな離れ雁よ、とは見てくれない。

（……宗清さえも）

と、かれはいいたかった。

頼盛の願いは、平家と頼朝との間に、どうか、不幸な戦いを見ぬように、なんとか、源平二つの氏族が、仲よく、共栄してゆける工夫はないものか。――ただ、それだけを、多年願い通して来ただけのことにすぎない。

自然、それには、後白河のお力にもすがろうとしたし、平和のためにはと、鎌倉へ書を通わしたことも事実である。

すべては、反対にとられて来た。世間からも、同族からも。

また、義仲の入洛は、まったく、かれの工作を、画餅にしてしまった。平和の希望など、今は、痴人の夢にひとしい。

(心ならねど、鎌倉殿の情にあまえて)

と、東国行きの心をきめたわけだった。

が、老臣の宗清だけは、

(あなた様は、あなた様の道を迷わずお踏みください。それでこそお立派です。が、宗清は、古きがままの、もののふの道を、まっすぐ、踏みしめて終わりとう存じまする。……むかし、平治の乱のとき、幼い頼朝殿に、恩義をかけた縁を頼って、宗清までが、鎌倉殿のお廂の下に、憐れを乞いに参ったとありましては、池殿のお身内に、ひとりの武者もおらなかったと世の嘲りをなお加えましょう。宗清ごとき頑固者が一人はいてもよろしいのでございますまいか)

と、多年の主君と、雪の中で、袂を分かった。

そしてこの宗清は、山に隠れて剃髪したわけでもなく、ひとり、屋島へ渡ってゆき、

(参り遅れましたが、今は心残りもない身です。――老骨ながら、池殿御一族の分も負うて、働く覚悟にござりますれば、何とぞ、御陣の端になと、お加えおきくだされい)

と、身を流離の平軍に投じ、矢にあたって死ぬまで、日々、明るい顔で一門の中にいたということである。

――だが、池殿東下の心境も、それらの余談も、雪のあしたのちまたには、まだ、詳しく伝わっていたわけではない。

ただ、どこかでいわれていた風評の一片を、敏感な木曾方の放免(密偵)がチラと小

耳に入れたので、
「すわ、真なら大変だ」
と、六条へ駆けつけて、これを義仲の耳に入れたことから、ぱっと、明るみに出たものだった。
「なんたる手抜かりぞ。あの辺りには、見張りの武者も屯させてあったるに」
と部将たちは、それと知って、ののしりあい、落合五郎兼行や、ほか二、三の将は、
「この雪解路、かれらとて、行き悩んでいるにちがいない。馬を飛ばして追いつき、数の知れた頼盛以下の者、数珠つなぎとして、引っ捕えてまいりましょうず」
と、猛り叫んだが、義仲は、
「いや、放っておけ。――腰抜けの頼盛ずれを捕えるのに、矢一とすじ射るのも、もったいないわ。くだらぬ矢費え、思い止まろう」
と、度量をしめし、さても、恥さえ思わねば、世の中は広い、と手を打ちたたいて一同、嘲笑ったことだった。
すると、この事件で、ややガヤガヤ騒いでいたところへ、*主典代景宗なる者が、院のお使いとして、騎馬武者大勢をしたがえ、
「木曾殿やおわす。直々、院旨なお伝え申したい」
と、乗り入れて来た。
いつもならば、公卿車であるべきに、騎馬甲冑の装いだ、まるで、陣門を訪う軍使か

のような錯覚を起こさせる。
「おう、たれなと来い。会ってやろう」
義仲も、その気で会った。寝殿の広床に出て腰うちかけ、院使にたいしても、武将の床几を与えた。
おそらくは、院と六条との交渉も、これが、さいごのものだろう。なんとなく、義仲は、直覚した。
そしてその通りになったのである。その日は、十一月十八日、午ノ刻（正十二時）をやや過ぎていた。

天魔の府

むかいあったが、主典代景宗は、いつまでも口をとじていた。義仲の眸を眸でかっきとうけとめたまま、初めから肩肱張った態度なのだ。
やがて、そのかれが、最初に口を切ったことばは「木曾殿、無礼ではないか」であった。「院宣を承るのに、床几に腰かけて聞く法はない。下にいて、謹んで聞くべきである」と、教えるような口吻である。
義仲は苦笑をゆがめ「何をいうか景宗」と、かえって、かれを揶揄した。
院のお使いなれば、なぜ文官は文官らしい衣冠で来ないのか。あまたな武者をひきつ

れ、甲冑を帯して来たゆえ、こちらも武者同様な扱いをしたまでのことである。「——それが不満なら出直してまいれ」と、やり返して、身を低めるどころではない。

ヤブ蛇のかたちである。「まずい」と思ったのであろう。景宗は急に態度をかえた。

「——いや、事々に物騒がしい昨今、おたがいも何やら落ち着かぬおりよ。ま、礼は略して、院の仰せのみを申し渡す。そのままでよい。聞かれよ木曾殿」

「おう、このままでよくば」

「明朝までに、和殿をもふくめた木曾衆すべて、六条を引き払い、京外へ出づべしとの仰せ降しでおざる」

「なに、この義仲へ、京外に去れとの、御命とあるか」

「いやいや。退去せよの追放のと申す御諚ではない」

「でも、今のことばは、そう取れる」

「おことばの意味には裏もある。おふくみの辺もよく聞き分けられたがよい」

「義仲、そんな調法な耳はもたぬ。ことばは一つで足りよう。はっきり申してもらいたい」

「つまりは、御催促なのじゃ。これまでにも、再三再四、木曾殿へたいしては、本来の平家追討の任に馳せ向かわれよとのお沙汰は降っていたはずであった」

「兵家には兵略、義仲の胸にも方寸のあること。なんで、いちいちの進退を、*長袖の堂上たちが指図に待とうや。西国へ征くべき時が来れば、仰せなくとも、西国へ征く」

「では、昨夜来の軍揃え（いくさぞろえ）は、何がためのお準備（したく）か」
「洛中の物騒、いつなんどき、何事が起ころうも測り知れぬため、京の守護職として」
「それにしては物々しい。いたずらに聖聴を驚かし奉るもの」
「驚くお覚えがあればこそ驚かれるのであろ。義仲の知ったことかは。わははは、あははは」
　狂笑ともいえるような、奇妙な誇張をもった笑い方だった。声の割れ（わ）は、その若い肉体のどこかに、不健康な亀裂（ひび）がはいっていることをあきらかに物語っている。
　しかし、景宗に、相手への、そんな斟酌（しんしゃく）があるはずもない。
　怒気にふるえ、まっ赤になったが、突然、床几を突っ立った。
「ううむ、これまでのこと。おいとまする」
「ア。そうか」
「だが念のため、もう一度、しかと御意志を聞いておこう。どうでも、院の御下命には服せぬといわれたな。大口開いて笑い召されたの」
「笑った。笑いの解釈は、そちらの勝手だ」
「かりそめにも、さような戯言（ざれごと）をお答えとして、奏上いたすわけには参らぬ」
「戯言ではない。物具（もののぐ）よろうて、大太刀など横たえて推参（すいさん）の者を院のお使いとは初めから見ておらん。ああ面倒だ。者ども、この公卿やら武者やら、鎌倉のいぬとも知れぬやつを、門外へつまみ出せ」

「こは、乱暴な。——な、なにをする」
「荒胆も持たぬくせに、武者の陣門へ来て、さも、えらそうな面つき、懲りたがいい。者ども、懲らしてやれ」
まわりへ寄りたかって来た腕力の下に、景宗は亀のように頭をすくめた。そして押し揉まれつつ門外の雪泥の中へ突き出された。
静賢法印が、義仲を訪ねたのも、同日だった。しかし義仲は、法印と聞くと、
「ここ風邪ぎみにて、臥しおりますれば」
と取次ぎにいわせ、どう乞われても、会わなかった。
法印に会うのが、なんとなく、恐かったのだ。
あの僧の、理解のある慰めとあたたか味で接しられると、いまの義仲には、かえって畏怖に似た心理とニガ手を覚えるらしい。ひそかには、自分でも醜いと知っている顔面へ、しいて、鏡を押しつけられるような気がするのだった。
「はて。なんとしよう」
断られた六条の陣門に佇んで、静賢は、何か身の毛がよだつようなものに吹かれた。
「院は院で、あのような御準備だし、ここには、かくの如き殺気。……火を発するばかりだが」
ぜひなく、ちまたへ歩き出したが、ちまたの声も、血走っていた。ある者は「木曾殿

が院を攻める支度ぞ」と、いい、またある者は「院が木曾を誅伐なさるのだ、院の木曾征伐ぞ」と叫びまわってはばからない。

　女子どもは、とうに山野へ疎開している。それなのに、なお、わいわいいいながら、さんばら髪と素足で、今ごろ町に残っているのは、戦稼ぎの火の手を待つ餓鬼の浮浪にかぎっていた。

「――ああ、餓鬼がよろこび始めている。餓鬼の乱舞は、なんとしても、防がにゃならぬが」

　どうしても、義仲が会わないので、一時は、手の施しようもない絶望感にくるまれたが、ふと、かれの胸にうかんだのは、月輪の右大臣、九条兼実（玉葉の筆者）であった。

「そうだ、この危うさを、救うお方は、月輪殿のほかにはない」

　かれは、その足で、兼実を訪ねた。そして院中の秘し事から、眼に見た六条のけわしさを、切々と訴えた。

「もともと、御当主には、院と平家のもつれにも、木曾が上洛にも、おかかわり合いを避けて、久しく御出仕もないことですが、しかし、かかる危急の日まで、その御聡明を冷たく守っておられるのは、どんなものでしょう。摂家の御一人であり、国家の重臣としても」

「いや法印。こうしてはいるが、儂は決して、風月に逃避れているわけではない。ただ、ひとのように、権栄と保身に、恥もなく右往左往のできぬ性分ゆえ、門をとじてい

るだけのものよ」
兼実は、しきりに、いいわけした。かねて認めておいたらしい上奏の一文をも取り出して、静賢に示した。
「じつは、使いをもって、聖慮を仰ぐつもりでいたが、事態、そのような切迫とあっては、心もとない。すぐ出仕して、直々、御諫奏申しあげよう」
二人は、連れ立って、院の御所へ、車をいそがせた。
あいにくの雪解道である。牛の歩みも、車の輪も、泥の海を泳ぐようであった。法住寺殿へ行きついたころ、もう黄昏の灯が見られた。
常日ごろ、兼実の門へは、客と称するいろいろな人物が来て、木曾、西海、東国の動静から、院中の機密なども、いながらに聞いてはいたが、いま、院中の実際を眼に見て、
「かくまでとは思わなかったが、浅ましい有様よ……」
と、眉をひそめたことだった。
諸所に鹿垣を結い、壕を掘り、外廊には、楯をならべ、まるで城寨の備えである。きれいな敷き砂の道にさえ、武者草鞋が捨ててあるし、附近の木立には野営の煙が立ちこめているなど、おおいようもない兵馬のにおいが、むうっとする。
兼実は、祗候の間にすわって、拝謁を待ったが、夜にはいっても、なかなか、法皇の出御はない。

そのくせ、奥まった所では、人びとの遠い跫音（あしおと）が、のべつ忙しげに往き来する風だった。

不審に思って、高階泰経（たかしなのやすつね）をとらえ、

「何事があるのか」

と、たずねると、

「ただ今、行幸（みゆき）あらせられましたので」

と、いいにくそうに答えた。

にわかに、後鳥羽帝（ごとばてい）をここへお遷（うつ）し申しあげて来たらしく、そのための混雑と察しられた。

泰経は、兼実の顔色をうかがいながら、こんなこともいった。

「やがて間もなく、八条女院も、院へ御避難あそばしますが、主上の渡御（とぎょ）といい、それらのすべて、法皇（きみ）には、何も御存知はあらせられません。……ただなんとのう、かような騒ぎに立ち至ってしまいまして」

「ではいったい、たれが、そのような指図をしておるのか。よもや、天狗（てんぐ）の指揮ではあるまいが」

「は。それが、われらにも、よう分かりませぬ」

「わからぬ」

「まったくもって」

「ふしぎよの。……とすれば、いよいよ、天魔の所業と思うしかないが、しかし、政の府たる院の御所さえ、天魔の巣となり果てるようでは、不逞な武将や、凶悪な部下が、世をほしいままに狂うのもむりはない」

――長嘆して、兼実は、

「夜も更けたれば、あらためて、明朝、御尊顔を拝し、なお親しゅう、兼実が憂いを聞こえ上げたいと思うが、ともあれ、これを叡覧に供えてほしい」

と、諫奏の一文を、託して帰った。

それは後で、法皇の前に捧げられたが、ついに後白河の用いるところとはならなかった。しかし、さすが兼実でなければいいえない直言の書であった。

大意は、こうである。

(――院中、御要心の態、なんとも法に過ぎて仰々しい。武門の義仲と対等になって、院を武門化するなど、みぐるしい極みであり、決して、王者の行いではない。

――王者たるものは、人民が罪を犯したばあい、法と刑罰に照らして、正しくさえあればよいので、かれと対等に立って、武者を狩りあつめ、剣戟を衒うなど、まさに狂気の沙汰である。

――まず、和顔をお示しあって、よく、義仲の肚をきいておやりになるがよい。義仲たりとも、院の必要以上なる武備など解いて、お心寛く、その真意なり誤解を聞いてやれば、王威と道理に伏して、御命のまま西国征伐にもすすんで赴くにちがいない。

──わけて鎌倉とかれとの感情には、はなはだむずかしい機微もある。その辺も深く御思慮あって、小策を弄ぶべきではない。ただ公明正大をむねとして、政事の大道だに誤らねば、この難局もおのずから打開されてくるでしょう。しかし今の如き状態では、王法なきにひとしと、断言してもはばかりません)

どう読まれたろうか、これを。

いちいち、後白河のお気に染まなかったであろうことは、充分、察しられる。けれどかりに、法皇がお考えなおしになったとしても、この諫奏は、すでに時を逸していたのである。

その晩、兼実はおそくに自邸へ帰ったが、例の如く、日記を書き終えて枕につくと間もなく、異様な世間の物音に、また眼をさました。

木枯しではない、出火騒ぎでもない。たしかに、武者の鬨の声である。──もう十九日となった暁闇の一角を破って、それは何か不吉を思わせる、どよめきだった。

姫秘事

十一月十九日。丑満から未明のあいだ。

加茂堤を、五条、七条、九条と見まわってゆく鉄騎の小隊があった。

院の御所のある川向こうの高地に備え、巡邏はつねに行われていたが、木曾方では、

急にその度数と人数を増していた。
対岸よりも、自軍の警備に尖り出したのだ。一昨夜からでも、千人近い将士が影を消したという。——昼には、丹波口と上加茂の二ヵ所で、数十人の脱走兵が、味方の追い討ちにあって、みなごろしになったりしている。
「あっ、矢だぞ、身を伏せろ」
不意の叫びに、騎馬隊は、堤の下へなだれ合った。すばやく馬を降りるやいな、おのおの、土手の腹へ身をはわせた。
「おかしい?」
と、一人が首をのばした。
「いまの矢は、味方の射た矢よ。川向こうから来た矢ではない」
「またしても、ふた股者が、院方へ寝返るため、忍び渡って行くのではないか」
「起つな。……見定めろ」
息をころして、遠くを見まわした。
果たして、一団また一団と、騎馬徒士を交ぜた約二、三百人の影が、下流の森蔭から土手の上にあらわれた。おりふし、雪解の濁流に、川は水かさを増している。それに阻まれたか、渡りよどんでいるようだった。
「あれ見ろ、たしかに、怪しいぞ」

「不敵な脱け陣だ。たれの手勢か」
騒ぎあったが、見まわりの隊は、わずか三十騎足らず、みすみす、かなたの大人数へ向かって、どう制裁の下しようもない。
すると、まろぶように、こっちへ馳けて来た常番小屋の兵が、
「葦敷殿の寝返りじゃ。出羽殿も変心と見ゆるぞ」
手足を舞わして、そこらの味方へどなった。
「恥知らずは、葦敷太郎重隆か」
「そ、そうです」
「裏切りのもう一名は」
「高田四郎重家殿」
「よしっ、流れは、水かさを増している。あの辺、急には渡りこえられまい。すぐ六条の御加勢を仰げ」
数騎が報らせに飛ぶ。
義仲の起臥しているそことは、さして遠くない。
ところが、義仲は六条にいなかった。近臣の二、三は出先を知っていたが、命を待ってからでは間にあわない。今井兼平と根井小弥太の二将が、手勢をひきい、ともかく加茂の下流へいそいで行った。
――すでに。

寝返り隊は、一部、対岸に渡っていたが、大部分はなお川中の洲(す)や水際(みぎわ)に残っていた。追手の将士は、まず堤上から遠矢を浴びせかけ、かれらが、あわてふためいて、水しぶきを揚げ散らすのを見、

「人非人(ひとでなし)めら。この期(ご)に及んで、味方を売る気か」

憎しみを、その諸声(もろごえ)と白刃にこめて、一せいに肉迫した。

お互いに知ってのうえの同士討ちである。激烈な接戦と、ののしり合いが起こった。根井、今井の二将は、逃ぐる裏切り者を追って、ついに対岸へまで、馳け上がった。

――と、東の岸には、木曾の寝返り分子を待つ院方の一軍が出張っていた。ためにこの内輪騒ぎはそのまま、院と木曾方との本筋な合戦へと、いとも無造作に移行してしまった。――そして意志でもなく作戦でもなく、背水の陣におかれた木曾武者は、もう無二無三、猪突(ちょとつ)するほかなかった。

わあっ、わあっっ、という獣(けもの)じみた諸声(もろごえ)の下に、双方、入り乱れての血戦になった。

――ふと眼ざめて、九条兼実が、遠くに聞いたのは、それだった。寿永二年十一月十九日を吹き荒(すさ)んだ血の木枯しの先駆を耳にしたのである。

義仲はその暁ごろ、洛外桂川に近い民家の一亭に駒をつないでいた。狩衣腹巻姿のままで、いと無造作に、そしてさむざむしい荒壁のひと間で、燭(しょく)を横に寝そべっていたのである。

取り散らした酒器は、次の部屋に下げられ、酒ならぬものを、何か、心待ちしている風である。
「――のう、親忠」
手枕の手の痺れを撫でながら、後ろを見て、
「まだ、戻って来ぬの。とかくするまに、夜も明けように」
「もう見えましょうず。……間もなく」
「雑色の猪丸め。よいほどなことを、さも真しやかに、そちへ告げたのではないか」
「いやいや、洛中の物騒を避けて、松殿（関白基房）の姫ぎみが、桂川の別業へひそかに移されたことだけは、確かでおざる。――そのおりの女車は、猪丸があとを尾けて、しかと見届けたことでもおざれば」
義仲の足もとから、幾尺か退がって、壁代を背に、楯親忠がすわっていた。
この家は、河畔に多い妓亭の一軒らしい。
しかし裏の木立つづきからかなたには、べつに整然とした一郭の防風林と、広大な地域を抱いた土塀とがながめられた。――やや荒れてはいるが、関白家の先主、いまの基房の父、藤原忠通が、保元以前に、造庭の数寄を凝らしたという桂川の別荘である。
ところが、ここに数日前のこと。
基房の息女冬姫が、他の小女房たちと一しょに、洛内からここへ移され、世間から深

く秘されているという事実が、義仲の耳へはいっていた。
もと関白家の雑色で――今は楯親忠の手に飼われている例の猪丸が――それを嗅ぎつけて来たのである。
猪丸は、あれ以来、冬姫の見張り役だけで、召し使われていたのである。好きな酒もたらふく飲み、扶持以上な物ももらっていた。それくらいは、犬でもする奉公といわねばならない。
義仲は、聞き知ると、「さては、おれの眼から姫の身を隠したな」と邪推した。山野へ女子どもを避難させたのは、どこでもの現状である。常識なのだ。まして深窓の姫君――とはかれに考えられない。
人知れず、義仲は、業腹を煮やしていた。かつて、姫の替玉を見せられた恨みも新たにして、基房の仕方を憎んだ。そしていよいよ、見ぬ恋に焦躁った。じっさいの冬姫は眼に見ていないはずだのに、面影はあざらかに、かれには描くことができる。眠りの中にもそれを見、杯の底にも見たりするのである。
――堪らなくなると、時には、一隊の兵馬をやって、姫の身を攫わせて来ようかとすら思いつめた。しかし、かれを目標とする四面からの攻勢と、危局のまっただ中に置く身の忙しさとが、からくも、暴を思い止まらせていたのである。わけて、院との対立が極度に尖鋭化したここ二日間ほどはそうであった。
それが、はしなくも、ふと心に閑を生じた。

樋口兼光の諫めから、急に、小康を抱いたのである。平家との和議が、どう答えて来るか、十日ほどは、現状を持していよう。軽率にうごくまい。そう腹をきめたためだ。

院使の景宗を追い返し、静賢法印の面会を避けたものの、われから事を荒立てぬ以上、院方から合戦を仕かけてくる気づかいはない。

そうした仮定の下に、凝り固まった闘志やら鬱憤を紛らしたい気もあったとみえる。

楯親忠など、わずかな供をつれたのみで、雑色の猪丸を案内とし、にわかに、六条を出たのである。――十八日の夜半だった。――途々も、義仲のあたまは冬姫のことだけだった。これほどまでに、朝日将軍の思いこがるるものが、なぜ、会いもできず、手の届かない所にあるのか。不合理に思える。心外でならないらしい。

――といって、強盗のような闖入はしたくなかった。

姫を悲しませ、姫から恐らしき木曾人よと、忌みきらわれたくないのである。恋を恋らしく奏でたい気が義仲にもあったのだ。「……ま、お任せなされませ」と、楯親忠と猪丸はのみこんでいう。しかし、手段はどうするのか。義仲は、知っていない。「かれらが、うまく手引きして、どうかするつもりだろう……」漠然と、そう信じているだけである。そして、さっきから、灯も凍る暁の寒さを、酒にしのぎ、その酒も醒め心地と思いながら、むなしく手枕を痺らしていたかれであった。

「戻りまいた。猪丸にござりまする」
妻戸の外の声に、
「猪丸か、はいれ」
と、親忠がゆるした。
だがそこに、義仲の姿を見たので、猪丸は、壁の下にかがまってしまい、親忠にだけ、小声で何かささやいた。
瀬踏みして、別荘内へ忍びこんでみたものの、園内や家の広さは想像のほかであった。しかしようやく、冬姫の住む一棟(ひとむね)をつきとめ、微(かそ)けき灯明(ほあか)りのもるる寝間の帳台(ちょうだい)と薫香(くんこう)とを、この眼と鼻で、確かめて来たというのである。
「……さ、御案内致しましょうず」
したり顔に、猪丸は、先に縁を下り、親忠も、義仲を眼でうながして起ちかけた。
「親忠。姫の許へ、おれが忍ぶのか」
「それが、どの手だてよりも、およろしいかと存じまする」
「もっと手軽に、どうかならぬか」
「兵に申しつけて、姫を引きかつぎ、他所(よそ)へ運び去るぶんには、なんの造作もありませぬ。けれど、ゆめ、姫を驚かし奉るな、手荒いことはすなとの、きつい仰せつけなので」

「そうだとも、花を盗むにも散らしては何もならない。といって、おれが恋猫の真似するのも、何やら、忌々しいのう」
「ははは」と、雑色の猪丸が、暗やみの中で笑った。
「――御大将には、何をさようにお羞恥いなされますか。この都では、大臣や大納言の君たちと申せ、恋の道に忍ぶことは、恥ともいたしませぬ。いや、風雅男とさえ申しまする」
「おお、そうか。色恋は人の風流、女房狩りは、公卿どもの慣わしだったな」
うなずきながら、義仲も、外へ出て来た。
破れ垣から、林の小道へはいり、行くほどに、やがて長い塀の土壁へつき当った。
……カサ、コソ、とその後からべつな郎党たちの影が、よそながら主君の守りに従いて来る。
すると、林の外の街道を、五騎、また十騎、すさまじい迅さで、駆けて通った。
「あ。今のは？」
駒音の行方を、義仲は、眼で追いながら――
「親忠。見て来い」
急に、声も打って変って、鋭かった。
その前に、後方にいた郎党が、道へ飛び出して、何か叫んでいた。そして、行き過ぎた騎馬の群れが、駆け戻って来ると、たちまち、馬を捨てた武者たちは、木蔭の残雪を

踏みしだいて、義仲の方へ近づいて来た。
「や、小諸(こもろ)、物井(ものい)などではないか。何事があったのだ、何事が」
「おう、これに、おわせられましたか」と、義仲を探し求めて来た人びとは、ひざをついて、
「お留守のまに、葦敷(あしき)太郎重隆と、高田重家めが、諜(しめ)しおうて、部下残らずを連れ、院方へ、逃げ入りました」
と、六条の急変を告げた。
「ち。またしても、寝返り者か」
「すぐ、追手をかけて、川を馳け渡し、合戦の最中にござりますゆえ、半(なか)ばは、討ち取るかと、存じますが」
「なに、なに。追い渡して、川向こうで合戦の最中だと。それや、まずい。まだ早いぞ、それは」
義仲は、大いにあわてて出して、
「呼び戻せ。それは捨ておけぬ。いや、おれが行って、呼び返す」
急にそこの林を出て、馬をひかせ、鞍(くら)へ手をかけると、もうかれの騎影は、他のどの騎者よりも迅(はや)く、ついに六条の門前まで、ひとに先を譲らなかった。
内へ馳け入るやいな、義仲は、大鎧(おおよろい)を着こみ、薙刀(なぎなた)を手にかいこみ、またすぐ表に現われて、馬上になった。

「樋口やある。樋口、樋口」
良人につづいて、門を出て来た巴が、後ろの駒の上で、それに答えた。
「兼光殿は、はや、おりませぬ。すわ大事ぞと、手勢をそろえて、先刻、河原へ馳せ行きました。そのほか、御陣のおもな人びとのあらましも」
「巴」
「はい」
「そなたは、陣の留守をしていよ」
「いえ、参りまする。お側を離れとうございませぬ」
「ばか。義仲は、逸り気な味方の奴輩を、呼びもどしに行くのだわ。樋口も、心得おるはず。なんで樋口が、見ておるのか。——おれが行って、川向こうの戦をやめさせる。そなたは、来ても無用ぞ、陣所で待て」
「では、すぐお引き揚げなされますか」
「おおさ、申すまでもない」
わずか四、五十騎を伴ったきりである。義仲は六条の門から駆け出した。
ぬかるみは、みな凍っていて、馬蹄の下にパリパリと氷が砕ける。紫色をおびた大きな朝日が、叡山と東山のあいだにあった。義仲は白い息を吐きながら東を振り仰いだ。
その眉目は、無邪気なほど平和なものだった。かれはまだ開戦など考えもしていない。
この日に、阿修羅のような凶暴をみずから演じようなどとは、ゆめ、思っていなかった

のだ。

京乃木曾殿の巻

烏合と狡獣

いつのまにか、院御所の法住寺殿は、まったく城塞化していた。古記には〝――参り籠リタル軍兵二万余人〟とある。二万余は誇大に過ぎようが、少なくも、当時在京の木曾兵力と同等ぐらいな三、四千の軍勢が拠っていたことは確かだった。

「これは御用心も度を超えたようだ。月輪殿も、法外なりと、御諫奏申し上げたそうだが」

「さらぬだに、御穀倉すら乏しいおり、こうたくさんな雑人までが寄って来ては、またたくまに、物も食い尽くそうぞ」

「京中、どこにも食物はないが、ここへ来れば食えるというので、武者ならぬ辻冠者や乞食法師までが、入り交じって来ておるという」

「一体、この末は、どうなることとか」

公卿の多くは、喪心の態だった。

執拗なまでに相手を刺戟し、表裏を弄して、義仲を政治的孤立におとしいれた者は、たれでもない、かれらである。

つまり、きょうのことは、後白河とともに、かれらも望んでいたものといってよい。にもかかわらず、自分らのした計画とその成功に、かれら自体が、うろうろして、統御も取れない有様だった。

こうなってはもう、指揮も秩序もあったものではない。事態そのものが、生きものとして厳存するだけだった。個人的な意志命令などは、その小部分を左右するだけにとどまり、群集は群集自体の好むままに揺れうごいた。

「やあ、何者だ、大屋根へなど登っているのは。降りろ、降りろ」

西御所の一門をかためていた鼓ノ判官知泰は、まだ星のある暁天を見てしかっていた。

猿に似た大屋根の人影は、一ツや二ツではない。小手をかざしたり、位置を歩きかえたりしていたが、知泰の声に、のぞき腰をそろえて、

「降りろといわるるが、われらの大将は、登れといわれた。登るがいいのか、降りるがいいのか」

「なんじらは、どこの手勢ぞ」

「伯耆介光経殿が手に従うもの」

「何を見ておる？」

「たった今、木曾勢とお味方とが、河原にて合戦を開いたりと聞こえ申すにより、主命によって、見とどけておるのでござる」

「何、何。木曾が襲せて来たと？」

叱言どころではない。知泰は、殿上の御庭の方へ、まろぶが如く馳け出しゆき、まもなくまた、帰って来るなり、どよめく味方を見ていった。

「いよいよ、木曾はあらわに、謀反の軍を進めて来るぞ。軍の奉行は、ただ今、院旨にてこの壱岐判官知泰に仰せ付けられた。――何事によれ、知泰がさしずによってうごけや人びと」

しかし、そう布令ている間にも、七条口や東殿の門を、あふれ出て行く兵や騎馬の影は、全然、知泰などは無視していた。

何しろ広さも一と目にできないほどひろい。五つの法住寺建築群からなる院の御所である。地域は十町四方もあり、隣接の蓮華王院、最勝光院などをふくむと、加茂河原から、阿弥陀ケ峰の南の山や渓流や池までが、すべて御苑といってよい。

するとその山腹の方で、新たな鬨の声が起こった。

おなじ武者声でも、京兵のそれには京兵らしい呼吸があるが、木曾兵の猛吼には、なんともいえない山気があった。

「あれよ、はや木曾勢が山へまわっているぞ。山のすそを断ち防いで、敵を御築土に寄せつけるな」

知泰は、指揮に声をからしながら、駆けずりまわった。

寝返りの味方を追って、東の岸へ駆け上がった今井兼平と、根井小弥太の部隊は、そこで院方の兵と遭遇して、川を後ろに、

「退くな、退けば、追い陥されるぞ」

と、突っ込むほかない壁へ突き当った。

寝返った葦敷太郎と高田重家の人数も、踵をかえして、きのうまでの友軍を、無慈悲に、包囲してかかった。そして、

「小弥太、小弥太。あたら犬死になどせず、降伏いたせ。今井殿も、院へ降って、一命を助かられよ。以前のよしみ、おとりなしはして進ぜる」

と、遠くでいうのは重家の声だった。

「けがらわしい。そこ動くな、重家」

兼平は、馬上姿を躍らせた。

院方は、接戦をさけて、遠矢を用い、つぎつぎに木曾の勇者を、的にとらえた。また、院の御所は近いので、加勢はつぎつぎに増してきた。

今井勢は袋だたきの目にあった。

――だが、急はすぐ六条陣屋へつたえられ、「それ行け」「今井殿を討たすな」と、居合わせた木曾兵のあらましが援軍にいそいで来た。そしてたちまち、院方の兵を追いし

りぞけたうえ、騎虎の勢いで、院の御所の一角へまで肉迫してゆき、そこの高い大築土へむかって、怒濤のような喊声をくり返していた。
するとと、後から来た援軍のうちで、
「葦敷太郎を見つけたぞ。葦敷太郎を、物井五郎が生け捕ったり」
と、呼ばわるのが聞こえた。
木曾方の人びとは、自分たちを裏切った人間を眼に見ると、盲目的にその影を取り囲んで、撲る、蹴る、あらゆる辱めを加えたあげく、
「院方へ寝返ったのは、そも、たれの手引きぞ。いかなる欲に釣られたか」
と、責めののしった。
すると葦敷太郎は、さも心外そうに、それへ答えた。
「裏切り裏切りとののしるが、もともとこの葦敷が主と頼うだお人は、木曾冠者ではない。新宮十郎行家殿だ。その行家殿と一つにならんと、川を越えて参ったるなれ。ただの裏切りとは、わけが違う」
「しゃつ。吐かしたり。さては、あの跛行殿と狎れ合うてのことだったか」
根井小弥太は、大の行家ぎらいである。
そう聞くと仮借なく、
「この二股者を血まつりに上げろ。見せしめのため、首を、味方の上に見せてやるがいい」

と、辺りへ命じた。

五郎がそばへ寄って行った。ひらめいた太刀の下に、葦敷の体は血の中へうつ伏した。

首は矛の先に突き貫かれ、馬上の者の手から、揺れどよめく軍勢の上に、高々と差しあげられた。それ自体の重さで、首は、祭り行列の飾り物みたいに、ゆらゆら動く。また、生きてる無数の首がそれを仰いで、ののしるのか、悲しむのか、えたいの知れない声で、わアわア噪いだ。すると、高くにいる首も、下へ向かって答えるかのように、一そう揺れて、唇の辺から、笑うが如き血のよだれをタラと垂らした。

「しずまれ、しずまれ」

根井小弥太は、狂舞の群をやっと制して、こう、大声で告げ渡した。

「なんと、面々。幸いに、葦敷はここで成敗したが、たとえたれを討ちもらしても、かんじんな味方割れの張本、あの新宮行家殿と申す厄介な主君の悪叔父を討ち損じては何もなるまいが」

ことばの途中で、かなたこなたから、それに応える鬱憤の声が多かった。

「仰せまでもないことよ」

「叔父面をかさに着て、木曾殿に手は下せまいと、多寡をくくっているあの曲者」

「ここばかりか、北陸でも」

「いまこそ、八つ裂きにしてくりょう。ただし、主命を仰いでは、主君に叔父殺しの悪

名がかかろうぞ。やるなら、おれどもの手でやれ、おれどもの手で――」

このばあい、小弥太が投じた日ごろの不満は、狂える兵らにとって、薪に油であった。木曾谷出郷以来、ともあれ、義仲と生死をひとつにしてここまで来た者は――わけても義仲思いな将士ほど――いかにそれを常日ごろから口惜しがっていたかがわかる。

叔父は叔父でも、主君のためには、好ましからざる人物と、みな見ていたのだ。義仲が黙っていても、義仲が備中水島の出先から、あのような引っ返し方をした原因も、部下はみな知っていたのである。

「やア待て。面々の申し条はもっともだ。何もおれとて、主君のおさしずをここで待とうというのではない。われと思わん者は、この根井について参れ。――院の御袖にかくれて、岩穴の深くに住む跛行の狐殿を、これから萱ノ御所へ不意打ちかけて襲うのだ」

「おうっ、それよ。根井殿へついて行け」

「いやいや、さように多くは要らぬ。人数は、三百もあれば事足りる。あとはここに残って、おりおりに武者声をあげ、院中にごった返しておる烏合の駄武者どもを、ここの一点へ牽きつけておけ。――その秘計だに覚られねば、行家の首を見ることは朝飯前だ。東山の上に、陽をみるまでには、この手に、きゃつが髻をつかんでおろうぞ」

小弥太はすでに誇っていた。物に憑かれた人間の形相である。そして全軍の五分の一ほどな兵を選りすぐり、道を迂回して、山の手方面へ急いで行った。

――それから間もなく。

阿弥陀ケ峰の南側の高所から、山風のような鬨の声を起こし、どっと、瓦坂を馳け下って、法住寺の一端にある萱ノ御所へ急襲して行った黒つむじの如きものがある。いうまでもなく、根井小弥太の一隊だった。

ところが、その十郎行家は、もう、萱ノ御所にはいなかったのである。

四囲の変化というものに、行家ほど身の処置を機敏に変えてゆく男はない。

こんどのばあいも、そうである。

院のために、和泉、河内のお味方を糾合して、一軍を編成し、義仲を南から衝くという策を、急に法皇へ献策していた。そして、それを名目について二、三日前、ここを立ち去り、河内の国石川城へ、密かに移っていたのだった。

おそらく、かれの特異な嗅覚が、その進退をかれに教えたものであろう。同時に、後の発火寸前の状態にたいしても、かれはなんらの責任など感じてはいない。ただ、どうなっても安全なことだけは確実だと考えられる地点へ移って、かれはかれ本位の、次段の策を練ろうとしたにちがいない。

体じゅうの智恵と、智恵の使いみちにいつも困っているような行家なのだ。院方も木曾も、かれの眼からは、智恵のない、愚者のかたまりに見えていたことであろう。

前夜、すでに河内にいた行家は、石川城の窓に倚って、その狡獪な眼と耳で、世間の物音をさぐりながら、ひとりこう考えていたのではあるまいか。

（いやおうなく、何か起こるな。このままでは、おさまらぬ。――だが、院中に身をおいていたら、木曾が勝ったばあい、絶対にわが一命はない。――といって、木曾が都を持ち通せるか。とんでもない、しょせん、うっちゃりものだろう。院の御存在も、漂う海月だ。――帰するところ、やはり行く末、中央に立つのは鎌倉だろうが……さて、その頼朝とわしとは、年来、気まずくなったままだし……。そうだ、上洛軍の大将は、舎弟の九郎義経とのこと。まず、義経の軍を助けて、しかる後、おもむろに。そうだ、おもむろに……）

弱公卿・強公卿

もとより、もう行家がいないとは、ゆめにも知らぬ木曾兵だった。
萱ノ御所を包囲して、
「それっ、射て見ろ」
一せいに弦を張り並べ、窓、妻戸、蔀、床下など、所きらわず、ばらばらと、脅し矢を射込んでみた。
わずかな留守の家来や男女の下部が、仰天して内から転び出した。とたんに、むざんな矢にあたるもあり、悲鳴をあげて、内へ逃げ入る影もある。
「手薄だ、躍り込め」

「足跛えと見たら見のがすな」
土足が内へなだれ込んだ。棟を裂き、妻戸や障屏を蹴たおす音など、血まなこな家探しと破壊が行われれた。
そして、それが空しい徒労と分かって、根井小弥太らが、屋内で地だんだを踏み合っていたとき、逆に、
「火を放けて、中のやつらを、みなごろしに、焼き殺してしまえ」
と、ののしる声が外で聞こえ出した。
いつのまにか、院方の兵が、外を取り囲んでいたのである。しかし、この建物とて、御所の一部だし、そこまでの理性は失くし切れないらしく、
「もってのほかな——」と、しかりつける部将らしい者の喚きもして「諸所には、貴重な建物も多く、御座所とて遠くないのだ。めったに、火など放しては相ならん。——矢を射込め、ただ、矢を射浴びせて、出て来る木曾猿を、片っぱしから討って取れ」
との勢いである。
屋内の人数よりも何倍もの兵力らしく思われた。妻戸の口から顔を出すとすぐ矢が来るので、壁穴からうかがってみると、もちろん正規の武者もいるが、ボロ法師やら辻冠者やら、脛当一つ着けていない烏合の衆がだいぶであった。
「これが院の御所の兵とはすさまじい」
小弥太は、あざ笑って、

「察するに、十郎行家も、一家の郎党どもをひきつれ、さっそく、忠義顔して、院中の守りに就いているのだろう。こうなれば、やぶれかぶれよ。火の手はこっちで出してやる。火を見て行家めが馳け戻って来れば思うつぼではあるまいか」

釜殿の竈には、下部の焚きつけた火が赤かった。兵たちは、燃えさしの薪を手に手に持ち出し、館の内を火でちりばめた。

「や、や。屋の内から黒煙が」

「おうっ、火だ。火を放けおったぞ」

うろたえ声は、かえって外の方で起こった。濛々と、躍り出て来たものは、煙だけではない、それにもまさる奔放と、火のままな殺気をもった木曾勢だった。

かれらの打ち振る太刀、長巻、種々な形の矛などが、逃げくずれる敵の一個一個をとらえるたびには、日ごろも用いない山家言葉が無意識に口を突いてほとばしった。その語意のない語勢も何か咒文のようなひびきを敵に与え、吹き散らかる落葉のように外の囲みは解けてしまった。

大きな炎の音が後ろでした。

萱ノ御所の萱葺を噴き抜いた炎の柱は、逃ぐるを追って「なおも」と院の大庭へさして殺到する木曾勢の影を、蟻のように黒々と見せた。そして、そのせつな、西御所、中ノ新御所、東殿などの大屋根も、泉殿の水や谷川の木々も、昼より鮮らかにぱっと浮いて、またすぐ濁った朝靄のうちに晦くなった。

おそらく、殿上の混乱は、どういってもいい足りないほどなものであったろう。当然、計画的な木曾の突入と見たにちがいない。
「すわ、乱賊どもは、からめ手より混み入ったるぞ」
「軍の奉行を申しつけたる鼓ノ判官は、いかがなせしか」
「矢に中るな。あな、おびただしの矢よ」
「院には、いずこに」
「主上のおわす廊の欄を、武者どもにて、人垣を作し奉れ」
「あれよ、そこへ近づくは、木曾か、味方か」
どの声も、ほとんど、狂気の叫びである。
といって、公卿のすべてが、そうだとは限らない。いつの世でも、公卿の中にも硬骨な人間もいて、「力に対しては、力だ」と主張する主戦派があるものだった。
このときの院における近臣中でも、大外記頼業の子、主水正親業とか、近江中将為清、越前少将信行、右馬頭資時、参議俊経、右大弁兼光などは、つねに、「木曾、用うべからず」を君側にとなえ、「木曾討つべし」の方針に同調して来た人びとである。当然その手前としても、この期にうろうろしていられた義理ではない。ひとしく、身を鎧いかためて、
「たとえ、手馴れぬ弓矢とて、やわか、山野の下郎に、禁闕を踏み荒さすべき」
と、欄に繞り立ち、階に立ちむらがり、それはかの雷鳴陣の儀式よりは、高い意気で

あったし、装いも、まばゆいばかりだった。

けれど、一部側近のこの虚勢の裏には、

（やがて、頼朝や上洛せん。頼朝の弟、九郎や馳せ参ずらん）

とする恃みがあってのことだったのはいうまでもない。しかも、なおこの戦慄に襲われたのは、事態の急が予測を超えていたからだった。――こう早くとは、思っていなかったものらしい。

兵乱はいつも不測を衝いて起こる。

こう早くには――と思っていたのは、公卿側ばかりではない。義仲にしても同様だった。

ここの黒煙には、義仲も仰天したにちがいない。「しまった」と足ずりしたか、「かくなれば、もう、これまで」と観念したか。いずれにせよ、今暁の火は、かれにも計算外だった。悪戯好きな運命の神が、かれの心のうごきを、おもしろがっているのかもしれなかった。

「ばかなやつだ。樋口までが、川を越えてしまうたとみえる。――やい、兼行」

義仲は、七条河原の西に、馬を立てて、うしろの群れから落合五郎兼行をよびたて、

「かねて、おれに意見も申していながら、なぜ、つまらぬ味方割れの喧嘩などを追って、樋口までが兵を渡したか、すぐ引っ返せと、申して来い。――樋口のみならず、根

井、今井、みな引き揚げろと、布令いたせ」
と、いいつけた。
「――心得て候う」
と、兼行の小隊は対岸へ渡って行った。けれど烈しい雪解の濁流に会い、徒歩武者の二、三は足をとられて押し流され、半丁も先の堤へはい上がっていた。
「あれよ、意気地のないやつだ……」と、義仲は苦笑をうかべ――「この雪解水は、信濃の川を思わすぞ。山は、よほどな大雪であったとみゆる」
と、待ち佇む間の眼を、しばし、上流の比叡、鞍馬の空へ遊ばせていた。
すると、はるか上流の方に、意外なものを、ふと見出した。
まだ、陽は昇ったばかりだし、朝靄も深いので、しかと見さだめ難いが、たしかに僧兵の一軍と思われるものが、堤の上や、川添いの民家をうしろに、うごめいている様子なのだ。
それはしかし、退きもせず、進んで来る態勢でもない。声を揚げて、何ものかへ、ただ、示威か牽制をしているだけのものらしい。
「おう、山法師らが、下山しておる。さては、院の強がりに同調して、叡山の坊主めらも、のこのこ里へ降りて来たか」
またしても、かれはいいようのない不安と憤りに駆られ出した。
対叡山策は、かれとても、決して、抜かっていたわけではない。

かつて、入洛の前には、そこに本陣地をすえていたこともある義仲だ。――山門の位置も力も知りぬいている。

だから、院との葛藤が生じると、再三、書面もやり、確約も取ってあるのだ。「中立を守る」という約束をである。院、鎌倉、いずれにも武力的な便宜は与えないということを、義仲は正直に信じていた。

「光貞、光貞」

「はっ」

「ひと鞭あてて、あれを見て来い。はるか、かなたに見ゆる山門の僧兵らしき一軍を」

命をうけて、諏訪次郎光貞が、五条へ馬を飛ばしたとき、夜明けの遅い対岸の山蔭、阿弥陀ケ峰のやや南のふもとあたりに、はっきりと、立ち昇る黒煙が見え出していた。

「や。あの煙は？」

すでに、麾下の一部が、院の御庭内へ突入して、兵火を揚げたものとも知らず、義仲は、

「はて。兼行は、まだ帰らず、樋口も何しているか」

その消息のみを待ち焦れた。

「高信、催促に参れ」

と、高梨高信をまた対岸へやった。ところが、その高信より先に、五条へ行った諏訪次郎が、馬を汗にぬらして、馳け戻って来た。

「光貞、見届けて参りました。仰せにたがわず、かなたなる一群れは、山門の法師輩三百ほどが、おのおの、打物たずさえて、立ち騒いでいるものにござりまする」
「たしかに山門か。山門の大衆にしては少ないな」
「いえいえ。ここよりは、あの一群しか見えませぬが、五条の橋の上に立てば、東の車大路の辻、大宮大路の松並木などに、五百、七百と、むらがり分かれ、およそ千余人もおりましょうか。——けれど、院の御所への道を、樋口殿の手勢が、しかと断ち切って、通しませぬためか、わあわあ、空ら声ばかり揚げているだけのようにございました」
「なに。それでは、樋口が馳け向かっているのは、六波羅の方だったか。……そして、あの山すその火の手は」
「萱ノ御所に相違ございません」
「叔父行家の住居だな」
「されば、あの辺りでは、矢響きもしている様子。はや、合戦かと存じまするが」
「えっ、合戦だと。た、たれがそんな指図をした。樋口ではあるまい、今井でもあるまい。それでは、落合五郎も高梨高信も、川を渡ったまま戻らぬはずよ。捨ててはおけぬ」
狼狽ではあったが、しかし、その余儀なさは、義仲のむしろ好む方向であったともいえよう。かれは、何か大声で号令をさけんだ。同時にかれの馬は、水を蹴立てて、川の中洲へ馳け出し、また濁流を渡って、対岸へ向かっていたので、楯親忠そのほかの将士

も、
「それっ、御主君におくるるな」
「今は、わが大将も、院との一戦、やむを得じと、お肚をすえたるぞ」
「手柄せよ、面々」
先を争って、東の岸へと、躍り上がり、躍り上がり、馬に息も入れず、なお馳けてゆく。
途々には、弓の折れ、無数の矢、捨てられた長巻などが、暗いうちの血闘を、まざまざと見せている。敵か味方か、うごかない人間の、うっ伏したのや、仰向いたのや、さまざまな屍の姿が、義仲の眼に映った。
いや、その義仲の体へも、すでに幾つかの矢が、突き刺さるばかりに風を鳴らして来た。それは武者の耳には、死の笛と聞こえるのだった。
「やあ、そこを馳けるは、木曾冠者ではないか。木曾の山冠者、血迷うて、どこへ馳ける」
不意に、どこからか、声をかけられ、義仲は馬をとめて、振り仰いだ。見ると、ここはもう院の一角か、高築土の上に、一人の公卿武者とおぼしき大将が登っていて、
「かねて、なんじに逆乱の企てありとは、見抜いたれど、ついに不逞の本体をあらわしおったの。あわれよ田舎者。身のほど知らぬ凶賊よ。天日に矢を射向けて、みずからの矢にあたってくたばる身の果てに気づかぬか」

「……うむ、な、なんだと」

義仲の眼は、その男を見て、坩堝のように光った。

築土の上の公卿大将は、籠手脛当は着けているが、赤地錦の直垂に、兜ばかりを被っていた。そして片手に鉾を持ち、片手に金剛鈴を持って、打ち振り打ち振り、何か、呪文めいたことばを、さっきから、叫びぬいていたものである。

「わはははは」

義仲は、大きな口をあいて笑った。神楽舞を見て興じるあの子どもじみた笑い方だった。しかし満身の忿怒と、その人間への憎しみをこめて、

「やあ、おのれはいつか、六条のわが家へ院のお使いとして来た、あの鼓ノ判官知泰とかいう愚かしき青公卿ではないか。身のほど知らずとは、うぬがことよ。――よくいった。いや、おもしろい。――天に射る矢が、この義仲にあたって突き立つか、うぬが脳天に落ちて刺さるか、試してみよう。そこうごくな」

肩ごしに、箙の矢一筋を引き抜いて、義仲が弓につがえかけるやいな、鼓ノ判官知泰は、「ひえっ」とばかり奇声を揚げて、築土の上から内へ、その姿を消してしまった。

火矢

――どうしたのか、そのとたんに、築土の内側で、どっとばかり大勢の笑う声がし

た。
よほど何か、おかしいことでもあったにちがいない。一瞬、戦場を忘れたようなどよめきだった。
築土の上で、あっぱれな広言を吐いていた鼓ノ判官知泰が、義仲の一喝とその矢おもてに出会い、口ほどもなく狼狽して、味方の中へころげ落ちた姿は、余り恰好のいい図ではなかったであろう。爆笑はそれだったらしい。
しかし、性懲りもなく、その知泰は、またも築土へはい上がっていた。味方への意地からも引けないところにはちがいない。
「――やよ木曾の山人ども、耳あらば聞け」と、前にも増した強がりをいい、その公卿大将の扮装にも、虚勢を飾って、
「かりそめにも、十善の君に弓を引き奉れば、末代まで賊の汚名はのがれぬところぞ。昔は、宣旨と聞けば、枯れ木に花咲き、怨敵離散し、飛ぶ鳥も地に落ちたほどなもの。――いかに末世とて、かほどな狼藉は、平家もなさぬところであった。必ずや神明の裁きは、なんじら九族のうえにも及ばずにはおるまい」
木曾勢は、わいわい騒いでいたが、もう義仲の姿はその中に見えもしなかった。とうに、ほかへ馬を飛ばしている。
と知ったので、知泰は、なお雄弁をふるい立てた。左の手に鈴を振り、右の手に矛を持ち、持国天、広目天、増長天、多聞天などの名を刻んだ兜に、赤地錦の直垂という奇

妙ないでたちで、築土のみねをかなたこなたと走りながら、
「さるを、義仲ごとき暴主にひかれ、命を落して、なんとするぞ。ただ今、院方へ降参いたせば、一命も完うし、後々、御所の北面に重く用いられもせん。また第一には、院宣によらねば、天下の食糧は寄って来まい。されば、信濃の村上三郎判官代のごときも、義仲を見かぎって、御所の守りについたるぞ。そのほか、なんじらの一類より心を変じて、院へ降参の者も日々少なくはない。今のうちならまだ間に合おう。なんじらも疾う疾う降って、弓矢の仕えを誤るな。木曾を背にして、降って来い」
かれはそのことば通りな信奉者であった。鈴を振り鳴らし、声をからして、叫ぶのである。
これをながめて、かれの味方の公卿たちは「知泰には天狗が憑いた――」といったそうであるが、しかしかれとすれば自己の信念に殉じるほどな気概だったに相違ない。そしてその説得力は、敵の耳を確かにとらえた。築土の外の木曾兵は、ひたむきな眼いろの奥に、ふと、ためらいにも似たものをたたえた。
「やあ、鼓ノ判官とやらが、また何か、築土の上で舞ったり吠えたりしておるぞ。射るはやすいが、道化たやつ、あの道化者を生け捕りにしろ」
木曾の一将保科四郎の声の下から、「向田荒次郎ぞ」と名のった男が、味方の人梯子から飛びあがって、築土の上に、立ちあらわれた。
「これは」

驚いた知泰は、やにわに手の金剛鈴を相手の顔へ投げつけ、敵が面をそむけたところを、さらに右手の矛で力いっぱい撲りつけた。

荒次郎の鉢兜は、かんと音を発したが、かれ自身には、なんのこたえもなかったようだ。かえって、矛の柄を手繰って、敵の手許へ弾み込もうとした。

けれど、知泰もさる者で、力に釣られると見せて、逆に、矛を手から離したので、向田荒次郎は、矛と一しょに、勢いよく、築土の外へ、もんどり打った。——で当然、知泰はまた築土の内へ飛び降りてしまったのである。同時に、「わあっ」とかれをくるむ声がした。こんどはかれへの嘲笑ではない。その勇と機智を讃えての味方の喝采だったらしい。

向田荒次郎は無念がった。すぐ跳ね起きて、ふたたび築土へよじ登り、「おれにつづけ」といい残すやいな、むらがる敵兵の上へとび降りた。

「向田を討たすな。続けよ面々」

「そこ乗りこえろ」

「衝き破れ」

保科四郎以下、その手の二、三百人は、兵に兵を積み重ねて、築土を乗りこえ、院の御庭内へなだれこんだ。

一角の堤は切れた。

遠矢を射込むこともせず、初めから身をさらして院庭へ乱入して行ったこの手勢は、もちろん、暴勇を奮い抜いた。しょせん、公卿大将の指揮する院方の烏合の兵などはその敵でない。

しかし、おそろしく広い御庭なので、それとて、まだ大勢を揺すぶるような合戦ではなかった。

この日の、じっさい上の激戦は、やはり義仲が馳せ向かった大和口西の御門に発したと見るのが正当であろう。――何しろ、そこは院御所の中枢にも間近いので、院方においても、もっとも守りに力を入れていたようである。

それと、守備の大将の一人に、村上三郎判官代をおいたことも、ここの戦闘を苛烈なものとする一因になった。

村上三郎判官代は、木曾から院方へ、寝返った人物なのだ。木曾方にとれば、倶に天を戴かずともいうべきである。それを眼に見たから堪ろうはずはない。――さきに殺到した今井兼平、物井五郎など、

「出会ったり、判官代」

「きゃつを射止めぬうちは、ここ退くな」

と、猛烈な射戦をひらき、またたちまち、地上の矢がらを踏みしだいて、敵の楯のうちへ斬りこんだ。

しかし、院方の守りもここは強固だ。近江中将為清、越前少将信行などの陣もある。

それの両翼からの挟撃もうけて、今井勢は、退路さえ失った。それに、かれらは未明から戦いどおしである。兵は空腹になっていたし、綿のようにみな疲れ果てている。
「あれ助けよ。今井を救え」
義仲の声がした。
このさい、義仲自身が乗りつけて来たことは、どんなに、かれらを奮い起たせたことか。
ふたたび、喊呼をもり返し、村上勢を蹴ちらして、裏切者の三郎判官代を、乱軍のなかに、滅多斬りに、斬り殺した。
義仲の新手は、その間に、近江中将為清を追いまわして、馬の上から熊手に懸け、寄ってたかって、首を打ってしまった。
また少将信行は、矢にあたって、ころげ落ち、あえなく、これも首を打たれた。ここに総なだれを起こして、門内へ逃げこむ院方の兵を追って、木曾勢は怒濤のように込み入った。義仲の駒も、いななき、いななき、馳け行っていた。
もう、あらゆる様相は、修羅地獄である。血に酔っていない顔はない。
「しめたっ、敵は乱れ立ったぞ」
兼平は、いま、部下の手から受け取った三郎判官代の首を、すぐ邪魔くさそうに、かたわらの藪の中へほうりこんで、
「おうい、佐井七郎。おぬしの箙には、鏑矢があるな。その鏑矢、おれによこせ」

と、眼のまえを馳けてゆく佐井七郎をよびとめた。

「どうするのだ、鏑矢を」

「火矢に使う」

兼平は、敵が焚き捨てた火屑を兵にかき取らせて、それを鏑矢のさきに籠めさせた。――矢唸りを主とする蕪形の鏃には、火屋のように火屑がはいった。

それを、弓につがえて、兼平は、院の御所の大屋根を目がけて、射たのである。びゅうっ、と鳴ってゆくうちから、細い煙をひき、火をこぼしながら火矢は飛んだ。まずたちまち、東殿の破風の角から新しい煙が細く立ちはじめる。

中ノ新御所の屋根も燃え出した。そのほか、あちこちの門屋根からも煙が立つ。――もう、煙の下でない地上はない。

おりおり、火焔の切れ端が、稲妻のごとく、虚空のあちこちで、ひらめいた。大雨樋を走る火の流れや、広廂の黒煙を見ては、もういるにもいたたまれなくなった殿上の男女が、蜂の子のように、後から後から、まろび出して来る。――悲鳴をあげ、衣冠も失い、手を打ち振り、走り迷い――流れ矢にあたってたおれる小女房や女童など、踏みつけても、振り返る者はない。

かの女たちは、ほとんど、裸にひとしい身なりであった。日ごろは誇りとしていた長やかな黒髪も、かえって邪魔な物になり、むざんな兵の手につかまれて、あられもなく、うしろだおれに弄ばれるやら、煙の中へ、舁き攫われてゆく者など、これが、か

りそめにも、宮苑の内かと疑われるほどだった。

しかし、それらは、まだよい方で、伯耆守光綱、光経の父子は、所も別れ別れに、討死をとげ、天台座主の明雲僧正も、馬に乗って、逃げんとするところを、木曾武者に射立てられ、馬もろとも、一抹の血煙となって、死んでしまった。

僧侶では、*円恵法親王も殺され、その他、南都や山門の僧の死骸も、あちこちに、屍をさらした。――木曾誅伐の御密議に招かれて、そのまま院中から出ることもできずに、籠り合っていた人びとである。

なにしても、この合戦は、院側、木曾側、どっちにも、正しい指揮系統さえなかった。戦法もなければ、秩序もなく、物の弾みが、日ごろの相互の悪感情と強がりとを、自然発生的に爆裂させたものにすぎない。

いわば衆愚と衆愚との喧嘩だった。

しかし、その衆愚の一団の中には、畏くも、十善の君がおわしまし、また一方には、時の驕児、朝日将軍がいたのである。事は当然、天下の大乱といえるし、開闢以来初めての、宮苑の大兵火とも化してしまった。

東殿や中ノ新御所が焼け出したのは、午ごろであったが、すでに、萱ノ御所や、その附近の建物は、朝のうちに、例の行家を狙って迂回していた根井小弥太の一軍が焼きたてており、これはそのまま、院庭の東北部を、あばれまわっていた。

それらの、勝手勝手に行動していた者どもも、やがて、矢だねは射尽し、太刀や長巻

も血に飽くほど戦い疲れ、
「かたまれ、かたまれ。おん大将の馬前へ寄り合え」
と、招かずして、いつか、義仲のすがたを目あてに、集まっていた。
義仲はしかし、なおその眸を、しずかにはしていなかった。
見わたすところ、公卿、坊官、武将、女房、雑兵まで、煙とともにみな院外へ逃げ出している。そして法住寺殿の全地域は、確実に自分の武力の下にあった。――とは思うものの、ここの占領が、そして、単なる腹癒せが、なんになるのか。
かれも暗然と、身を吹く黒煙りに、咽せ返らずにいられなかった。
「そうだっ、後白河の法皇を逃がしてはならぬ」
義仲は、平家のやった失策を、卒然と、自分の今に思い当った。
「たわけよ、おれは」
かれは、自分をののしってから、さらに、眼をぎらぎらと、あたりへ射向けて、
「やいやい。たわけは、おればかりか、なんじらとて、何を眼あてに、手脚を血みどろにしているのだ。御所など焼いて、得意がるかよ。当の相手は、公卿や女房などではないぞ。院の法皇こそ、取り参らせねばならぬ獲物。疾う探せ、後白河の法皇をお探し申せ」
と、あたりの軍勢を、八方へ手分けし始めた。大将としてのかれの声が、軍令として、叫ばれたのも、このときが初めてだった。

捨て小舟

華頂山のふもと、瓦坂の下あたりは、木曾兵の影も、手うすだった。
この方面から、逸早く逃げ退いた公卿は多かったが、中でも、早かったのは、鼓ノ判官知泰であった。
物々しい、例の兜は、どこかへ打ち捨て、女房衣を頭から被って、煙の中を紛れ出、馬を拾って、東の方へ、素っ飛んで行った。――やがてこの男は、鎌倉までも、休みなしに、逃げ通して行ったそうである。
続いては、摂政の基通であった。玉葉にも「――摂政殿ニハ、未ダ合戦モセザル前ニ、宇治ノ方ヘト逃ゲラレ了ンヌ」と見える。もちろん、陣頭にも立たず、後白河法皇よりも先に立ち退いていたものらしい。
さすが、法皇は、御責任も感じていたろうし、戦いのある時期までは、なお「負けじ」とする闘志も奮っておられたものとみえる。いくたびとなく、
「無念よの」
と、お口にもらしたり、
「木曾、北国の未開の輩に、かくも辱めらるることのくちおしさよ」
と、おん眼じりを裂きながらも、ぜひなく、落去の御輿に召されたのは、すでに寝殿

の廊までも、火にくるまれてからの後だった。
御輿の出が遅かったので、
「供奉にまかれ。者ども、供奉せよ」
と呼ばわりあっても、御輿につづき参らす武者は、わずか十数騎にすぎなかった。
しかも、煙の下を、咽せあいながら、大宮大路へ出ようとすれば、その方面には、樋口兼光が、松並木を遮断しており、すでに十数名の公卿が捕まって、並木の木々に縛られているという。「いかがはせん」と人びとが途方に暮れると、
「さらば、南をさして、木幡へいそげ」
と、御輿のうちからの、憤ろしいお声であった。
火の粉が、バラバラと、御輿の蓋だの、欄に落ち、いくたびも御簾に燃えつきそうになった。お供の左中弁光雅、右大弁兼光、兵庫頭章綱など、おりおり、道ばたの小川から水をくませて、
「御免」
といいながら、御輿の上から水をかけた。
水は白い湯気になって立ちのぼり、法皇の御憤怒そのもののように見えた。
すると。
八条の南を出端れようとするころ、一陣の兵馬が、ゆくてを立ち塞いで、とつぜん、矢の雨を浴びせて来た。

「すわ、ここにも」
「木曾の手下ぞ」
駒は、いななき狂い、はやくも、手綱を持ったまま、まろび落ちる手負いも出る。
「——道は、これまでか」
内なる法皇のおひとりごとであった。
手ずから、おん輿の簾を上げて、おそるる御気色もなく、ぬっと、顔を外へお出しになった。
平常の法衣である。
それに、被り物さえ被らず、あの巨大な中くぼみのある素頭に、血の脈が、つねには見ぬほど、太く青くうねっていた。
「……これまでよ。ううむ」
もういちど、呻くが如く仰っしゃって、
「宗長、あわてまい。お汝、あなたへ馬を出して、下郎どものあだ矢を、ひかえよと、押し止めて来い」
と、さしずされた。
仰せをうけた豊後少将宗長は、木蘭地の直垂に折烏帽子の姿で、ただ一人、矢道へ馬をすすめて行き、
「渡らせ給うは、院にておわしますぞ。慮外すな。過ちすな」

と、遠くからさけんだ。
武者たちは、弓の手を休めた。
「院とは」
「畏くも、後白河の法皇ぞ」
「やあ、待ちもうけていた」
気負い立つのを、宗長は、またしかって、
「無礼をなさば、きょうのちまたは、乱れてこそあれ、後々、なんじらの重罪はまぬかれぬぞ。――まず、たれの手勢か、名のり申せ」
すると、右端の一将が、馬を降りて、
「木曾殿の御内にて、信濃の住人、矢島四郎重行」
と、告げた。
重行は、以下の者どもにも、下馬、拝礼を命じてから、さて、
「さきに主君木曾殿よりも、御幸のお行方を探し奉れとの令、八方へ布令まわされており申す。はや、御運の末、いずこへ遁れ給わんにも、安き道はおざるまい。おなじ儀なれば、重行が手にかからせ給え。否とあれば、やむをえず、ただ、弓矢にて迎え取り奉らんまでのこと」
と、やわらかなうちにも、威嚇をもっていった。
かれがそれまでのことばを尽さないでも、法皇はもう御観念だったのである。――こ

れが最後的な破滅などとは、決してお考えなのではない。――みずから恃む縦横な御才略がある。現実は現実とうけとって「これまで」と見た局面の終末をうけ容れると、御胸中には、もう次の「変」と「新手」についての工夫を凝らしておられるのではあるまいか。

すぐお顔色も日ごろのものになって、おおどかに「ただ、重行にまかせん、いずこへなと案内せよ」という仰せだった。

矢島四郎重行は、すぐ伝令を飛ばして、義仲のさしずを仰いだ。義仲からは、楯六郎親忠をさしむけて来た。ただちに後白河の御輿を三百騎ほどで守りかため、五条の里内裏へ籠め奉って、きびしく、昼夜の番を付けた。

ここにまた、御幼少な後鳥羽帝もある。帝は、七条侍従信清や紀伊守範光に守られて、やはり火を見るやいな、逃げ出されていた。しかし、いずこへ向いても、矢ひびきや雄たけびが聞こえるので、ついに逃げ道を失わせ給い、大池の渚から小舟に乗って、漂うておいでになった。

仮借のない武者ばらの眼は、やがて、それをも見つけて、

「あれも院方の公卿にちがいない」

「矢だめしには、よい的」

と、おもしろ半分に、弓勢を競い、われもわれもと、その*捨て小舟を、狙い物にし始

めた。
この八月、何も知らずに、践祚の御式に立たせられたばかりの幼帝なのである。西国には、平家の奉ずる安徳天皇があり、ここにも幼い後鳥羽帝が、朝の御主体になっていたのだ。
恐ろしさに、帝は、丹後ノ局のおひざにしがみついて、声かぎり泣き出された。その御悲鳴が、水を渡って行ったので、さすが荒武者たちも、
「や。童の声よ」
と、弓の手を、すこしゆるめた。
そのすきに、舟底にうつ伏していた範光や信清たちが、伸び上がって、
「ましますは、主上なるぞ。みかどにて渡らせ給うぞや。矢をやめ給え」
と、声かぎり叫んだ。
主上と聞いて、武者たちも、びっくりしたらしい。馬上の者は馬を降り、徒士はひざまずいて、
「矢は捨てたり。岸へ返させ給え」
と、遠声を送って来た。
やがて幼帝のおん身は、あり合う御車に乗せまいらせ、樋口次郎兼光が供奉して、二条の南――むかし藤原冬嗣の別荘であった――閑院殿へ入れ奉った。
〝行幸ノ儀式ノアサマシサ、申スモナカナカ愚ナリ〟

とは古典の筆者の述懐であるが、おそらく、儀礼など行われるはずもなかったであろう。途々、諸所にも、落武者を狩りたてる小合戦や、無意味な乱暴がまだ熄んでいなかった。

日下党の加賀坊という法師武者だの、次郎蔵人仲頼などという院方の人びとが、落ちゆく途中で、無残な斬り死にをとげたのも、ほぼ同時刻ごろだった。

けれど、これほどな戦乱があったにしては、少し離れた所にいた人びとなど、案外、暢気顔に、事の成り行きを、見物していたような風がないでもない。

たとえば「吉記」の筆者、藤原経房などにしてもそうである。僥倖にも、かれは当日、出仕していなかったが、その日のかれの日記には、

――十九日、午ノ刻、南方ニ火アリ、奇シミ見ルノ処、院ノ御所ノ辺ナリト。再三、人ヲヤルモ、戦場タルニ依リ、通ゼズ、*意馬逸ルモ、参入スル能ハズ。日入ルニ及ビ、院ノ御方、逃レ落チ給フノ由、風聞アリ。

などと誌し、ただうわさにばかり耳を尖らしていただけらしい。

また見物や、火事場稼ぎに出かけた者も、少なくなかったようである。

中納言頼実は、御所から河原の方へ逃げ出して来たところ、どこの下部とも分からぬ輩に取り囲まれ、衣裳、持ち物、みな剝ぎ奪られて、まっ裸にされてしまったという。

そればかりでなく、頼実が、河原の寒風にふるえていると、また今度は、木曾の兵が

多勢やって来て、「怪しいやつだ、首を刎ねてしまえ」と、ののしり合った。驚いて、身分素姓を告げたが、裸形なので、たれも信じようとはしない。すると、まわりに集まって来た見物人の中から、一人の中間法師があらわれて、
「これはまったく、てまえの御主人の弟君で、お父君は、左大臣経宗殿です」
と、証明したところ、初めて、そんな貴人かと驚いた顔つきで、
「ならば、父大臣の許まで送ってやろう」
と、木曾兵が、中間法師の法衣を剝いで、頼実に着せ、左大臣家の門まで送りとどけてくれた。
といっても、かれらには、下心があることなので、大臣家から種々な品物を与えると、兵はそれらの物をあばき合って、いずこともなく立ち去ってしまったとある。
人間には怖ろしい天変地異も、鳥獣には、ひと事にすぎないばあいもある。法住寺殿焼き打ちの一日も、血みどろな地区と、それを、至って暢気にうけとって、
「やれやれ、十一月十九日も、これで暮れたわ」
と、いつもの夜と変りなくただ、眠って送った人間もあるにはあった。京という狭い地上の中でも、人の生態と心はまた、種々だったというほかはない。
明くる二十日の日。この日も、空は薄陽、風は蕭々。
六条河原には、六百三十余人の首級が、梟け並べられた。

武士の首、法師の首、女の首、公卿の首、烏瓜のように真っ赤に染まっている首——。さすが、立ち寄る人影もない。

午ノ刻ごろ。

五条から六条河原にかけて、吹螺（貝）や鼓の音が鳴りひびき、義仲の馬上姿が、河原の一端へ降りて来た。

木曾の全軍は、七段に陣をわけ、かれの閲兵をうけてから、部将部将の指揮のもとに、東へ向かって、三度、勝鬨の声をあわせた。

おそろしげなその諸声は、洛中の隈々まで聞こえてゆき、武門の武威を震駭させるには充分であった。

けれど、京中の屋根は、墓場の石のように、しいんとしていた。武者声の果ては武者声だけで消えてゆき、それにこたえる歓呼らしい庶民の声はどこからもわかなかった。

とはいえ、義仲は上々きげんである。きのうの合戦は、さきに樋口の意見もあり、かれ自身の慎みもあったし、いわば心ならずも、物の弾みで、事態に引きずり込まれてやってしまったものだが、けさは、それを悔いている風もない。

むしろ、得意にすら見えた。その得意そうな容子は、こうなる方が、かれにとっては、やはり自然だったことを証拠だてていた。

馬上、わが三軍を眼下に見て、身、その大将軍として閲兵するような生活の中に、かれは、かれ自体の最大な愉悦を感じるものでもあろうか。その陶酔と満足とは、ひとの

うかがいえないほどかれには価値の高いものだったには違いない。
「なんと、これや不思議よ」
閲兵が終わると、かれは、上ついた調子で、左右の幕僚をかえりみた。
「味方にも、相当、死傷はあったのに、軍勢は急に殖えているではないか。前に、樋口が申した実数よりは、ずんと、兵が増しているのは、どういうわけか」
「されば、院方の大量な兵が、こぞって降伏を申し出で、一夜にお味方へ参じたせいです」
「はははは。寝返りに利がついて、また、寝返って来たか」
「いや、裏切者はゆるしません。首か、逃散。ことごとく、かき消えました」
「およそ降参の兵は、食うに道がないゆえこっちへ来たまでのものよ。木曾の下で食えねば院へ奔り、院で食えぬとなれば木曾へ来る。さしあたり、食わせることが軍の急務ぞ。兵糧の貯備、徴発をおこたるな」
その日、義仲は、ほかの新亭へ移った。もと五条大納言のいた大館である。森を隣にして五条内裏があり、そこには昨夜来、後白河法皇を押し籠め奉ってあるのだ。
自軍の中に、法皇を擁したことは、みずからの手に、政権を握ったことと同じである。と義仲は考えたし、その通りを実行し出した。
二十三日付の宣文で、義仲は、これまでの君側と見られる公卿――三条中納言朝方以下、四十九人の官職を解き、その所領までを没収し、また、摂政基通も罷めさせて、

基通の叔父（基房）の子の、まだ十二歳でしかない師家を、摂政内大臣の位にすえた。
「これはまた、どういうお胸のお計らいか」
人はみな、かれの突拍子もない人事ぶりを疑った。
しかし、義仲が今も、冬姫を忘れていないことを知る者には、うなずけぬことではない。師家は冬姫の弟君である。そしてこの姉弟の父、前の関白基房は、いやおうなく、五条内裏へいくたびとなく呼ばれていた。

物の怪沙汰

たれが考えても、十二歳の師家が、摂政の職についたのは、滑稽である。
しかも義仲の考えでは、大臣をも兼ねさせたいのだった。ところが、大臣の空きがないので、
「徳大寺殿へ、罷り出でよと申せ」
と、庁文をもって、徳大寺実定を呼びつけ、実定の内大臣の職を、しばらく師家へ借用させ給え、と妙な強談合をもちかけた。
実定は、内大臣兼左大将であったから、
「どうぞ、御入用なれば」
と、これも妙な答えをして、ひき退がった。

そこでまた人びとは、新摂政のことを「借物の大臣よ」と笑い「借の大臣」と蔭で綽名した。

義仲の傍若無人はかくれもないことだ。だからそれらの諷言は、義仲が的ではなく、もっぱら、義仲の相談あいてと見られる前関白基房を皮肉ったものであろう。

〝――禅閤（基房の事）恥ヅル色アリ、道ヲ行クモ車ヲツ、ム〟

と時人に書かれたほどである。しかしかれの立場は、人がうらやむようなものではない。むしろその反対であり、その恥ずる色は、公卿中の恥を身一つにあつめた苦衷の姿とも見られた。

（――まるで狂乱の世じゃ。院はおろか、どこへも顔は出したくない）

とかれも世相におののいていた一人であったが、義仲からは、戦後さっそく「五条の院御所へ罷られよ」との迎えだった。夜も使い、朝も催促、時をきらわぬ庁命なのだ。

そしてぜひなく行けば、義仲からは、出放題な註文がいい出された。意見を問われるのではなく、強制的にである。何一つでも拒む力は公卿側にない。およそ、武力に把握された傀儡の政庁につながれて、武人の下に、その余命を雇用人的に利用されている大官ほど、あわれとも、みじめとも、またそれ自身が自身に恥ずるものはあるまい。

しかも、摂家第一の氏の長者基房が、その恥に耐えている姿は同情にも値しよう。「いやだ」といえば何が起こるか結果はわかり過ぎている。――で、毎々呼ばれるたびに、かれは「院のおんためには――」と、嘆息しながらも出向いて行った。けれど、そ

の余儀なさには、ほかの理由もあることだった。

木曾にたいするかれの恐怖には、もひとつ、わたくし的ないきさつが潜んでいた。それは、冬姫の問題である。

かつて義仲を自邸の宴遊に招いたとき。「見せ給え」と義仲が執拗に求めた冬姫を、故意に見せなかったことがある。それだけならよいが、べつな小女房を姫の替玉として琴など弾かせ、その場かぎりの心にもない歓待をして帰したものだった。——ところが、風聞では、義仲はあとでそれを知ったらしいということだし、知りながら、意趣も仕返しもして来ないのが、基房にはなお気味悪くてならなかった。で、何かにつけ、気に病みぬいていたのである。

それゆえ、義仲から「罷れ」といわれると、罷り出ずにいられなかったし、「こう計らい給え」「院へかくすすめ給え」といわれても、否むに否まれない、弱さもかれにあったのだ。

その代りに、義仲の意に逆らわずただ易々として来たお蔭には、子の師家が摂政に推され、かれ自身も身内の如く「禅閤、禅閤」と泥まれて、木曾殿のお覚えだけは、めでたかったわけである。

「つらいことよ」

と、かれはおもう——

「ひとの誹りはぜひもないが、院にはわれをどう御覧じあることぞ」

ここの幽所に押し籠められている後白河の前に出ることが、かれには何より辛かった。針のむしろの思いがする。

五条内裏も、院御所と仮称しているが、法皇は、武者どもの監視の中におかれ給い、ただ義仲の請うがままに、御裁許のかたちを執らせ給う木像の如き存在に過ぎないのである。

そこの幽所へ伺って、

「この儀を、かくのように。あの沙汰を、このように」

と、義仲の無法な要求をたずさえて、いちいち奏請に出るのがかれの役だった。

「ふうむ……」

法皇には、いつものように、鼻腔を鳴らして、自嘲するとも無関心ともつかない薄笑いをなさるのが、型のようにきまっていた。

そして「可」とも「否」とも、すぐには、次の御返辞をなさらないのもきまっていた。その間の重くるしい沈黙こそ、基房には、ひざに責苦の石を積まれるような痺れであった。

(よくもまあ、こんなことを、そちもまた、のめのめと、取次いで来られたものだ。いったいそちは、朝廷の臣か、木曾の家来か。歴朝、関白や摂政を出して来た誉れある氏の長者の家柄ではなかったのか)

これは基房が、自分へいっていることである。法皇の冷たいおん目は、この基房を、こうもお蔑みあるのではあるまいかと、ひとり恥じぬく姿なのだ。

ところが、後白河は、やがて、からからとお笑いになる。なんともうつろなひびきであるが、日ごろの剛毅はお崩しになっていない。仏教の御素養などが、こんなときのお心構えを助けるのでもあろうか、ないしは、かつて清盛のために福原に幽閉の憂き目をみられた御経験もあるので、「やがては、見よ」と、ひそかに後の確信をお持ちのせいか、とにかく、

「――諸事、よいように」

と、打棄るように仰せられるのが常であった。

いわゆる下世話の「どうとも、してみるがいい」というのが、御本心なのであろう。けれど、御本意でなくも、それが院宣となり、庁の下文とされてゆけば、必然、政治力の即発となる。――側近の公卿四十九人の解官もそれで行われたし、摂政の更迭も、借の大臣の出現も、義仲の思うまま公文化されて行った。

武力の支配には、なお限界がある。文治的権力の無辺さを、義仲は初めて知ったのである。おもしろいものだと感じ出したらしい。公卿の任免ばかりでなく、所領の分配なども思うがままに振る舞った。――そして全国にわたる平家一門の旧所領は、

（――是ヲ、義仲ニ賜フ）

という下文を請うて、ことごとく、かれの相続する物としてしまった。

次いでは、左馬頭の職名を返上して、院の御厩ノ別当になった。
また、征夷大将軍になりたいとおもい、奏請の結果、望みどおりの印綬を帯びた。
なお、やがて、こんどは、
(——義仲にたいし、頼朝追討の院宣を降し給われ)
と、院へ迫った。そしてそのことが成就すると、
(奥州の藤原秀衡へも、庁の下文をつかわされ、義仲と力を協せて、鎌倉の頼朝を討てとの御沙汰を降し給わりたい)
と、申し出た。
後白河は黙々のうちに、それらの要求も、すべてお容れになった。
いまは義仲の思うことで成らないことは何もなかった。ただ西の平家と、東の鎌倉と、そう二つの脅威を除く以外には。
いや、もうひとつ、ままならぬことはあった。
月は越えて、その年も十二月になっていたが、冬姫はまだかれの手にはいっていなかった。義仲の驕慢も恋には武力も政権も施すに手のないことを思い知らされていたのである。なぜならば、冬姫は、もしかれの手が伸びれば、いつでも死ぬ覚悟でいるということを、父の基房が、姫に代って答えていたからだった。
「姫はこの義仲を、鬼のごとき者と思うておるらしい。のう親忠、おれほどな優しい男

を、この気もちを、どうしたら、冬姫に分かってもらえようか」

あるおり、義仲は、楯親忠(たてのちかただ)へ、くるしげに、こう諮(はか)った。

飲んでも飲んでも、近ごろは青じろむだけで、酒には酔わない義仲だった。ある一つを思いつめている人の眸(め)である。

「なんの御意(ぎょい)かとおもえば――。あはははは、わが君らしくもないおことば」

親忠(ちかただ)の方は、酩酊(めいてい)していた。

法住寺殿焼き打ち以後、義仲の幕僚たちは、みな、思い上がっていた。――だからこそ、おかしいのであろう。いまの主君の御威力が、なぜ、冬姫だけには、振えないのか。ひっ込み思案や吐息にばかりなるのかと、焦れったく思うらしいのだ。

「いつかの夜のように、桂川の別荘へお微行(しのび)あったらよろしいではございませぬか。親忠もお供いたしましょうず。そして、姫の許にて、一夜をお明かしなされませ。いやも応もありは致しますまい」

「ところが、男はおろか、世の風だにも知らぬ姫。もし、おれがそのようなことをしたら、すぐ自分の手で死ぬであろうと申しおる」

「たれがそのような儀を」

「姫の父が」

「それや嘘(うそ)でおざる。やがては天皇のお后か女御(にょご)には約束されているも同然な摂家(せっけ)の姫。わが君ならずとも、可惜(あたら)な花と、余人に手折らるるのを惜しんでおるにきまってお

りまする。なんで基房公が、おいそれと、御意にまかせましょうや」
「では、禅閤が申すのは」
「嘘だと思いまする」
「おれはそうは思わぬ。風にも耐えぬ姫ならば、さもあろうかと思う」
「では、おあきらめなさいますか」
「ばかをいえ。これをあきらめるほどなら、征夷大将軍の名も何もいらん」
「さまでの御執心なら、なぜ、そのおつよい情火をもって、姫の心を溶かしてみしょうとなさいませぬか」
「死なせては何もならぬ。せっかくの珠を砕いてしもうては」
「それが基房公の詭弁というもの。厄除の禁厭みたいなつもりで申しおられるのでしょう。なぜ、姫のばあいに限ってわが君はさように臆しなされますのか。あの山吹を初めてお手なずけ遊ばしたときは、どういうふうになさいましたの」
「山吹は山吹よ」
「でもやはり初心な処女は処女であったでしょうに」
「あれは女兵の屯にいた女、摂家の姫とは、ひとつに語れぬ」
「さ。そこが大きなお考え違い。山猫にひとしい女兵でも、やごとない姫君でも、違うのは粧いだけで、しんの女体はおなじものです。――なぜ山吹をあしたように冬姫の君をもねじ折っておしまいなさらぬのか。……ひとたびその者の女体に目醒めを与えて

やれば、深窓の花といえ、野の花といえ、情を開いて、男にすがる自然の趣にはなんの変りもありませぬ」

親忠は恋愛をでなく色道を説いた。その道にかけては一ぱしの通人みたいな顔して

「ただ、やるのが先ですよ。考えるのは後でよいので」としきりにいう。

もっとも、かれら木曾の部将は、親忠がいまいったような漁色の道を、おのおの、ひそかに体験していたかもしれないのである。

近ごろ、五条内裏の局々には、夜が更けると、異様な男どもが徘徊して、院の女房たちに、あやしき泣き声を立てさせたり、また、夜の明けるまで、体をよそに運ばれて、局にいなくなったりする小女房なども多いとかで、「物の怪沙汰」が絶えなかった。

何しろ今、院御所と木曾の館とは、木立をへだてているだけなので、上﨟や雑仕女の艶な色どりや匂いが、昼も木蔭にちらちら見られるほどだった。そのため、夜になると木曾の武者たちが、〝つぼね見舞〟と称して、禁園の果実を漁りに半ば公然とはいって来るのだ。それの訴えには、法皇もほとほとお困りだったのである。「五条は物の怪が出るとやら申し怯えて、女房たちの顔色が日増しに悪うなってゆく。どこぞ院御所を他へ遷したいが」とは、再三な御諚であった。

けれど政策上、今のかたちは、変えられないものであったし、副作用的な弊害なども、部将らとすれば、当然、勝者に与えられた甘美な戦利品という考え方なのだろう。これくらいな分け前がなくて、どこに、上洛して来た効いがあるかというに違いない。

かく、部将たちはおのおのの戦賞を、禁園の実にあばき合ったが、義仲には、それもできなかった。「——いや、われらと同じお心になれば、冬姫の君を御自由になさるくらい、なんの造作もないことなのに——」と楯親忠などは、歯がゆがっていたようである。

婿誓文

法住寺殿焼き打ち、法皇の監禁など——義仲はそれを当然な自己防衛として、やや荒療治とは思っても、さまでな処置とも畏れていないらしかった。——しかし世上への反映は重大だった。

ある者は、
「木曾の狂乱」
と、それを評し、ある者は、
「入道清盛すらもなしえなかった悪逆無道」
と、ののしった。
動機や名分はどうでも、破壊を「悪」と憎む民心は、まったく木曾から離れて、兵乱が終わっても、疎開の山野から町へ帰って来る者もまれだった。
——この結果は、屋島の平家と、鎌倉のうごきにも、すぐあらわれた。

かねて、義仲が、ひそかに期待していた〝平家との和議〟は、十二月半ばのころ、平家方からはっきり、こう、拒絶してきた。

（わが屋島内裏には、照々として人皇八十一代のみかどが御座あらせ給うものを、木曾と対等な和睦などはおもいもよらぬ。和を乞うは大いによし。もし和を欲すならば、すなわち、甲冑を解いて、身みずから平家の陣門に降伏して出よ）

という返牒なのである。

あたかも、これと呼応するかのごとく、尾張、美濃あたりの味方からは、

（鎌倉の軍勢数千騎、きのうもきょうも、墨股を西へ渡り越えて候う）

と、急を告げて来、

（さきに御飛脚いたしたる九郎殿の上貢使と称する小勢とちがい、このたびは、海道筋を絶えまなき大軍勢と見えて候う）

とも追い飛脚して来て、義仲の奮起をうながした。

しかし、義仲は、驚かなかった。

いや、何かしら、驚く神経を失っているのである。驚けなかったといった方が正しいかもしれない。

刻々にせまる運命を、しんに感じている者は、館中、樋口兼光ぐらいなものだった。

それと、かれの妹である、つまり義仲の妻、巴であった。

その巴と兼光の兄妹は、すでに、ある心支度もいい合わしていたのだろう。打ちそろ

って、義仲の室に姿を見せ、

「このうえは、北陸へお退きあって、鎌倉のほこ先を避け、敵のみだれを見て、またの入洛をお計りあっては」

と、義仲の果断を求めた。

だが、義仲はいつになく煮え切らなかった。

「さよう——」

とのみで、考えこみ、

「頼む味方は諸道に分かれておるし、呼び返すには、日がかかる。むしろ、このまま都にいて、遠くの味方を励ました方がよいかとも思われるが」

「いや、この都は、都の空骸(なきがら)です、しょせん、守りうる何物も持っておりませぬ」

「だが、北陸落ちには、法皇をもお連れして、供奉(ぐぶ)申しあげねばならんが」

「いまなれば、それも……」

「ところが、松殿(基房)以下、公卿どもはみな、よろこばぬ」

「はて。君には近ごろ、どうして、基房公にいちいちさようなお気づかいを抱かれまするか」

兼光に突っ込まれると、義仲は黙ってしまった。そして巴の視線からも眼をそらすのであった。

良人の胸のものは、何もかも見抜いているかの女の眸なのである。兄にもそれは打ち

明けていないはずはない。それかあらぬか、兼光も、それ以上に迫るのは辛いらしく、

「事は急、それに大事。一、二夜はまず充分にお考えおきを」

とのみで一応、退がった。

そのあとで、義仲は例のように酒を呼び、浴びるばかり痛飲していたが、たそがれの燭を見ると急に、

「松殿は、院におられるか。まだ帰ってはおられまいな」

と、何思い出したか、五条内裏へ足を運んだ。

そこで、基房をたずねると、基房は、つい今しがた、車に乗って、御所を退がったところと聞き、

「お呼びして来い。呼び戻して参れ」

と、武者を追っかけさせた。

横顔に燭のまたたきをうけながら、義仲は、内裏の古びた一室で、基房を待っていた。

十二月の夜寒である。

火の気もないが、かれ自体が火といえよう。紅炎ではない、青じろい炎なのだ。酒は、からだじゅうが酒壺だったが、赤くはならず、眸も皮膚も、燐を思わせる色だった。

「おう、木曾殿よの。なんぞにわかな儀でも?」

戻ってきた基房は、かれの眉に、すぐ何かを感じ、剣の前にすわるように座についた。

「あなたは氏の長者。その松殿の御帰館を呼び戻したような無法者は、おそらく、この義仲だけでしょうな。ははははは」

「いや、そのお気軽が、武人らしゅうて、まことによい。率直で、まろも気がおけぬ」

「よも、世辞ではありますまいな」

「なんの、追従などを。して、おり入って、何事を」

「ほかでもないが、誓文を賜わりたい」

「誓文とは」

「ここを院御所とさだめ、あなたを一切の談合相手といたしたさいに、義仲より、あなたへ申し入れた一儀がおざろう」

「……?」

「お忘れのはずはない――」

と自然、激して来るもののように、義仲はやや声を荒らげ、

「決して、お忘れあるはずはない。そのとき義仲は、あなたへ、はっきりとこういった。……過ぐるころには、よくも義仲へ、冬姫君の替玉を馳走されたのうと。……笑止や、松殿はおれの前でガタガタふるえ召された」

「……いや、もうその儀は、その儀は平に」
「いわずにおけといわるるか。だが、義仲の申し条、あなたの詫び言、もすこしいってみねば分からぬ。義仲は、心を割って、真っ向、あなたにこう求めた。——冬姫を娶いうけたい、真の冬姫を義仲が宿の花とせずにはおかぬ。——いやならば、ただちに兵をさしむけ、関白家を焼き払い、一族みなごろしにせん、といった。……ちがうか、松殿」
「ちがいませぬ」
「そこで、あなたは、なんと答えたか。……しばし、時を待ち給われ、かならず、姫はまいらすが、今では、姫が驚きの余り、みずから死ぬであろう——というた。姫を死なせてはと、義仲も待つことにした。きょうまでも、怺えていた。……だが、もう待てぬ。鎌倉勢が、美濃までも迫って来たのだ。松殿、松殿」
「は」
「約束だ。約束どおり、おれを婿にされよ」
「…………」
「いやか」
じりじりと、ひざをつめ寄せて、
「いやならば、いやといいえ。思うところへ、火を放ち、こよいのうちに、法皇の御輿を奉じて、北陸へ落ちんと思うぞ。——あなたの返辞が、義仲の都の去就をきめるもの

だ。冬姫をくれるか、否か」
「さ、さしあげまする」
「ならば、一筆、誓文を書き給え。それを持って、義仲より姫を訪い、姫が身を、桂川の別荘より連れてまいれば」
「一言、院へも奏上のうえ、すぐ否やの御返辞を申しましょうず。しばらくお待ちを」
逃げるように、基房が立ちかけるのを抑えて、
「院にお媒人(なこうど)は頼み上げぬ。もともと、あなたと義仲との約束だ。いやならば、よし、義仲は義仲を恃(たの)むだけのこと」
と、また突っ放した。
よろめいたまま、基房は、いかずちに撃(う)たれたように、うつ伏していた。ふるえがしずまると、はうように、次の室へゆき、やがて一通の誓文をしたためて、義仲の前へおいた。
(――むすめよ、このお人は、そなたの婿殿ぞ。父がえらんだ婿の君ぞ。法皇のおぼしめし、父のねがい、千代までも契(ちぎ)りねかし。世を救う救世(ぐぜ)観世音菩薩(かんぜおんぼさつ)をそなたと拝(おろが)むぞや)
そんな意味が書いてある。
義仲は、文字のうえだけを見て、その底にある意味は、解きもせず、解こうとする心

のゆとりもないのだった。
「――馬を」
と、外へ出て、外の暗やみへ呼ばわった。
郎党六、七人が物々しく、悍馬の口をとって、かれの前へひいて来た。それへとび乗るやいな、どこへともいわず、御所の門から馳け出した。
もちろん、郎党たちも、大あわてに、おのおの、馬の背に移って、おあるじの後を追っかけたが、そこの辻、ここの辻、どこをどう曲がって行ったか、もう義仲の影は見えない。
――やがて義仲はただ一人で、桂川のほとりへ出ていた。
空には、冬の月が吹き研がれている。おりおり啼きこぼれる川千鳥の声、淙々と、どこかを行く大河の水音。義仲は、ひとり愉しそうだった。
「……おう、この木立だ。この築土よ」
かれは、馬を降りた。
そして、法住寺殿焼き打ちの前夜、楯親忠や猪丸を案内として、いちど来たことのある関白家の別荘の近くに駒をつないで、門の方へまわって見た。
むかし、藤原忠通が、ここに籠って、詩文を愉しんでいたころの――あの宏壮なおもかげはあるにしても、門屋根は朽ち傾き、あたりは冬草に埋もれ、もとより、召使らしい人影もすきもる内の灯影もない。

義仲はしきりにそこをたたいた。
だが、むだと覚ると、築土を大きく横へ曲がってゆき、足がかりを見ていたが、やがて一つの木へ登るよと見るまに、その枝さきから、ひらりと、築土のみねへ跳び移っていた。

秘園獣走

どこが冬姫のいる棟であろうか。
かなたの大屋根は幾つかに分かれ、泉殿の下の流れや築山の様も荒涼である、灯影もあらず、人の気配はまったくない。
――跳び越えた築土を背にして、義仲は、眼にとらえる何物もないむなしさ、寂寞さに、しばらく、茫としていた。
ここへはいってみるまでは、関白家の姫君の隠れ家、召使や、守りの武者もいるものと予測していたにちがいない。案に相違した面もちだった。
しかし、体じゅうの酒気も妄執も、たやすく醒め果てるはずはない。かえって眸には疑いと情火を加え、人のにおいを嗅ぎ求める黒豹のごとく寝殿や対ノ屋の外をしきりにうろうろ歩きはじめた。
すると、すぐ――いま義仲が越えた所のおなじ築土を、また後から躍り越えて来た男

があった。男は、注意ぶかく身をかがめ、先の影を尾けて、突然、うしろから跳びかかるような姿勢をしめした。
うつつもない義仲だったが、とたんに動物的な反射を四肢に見せて、
「たれだっ」
と一喝し、太刀の手へ腰のひねりをかけた。
「やや、あなた様は——」と男は、義仲と初めて知って、遠くへ飛び退き、ひざまずいて、
「おゆるしくださいまし。御大将とは、ゆめ思わず、あわや粗相つかまつるところでございました」
「関白家の召使か」
「いえいえ、てまえは、楯親忠殿に飼われている雑色の猪丸で」
「なに？　……。おう、猪丸か。なんで、かような所に、ただ一人潜んでおりしぞ」
「おあるじの申さるるには、ここの姫君が、またもいつ他へ隠れ家をかえまいものでもない。夜昼なく、見張りいたせ。もし家がえをしたら、その行く先を見とどけよとの、おいいつけによりまして」
「では、冬姫はまだここにいるな」
「されば、あの翌日、法住寺殿の方角に御合戦の煙を見ると、この上の浄光妙院へ深くお籠りあって、そのまま、潜まっておられまする」

「さては、ここには人も見ぬはずよ。その浄光妙院とやらは？」
「すぐかなた、御庭(みにわ)つづきの、小高い松林の上ですが」
「猪丸、そこへ案内いたせ」
「して、お供の武者方は」
「なに供人。そんな者は、こよいは連れておらぬ」
「あ、お忍びで」
猪丸は急にのみ込み顔をした。先に立って、庭端れから小道を登って行き、松の木の間を指さした。
初めて、幾つかの灯があった。関白家の先代忠通(ただみち)が建立した三重の塔や御堂なのである。過ぐる日の戦い以来、姫に侍(かしず)く女房や武士もみな一つに潜んでいたらしい。義仲が不意にやって来たことを、義仲に代って、猪丸は車寄(くるまよせ)から大声で奥へどなった。
「やあ、御内(みうち)なる人びと、突然なれど、これへ渡らせ給うたは、木曾の大殿(おおとの)ぞ。新将軍義仲公なるぞ。耳を疑うな。これへ出て、お迎え申せ」
二度三度、そう繰り返したが、しかし、義仲は家人の応接などを待っているつもりはない。かれの姿は、もうずかずか内へはいって行き、
「姫君はどこにおられる。冬姫どのに会いに来た」
問いつつ、見まわしつつ、廊や細殿の物蔭をうろたえ回る召使の影を払って、なお奥の方へ、ぐんぐんと通って行った。

御堂づくりだけに、屋鳴りは大きく聞こえ、人の叫びやら跫音など、不気味に響き合った。

木曾、という声だけで、それまでの静寂がこの有様だった。朱雀のちまたへ、鬼が出たような恐怖のあらしである。

——と、中の廻廊を、一団になって、こっちへ渡って来た人びとがある。みな、侍たちであり、長柄や弓を横ざまにかい込んだ挑戦的な者もあって、

「やあ、待て。待ちおろう」

と、義仲のゆくてを立ちふさいだ。

「どこの者かは知らぬが、人の家へ押し通って、何を求めに参りしぞ。木曾将軍の名を騙るなど烏滸がましい。おそらく、賊徒であろうが」

「よく人を見てこそ、ものをいえ。おれを知らぬか」

「賊の顔など、たれが見知ろう。こやつ、胆に毛が生えたような面して、びくとも動じおらぬぞ」

「やかましい」

と義仲は、しかりつけて、

「なんじら、雑色輩に用のある身ではない。おれは、まぎれない木曾ぞ、後で悔いるな」

「木曾の何やつかよ」
「しゃつ、都にいて、この義仲を知らざるか」
「あははは」
虚勢だが、どよめき笑って、
「いかに、山家出の義仲冠者とて、夜陰、供も連れず、かかる所へただ一人で来るはずはない。尾を垂れて帰ればよし、なお、コケ脅しを申しおると、ただはおかぬぞ」
後ろの方で二、三の弓は、矢つがえを示し、前なる者は、長柄をしごいて、斜めに持ち直した。
いかに酒気があったにしろ、それにたいしての義仲は、ずいぶん無謀な仕方だった。柱の蔭へ身をかわすでもなく、体そのままを、数歩、かれらの前へ持って行って、いきなり平手で一人の横顔を撲りたおしたのである。
これはかれが、木曾の山犬峠などで、狼に囲まれたときの経験をそのままやったものかもしれない。素手で寄って行ったため、相手の同勢は、かえって戸惑いしたらしく見える。撲りたおされた仲間が横へよろめくのを見ていながら、なんの手出しもしなかった。いや義仲の威に圧されてできなかったものらしい。
「木曾といえばおれ、おれといえば木曾、天下に義仲は二人とおらぬ。そのおれは、当関白家の婿でもあるぞ。なんじら、あるじの婿君に、弓を引く気か。その面どもの一つ一つをよう見ておくゆえ、後になって泣き吠ゆるなよ」

義仲は、ねっとりといったが、もとよりかれらの耳に、受け容れられる言ではない。
また一せいに喚き始め、矢はそれたが、ぶんと、後ろで弦鳴りも起こった。
ところへ、義仲の後から馳け出して来た猪丸が「まぎれない御方なるぞ、ばかなまねをするな、後悔するぞ」と大声で関白家の侍たちを制した。
この猪丸は、もと、関白家に仕えていた雑色の一人であったから、当然、そこにいた人びととは、以前の朋輩なのであった。その猪丸が、近ごろは木曾幕下の楯親忠の配下にいるということもみな知っていたので、
「やや、猪丸がああ申すぞ」
「では、義仲公とは、まことなるか」
にわかに、仰天したのである。
弓も投げ、長柄も下において、
「いかなれば、この夜陰に、かくは突然、お渡りなされましたか」
と、平あやまりに詫びつつ訊ねた。
義仲は、狩衣の下から、禅閤基房にしたためさせた一札を取り出して、読み聞かせ、
「わかったか。いま読み聞かせたは、関白殿の婿誓文ぞ。余人ならぬ姫の父君が、この義仲へ、こう、ゆるしておることとなのだ」
「…………」
「すなわち、婿の義仲が、こよい自身で姫の身をもらい受けに来た。姫君はどこにおら

るるぞ」
「……あ、もし」と、義仲の語気と眸を、自分の方へ引き取って、中でも年とった家職らしい者が、毅然として、答えた。
「おあるじの禅閤様の御筆、みじん、お疑いも仕りませぬ。また、仰せの旨も、よく分かりまいてござりまする。けれど、姫君には、もうここにはおいで遊ばしませぬ。はい。まことに、せっかくな儀ではおざりますが」
「なに、おらぬと、では、どこへ移した」
「さる御寺の内へ」
「寺と申せば、ここも寺だが」
「いえいえ、秋のころより、世は恐ろしき苦患の辻のみと、いたく世をお厭いあって、藤原氏の有縁とて、奈良に近いある御寺へはいられました」
「うそをいえ。……どうだ猪丸、いまのことばは、嘘であろうが」
「大嘘でございまする。ここへ潜み給うたのも、たしかに見とどけ、その後も、この猪丸が昼夜見張っておりましたが、冬姫の君が、ほかへ移った様子はございませぬ」
「そうだろう。奈良といえば、義仲の力も届きえまいと、その老家司めが、機転で申すことにちがいない」
「なんの、まったくもって」
「まだいい張るわ、この、しぶとい家司めは」

「おわさぬものは、いかにとも」
「よし、さらば家探しいたすぞ。それでもか」
「御存分に」
「猪丸」
「は」
「広くもあらぬ御堂や僧房、隈なくそこら中、捜してみろ」
義仲もまた、一間一間の御簾を引きちぎり、几帳を蹴たおし、壁代をめくり、妻戸から妻戸へと、かれとともに捜して行った。
よい香料の香のただよう部屋があり、美しい女房衣を掛けた衣桁があり、鏡台、調度のたぐいも見える。「いる。いないはずはない」という疑いは増すばかりだった。そして、そういう雑兵的な行為そのものに、義仲の野性は野を行くように翼をひろげ、かれ自身が自身のしていることを知らないような姿だった。
けれど、ようやく、徒労がわかった。
捜しあぐねた猪丸は、もう、下屋から釜屋までも見、なお床下をものぞいた末、外で考えこんでいた。
そのうちに、かれの眼が、一つの不審を、かなたに見つけていた。
浄光妙院から数十歩の西側に、三重の塔があった。その塔の一層目なのである。かすかに、すき間もる灯が見えたのだった。

義仲は西の廻廊へ出、猪丸とともに見ていたが、
「おう、あれか。——さてはかしこよ。あのような所に、冬姫のほか、たれが隠れ住むものか。見つけたわ、姫は、あのうちだ」
そこの欄(おばしま)を飛び降りざま、目標へむかって、獲物(えもの)にかかる野獣のように走った。
猪丸も、おくれはしない。
けれどその猪丸は、十歩とも馳けないうちに、どこからか飛んできた矢に喉笛(のどぶえ)を射抜かれて、ぎゃっと、みじかい叫びをあげ、もう、芋虫のように、地上に身をもがき丸めていた。

冬の花

うしろの、猪丸の絶叫にさえ、義仲は気づいていない。
幾すじかの矢は、義仲の影をも、掠(かす)めていた。
そして、その姿は、もう塔の階(きざはし)のすぐ間近に迫った。「姫っ」とかれの心がさけんでいる。
灯影は、いつのまにか、かき消されており、二層目、三層目、塔頂の水煙(すいえん)までも、すべて、墨一色のものだった。
しかるに、塔の室をめぐる四方の廊には、掛仏(かけぶつ)の像のように、具足、腹巻の人影が立

ち並んでいたのである。義仲は、反射的に、跳び退いた。

関白家の臣、河内介安成、非蔵人貞正、春日四郎、弟の菊王などだった。これらの子飼からの郎従十数名は、一命に代えても、冬姫の身を守ろうものと、桂川へ移ったときから、そばに仕えていたのであった。

わけて、法住寺殿の兵変以来は、いつ、木曾殿の魔手がさし伸ばされて来るかも知れぬと覚悟していたし、今も、「たとえ、義仲自身たりとて、なんでむざと、姫君のおん身を渡そうや」と、おのおのの肉陣で守り堅めていたものだった。

さすが義仲も、ぞっとした。内に燃える妄執と、近づき難い決死の群像に阻まれて、じんと、髪の根が熱くなった。「いかがはせん？」と、後ろを見るのだった。後ろにはまた、さっきの剛毅な老家司以下、雑色たちが、打物を押っ取って、
（これ以上の乱暴をなすならば、木曾殿とて、ゆるしはせぬ）
と、関白家の運命をも、賭ける覚悟でいるらしく見える。

おりもおり、そのころだった。四方に人馬の声が近づきつつあった。五条を出るとき、義仲を追っかけた郎党の一人が、さらにそれを楯親忠へ、告げていた。「さてこそ、桂川へ行かれたものにちがいないぞ」と、親忠を先頭に、探しあてて来たものらしい。

「あれよ、かしこに人影が」

「一人は、わが君」

見つけるやいな、親忠の部下たちは、ぶんぶんと、弓鳴りを争った。矢かぜは、塔を

中心に無数の矢を突き立てた。
塔を囲んでいた決死の群像も、あえなく、ばたばたとたおれて行った。もうその側まで、木曾方の騎馬は躍っていたのである。あなたこなたで白刃のひびきがし、組み合う武者と武者もあった。かの剛毅な家司は、まっ先に斬り死にし、あとの雑色は、ほとんど、戦わずに逃げ散った。
「わが君、わが君。親忠でおざる。親忠、馳けつけて候うなり。——おういっ、味方の者ども、もう、敵らしい敵はおるまい、さは追うな。それよりも、わが君を、おたずね申せ、わが君を」
親忠は、塔のまわりを、ぐるぐる馬で馳けまわった。林のうちへもはいって行った。どうしたのか、義仲は見えもしない。
もしや、と不吉な想像もして、そこらの死骸も調べさせた。が、手負いや死者は、関白家の者ばかりである。義仲はその中にも見あたらなかった。
義仲は、塔の中に、いたのである。
矢つむじの一瞬に、扉をつき破って内へ馳けこみ、漆壺のようなそこのやみを、体じゅうで、じっと、さぐっていた。
十二月の外気にひきかえ、塔の中は、生あたたかい。人肌ほどなあたたかさである。伽羅の香か、蘭麝の香か、*えならぬ匂いが鼻をついてくる。それにも女性の特有な体

臭とぬくみが加わっているので、咽せるばかりなここちがする。
「姫ぎみ……」
義仲は、そうっと、下へすわって、しかも努めて、優しくいった。
かれは、ふるえていた。どうしようもなく、ふるえが出る。
余りに高貴な君と思うばかりではない。ひょっとしたら、自害しているかもしれない予感がするのだった。また、自分の闖入に恐れて、こうしているまにも、死にはしまいか。無残な亡き骸のみが、そこにあるのではないかと、歯の根で思いしめるのであった。
「……姫ぎみ」
間をおいて、またいってみた。依然として、答えはない、物音もない。
「なにも、恐いことはありません。……お父君基房公の御書面をもって参り申した。お明りをおつけください」
お父君の――とかれがいったとたんに、隅の方で、泣き咽ぶ声がした。その泣き声のうるわしさ。義仲は、わくわくした。
「決して、決して、御不幸な目には遭わしませせぬ。万一にも、姫君がお気みじかな真似でもなされたら、それこそ、基房公の御不幸は、はかり知れまい。……さ、御書面を御覧ぜられい」
「…………」

「ここには、姫ぎみお一人ではおざるまい。侍く女房も、そばにおろうに。……なぜ明りをお点しなさらぬか。お父君も、案じておわす。一刻もはやく、事の始末をおこたえしてあげたいとも思う」

「あ、あなたは……？」

姫か、侍女か、糸のような声だが、やっとそう答えて来た。

「いや、お明りを、ともせば分かる。御書面を御覧あれば、なお分かり申す」

しきりに、燧石を打つ音が聞こえ、細かい火花が、やがて灯皿に小さい灯の虹を咲かせた。

見れば、塔の中は、絵屏風にかこまれ、几帳から調度類まで、貴女の室そのままだった。五衣の袖を打ち被いて、泣き伏している君こそ、冬姫にちがいあるまい。義仲は、眼もくらむここちで、その人の黛を、想像しぬいた。

そばには、二人の小女房が、ともに、袂で顔をおおって、泣いている。

このどっちか一人が、かつて、関白家の客となって行ったとき、姫の替玉となって、琴を弾いた女であろう。こう並べて見れば、髪衣裳のみではなく、品位といい、姿といい、姫とは、較ぶべくもない。

外の親忠や、郎党たちが、義仲をさがしていたのは、かれが、こうしていた間だった。

しかし、そこに灯影がさすと、かれらもすぐ気づいた。それでも、なお何か、塔を繞

って、いい噪いでいたが、やがて馬を降りた親忠が、階を上ってゆき、扉を押しあけ、ぬっと、内をのぞきこんだ。
「おう、わが君には、ここにおいでなされましたか。親忠にござりまする。なぜ、それがしには、あのようにお秘しあって、ただお一人、危うい中へ」
いいかけるうちに、義仲が、
「そこ開けるな、ばか者、たれが呼んだか。ひっ込んでおれ、ひっ込んで」
と、どなりつけた。
――その大声に恐怖したのか、親忠が顔を出したので驚いたのか、義仲は、冬姫の横顔に白い戦慄をふと見た気がした。しかし、その美しさに射られたと思ったときは、姫はまた五衣の下に顔を埋めていた。
「いざ、義仲とともに」
義仲は、ふいに、飛びかかった。
そして、かの女の体を、横ざまに抱え上げると、ひいーっ、と姫の唇から悲鳴が走った。かれはかの女が、自分を義仲と知ったためだろうかと、かなしく思った。
「親忠、馬をひけっ。馬だ、馬だ」
肩さきで、扉を押し開き、外へおどり出たものの、かれは横わきに抱えたものを、ほとんど、持て余しそうにしていた。
冬姫は、いくどとなく、死ぬばかりな悲鳴をあげ、その冷ややかな黒髪で、かれの顔

をも腕をも乱れ打った。
親忠は、あわてて、義仲に手を貸した。そして、
「おまかせなされませ。それがしが、馬上に引っ抱えて参りますれば」
抱き取ろうとすると、
「いらざることを」
義仲は、舌打ちした。まるで蹴放さんばかりである。かれの手を振りほどくやいな、冬姫を抱えたまま、馬の鞍(くら)へ、よじ上った。
見ているほかはない。
親忠も、郎党たちも、あっ気にとられた顔を並べてしまった。義仲の眼には、それもない。かれは、姫のからだをいたわりながら、鞍の前輪とひざのあいだに抱いて、
「姫よ、何も恐いことはないぞ。わずかな間だ、こらえておれよ」
と、浄光妙院の横坂を馳け降ろし、やがて、洛中の方へ、飛ぶ星のごとく急いでいた。まるで市原野(いちはらの)の土蜘蛛(つちぐも)かなんぞのような仕業であった。
梅小路近くに、閑雅な小館(こやかた)が、焼け残っている。元は八条女院の御別邸であったとか。
かねて義仲は、ここもおりおり、使っていた。
葵(あおい)が病を療治しているには、静かでよかろうと、思ったからである。――が、葵は拒

んで、どうしても、義仲のそばを離れようとはしない。そのため、空き館のかたちだった。

義仲は、冬姫の身を、ここへおいた。というよりも、閉じこめた。そしてかの女の泣きたいかぎり泣くにまかせた。

「この一札をよく見たがよい。基房公のこのお筆を。——姫の身は義仲に賜わるとの婿誓文だ。義仲は、乱暴もせぬ、欺きもせぬ。ただ、初めからの約束を、約束のとおり履んだまでのこと」

しかし、冬姫は、信じない容子であった。

忌わしい物のように、よく読みもせず、義仲が置いたまま、いつも、小机の上にあった。

義仲はまた、夜も日も、ここにいるわけにはゆかない。

寿永二年十二月の余す日も、あと、半月とはなくなっている。押しつまる年の瀬とひとしく、四囲の情勢は険しさを加え、木曾の地位はますます危うい。

かれが、梅小路から五条へと帰るたび、かれの眼にすら、味方の暗さと、日ましにつのる浮き腰が分かるほどだった。

それを見ては、義仲も、

「かくては、ついに」

自滅の淵は寸前にあると、自覚せずにはいられなかった。

今となっては、後白河法皇を擁して北陸へ退く策も、やや遅すぎる。

西は平家。南は、行家という離反の敵。

そして東方は、すべてといえるほど、範頼、義経以下の鎌倉勢が上洛して来る跫音ではないか。

すでに、美濃、伊勢方面の味方との連絡さえ、どうなったのか、絶えている始末である。情報は、日ましにあいまいになってゆき、聞こえるものは、町の流説や、旅人のうわさでしかない。

無念だと思う。悶々とかれは爪を噛む。

このままの自滅は、残念だ。なんとか打開の道はないものか。天来の妙計はないか。せめて、最悪のばあい、一方の血路は開いておきたいが……と思う。

「そうだ、そもそもは、叔父行家の二心から破れ始めたこと。あの佞物を葬り去り、かたがた、和泉、河内路を、切りひらいておこう」

樋口兼光に、残り少ない兵千余騎を与えて、

「石川城の新宮行家を踏みつぶせ。あの行家の首を見ずには」

と、急に、河内へ急がせた。

それが十二月も、もう、二十日を過ぎたころだった。

兼光は、反対だった。行家ごときは、正面の敵ではない。このさい、私憤に、兵を分かつなど、愚策であろう。目前の強敵は、鎌倉勢であり、それへの手当てさえ、不足な

おりにと、諫めたのである。けれど、義仲はその言を用いなかった。
「亡ぶというのは、こうしたものか。事すべて亡兆でないものはない。御自身、滅亡へと、ひた急ぎに急いでおられる」
兼光は、長嘆して、巴にいった。
何かと後々のことなどを妹の巴にいいのこして、かれは、師走の都を去ったのである。士気旗色も冴えない兵馬は、ゆくての河内平野にさえ、兵糧のあてもあるかどうか。
巴は、心もとなげに、霰降る日の、兄の出軍を見送った。涙は出なかった。まもなく、兄の姿はそのまま、自分の姿と思われていたからである。
そういう日にさえ、義仲は、あとを今井兼平や根井小弥太にまかせ、すぐ梅小路の小館へ舞い戻った。すきさえあれば、ここの門に、かれの駒はつながれている。そして、昼も燈し灯の要るような一間で、時をきらわぬ酒であった。
その杯も常にひとりぼっちなのである。酔えば手枕になるが、よく眠りえたためしはない。うつつと夢のさかいにある睫毛だった。そして、冬姫の姿を見入る眼でもあった。昼の灯と、冬姫の姿とは、いつも一つ所におかれ、何かの宿命のようだった。しかし義仲は、どんなに酔っても、またその睫毛をひとり泣き濡らしているときさえ、あの土蜘蛛のような乱暴をやった夜のほかは、まだこの花に一指も触れてはいなかった。

平家椀と源氏椀

ゆるされた特定の女房たちのほか、法皇のおそばには今、侍者も蔵人もおかれていない。また、その御幽閉中の室へは、何人といえ、木曾に無断で近づき参らすこともできなかった。

鹿垣こそ結いまわしてないが、そこの寝殿へ通じる門と廊の口々にはすべて番兵が立っていた。たとえば、大膳職の寮から、女房たちが、朝夕の供御の膳を目八分に捧げて来るにしても、それすら途中でうさん臭そうにジロジロ見る番卒らの眼の関を通って来なければならない始末であった。

そんな有様なので、伺候を思い立って来るたまたまな牛車も、みな、表の第一門で追い払われた。

日ごろ、法皇から特に眼をかけられたり、御寵用をうけていた者ほど、受けが悪く、

「拝謁は相ならぬ。いや、庁へと申しても、院参の儀は、一切、停止されておる。帰れ、帰れ」

と、剣もほろろに、あしらわれた。

ところが、ここに例外もある。

故入道信西の子の参議修範であった。かれも木曾武者の脅しにあい、ほうほうのてい

で、門前を去ったが、近くの民家にはいって、にわかに、髪を剃り落し、姿も墨染めの法衣となって、すぐまた、表御門へ出直して行ったものである。そして泣く泣く、
「じつは、世を捨てて山へはいる身、ひと目、おん名残を告げばやと、参ったるにて候う。何とぞ寸時の拝謁をお計らい給われかし」
と、拝ばぬばかり哀訴した。
たった今、衣冠姿で、牛車を降りた男が、たちまち、頭を丸めて来たので、番の将士は、大いに笑ったが、
「これは、とんだ愛嬌者だ。世を捨てる人間とあらば、さしつかえあるまい。入れてやれ、入れてやれ」
と、この修範だけは、偶然、拝謁をゆるされた。
かれの姿には、後白河も、びっくり遊ばした。お側には、法皇の寵姫、冷泉ノ局ひとりが、かしずいていた。
この冷泉ノ局は、故入道清盛が厳島ノ内侍に生ませた子なのである。——局の父清盛と、修範の父信西とは、無二の友であったから、とかく、話も涙になりがちだった。そして後白河とも、ひそひそ、おものがたりの末、半刻ほどで、修範は退出した。
しかし修範は、ひそかに舌を巻いて帰った。「ああした御境遇におわしながら、どうして法皇には世事雑事、天下の隈々までを、あのようによく御存知なのか？」と、意外な思いに打たれたのである。

じつのところ、かれの拝謁は、以後の世間の有様や、聞き及ぶ四方の情勢を、お耳に入れたいがためであった。しかるに、それらの動静は、法皇の方が、かれ以上によく御知悉なのだった。

たとえば――

この年暮に迫って、木曾方の樋口兼光が、千余騎をひっさげて、河内石川城へ、出撃して行ったとか。

また今、河内にある十郎行家は、密々、鎌倉方へ、気脈を通じているらしいとか。

さらに、義仲は、屋島の平家へ、かさねて和平を申し送り、平家方も鎌倉勢の上洛の急なるを見て、こんどは応じるかもしれない形勢であるとか。

また、平家そのものは、主力を播磨、摂津にまで進めて来、旧都福原を足がかりに、いつでも、洛中奪回の挙に出られる態勢にある――ということなど、すべて御承知なのだった。

そして。

いや、より以上に、鎌倉方の情勢には、もっとお詳しいようである。

京を脱出した、かの池頼盛一家が、やがて、東海道の国府津に着き、そこで頼朝の迎えをうけたとか。それは何月の何日であり、なお鎌倉へはいってからかれのうけた歓待ぶりだの、頼朝が池ノ禅尼の旧恩を、そのことによって、いかに世間に大きく映そうとしているかという観測などをも、いながらにして、冷静に御批判しておられるらしい。

――ことに昨今、頼朝の将士が、実数、どれくらいで、鎌倉から西上しつつあるか。その代官はたれ、侍大将はたれたれ、都へ迫る日は、およそいつごろか。そして、攻め口は宇治か瀬田かという機密まで、御考慮であり、かつ、刻々の日と、それへの対処も抜けめなく、御計算かのようにさえ、拝されたほどである。――もうそれ以上、修範ごときが、耳新しい事実をお聞きに入れる余地はない。

「やはり、尋常人ではおわさぬ。あのぶんでは、かかる破局も、見事、御収拾あそばすにちがいない」

もとより、本心、出家のつもりではないので、修範はそのまま、わが家の奥に引き籠った。そして深淵の龍が、すぐ時をえて、以前のように院の主権を奪り返すであろうことをかたく信じ、剃ったばかりの髪をまた蓄え始めていた。

それにしても、世間は、おかしなものである。

人は、かれが髪を剃ってまで、拝謁をとげた一事を伝えて、「近ごろの美談」だといった。

それすらの行為が、人の美徳と映るほど、世間そのものが、濁りきっていたのかも知れず、でなければ、無数の朝臣も、木曾を恐れて、あえて御幽居には近づく者も少なかったせいでもあろうか。

その後、公卿任官も行われ、庁官も首だけはそろえており、従来からの女房もあまた

住んでいたので、いまの院御所とて、人少ないわけではなかった。
ただ、法皇の御座所まで行ける者は、前関白基房に、限られていたのである。しかし、その基房も、持病とかで、ここ十日ほども姿を見せなかったが、年内もあと数日と押しつまってから、驚くばかり窶れた姿を、御簾の下にひれ伏した。
「寒気のせいか、また宿痾を再発しまして」
まず、出仕の怠りをお詫びすると、後白河は、傷ましげな口調で、すぐ仰っしゃった。
「いなとよ、禅閤。おもとのわずらいは、持病ではあるまい。桂川の亭にかくしおいた冬姫を、木曾に攫われたがための、悲嘆であろうが」
「やっ。どうして、そのような些事を」
「いや、些事とは申せまい。珠ともしていたであろう愛娘を、魔の手に奪われては、親心、髪も白うなる思いであろうに。……察していたぞよ」
「あ、ありがたい御諚をば」
基房は、何か、支えを失って意気地ない涙の中に、朽ち折れてしまった。
義仲の邪恋にほとほと困りぬいていた事情は、かねて、お耳に入れたこともある。しかしその後に起こった騒動を、どうしてもう御承知なのか。自分以外、たれがここの御座所へ伺った者があったのか。涙の中にも、不審にたえない。
だが、法皇のお唇から、次のおことばが発せられたとき、基房は、涙も急に止まるほ

ど、胸を衝かれた。

「のう、松殿」と、後白河は、摂家への敬称を特にこう用いられて――「むごい言葉には似るが、どう嘆いたとて、姫の身は、もう義仲の手にあるもの。というて、よも、姫が生命までは奪りもすまい。おもうに、これこそ、宿命というものであろ。あるいは朝廷を御守護ある神のお旨かとも考えられる。……姫は、院の存亡を救わんがため、すすんで、みずから魔の贄になったものと、まろは思いたい。親のおもとに無理ではあろうが、おもとも、そう思うて、あきらめたがよい」

「な、なんの……。もとより、事はわが家の禍いとして生じたもの。これも何かの罪業ぞとあきらめておりまする。けれど、しょせん、のがれえぬ禍いなれば、せめて、君のおんためにもなれかしと、かねて覚悟もすえ、義仲の請うがまま、婿誓文さえ、かれの手に渡してあるほどでございますゆえ」

「ほ。それは初耳よ」

と、何かお気に入ったときによくするように、その分厚いおひざをやや乗り出されて、

「では、松殿には、涙をのんで、義仲を婿にせんと約しておられたのか。それまでとは知らなんだ。女人の黒髪は大象も繋ぐとか申す。義仲が恋々として今日まで都を離れ得なんだは一にそのためとみゆる。さもなくば疾うにまろが身を拉して北陸へ立ち退いていたはずよ。まろが密かに恐れとするは今もなおそれ一つにある。……ようぞ断ち難き

情を思い断って、朝のため姫をそれが犠牲として給うたの。この通りぞ、松殿」
と、こころもち頭をお下げになり、いと御満足な態だった。
基房はむしろ畏れ多さにうろたえた。義仲へ誓文を与えたのは、もともと、自分に弱味があるからだった。仕返しを恐れてした窮地の策にほかならない。院のおんためも思わないではなかったが、自己一身の方が主であったのはいうまでもない。
けれど今、優渥な御諚を賜わると、かれも同様な心理になった。自分の災難は、ひとえに院のおんためによるものであり、一個の恩愛や絆とちがう忠誠かのごとき錯覚を抱くのであった。はらはらと涙へさらに涙が加わるのだった。
「げにも、もったいない仰せを承りまする。われら摂籙の臣は、もとより皇室の藩屛たる家柄の身、朝の存亡にかかわるこのような日においては、なんの家のむすめ一人や二人……。それが朝恩にむくい奉るものなれば、冬子とて、君をも親をもお恨み申すものではありません。むしろ生贄たる身をよろこんでおりましょう」
「おう、そこでよ松殿。親のおもとからその儀を冬姫の胸へ、篤といいふくめてほしいがのう」
「……が、冬子のおる所も知れず、便りの術もございませぬ」
「いや、八条女院の古家に匿まわれておる。細々と文だに書けば、姫の手へは、かならず届く術もある。やよ、冷泉」

と、かたわらの冷泉ノ局に向かわせられ、料紙と硯を基房に与えよと、さっそく、おいいつけになる。

基房は、わきの間へ立って、局が供えた机に向かった。小色紙ほどな大きさの薄い料紙が与えられた。自然、極小な細字を用いなければ書ききれない。

基房が、親心と、そしてまた、後白河の御希望とをそれへ、書きこむには、かなりな時を要した。

冬子よ――と、まず呼びかけ。

冬子よ、おん身は、尊い生贄に選ばれた運命の子なるぞや。朝廷はいま、累卵の危うきにある。院の危急を救うもの、おん身をおいて、ほかにはない。

もし、木曾が北陸へ退陣すれば、院の御座も僻地を漂泊い給うことになろう。あとの都はどうなるか。もちろん、万乗の君以下百官とこの都とは、まったく、隔絶されてしまう。

いまこそ、朝家、法皇御一生中の、大難の時。

それを救う道は、おん身の手に、義仲の手足を繋ぎとめておくことだ。最後の際にいたるまで、義仲をこの都から出さないように努めてくれることでしかない。

あわれ、目的のためには、姫よ、親なる者の口からは口の裂くる思いなれど、おん身の黒髪も雪の腕も魔王が求むるままに餌としてそれを投げ与えてよ。

悲しむなかれ、死ぬなかれ。姫よ、目をふさいで、贄の尊いことを知って給べ。その

行為は、いかなる功臣の忠誠にも劣るものではない。神もみそなわす。自身、誇りを持って給べ。

それも、長い月日ではない。頼朝殿の代官と軍勢は、都へさして急いでいる。そが頼もしき武者たちを都に見る日、都の妖雲も打ち払われて、おん身も檻から解かれるであろう。父は、いかなる苦患にも耐えてその日を待とう。

冬子よ、かさねていう、ただ生きてこそぞ。

基房は写経するあの慎みと血を吐く思いで、一字一字、虫のような細字を綴っていた。

書き上がると、一応、お目にかけた。

法皇は、黙読して、御満足そうに、うなずかれ、冷泉ノ局に何か小声でおいいつけになる。

局は、基房に代って、その薄葉を、幾重にも細かにたたみ、小さいおん守り袋に入れて、御座の間の次へはいった。そして几帳の蔭の菅畳をすこしずらし、床の上を、檜扇でコツコツとたたいた。

すると、床下でも、コトコト応える音がした。それを耳にたしかめてから、冷泉ノ局は、母の厳島ノ内侍によく似ていたといわれるその明眸を一瞬キッとあたりへ配って、桝形に切り抜いてある方一尺ほどな床板の一部をそっと取り除いた。

「……？」

基房は脇座の方からそれを見ていたが、見ていてさえ、どきどきし出して、胸も肩も喘ぎを覚え、「もし、木曾の番卒に見られたら」と、息もつまりそうになった。

法皇は、見もなさらない。

あらぬ方へ面をそむけ、おん瞼は半眼に、まだ何か御思念の容子である。

——そのまに、冷泉ノ局は、常時、床下に潜んでいるらしい人間に向かって、何か小声で命じていた。うなずいたり、「否」という眼をしたり、そしてさいごのうなずきとともに、手にしていた守り袋を、床下から伸ばした人間の手へさずけた。

「あ、あっ……」

基房は、思わず、小さい叫び声を出してしまった。

細殿の壁の蔭からこなたへ向かって、人の跫音が近づいて来たからである。

その基房の声には、局も、ぎくとしたことであろう。ガタッと、音の立つほどあわてて床板の穴と菅畳とを、元のように直したことだし、後白河もまた、巨大なおん眼をくわっと、細殿の方へ射向けられた。

しかし、そこのほの暗い壁の蔭から、御座所のお次へはいって来たのは、はやその日もたそがれていたので、大膳職から供御のお夜食の膳を捧げて来た女房たちだったのである。

こんな時の逆心理で法皇はおかしさに衝きあげられたものとみえ、冷泉ノ局とおん眼

を見合わせて、ニュウッと、満面をおくずしになった。

申しわけなさ、まの悪さに、基房は恐懼しながら、お二人だけの夜食のお愉しみを妨げまいと、匆々におん暇を乞うて、退出しかけると、

「いやいや、松殿には、もはや今宵あたりから、館へ帰らぬ方がよい。きょうは師走（十二月）の二十六日よの」

と、指折るように、じっと考え込まれたが、ひとりおうなずきあって、

「やはりこれからは、院中に寝泊りもし、めったに、ちまたへは出ぬがよかろう。——館へは使いを派して、その由を、留守の家人に申しふくめてやるがよい」

との御注意だった。

いつなん時、何事が起こるかも知れぬぞという要心を御自身もかためていらっしゃるにちがいない。基房も、その不気味さは万々であった。「仰せに従いましょう」と申しあげて、なおもそのまま侍座していた。

幽居付きの小女房らが、三ヵ所に三つの切燈台を置いて退がってゆく。このころの洛中には、夜の灯とする菜種油や粗悪な魚油さえなくなって、たいがいな家では、脂の多い松の割木を少しずつ燃やして過ごしたり、武者の屯や屋敷ではほとんど焚火ばかりである。だから小指の先ほどな灯皿の穂を見るのも妙にめずらしくて眼をぬぐわれるほど明るく思えた。

物の豊かにあったころの都を思い返してみて、今の貧しさがふしぎにさえ思われた。

あればあるで奢りのとどまるところもない人間の有頂天を醒ますために、神が凶作とか戦乱とかいう天譴をときどき地上に降すのではあるまいか。そんなことを考えながら基房が燈台の小さい明りを見入っているまに、法皇と冷泉のお二方は仲よく膳部に向かわせられた。

基房は脇座からその御様子を見るともなくながめていたが、ふとまた、その眼をまろくしてしまった。

というのは、黒塗の飯盒子（飯椀）のほか、同様な菜椀が幾つかお添えしてあったが、おん箸を取らるる前に、その一箇の蓋をのぞき、器の底にはいっていた料理でもないものを御指の先でつまみ取られたからである。

このときは最前の床穴を知った一瞬みたいな驚きにはもう打たれなかったが、それにしても基房は、かく御幽閉の身におわしながら、後白河がじつによく万事にお詳しいわけを、眼に見て二度の驚きを抱いたのだった。そして底知れぬ御才気かな、と心の底から驚歎した。

たれが、供御の椀の中に、薄葉の密書が秘されていると気がつこう。番の木曾兵も、まさか、そこまでは、検めてみるはずはない。

法皇は、御膳部もお忘れ顔に、まずそれをお抜きになり、読みおわるとすぐ燭に燃やしておしまいになった。それから、おん箸を取られ、ゆるゆる物をお嚙みになる。その飯も、粟やら稗やら、とにかく、玄米でもない物だった。

「…………」

その間、基房は、脇座にひとりうな垂れて、あれこれ思い合わせていた。

朝暮のお食事は大膳大夫成忠が勤めている。成忠は、誠実で心ききたる男であると、院の御信用も浅くない。思うに、法皇はその成忠を、眼となし耳となし給うて、大膳職とこことの唯一の通いを巧みに利用遊ばしているのではあるまいか。

——とすれば、朝の御膳部には、鎌倉方の飛報が椀に蓋されて来、晩の椀には平家方の諜報が運ばれてくるわけである。その手法でまた、大膳部へ戻ってゆく食器の空には、時により、法皇からの御密詔も、成忠の手へ下げ渡されているのであろう。——そしてなお急を要するばあいには、冷泉ノ局が、檜扇の端で、あの几帳の蔭の床板を、ひそかにたたくにちがいない。

なんと、自分らの迂なることよ。

基房は、何もかも解けた気はしたが、同時に、そこにあるお人が超人的なもののように思われて、急に意味もない怖ろしさにとらわれた。で、思わず偸み見るような眼をしたのである。すると、御膳部の秘め事は、あれだけのことではなく、成忠の心づかいで、御酒などもかくされて来るものとみえた。後白河はよいお色になって、お顔から頭までテラテラしておいでになる。そして今おすみになったばかりの膳部を冷泉ノ局が下げかけるのを、おん手をもって追うような恰好を遊ばしながら、音声も一ばいと御愉快そうに、

「やよ、局、局。まろが食べ残したその塩魚の半分は、あすの夜の肴に取っておけよ。退げずに仕舞うておいてくれい」

そう仰っしゃったが、ふと、基房の姿にお気づきになると、

「おう、まだいたのか」といった風に、突然、あははは、と大きく胸をお反らしになった。

まつ毛の雪

この年暮へ来て雪が多い。

二十六日の夜も、いつのまにか、外は音もない雪となって――。

その雪風も忍び入らぬように、屏風、壁代、火桶など、かの女の几帳の内はめんみつに世の物音と寒さから守られていた。

「おや。……お帰りかしら」

ときどき、あどけないほど明るい眸を小机から上げて、耳をすますような顔をする姫であった。

その藤原冬子は、もうあとわずかな日で、十七になるが、厳密にはまだ十六の蕾である。どこか、あどけないのも、むりはない。

それにしても、あの恐ろしい夜から十数日にはなるが、泣き腫らした瞼もきれいに癒

え、今はここに安心しきっている様子に見える。悄々と塔の中に隠れ住んでいたひところよりも、健康さと容姿の美さえ加えている。

姿が心の現われなら、あれ以後、姫の心に、どういう変化が起こったのか。

——今宵、義仲は側に見えない。

義仲は、平家との和議の使節に落ち合うため、摂津までにわかに行かねばならぬとて、この梅小路を立って行ったが、

「——三日後には、きっと帰る」といいのこしていた。そして、三日めの今夜もすでに更けようとしているが、まだその人は帰って来ない。ときどき、耳を疑わせられたのは、雪の音か風かであった。

あんなにも——まるで鬼か野獣のように恐かった義仲が、どうして、こう心待ちに待たれるのか。

なぜ、あの人が、ここにいなければ、さびしいのか。

ふしぎなほど、姫の心は、変っている。けれど、姫自身は、そう深く自分の心を観もしなかったし、まして他人の心を智恵で観るほどな力もなかった。

あるがままを観、あるがままを信じ、いつかしら義仲を「恐い人ではない」と思って来たまでのことである。

むしろ、ふしぎなのは、父の基房や家臣たちが、どうしてあんな良い人を、鬼か魔のように悪しざまにいって、恐怖するのだろうか。姫には、その方がふしぎでならない。

つい、おとといの朝も――

どこからか忍び込んで来た院方の武士らしい男が、突如、蔀のすき間から一個の守り袋をかの女の室へ投げこみ、

「ゆめ、お疑い遊ばすな。お父君基房公の密使です」と、早口にいいすてて、また飛鳥のごとく外へ躍り消えてしまったが、そのことでも、姫にとっては、理解しようにも理解できないことがたくさんあった。

後で、守り袋を開いてみると、父の手蹟にまぎれない薄葉の文があらわれ、心血をそそいだ筆のあとも細々と読まれたが、父のいう「院のおんため」とは、どうすることか。「尊い生贄になって給べ」とはなんの意味か。また、木曾も源氏なら鎌倉方も源氏なのに、どうして、義仲だけを陥し穽に入れるようなお計り事を企むのか。――それらの機微や矛盾めいた軍事の問題などは、到底、姫には分かりもしなかった。

そして、父の文中にも、依然、義仲を鬼畜と憎悪してあるが、その文字に眼が触れると、思わず涙になって――「ちがう、ちがう、そんなお人ではありません、お父君も、院の法皇も、何か、思い違いしていらっしゃる」と、かの女の乙女心は、小さい反抗に似た感傷を無意識に胸で叫んでいる。

かの女も、ここへ運ばれて来た数日のうちは、一つ檻の中に猛獣と住むような恐怖だったし、夜も衾を被かず、泣き竦んだまま明かしたほどであった。けれど、日をふるに

従い、それは無意味な疑いと自然に分かって来たのである。なるほど、義仲は、時には凄じい言語を吐き大酒を飲み、酔えば行儀も悪く、関白家の姫ぎみを前に、寝そべったりもするが、かの女に、危害の爪を加えたことは一ぺんもない。

いや、たった一度、姫のひざを枕に、寝ころぼうとしたことはある。けれど、姫が身をすくめて悲しむと、すぐやめて、ただかの女の五衣の袂をつかんで自分の酔顔を包んでしまい、それ以上、かの女のいやがる悪戯には出なかった。

夜半も過ぎるし、いつまで、そうしたままなので、もう義仲は寝たのであろうと思い、姫が、そっと自分の袂を取り除けようとすると、義仲は「あな、酷いことを」と、袂の香を離しがてにつかまえて、袂の下で泣いていたらしい顔をあわててそむけた。

義仲が酒癖のようにひとり泣くのを、かの女はこの時ばかりでなく幾度も見た。多くは大酔の後である。そんなとき、かの女もひとりでに涙がこぼれ、義仲とはまったくべつな意味で一しょに泣いた。「家へ帰りたいのか」と義仲はいう。「いいえ、帰りたいのではありません」と、かの女は答えた。それは義仲を恐れて嘘をいったのではない、ほんとの気もちが出たのである。

摂家の中でも、かの女の容姿は定評が高い。ために一そう珠簾深窓の秘花として大事がられてきた。けれど家庭は肉親たちの愛の培い合いでなく、かの女の将来には、やがて帝妃たるべき出世が約されているからだった。じつのところ、冬姫は、父の基房と顔を見あうのさえ、年に幾たびかと、数えられるほどな記憶しかもっていない。

兄や妹とは、母もちがうし、めったに一堂に会うというような団欒もなかった。そうした家よりも、また、桂川のあの古別荘や塔の中にいるよりも、こうして、梅小路の町中に居、八条女院が残してゆかれたおびただしい書物やら絵巻などを小机に繰りひろげ、また、義仲の命によって、なんでも好きな物、欲しい物の得られぬはない、ここの境遇の方が、乙女心というものには、はるかに、よかったにちがいない。

義仲もまた、そうだった。

かれには、家らしい家がない、戦陣が家庭である。

子は敵国に奪われ、妻にいたるまで、血の渇くひまもない甲冑を着、葵は病んで陣営のすみに寝たおれている。

しかも、味方といえ、かれは、人間を信じられなくなっている。叔父行家はもちろん、院はもちろん、平家は、和議の会見にも、かけ引きのみしているし、鎌倉は、同族だが、倶に天をいただかざるの敵だ、いや敵以上のものだ。

「……梅小路の家だけが、憩いの灯よ。この世において信じられるただ一人の者、真に都人らしい都人、それはあの姫だけだ」

その夜。――義仲は摂津の稲川方面から、淀の西岸を、吹雪を衝いて、従者数十騎とともに、都への帰路を急いでいた。

平家との、さいごの和議も、平家の強腰のため、ついに破れ、吹雪の悲風は、人馬を打つばかりでなく、かれの心中にも吹き荒んでいた。

しかし、かれはなお、一縷の愉しみを失っていない。夜半過ぎには、洛内へ帰れよう、帰れば、冬姫の姿と灯とがそこにはあると、睫毛の雪にも幻の恋を描いていたからだった。

雪巴

木曾の館ではその夜、みな寝もやらず、義仲の帰りを待っていた。
巴を始めおもなる部将は、それの吉左右にひそかな期待をかけ、さいごの運命の分かれもきまるものとして「平家との和議は成ったか、やぶれたか」――また「摂津路のお帰りも、この雪では、さだめし途中御難渋であろうに」と、思いを館中に凍らせていた。
夜半をすぎて、どやどやと、一行の人馬は、まっ白になって、帰って来た。
出迎える巴や諸臣の姿へも、義仲は口かず少なく、やがて、暖をとり粥などをすすってから、「平家とは、手切れになった、和議もこれまで」と、結果だけを、あっさり告げた。
あきらかに、失望の色が、一同の容子にながれた。と見て、今井兼平は「いや、それはむしろ望むところ」と、逆をいった。「ややもすると、平家が和平に応じそうな色を示すのは、われらの士気を紊さんための謀にすぎない」という見方や、他の理由もかぞ

えて、士気を損じまいと努めた。

いつもなら、兼平以上に、義仲こそ、りんりたる敵愾心を吐くところである。だが、一語も発せず、兼平や親忠らの悲壮な意気ごみを、ただ、黙々と受けているだけだった。

その間に、瓶子の酒を、気みじかに傾けて、やがてすぐ奥へ立ちかけたが、

「留守中、院の御所には、なんのお変りもないか。まわりの様子にも、異状はないか」

それだけは、いかなる場合も忘れえない気がかりのように、今も唐突に訊ね出した。

「異状、ございませぬ」

根井小弥太が、はっきりと答え、そして後から、いい足した。

「ただきのう、基房公の仰せ出でには、ここ、院の法皇には、痢病におかかりあって、めっきり御衰弱のお模様とか」

「御不予とのお触れ出しか」

「大膳寮の者からも、おなじように伺いました。供御の物も、とみに、おすすみ遊ばさぬそうで」

「それは困ったことだ。医師の参入、おん手当などの儀には、守護の番士どもも、あまりやかましい詮議沙汰は、さし控えさすがよいぞ。義仲こそは、院のおん病気をすら無慈悲にしたれ、といわるるは心外。何かと手をお尽し申せ」

いいわたして、義仲は、奥へはいった。

じつは、それもまた院の苦肉な御計略であったものを、疑いもしない義仲だった。危機刻々の様相と見あわせて、いつ義仲が御動座を迫って来るやもしれぬという御懸念を、院には、たえず抱いておいでになる。

万一のばあい、いや未然にも、義仲の強迫を拒絶するための口実に構えられた御仮病ではあったのだ。——とも覚らず、義仲は、反対に安心したらしい。法皇が御不予とあれば、平家都落ちの夜のような雲隠れも遊ばしえないと、気をゆるめたものなのである。

巴に手伝わせて、雪に濡れた狩衣や袴など着がえたのはまたすぐ他出のつもりであろう。義仲は広縁へ出て、中の坪へ馬を呼び入れていた。

巴は、すでに、あるあきらめをもっている。

重大な結果を、一族の間に告げているときから、良人の心がもうあらぬ方へ行っていることを、読みとっていた。「それくらいな良人の心が、妻の眼に分からないでどうしよう。嫉妬ではない」と、さっきからひとり自分へつぶやいていたのである。

「もう、夜半も過ぎておりましょうに、お疲れもいとわず、すぐ梅小路へいらっしゃいますか」

いっても、恨みがましくは、いうまいと思う。

嫉妬はせぬと誓っている。しかしその気もちが、すでに嫉妬かもわからない。巴は、

自分のことばが恐（こわ）いほど、自分を慎んで、そっといった。
しかし、それすらがもう、義仲の気に何かの棘（とげ）をつき刺したらしい。眉を、ひたとかの女へ向けて、
「そうだ、梅小路へ行って眠る。——ここでは、のべつ、武者どものわめきや、馬のいななき」
「事あればすぐ武者を走らせまする。どうぞ、お心おきなく」
「そなたが憎いの、飽いたのという沙汰ではないが」
「生（なま）じなおいいわけなど、およしくださいませ。かえって、お見せしとうない涙がこぼれて参りますから」
「腹が立つのか」
「い、いいいえ」
「ふるさとへ、帰りたくでもなったのか」
「今さら……なんでそのような」
「では、なんの涙」
「子の義高さえ、そばにいてくれたら、どれほど、うれしかろうにと思うだけでございまする」
「また、子の愚痴か」
「でも……女の命は、何かしら、女の命ひとりでは、散り迷う悩みを持ちまする」

「散り迷うとは」
「余りに空しく淋しくて、死ぬにも死ねそうもない気がするのです。花の雌蕊も、何かに結びつく風を待つではございませぬか。巴には、結ぶものがありません。未来の何を見て死んだらよいかと」
「未来。未来などがあるものか。人間、白骨となるまでの間のことだ」
「ではなぜ、わらわたち二人は、子の義高を、産んだのでしょう。未来へ因果を残すのでしょう」
「生まれた者は、生まれた者だ。それはそれなりに生きて行くわ。おれを見ろ、おれの生い立ちを、——義仲の親たちは、生み捨てだった」
「けれど、親御様のおん徳もあったればこそ、孤児のあなたをも人が拾うて、わらわの父中三殿に託し、御大切に養育されて来たのではございませぬか。やはり、後世がないとは申せませぬ。わが身は果てても、何かの因果は」
「うるさい。尼御前のような口真似はよせ」
「……お気にさわりましたら、おゆるしくださいませ。つい申しました。もう申しませぬ」
「いうな。おたがい、死なば白骨。その先のことまでを考えて、武門の合戦がなるものか。おそかれ早かれ、死のうは一定、生きているまが人間だ。愉しみもその間、何をしようもその間」

いいながら義仲は、郎党が引きよせた馬の鞍へ、広縁から飛び乗った。

軒ばの梅が、馬のしりがいへ、雪を振りこぼし、紅い蕾をこずえに見せた。かれは、その一枝を折って、手綱の手に持ち添えると、もう心もどこかへ、中門を出て行くのだった。

巴は、うつろに見送りながら「どういうお心やら？」と疑った。自分をも疑った。何もかも妻には分かっていると思っていた良人も、それは良人の影法師に過ぎなかったのかと、たまらない空しさと嗚咽にせぐり上げられてくる。

急にかの女は身をひるがえして、わが居間へ走りもどり、きのう鎌倉から来たわが子義高の文をまた取り出して、ひしと胸に抱きしめた。——それは先に、かの女のはからいで、一命を救うて放してやった和田義盛の家人西浦七郎が、質子の義高に便りを書かせ、ひそかに、母なる巴の許へ送ってくれた文なのである。

稚き火華

鶏鳴暁を告ぐ、というが、いまの都には、鶏も啼かなかった。みな食べ尽してしまったのだ。

梅小路の小館は五条からそう遠くはない。けれど、義仲がそこの奥へはいったころは、もう、ほのかな雪の晨だった。——といっても、家の内は、まだ夜のままに閉てこ

めており、宿直の老女だけが火桶を抱えて居眠っていた。
「姫は？」
と、訊ねると、老女はかれの姿にびっくりした眼で、
「姫ぎみには、夜もすがら、お寝りも遊ばさず、雪の音にも、お耳をすまして、お帰りもやと、待ちわびらるる御様子でございましたが」と、すぐ立ちかけそうにしたので、
「いや、起こすには及ばぬ」
と老女を退け、かれは一人だけで、いつもの塗籠の間へそっとはいった。
老女がいったのも世辞ではない。姫はおそらく寝なかったのであろう。昼の袿衣のまま小机にもたれかかっている。読みかけていたらしい書物の上に、両の肱と、横顔をのせて、義仲がそばへ来て立ったのも知らず、うたた寝の睫毛をとじているのであった。
「……」
見惚れるしかない美しさである。猥らを思うには、余りに無邪気すぎている。
もし、ここへ来る人があれば、それは義仲以外な者でないことを、姫は充分に分かっていよう。
姫のしずかな睫毛には、みじん、警戒心の蔭はない。解放しきっている寝顔だ。それほど、義仲を頼りとしているのであろうか。義仲はこの無邪気な眠りを、心なく醒ます気にはなれない。
かれの見ぬ恋は、こうして、見ての後の方が、すばらしかった。

かれが、うつつに、夢に、想像していた以上に、冬姫は美しい。
いま思うと、あんな無謀な暴をふるってまで、姫を奪って来たのは、恋ではない、替玉の恨みから、替玉ならぬ関白家の息女を、意地でも、自分のものにしてみせるぞと、人知れず誓った意趣にほかならなかった。
だが、いまは違う。
もう意趣ばらしではない。恋だけである。
しかも、こんな恋を、かれは知らない。
ここで姫を見た夜の初めから、それまでの妄念もどこへやら、この姫ぎみの肌から欲情の甘美をむさぼり偸む気になれなかった。――あの夜のきびしい寒さのせいもあったろうが――またあのときの恐怖で姫のからだも生理的に知覚を失っていたのでもあろうが――ここへ来てシュクシュク泣き出した冬姫は、愛くるしい鼻のさきから、涙と水洟を一しょくたに流して、あげくには嬰児のように、シャクリ上げシャクリ上げして、いわゆる手放しで泣く有様だった。
あどけなさ、余りな稚さ。
つい、いわないでいられなかった。「決して、恐いことはせぬ」と。そしてまた「あんな塔の中よりも、ここの方が、どれほど安心な所かしれぬ。まもなく、都はふたたび、木曾と鎌倉との大合戦のちまたになるが、ここにいれば安心ぞ、義仲が身にかけても、きっと、守ってあげようぞ」と。

そのままを、姫は信じたようである。日をふるにつれ、義仲に懐(なつ)いた。義仲にはそれが無上にうれしかった。けれど苦しくもあったのだ。酒のあとでは泣きたくなり、わけもなく、姫も一しょに泣きすすった。だが、かれの苦しさは、姫には理解されてはいない。姫は涙とともによく水洟(みずばな)もこぼすのである。

今も――

小机の上の寝顔を、しげしげ見ると、かの女は、その手くびから書物の上に、他愛ない寝よだれを垂らしているのである。よだれは、大輪の花の押花でもおいたように、書物を滲(にじ)ませているではないか。

義仲は、微笑を誘われ、さっき、かの女に見せばやと軒ばから折って来た紅梅の小枝の、その一、二輪を指でちぎって、姫の鼻の先をそっとさわった。紅梅の香が、かの女の眠りをどう驚かすかと、ふと、悪戯心(いたずらごころ)を起こしたのである。

すると。――かの女の手が無意識に、それを撥(は)ね除(の)けた。梅は砕けて小机の下に落ちた。義仲は声を上げて笑いかけたが、寝顔の位置が変ったため、その下の書物にはさまっていた薄葉(うすよう)の紙片がふと眼にとまった。

「はて、なんの文？」

何か意味ありげな物に見える。義仲は、そうっと引いた。寝顔の重みで抜けもしない。指に力を入れて、無理に引っ張った。小さい音をさせて紙は裂け、半分はかれの手に、あとの一片は書物のあいだに残ってしまった。

義仲の留守中に、院の諜者が、姫の室へ投げこんで去ったあの密書である。――後白河のおさしずの下に父基房が姫へあててしたためた、あれだったのだ。

義仲は、読んだ。

燭を切り、息をころし、炬のような眼になって、何度も読み返した。

――が、それは半分でしかない。それにしても、法皇の詐謀の裏は読み取れる。

義仲の怒気をふるわせたのは、もちろん、法皇のお腹ぐろさもだが、院のため、姫に、魔の生贄になれ、といいふくめていることだった。

魔獣の欲情に、姫は忍んで肉体を与え、その黒髪の力でかれを都につなぎとめておけよ、鎌倉勢の上洛、義仲の滅亡、近きにあり、と何も知らぬ姫に、犠牲を強い、それを忠誠かのように励ましていることだった。

「さては、御不予の触れも、動座を惧れての、作り病よ」

義仲は、思い当り、

「この筆も、基房公とはみゆるが、策は、院御自体の計に違いない。いかなれば、かく義仲を憎まるるか。木曾を滅亡へ追いこみ、頼朝に媚態を送り給うのか。いや、それもよし、公明にそれとお示しあるなれば、何をかいおう。とかく義仲を赤子のごとく騙かしての詐術陰謀。……ううむ、無念な」

と、思わずうめいた。

そして、書物の間に裂け残ったあとの紙片へ眼をやると、その眼は、はからずも、冬姫のしずかな視線と、むすびついた。
　かの女は横顔を伏せたままではいたが、いつのまにか目を醒まし、じいっと、義仲を見まもっていたのである。
「…………」白いすじが、その頬に見え、白珠のような涙が、ぽとりとこぼれた。
　義仲は、突然、少年の歓喜にも似た烈しい甘い動悸を血のうちに感じた。
　このような清い驚きが、まだ、自分にもあったかとおもう。
　かの女の涙を、かれもじいんと熱い眼で飽くなく見つめた。二人は、あらゆる猜疑と、心のへだてを、涙で洗い合った。
　そして、それが浄霊の火華にまで達したとき、義仲は、人への恨みも一身の破局も忘れた。法皇と基房は、姫を囮として自分を死の柵に囚えようと企んでいるが、姫は泣いて、父のその罪を詫びているのだ。「……怒らないで。……怒らないで」と、いじらしい眸は、自分の顔いろへ、拝まんばかりな哀訴を見せているではないか。
　もし、ここに毒酒の杯があるなら、今の心のままを昇華して、一気にそれを仰飲るも悔いはないと、かれは思った。
　冬姫は濡れ紙のようになった顔を上げ——手は書物の間から密書の残りを抜いて、義仲の前へさし出していた。そして、その黒髪を帳の蔭へ投げ伏せると、声かぎり泣き沈んだ。

義仲は、あとの文字など見もしなかった。冬姫の背へ折り重なって、「泣くな。何を、さは泣く」と力をこめて抱きしめ「そなたの心ばかりは、つゆ、疑うてはいぬぞ」と、顔をすりよせていった。

熱い頰と頰のあいだに、みだれ毛が濡れ浸った。姫の髪と義仲の髪とが縒れ合うて、いつまでも、離れがてに二つの顔はもだえた。

喘ぎあえぎの小さい声の下でかの女は「もう、わが身は、どうしたらよいのでしょう」と、むせびつづけ、「あなたのお腹立ちを思うたり、父の身を考えると、どうしてよいのか分かりません、いっそ死にたい……」と、歯の根でさけんだ。

義仲はわれを忘れて、その白珠の歯のあたりへ噛みついたが、冬姫はかたく歯を合わせて「あな……」と黛をひそめ、泣き顔を横にそらした。眩めいた眼ざしで、義仲はまた姫の耳へ「死ね。死のう」と、狂おしげな息吹を荒らげ、姫がそれに応えて「死にたい」と、低く叫んだせつな、かれは姫の紅い耳朶を口の中に入れてしまった。姫はそこから体じゅうの血を吸引されるように上気して「ああ……。そんな」と、絶え入りそうにし、未知の苛責に解される十六の女体をせつなげに転動させた。

とつぜん、かの女のからだに、死を伴うかのような恐怖と歓喜が男によって灼きつけられた。それまでは幻のものだった異性なるものが、異性でも幻でもなく、自分の中に苦痛としてあった。つき放したい苦痛でなく、死を賭して溶け合おうとし、死んでも離すまいと生命がしている苦患の黛、睫毛なのである。深い息を内にひき、容貌は玲瓏と

して人界のものではなくなった。そして義仲の唇にもう歯を閉じようとはしなかった。すすんでみずからを燃やそうとし、同化への、いじらしいばかりな汗ばみは、その苦痛と歓喜を溶かして、転動してまわり、さきに、義仲が座のかたわらに置いた梅の枝をも敷き散らし、あたりを紅梅の蕾だらけにした。

元日の雷

まもなく、年は明けて。

寿永三年となった。

——四方の関々みな閉ぢたれば、公家の貢税をも奉らず、わたくしの年貢も上らねば、京中の上下、たゞ少水の魚にことならず、危ながらに年暮れて、寿永も三年になりにけり。

古典平家第八は、こういう詞をもって巻を結び、次への展開を暗示している。

朝廷の四方拝、院の拝礼、小朝拝などの御儀も、すべて、おとり止めとなったのはいうまでもない。

およそ、いずこの御墻、築土の内にも、音楽すらもれ聞こえなかった。

ところが、元日早々、奇異があった。

玉葉によると。

この年、正月一日、夜にはいって、大風雨があり、また、雷鳴、鳴りはためくと、日記をつけている。

「物もなく、地楽もなきゆえ、人界の浅ましさを嘲うて、天が天楽をとどろかせたものであろうよ」

人びとは、真っ暗な正月を見ていったという。

物の乏しいのはまだ忍ぶとしても、不安で夜も眠れぬ、とかなしむ者もある。

もれ聞こえるところでは、暮の三十日、義仲は突然、院参に及び、法皇の御不予の真偽を糺したといわれ、院、基房公などが、あらゆる慰撫と遁辞によってそれはなだめられたが、法皇のお座所を、石清水八幡へ遷しまいらすとか、北陸への動座を強請し奉ったとか、一時は、ただならぬ紛糾もあったとか。

しかし、冬姫の父基房公が、すべてを身にかぶっての詫び言と、法皇の御才略とで、なんとか事なくはすんだらしく、院ではその三十一日をもって、何を思い出したか、ふしぎな庁令を発しられた。

――というのは。

式部少輔範季に奉行を命ぜられ、もう遠いむかしの、保元ノ乱の合戦場址に、崇徳院（当時の上皇）の社祠を造って、怨霊を慰め奉れ、という令であった。

――それは、身、天子にお生まれありながら、讃岐の牢獄に終生を送らせ給い、御さ

いごには、

〝——我レ魔王トナツテ、コノ怨ミヲ報ゼム。天子ヲ以テ民トナシ、民ヲ以テ天子トナシ、世々、コノ国ニ仇シテ見セムゾ〟

と都の空をののしって憤死されたあの君のことであろう。その崇徳院の祟りとか、怨霊沙汰は、以後二十数年間、凶乱があったり、朝廷に不吉があると、すぐいい出されたことなのである。宮廷人のあたまに深くこびりついて、忘れることができないらしい。

——と聞いて、義仲は大いに笑い、

「おれが死んだら、おれを祀るか」

と、左右の将を見ていった。

そのことばを吐いたのが、はしなくも、五条本陣の館で、諸将とともに、元旦の杯をあげていた席であったので、人びとは、はっと、いい知れない不吉感にとじられた。

「あははは。正月だとて、なぜ、死を口にしては悪いか。おれたち武門、いつともしれぬ身は、木曾谷を出たときから承知だった。長生きしたくば、来世には、武門に生まれて来ぬことだ。ハハハハ、巴なども、次の世には、武者の妻になるまいぞ。そなたはのう——」

と、向き直って、

「そなたは、まいちど木曾谷に生まれても、樵夫か百姓の女房がよい。子さえ抱いて、大きな乳ぶさをくわえさせておれば、満足している女だ。あわれ、義仲の妻とはなって、気のどくな今生よ……。ははははは」

しきりに、愉快がるのである。

けれど笑う声には、亀裂があった。それが、きいんと、冷たく人の心を衝く。

心なしか、眼もと、頬の影も、どこか淋しい。兄の今井兼平は、べつな意味で「気のどくな」と妹の巴の方を見た。そしてまた、「良人勝りよ。健気よ」と思った。巴は、そういう良人を前に、いつものようにほほ笑んでいたのである。なお、あまた居流れている甲冑の中で、ただ一つ、元日らしきものといえば、それはかの女の明るい微笑一つであった。

夜――。その元旦の夜。

昼とは、形相を変えた空が、墨のような風を起こし、時ならぬ雷鳴さえともなって、大雨を地へ打ちたたいて来たころ、義仲はもう梅小路の家に籠っていた。

翔ける雷鳴が、近くの上に来ると、梁までが、ミシミシといい、ともし灯は墨を吐いておののいた。

「こわい……」

と、冬姫は、帳内にうつ伏して、耳をふさいだ。

義仲は、杯を手に、

「大丈夫、義仲がおる」
と、わざと自若として見せた。
そのとき、雷は、なお烈しくなった。姫は一そう身をちぢめて、
「殿、殿。……」
と、救いを求めるように、袂の下でいっていた。愛しさ、しどけない美しさ、眼も眩みそうな思いで、義仲は、それを流し眼に酒を仰いだ。手酌で二献、そして三献目の瓶子へ手をかけたときである。つんと、異様な匂いを感じたとおもうと、家じゅうの柱がみな裂けたかと思うような響きがした。雷は、近くに落ちたらしい。がんと、一瞬、耳をどこかへもぎ飛ばされたような衝動をうけた。
――それと、ひっという姫の叫びとが、同時であった。酒器を蹴って、かれは姫のそばへゆき、姫のからだを、諸腕の中にしていた。
かの女は、気を失っている……。「姫っ」と、義仲はその体をゆすぶった。白い顔が、とじた睫毛が、あのときの恐怖とよろこびに悶絶しそうだった顔容そのままだった。血のいろを退いた真っ白な面はガクとかれの腕に仰向いた。
義仲は、そうっと、その唇へ唇をふれた。すると、姫はもうその触覚を敏感な粘膜に知っていた。夢のさめたような眼をみひらいてまた夢の中にはいるような顔になった。おどろ、おどろ、雷鳴は遠くになってゆき、ふたりの現も、どこか、遠くになっていた。

すると、その時、ここの小館の門を、はげしく打ちたたく者があり、人馬の騒めきも、手に取るように聞こえ出していた。

変々恋々

大雨と狂風は、一ときのまにやんだ。

季節外れな——しかも元日の夜の雷鳴は遠くへ消え、空には星が洗い出されている

人馬ともにズブ濡れとなった七、八十騎は、さっきから、梅小路の門へむらむら寄って、しきりに内へ、ものを申し入れていたが、なかなか、そこはひらかれもせず、外に措かれていたのである。

——が、雷鳴がやむと、やっと門の一端が開き、内との応答が交わされた。まもなく廊の端に、紙燭の光が射し、前栽の木々をとおして、義仲の声がした。

「やい、やい。なんの物騒めきぞ。ただ遠方より立ち帰って来たとばかりでは分からぬ。頭立ちたる者はたれとたれか。そこにて、名を申せ」

するとー せいに、馬を降りる武者たちの、あの特有な鎧金具のひびきとともに。

「進六郎親直です」

「越後中太能景」

「また、津波田三郎丸などにござりまする」

――それきり、義仲の方からは、しばらくなんの声もない。とっさに、かれらへ酬いることばが思い出せないのでもあろうか。

さすが、人馬の声には驚かされ、冬姫との閨の帳も蹴って、廊の端へ出て来たかれであった。

多少あわてていたろうし、閨の香からわれに回り切れてもいなかったろう。しかし、ようやく思い出したらしい。

かれらは、約二十日ほど前に都を立ち、敵地へはいっていた決死行の猛者たちだった。――飛説紛々、鎌倉勢の実数や、西上の日どりなど、虚実のつかみようもないゆえと、義仲から敵中偵察の命をうけ、近江、美濃、北伊勢と潜行して、からくも今、帰洛した者どもである。

「おう、親直や中太などか。よくぞ生きて帰ったぞ。だがここは陣所でない。委細の報告は、明朝、五条の館で聞こう。疾う疾う五条へ行って、ゆるりと、疲れを休めるがいい」

義仲は、かれらをねぎらい、ひとまず、五条の方へ追いやった。

しかし、もとの閨へ帰っても、かれはもう冬姫との抱擁に燃えられなかった。数十日の決死行から帰った今の面々といい、樋口その他の隊といい、遠い冬空の山野に生死をさらしている味方のことを思うと、かれの痺れたあたまでも「主将が、これでいいか」

と悩み、「すまない」と、自責せずにいられない。
そのせいか、次の日は、冬姫との後朝も、振り切るように、梅小路を出て、五条へ帰った。
そして前夜の親直、中太などを一室へ呼び、海道方面の実状を聞きとった。
かれらは、口をそろえて、
「都の内で聞くことと、美濃や近江で見たこととは、まったく、大きな相違です。敵には、よほど、智者がいて、虚を実と見せ、実を虚と見せ、さまざま、策を弄しているものかと思われまする」
と、いった。
また、もっと具体的には、
「敵の実数は、決して、うわさのように多いものではありません。近江の蒲生に、五、六百騎、北伊勢に三百足らず、尾張熱田の本軍といっても、せいぜい千か、千五百ぐらいなものでしょう。何せい、海道方面も、都と同様に、食糧が乏しいのです。そう一度に大兵をうごかすわけにゆきませぬ。まま、何万という大軍が、今にも来るなどという風説は、すべて敵の術策でした。――そしてその少ない敵勢すら、まだ近江、伊賀、伊勢などに散在し、時たま、九郎義経なる敵将が、あちこちの間を、往来しているだけで、にわかに、それらが結集するような様子でもありません」
と、説明した。

「そうか――。そんな弱勢か」
おおいえない安心感が義仲をくるんだ。そうあってほしいと望んでやまないことだ。もちろん、かれは信じたい。
「して、頼朝の弟、九郎とやらは、いま、どこに陣しているのか」
「その九郎殿は、伊勢にいたり、近江へ出たり、とかく、所在も定めぬようでしたが、初春を前に年の暮、熱田へ引っ返してゆきました。このぶんでは、敵もにわかに、上洛の意はないものと思い、われらも都へ立ち帰って来たわけです」
「では現在、九郎がおる所は、熱田よな。上洛上洛と、今にも敵が都に現われそうに申すのも、また、それを吼え合う公卿どもの肚も、じつは擬勢であったのか。いや、そう聞いて正直、義仲の策も立てよくなった。まずは正月よ、其方たちも、この三ヵ日に、一と月分の渇きを癒すほど飲むがよい」
かれは、愁眉をひらいた。
すぐ士気にも反映して、館中すべて明るくなった。以前のように、巴の部屋でも義仲のきげんのよい声が聞かれ、酔うてそのまま妻と一つに寝る夜もあったりして、正月はまたたくうちに十日をすぎた。
天まだわれを捨てずと思い、心にも、ゆとりをもって来たせいか、義仲は、急に陣務に熱意をみせ、梅小路通いも、ここは自制に努めている風であった。

そして、この正月中を、頽勢挽回の時とせんと、心に、誓ったもののようである。
河内で越年した樋口兼光をはじめ、和泉、丹波、摂津、伊賀、伊勢などへ、無方針に分散してある兵力を、いちど、都によび戻し、これを、編成し直す必要を、まず思った。
樋口の隊は、やがて、引き揚げて来た。
しかし、兵はみな痩せ、気力がない。「これでは、苦戦のはず」と、義仲も反省した。
その他、地方の兵馬は、つぎつぎに帰洛したが、兵の痩せは、樋口隊だけではない。どこの地方にも、いかに食糧がないかがわかる。
「兵力の分散を正すのはよいことですが、それを都の中で行うと、また、都じゅうが、餓鬼の府となり、掠奪のちまたになる惧れがありましょう」
兼光は、憂えた。
田舎へ行っても、木曾には、同情がない。女子どもにも怖がられる。それでは、戦にも勝てないことと、飢餓のつらさを、かれは、体験して来たばかりである。
義仲はほろ苦い顔をした。
「いや、都には長く駐めておかぬ。またそれほどな兵糧もない。およそ六、七千騎を結集したら、ただちに、北陸へ立ち退こう。じつはそのため、堅田党の一族だけは、さきに堅田ノ庄へ帰国させた」
「おう、刀禰弾正介と、左金吾の父子をですか」

「北陸落ちには、大事な道すじゆえ、そこでの邪魔を切りひらかせておくために」

「はて。あぶないものですな」

「なぜか、樋口」

「堅田党を、木曾へ推挙した者は、十郎行家ではございませぬか」

いわれるまでもなく、義仲にもその不安がないではない。行家と堅田党との関係は、きのうやきょうのものではないから。

しかし義仲は、法皇のお体さえ自軍に擁していれば、叡山も堅田党も、抗しえまいと考えた。——つまり院の御動座に成功するか否かが、木曾にとっても、さいごの運の分かれ目としているのだ。

ところが、あれ以来——密書のことがあってからというもの——法皇の義仲にたいするお心遣りは、じつに細かい。この正月には、四位を賜い、諸国にある平家の遺産や、また将軍宣旨を降し賜うなど、ほとんど、義仲の顔さえみれば、何か、ありがたい御諚があった。

のみならず、従来、木曾木曾と呼んでいたのに「松殿の婿」と、いわれたり、「いちど冬子を伴うて院参せよ」と仰せられるなど、冬姫と義仲との関係を、いや関白家の婿たることを、公認するかのようなお口吻りでさえあった。

義仲は、つい、いうべきことも、いい出せなくなる。

そして、あとでは、

「あの甘いお口が院の毒計なのだ。冬姫への密書には、あからさまに、お腹が見えていたではないか」

自分の弱さを悔いるのだった。

けれど近ごろは、何事によれ、後白河はかれの言をむげに退けたことはない。北陸落ちも「やむなくんば……」と、お覚悟のていだったし「其許の力にて、世のしずまるものならば」と、平家との和議にも、お力添えを示そうとなされるのである。

すると、正月十一日ごろのこと。その平家が、洛中突入を企てているという風評がしきりに立った。

——が、諜報ではまた、平家方の小部隊が、丹波方面へ働き出したものにすぎないともいう。

しかし、河内の十郎行家が、またぞろ、反義仲の檄を飛ばしているとか、南都の僧兵が奈良坂まで出て来たとか、叡山へ鎌倉の使者がはいったとか、俄然、都のうちは、焔にあぶられる釜中のような様相に変っていた。

いちど、帰った樋口勢も、ふたたび石川城へ馳けむかい、丹波、その他の諸道へも、つぎつぎに兵を出したため、義仲の左右の兵は、またまた、元の小勢になってしまった。

義仲の容子も、ここ数日は、さすが平静でない。

西の平家攻勢、東の鎌倉勢。さらに行家の反乱など、思慮のいとまもない四面の楚歌に、その決断も迷わされたことが、かの〝玉葉記事〟などに見ても、思いなかばに過ぎるものがある。

一たんは、平家に当って、運を天にまかせ、雌雄を決せんとしたらしい。すると、かならず和平説が出、平家も迷い、義仲も迷ったのである。

そのまに、双方の出先の兵は、丹波方面で小ぜり合いを起こし、平家武者十七人が首切られたり、また行家の兵が、難波方面へ働き出すなどのことがあって、どちらも疑心暗鬼をいだき、和睦は、ケシ飛んでしまったのだ。

かかる間に、一方、鎌倉方の義経、範頼の軍勢は、ふた手になって、熱田を発し、すでに義経軍は、北伊勢の関から加太峠をこえ、伊賀の山中へかかっているという飛報もある。

これがすでに、十六日のことだった。

その十六日夜から十七日の朝にかけ、伊賀、南近江方面から、出先の木曾兵が、三々五々、みだれ立って、洛中へ逃げ帰って来た。

それらの、弱腰な者の口から、

「鎌倉勢の陣容はゆゆしいものだ。とても、太刀打ちできるものではない」

と、いいふらされ、いやがうえにも、死相の都を、暗澹なものにした。

しかし、どういうものか、まったくそれとは反対な流説もあった。

「なんのなんの、義経の軍も、範頼の手勢も、あわせて、たかだか千余騎にすぎぬ。
――いま洛中にあるお味方の数をもってしても、それくらいな敵、驚くにはあたらぬ」
どれが真。どれが嘘。
義仲は迷いに迷った。
一挙、西の平家に当るべきか。
――でなくば、法皇のおん輿を擁して、大津口へ進み、鎌倉勢を前に、堂々の陣を布くがよいか。
将また、いずれも避けて、法皇のお身がらだけを守り、北国へ立ち退き、鎌倉勢にも平家にも、ここは、肩すかしを食わせて後日を待つのが賢明だろうか。
――義仲は、まったく、思惟の乱視にかかった。

――義仲、今日法皇ヲ具シ奉リ、瀬田ニ向フベキ由、風聞アルモ、ソノ儀、忽チ改変シ、タヾ郎従ヲ派シテ防グニトヾマル。オヨソ去夜ヨリ今日未ノ刻ニ至ルマデ、議定ノ変々、数十度ニ及ビ、掌ヲカヘスガ如シ

木曾の周章を、玉葉はこう日記している。
ほかの日の項にも〃――火急、院ヲ具シ奉リ、義仲、北陸ニ向フベシトノ議アルモ、暁方ヨリ夕刻マデニ、取沙汰変々七八度、ツヒニマタ止ム〃といったような記事は毎日のようである。

いかに、義仲の言動が乱視的であったか、そして、後白河には、ここのせつなをあらゆる遁辞のもとに、かれの拉致から遁れようとなされたか、想像するに難くない。

それの苦しまぎれな遁辞の一例ともいえようか、なお玉葉の一節には、〃――御幸、危ク停止シ了ンヌ、院御赤痢病ニ依リテナリト、云々〃などというまことに際どい記事もある。策がなくなると、法皇には、御仮病を構えられたものであろう。もちろん、赤痢といっても、当時の病語であり、今の赤痢とはちがう。

しかし、院そのものは、まさに、危篤の命脈だったし、木曾の運命も、釜中の魚にほかならない。

なぜ義仲は、わずかなここ数日の間にでも、早く、次の活路へ、身を転じようとはしないのか。院の甘言に惑ったり、都に執着したりしているのか。

玉葉の筆者は、その様を、ただかれの無策と見、方針の変々、日に十数度とのみ書いているが、義仲の乱視のひとみに、冬姫のすがたが、不断に住んでいたことは見のがしていた。

義仲とても、その冬姫に、恋々とひかれていては、ついに、院の思うつぼに墜ちるものとは、知っていたにちがいない。しかも、知りつつかれは、冬姫との夜の帳を稚い涙で濡らしあう悲曲から自分を断つことができなかった。――いやむしろ、夜々に深まる死の都の暗黒と凄絶さとは、二人のほかは何もない盲目的な命の燃焼を、一そう、ひと知れぬ甘美なものにしていたかもわからない。

とまれ、もう、鎌倉勢の右翼、左翼の二軍は、宇治川から瀬田の対岸まで来ていた。
——と、確知されたのは、十八日の晩だった。
何を議し、何を騒いでいるひまもない。
ただ一声「すわ」という殺気だけのものだった。今井兼平は、約六百騎で、瀬田口の防ぎに。
また、根井小弥太、楯親忠らは、三百余騎をひきいて、宇治川の岸へ。
着くやいな、翌十九日いっぱい、根井勢は、防御構築にかかった。河中に乱杭、逆茂木を打ちこみ、大綱小綱を引き、宇治の橋板は、みな剝ぎ取り、櫓を築き、柴舟を引きあげ、およそ敵を利す物はすべて、視野から除いてしまった。
かくて、十九日は、暮れたが、対岸にせまる鎌倉軍の左翼とは、いかなる編成で、いかなる士気か、大将か。
この手の主将は、鎌倉殿の弟で、九郎義経とは、わかっていたが、いったい、どんな人物、どんな器量の男。それもまだ、世間、知る者はほとんどない。
一方——
さきに、河内石川城へ向かった樋口兼光からは、十七日、石川城を攻めつぶし、敵七十人を首とし、三十余人を生捕ったと、さい先のよい飛脚であったが、かんじんな新宮十郎行家は、合戦中、全身に傷を負いながらも、なお運づよく生きのびて、どうやら、高野へ逃げ落ちたらしいということであった。

春告鳥

ゆうべ、夜半過ぎ、時ならぬ鶯が、あちこちで、夜啼きした。
――と思ったらけさ、一月の十九日。
月ケ瀬から笠置の部落へかけて、おびただしい武者が夜営していたのを見出し、里人たちは、起き抜けの眼をまろくしてしまった。
奈良に都があったころから、この地方では梅から染料を採る業が伝わっており、今でも朝早くに、奈良の町へ物をひさぎに出る男女が少なくない。
ところがけさは、要所要所に立ち武者が見え、この地方では耳馴れぬ東国なまりで、
「ここは通さん。きょう一日は、木津へも奈良へも、往来はさせぬ。帰れかえれ」
と、道を断っていた。
それは、よほど疲れている軍勢にちがいない。歩哨のほかは、陽が昇っても、正体なく、全軍、くたくたになって眠り沈んでいるのである。
笠置寺七院のふもとにも、一隊が眠っていた。おそらく主将のいる本隊であろうか。あちこちに繋がれている駒はみな駿足で、鞍や鐙も、わけて美々しい。
山には、上堂と下堂があり、下堂の一院を繞って、甲冑の寝姿が、あふれている。ある人びとは廻廊に、ある一組は山門に、またある仲間は、鐘楼や木蔭になど、さまざま

ながら、しかし、泥藁靴を解いているものは一人もない。どれもこれも、ただただ、深い寝息の沼だった。

「――寝ておけ、寝飽きるまで、ここでは眠っておくことぞ」

ゆうべ、といっても夜半すぎ、九郎義経が、いいわたした声が、どかっと全軍を安心させ、夢の一つ一つに、その約束が、結ばれていたせいであろう。

だが、義経自身は、もう、そっと起き出して、ひとり笠置の山上に立っていた。

早起きは、かれの習性である。

鳥の声がすると、寝ていられない性だった。寝坊してはよく鞍馬法師のきつい懲罰を食った稚子時代の克己が、いまも骨身に残っているのかもしれない。

同時に、いいこともある。

たとえば、きのうの強行軍にしろ、かれは、たれよりも疲れを知らなかった。

負けずぎらいな坂東骨の佐々木四郎高綱でも、畠山重忠でも、梶原景季、安田義定、河越重頼といった面々でも、

「九郎の殿は、天狗の申し子か」

と、舌を巻いたものである。もとより、騎馬の行軍だが、坂東平野と事ちがい、北伊勢から伊賀山中を、一日のまに、十六里も踏破したのだ。ついぞ弱音を吹かぬ佐藤継信、忠信の兄弟や、伊勢三郎、武蔵坊弁慶すらも「きょうばかりは……」と、ふうふういったので、義経はわざと、

「弁慶、笑止ぞ」

と、からかい、からかい、ほかの面々をも、励まして来たほどだった。

「むりではあったが、まずよかった。きょうは、ゆるりとここを立つとも、明朝までには、宇治川を前に見られよう。――不破から近江路へ出た蒲殿（範頼）とて、まだ、瀬田には行き着かれまい」

かれは、山上を逍遥して、弥勒石のほとりに佇み、しばし石面の弥勒像を見とれていた。

指を頬に当て、やや小首を傾げた風情の女人像が、ふと、たれかをかれに連想させ、もの思わせたことでもあろうか。かれはやがて、素直な子のように、下へすわって、掌をあわせた。

その姿へ、山の端から、虹のような朝陽が射し、ふもとの泉川から木津川、また、はるかな大和平野の浅い春の色までが、あざらかに浮き出した。

九郎義経が、兄頼朝から与えられたこの方面の左翼軍は、千八百余騎。二千がすこし欠けていた。

部将の多くは、この正月六日、鎌倉を発し、熱田でかれと合流したのである。

――が、義経その人は、それ以前、すでに去年の十一月初旬から、頼朝の秘命をうけて、近江、伊賀、伊勢などの間を、わずか五、六百騎で、転々と移動していた。

まだ、義仲の法住寺殿焼き打ちが行われない前である。
鎌倉を立つとき、頼朝は、
「九郎、うれしかろう」
と、かれの喜色を見ていった。
「これが、うれしくなくて、なんといたしましょう」
かれは、兄の命を拝しながら、そういったが、なおいい足りぬように、
「生まれてから、今日まで、九郎は三度のよろこびに会いました。第一は、鞍馬をのがれ出たときです。第二は、奥州から馳け下って、黄瀬川の御陣にて、御兄上にお目にかかった時でした。……そして、きょうのおいいつけ」
と、思いを、思いのまま答えた。
頼朝は、うなずいて、
「和殿を見こんで、わしが申しふくめた秘策、わかったろうな。やれるか」
と、念を押した。
「よく、わかりました。不肖なわたくしですが、ただ、懸命に勤めまする」
「よし、わしの代官として、やってみるがよい。まだ、瀬踏みだが、万一、ただちに合戦ともなれば、和殿にとっては、生まれて初めての実戦、つまり初陣ぞ」
「はい」
「ぬかるな」

「…………」

なぜか、九郎は、ほろりと、涙になりかけた。——千載一遇ともいえるこの機会を、兄は、自分に与えてくれた。そうすぐに、愛情に取ったからであった。

が、頼朝は、その容子を見ると、かえって、むずかしい顔を守った。涙に誘われる人ではない。事は公命であり、鎌倉の運命をも決する大事ぞと、よけい冷静になるのである。

「九郎」

「はい」

「鶴ケ岡若宮の棟上の式。もうだいぶ以前になるが、覚えておるか」

「覚えております。養和元年の夏七月」

「うむ、御家人どもが、みな宝前で神馬をひいた。和殿も、わしが工匠へ与えた馬を、神前でひいた。あの日のことさえ忘れねばよい」

「ゆめ、忘れはいたしません。たとえ、遠くお側を離れましょうとも」

義経は、誓って、立った。

それはかれの真情であったから、何気なく答えて鎌倉を出たのだが、途々、頼朝の言を嚙みしめてみると、容易ならない意味がある。

かつての年、鶴ケ岡の晴れの上棟式で、頼朝が、わざと弟の九郎に、大工の駒をひかせたのは「わが弟といえ、公には、そちも御家人の一人だぞ」と、衆臣にも意識させ、

義経の心へも、しかと、心得させておくためのものだった。――当時、人びともみな密かにそういったものだし、義経の直臣たちも、「心外な」と口惜しがったことであった。首途にさいし、頼朝はそれをお復習したのであろう。もとより、義経に思い上がる気など毛ほどもない。ただ特に念を押されたことの淋しさが、いささか、胸をかすめたが、それとて、行くての希望にくらべれば、路傍の石に、駒のひづめがつまずいたほどな障りでもない。

そもそも、かれの上方行きは、表面、東国八ヵ国の貢税の監送というのが、名目であった。

従者五百騎、荷駄数百頭、斎院次官親能と同行で、不破を越え、近江にはいり、都へはいろうとしたが、当時、義仲と院とは、紛糾の最中である。――入洛のほどは、むずかしいとなり、税の官物だけを、洛内へ輸送させ、義経は、しばらく江州佐々木ノ庄に潜んでいた。また、湖上を渡って、堅田党の堅田にいたこともある。

いや、時には伊勢、時には伊賀、いる所をさだめず、そして今にも、鎌倉殿の大軍数万が、海道を上洛すべしと、諸道に触れ、洛中にある義仲に、圧力と不安と、総じて、心理的な風声を、たえまなく送りこんだ。

木曾の法住寺殿焼き打ちの暴は、木曾がその策に乗った焦躁といえないこともない。

十一月十九日、乱の勃発を、義経は、伊勢で聞いた。

院の北面の下臈公朝が、同地へ馳せつけて、

「義仲の逆乱は、もう天下の知るところ。一刻もはやく、軍をお進めあって、院の御心を安んじ給われ」

と、委細を訴えたからである。

だが、義経は、

「何事によれ、鎌倉殿のおさしずなくば、一兵たりと動かせぬ。疾う鎌倉へ、告げられよ」

といい、自身もすぐ熱田へ急ぎ、熱田で頼朝の命を待った。

頼朝には、絶好な機会である。しかしかれの前進は、なお極めて徐々であった。

義経の任は、以後、もっぱら義仲を洛中に封じ込めておくことにあった。「木曾を都攻めに」というのが、かれにかたくいいふくめられていた原則であった。

なぜならば、鎌倉の府も、そう大軍は送りえない。足もとの不安もあるし、輸送、兵糧がつづかないのだ。もし、しいて数万の兵を都へ送りこめば、それこそ、義仲の轍を踏み、部下の将士も、木曾の二の舞をやるであろうことは、余りにも、わかり過ぎている。

——で、義経の使命は、いよいよむずかしく、いよいよ重かった。もし木曾が法皇のお身をかかえて、北陸落ちでも仕遂げたら、かれは兄頼朝からどんな譴責をうけるかしれないだろう。いや、かれ自身、使命の名折れ、身の恥ぞと、心に誓った。

幸いにも、湖畔の堅田党、叡山の堂衆の一部、また、叔父の新宮行家などとは、旧知の仲である。それらとも気脈を通じあい、あらゆる〝義仲封じ〟の流言や策を行って来た。

そして、寿永三年の正月を、熱田で迎え、鎌倉評定所からの、さいごの議定を待ったのである。

評定所令は、六日に発せられ、大手軍の総大将には、頼朝の弟、蒲冠者範頼が任ぜられ、義経は、搦手軍の大将とさだめられた。

すべてで五千余騎。即日、鎌倉を発し、熱田で合流した。

そこで全軍の編成は二分され、範頼は二千余騎で、不破ノ関から近江路を経、瀬田の本街道、つまり大手へ攻め向かう。

また、義経の搦手軍は、伊勢にはいって、伊賀の加太峠へかかり、新居河原に馬を休めた。そして伊賀一ノ宮の敢国神社に、初陣の幸を祈願し、それから山中十六里の道は、おとといの朝から、わずか一日半夜を費やしたのみだった。たとえこの道どりと日数が、木曾方の早耳に、どう早く伝わっていても、きょう、一月十九日に、義経の手勢が、月ケ瀬、笠置にまで来ていようとは、たれにも計算しえないほどな迅速さであったのである。

生唼（いけずき）・磨墨（するすみ）

一月十九日。——甲賀、生駒（いこま）の遠山には、残雪が見える。木津川も上流の谷あいや山かげ道は、まだ冬だった。

だが、そこを行く人馬の列は、天地の一角から魁（さきが）けて来る春風のような潑剌（はつらつ）さで西北の平野へ下って行った。夜来（やらい）、眠るだけを眠り、兵糧もとって、笠置（かさぎ）の部落を立って来た鎌倉の軍勢だった。

「忠信。足をどうしたのか」

自分の後から、自分の乗（の）りかえ馬（うま）をひいてくる佐藤忠信の足元を見て、義経がふと訊（たず）ねた。

義経は、日ごろの愛馬〝薄墨（うすずみ）〟に乗っていた。もう一頭の乗（の）りかえ馬（うま）は、兄の頼朝から初陣の餞別（はなむけ）にと、名も〝青海波（せいがいは）〟として贈られたものだけに、わけて大切にひかせていたのである。

名馬をひく気苦労は駄馬（だば）の比ではない。けれど、主君からそれを預けられることは、また名誉でもあった。

「お目にとまりましたか」と、忠信は声も明るく——「お馬に水飼うとき、茨（いばら）か何か踏み、少々、傷を膿（う）ませましたがさしたるほどではありません」

「したが、そのように、難儀な足つきでは、合戦のときにも困るぞ。ゆるすゆえ、青海波に乗ってゆけ」
「めっそうもない。君の御馬などに跨(また)がれば、なお足が曲がってしまいましょう」
「では、たれか馬上の者と、代ってもらえ」
「いえいえ、さしたることではありません」
「つまらぬ痩(や)せ我慢はすな。誰(た)ぞ、忠信と代ってやらぬか」
――が、前後の人びとは、たれも「おう」といわなかった。苦笑だけが顔から顔へつたわってゆく。中でも武蔵坊弁慶は、
「いや、わが君。おん宥(いたわ)りは、ありがたくぞんじますが、あの強情者には、おすすめあっても、むだでござる。われらも、口を酸(す)くして申したことでございますが」
と、からから笑った。
「はて、忠信を強情者とは心得ぬ。お汝(こと)らよりは、優しき武士。わけて、弁慶などよりも、はるか、素直なかれを」
「なんのなんの、あの足つきを見かねて、いくたびとなく、友輩(ともばら)が、代ってやると申すのに、耳にもかけぬ忠信です。伊賀山越えの途中さえ、うんとは申しおりませぬ。――もし、大事な合戦の日に、よい働きもできぬときは、それこそ身の名折れ、一代の損ぞ、と申し聞かせましても」
「どう申すのか、忠信は」

「こう、申しまする。功名がなくば、なくもよし、きょうのお役は馬をひく役、お馬をひくぐらいは、この足でも勤まる、構うてくれるな。と友の宥りに二べもないあいさつ。忠信を優しきものとは、君のお買いかぶり、稀代な強情者ではございませぬか」

毒舌も、この弁慶が吐くと、何かしら、おかしいのだった。義経も苦笑をうかべ、騎馬の群れも、笑いの波を漂わせた。いわれた当の忠信まで、ニヤニヤ笑っているのである。

しかし、義経には、かれらの中の無邪気さが、いじらしかった。わけて忠信は、自分の心のうちをよく知る者ぞと、ひそかに感じた。

なべてみな、鎌倉殿の御家人にちがいないが、義経の麾下には、二つの系統があった。

一は、頼朝直属の臣、つまり武者所の錚々である。

もひとつは、日常、義経のそばに仕え、頼朝以上にも、義経を直接のわが主と仰いでいる面々だった。

たとえば。

——武蔵坊弁慶、伊勢三郎、佐藤継信、おなじく忠信。深栖陵助、伊豆有綱、鎌田正近、那須大八郎、足立義数、金子十郎、吾野余次郎、江田源三、横山相模介など。

これらの郎党は、古くは鞍馬時代から、または、かれが坂東地方を放浪中にむすばれ

た草の実党の人びとで——切るに切れない宿世の主従——いや主従を越えた一体といってよい。

けれど、鎌倉評定所の編成のうえでは、それらは、義経の子飼の士で、いわば陪臣に過ぎなかった。

頼朝には頼朝が重用している武蔵武士の精鋭がある。こんど、武者所から選ばれて派遣された部将たちこそ、それだった。

——まず秩父党の畠山次郎重忠、河越太郎重頼、重房。

児玉党の塩谷五郎、庄三郎忠家。丹党の熊谷次郎直実、小次郎直家、安保次郎、勅使河原権三郎など武蔵七党とよばるる一群のほか。

佐々木盛綱、高綱らの兄弟。梶原景時、景季、景高の一族。曾我祐信、岡部六弥太、大内太郎惟義、安田三郎義定など、星雲のごとくくつわを並べていた。そして、これらの部将たちの心は、「鎌倉殿のおさしずにより、しばし、九郎殿のおん手に属して、功名をなさん」と、いうにあって、義経を、主君とあがめる武蔵坊や伊勢三郎などとは、おのずから心もちがうし、気負いもちがう。

といって、義経その人を、軽んじはしないが、かれらはあくまで、鎌倉殿のおん弟として義経を見、また、出先の司令官としての義経に服従している者どもであり、弁慶たち直臣のように「無二のわが君」と、仕えているわけではない。

これの統御に当った義経が、部下の心理や、そうした組織に、迂遠でいるはずもなか

った。
「むずかしさは、敵との合戦よりも、内にある」
とは、出陣の日から思ったことであり、ひそかな、憂いでもあった。
果たせるかな、戦場が近づくに従い、麾下の将士のあいだには、それが、いよいよ露骨になっていた。義経の憂いとは、つまり、味方の弱さではなく、余りな強さにあったのである。
いいかえれば。
待ちに待ったる千載一遇の秋――という気は、鎌倉勢すべてのものだった。侍大将から一兵までの意気だった。わけて「九郎殿衆」といわれ、日ごろから、下風に措かれていた武蔵坊、伊勢三郎などの子飼組が、
「武者所の御家人のみに、名を成さしむな。九郎君のお側にも、人はあるぞと、鎌倉殿のお耳にも知らしめん」
と、誓ったことは、いうまでもない。
――が、義経は、可愛いそれらの直臣どもが、やがての戦場で、余りな武勇と奮迅ぶりを現わすのを、むしろ惧れていたのである。
――その、主将でなければ分からない主将のなやみを、
「いみじくも、忠信ばかりは、覚っているものとみえる。やさしき男かな」
と、義経は、うれしく思ったことだった。

そして、ひそかに、「あわれ、日ごろ義経のそばに仕える者どもは、みな忠信の心に習え。――表だちたる功をいそぐな。下積みの働きのみせよ。それも、まことの武者の働きぞ。われにとっては、武勇にもまさる忠勤ぞや」と、口にこそいわないが、前後の面々をながめるにつけ、祈るようなかれの眼ざしだった。

名誉を競い、功を争う。

もとより、戦陣の華だった。

総帥や大将としても、孫子の曰う〝兵をしてよろこんで死なしむ〟ほどな士気を作ることが、統御の術であることはいうまでもない。

が、義経は、内輪の和こそ、より以上な大事と信じた。もし、勢いのままこの麾下を、宇治川に放ったら、かならずや、自分の子飼の者と、頼朝直属の部将とのあいだに、露骨な功名争いが演じられよう。――あの弁慶といい、伊勢三郎といい、身分は低いが、武者所の驍将たちにも武勇では劣る者どもではない。

だが、それを義経は惧れる。――もし自分の子飼が武者所の人びとを超えて、より華やかな名を取ったら、きっと、後日の不和が醸されるにちがいない。

かつは、兄の鎌倉殿への、聞こえのほども、どうあろうか。

かれは、幾多の「考うべき事件」を、出陣以来、眼にも見、耳にもして来たのである。

一例をいえば。

こんどの出陣が布令出されるや、まず、御家人同士のあいだで猛烈な〝馬取り争い〟が演じられたことなど、早くも、その兆しであった。

中でも、佐々木と梶原との、いがみ合いなどは、陣中の話柄ともなり、おたがい笑いあっているが、微妙なものを、双方の胸で研ぎ合っている容子は、義経の眼にもわかっていた。

事の起こりは、こうである。

頼朝が秘蔵の名馬は十数頭も御厩に飼われているが、中でも、生唼、磨墨の二頭の駿足を知らない者はない。

梶原源太景季は、義経に従って出勢と決まると、「晴れの戦場は、宇治川」とすぐ考えついたので、頼朝の前に出、

「弓矢取る身のほまれに、御料の生唼を、拝領させてください。かならずや、宇治川において、先陣を勤めますれば」

と、厚顔しくも、ねだってみた。

頼朝は驚いたが、しかし、この若者が、こんな押しづよいねだり事をいう心理が酌めぬこともなかった。

この源太景季の父景時は、伊豆旗挙げの直後、頼朝が石橋山に敗れたさい、平家方として追跡して来たが、頼朝が大木の洞に潜んでいると知りながら、見遁して去った男で

ある。その旧恩によって、後日、鎌倉へ召された因縁つきの家臣なのだ。――ふと、そんな旧事も頭をかすめ、
「いや、生唼(いけずき)はいけない。蒲冠者(かばのかじゃ)（範頼(のりより)）にさえ許さぬものを、そちに与えるわけにはゆかぬ。だが、生唼(いけずき)にもまさる磨墨(するすみ)を取らすであろう。手功(てがら)せよ、景季」
と、励ました。
するとと翌朝、佐々木四郎高綱がまた、別れをのべに来た。配所蛭ケ島の長い年月も、ずっと兄弟して仕えてきた無二の家臣である。
「聞けば、梶原殿へは、磨墨(するすみ)を賜わりましたそうな。それがしの生国は近江佐々木ノ庄です。宇治川の深瀬浅瀬など、子どものころから存じおるものを、梶原殿に先陣をゆずっては、郷党どもへも、顔むけがなりません。あわれ、生唼(いけずき)をそれがしに賜い、高綱に先陣を成させてください。もし高綱以外の者が、先陣をなしたりとお聞きの時は、高綱討死せりと思(おぼ)し給わりませ」
その言にうごかされて、頼朝はつい生唼(いけずき)をかれに与えてしまった。しかし、先に範頼(のりより)や景季(かげすえ)にも断った逸物なので、もし人が問うたら、そこは巧く濁(にご)しておけよと、いいふくめた。
およそ名馬に乗っての出陣は、武者の誇りだった。功名を克(か)ちとる第一の条件でもある。
足柄(あしがら)、箱根を打ち越えて、都へいそぐ軍勢を見れば、和田義盛の白浪、畠山重忠の秩(ちち)

父鹿毛、熊谷直実の権太栗毛、渋谷重国の獅子丸、千葉介綱胤の薄桜、蒲冠者範頼の月輪、一霞など、上将は上将なりに、平武者は平武者なりに、いかに牧の駿足をすぐって、この日に期して来たかがわかる。
「……だが、自分の磨墨ほどな名馬を持つ者は、一人もおるまい」
梶原景季は、誇らかに、駿河路の浮島ケ原で、ひと息入れていた。
すると、人馬の流れの中を、かの生唼が通って行った。驚いて、「あれはそも、たれの料ぞ」と、訊かせると、口取の舎人は「佐々木高綱殿」と答えて去った。
景季は、憤慨した。——あれほど懇望した生唼を、自分にはくださらず、高綱に賜わるとは、偏頗もはなはだしい。「よし、次第によっては、高綱と刺しちがえ、恥ある侍二人を失うて、鎌倉殿に損させん」と、業腹を煮やしていた。
まもなく、その高綱が、後からやって来たので、景季が呼びとめ、
「生唼は、上よりの御拝領か」
と、空とぼけて訊ねた。
心得ていた高綱は、手を振って、
「いや、おゆるしなきゆえ、無断、お厩から盗み出して来たのだ」
「えっ、盗んで来たのか。さりとは不敵、後日のお咎めを、なんとする気ぞ」
「御勘当もあらばあれ。随一の手柄だに立てれば、なんとかなろう。もし御勘気の解けぬときは、御辺からも、お取りなしを頼むぞ」

「ても、厚顔しい男よ。とかく正直者では、良い馬も持てぬことだの。あははは」
幸い、喧嘩にはならずにすんだ。
けれど、これと同様な下心は、たれにもあった。燃ゆるが如き功名争いは、暗黙裡に、味方同士の闘いとなっている。
——で、義経は、逸りに逸る士気を見て、
「もう、宇治川に勝つは必定。ただ、功名争いの渦中に、わが子飼の者を投じてはなるまい、——というてかれらも、このたびの上洛をば、義経のため、泣いてよろこんでくれた者どもではあるし」
それは、おろそかに思わぬにしろ、ひとり心を労っていた。
なんといっても、義経には初陣である。功名に渇き、豺狼の勇に逸り立つ東国武者二千ちかくを、鞭一ッに引きつれているのである。
そして、その総大将のかれは、いとも小柄である。
馬上姿も、たれより小さく、なおどこかに、牛若御曹司のおもかげを残しており、ことし寿永三年の春をむかえ、年は二十六だった。

宇治川名のり

瓶原、上狛、玉水——と道もはかどって行くままに、まだ短い春先の日は、うすづき初

めて、大和路の野山を、茜紫に染めていた。
「やあわが君。お待ちしておりました」
富野ノ庄へかかったときだ。
民家の横から、六、七名の武者が馳け出し、かれの馬前にひざまずいた。
熱田で二手にわかれ、べつな道を、瀬田へ向かった範頼軍が、どういう状勢にあるか、それを確かめにやった物見の者が、待ち合わせていたのである。
「おう、熊井太郎か。蒲殿の御軍勢も、はや瀬田の口へ、お着きあったか」
「されば、大手のお味方は、途中も難なき坦道ゆえ、昨夜、野洲川に着かせ給い、きょうは田上、貢御瀬にかけて、敵への懸りを探っておられまする」
「そうか。諜し合わせた通り、時もたがわず、同日に着いたの。まだ陽は暮れぬが、兵糧をつかおうぞ」
義経は、ここでまた、大休止を命じた。
そしてなお、何かを、待つようだった。
かねて、新宮十郎行家は、義経へ密書を送って、入洛の日には、自身案内せんといっていた。
その行家の参会を待ったのだが、夜にはいっても、ついに行家は見えなかった。物見の聞き込みでは、つい二日前に、その石川城は亡びてしまい、木曾四天王の一将樋口兼光が、兵一千を遊軍として、悠々、河内平野を出没しているという。

「ああ危ういことだった。それ、見残しては、一大事ぞ」
義経は、急に、弁慶と伊勢三郎を、近くによび、
「木曾の内でも、樋口は勇のみでなく、思慮ある者と聞きおよぶ。その樋口が、都にも引っ返さず、なお河内にとどまっておるこそ心得ぬ。何か、期すところがないはずはない。——思うに、義経の手勢が、宇治川へかからん時、にわかに、あらわれて、うしろを衝かんとするのであろう。——げにもおそるべき樋口」
と、いった。
そして、このばあい、大切な兵ではあるがと、兵三百を割いて、二人にさずけ、
「お汝らは、木津川境より、河内の野を見まもって、あす、われらが宇治川を越ゆるまで、樋口の襲い来るのを防ぎ止めよ」
といいつけた。
武蔵坊も伊勢三郎義盛も、「これは、心外な」といいたげである。
晴れの戦場をよそにして、敵の偽計かもしれない遊軍の抑えに向かうなど、ばかげている。なんたる武運の拙さかと、泣きたいような不平面を見せるのだった。
「なぜ、おうと答えぬ。すぐ立て」
「はっ」
「かかるまにも、魔かぜの如く、忽然と現われて、われらの虚を衝かぬものでもない。義経が樋口なれば、きっと、そうする。はや行け、弁慶」

不承不承、弁慶と伊勢三郎は、本軍とわかかれ、一手となって西方へ去った。
義経は「まず、よし」と見送ったが、なお、かれの細心な気くばりは怠りもない。
そこを宵に出発し、夜半前には、宇治川の南岸に出たが、途々の馬上でも、しきりに物見の報をうけ、次の物見を放つなど、手繰るが如く、敵状を蒐めていた。
「われの探り知るところ、敵もわれを探りつろう。馬を降りても、うかと河原に立つな。あだ矢に射られて、犬死にすな」
夜半のしじまの底から、宇治川の水声が耳にふれて来たとき、すでに敵の位置、兵数、防禦の状など、あらましは、かれのあたまに描かれていた。
上流から下流まで、川靄は深く、瀬々の水光もぼかされている。義経は、ひと渡し、岸辺を馳けて、地の理をしらべ、
「あれ見よ、あの柳の茂き所、平等院の北のほとり、富家ノ渡しを、本陣地とするぞ」
各部将へむかって、弓の先でそこを指し示し、そして、
「おのおのもまた、思い思い、足場をえらんで、陣を取れ。おりふし、雪解の水に、河の水かさも増して見ゆる。河原も狭し、岸の上も狭すぎる。民家を焼いて、兵馬の出入りを自由にせよ」
と、告げ渡した。
また、子飼組をかえりみては、
「お汝らの一部は、民家を毀ち、あの橋姫ノ社の西へ、高櫓を組め。他の者へも、なお

つぎつぎに命じることとなあるぞ。わしの命もまたず先駆けの功などゆるさぬ。構えて、義経のそばを離るるな」

と、かたく戒めた。

たちまち、沿岸の民家が、あちこちで焼き払われた。火光のなかに、千五百余の人影馬影がみだれあい、「われこそあすは――」と功名を胸に秘して、もうその足場取りから、われ勝ちな布陣であった。

義経はにわかに組ませた高櫓の上に立った。

そばに。また、その下に。

佐藤兄弟、深栖陵助、伊豆有綱、鎌田正近、那須大八郎、金子十郎など、股肱の者ばかり四、五十人をおいていた。

「…………」

夜は明けんとしながら明けきれない。

長い岸波と、瀬々のしぶきだけが、ほの白かった。

焼け潰えた民家の余燼は、遠方此方の芝草に移って火を綴っており、宇治橋をはさんで、楯をならべた陣々は、なお、なにを喚くのか、揺れあい、揉みあい、喧騒してやまなかった。

「陵助、大八」

「は」

「平等院の御内より、太鼓を拝借してまいれ。そして、わしの合図に従うて打ちたたけ」

やがて、郎党たちの手で、それが運ばれて来たころ、うっすらと、川面の波が見えはじめ、波間波間の逆茂木や、張りわたした大綱小綱や、あらゆる障碍物と、対岸の敵陣までが、ほのぼのと視覚にはいった。

木曾方の備えにも「ござんなれ鎌倉勢」と、満を持して待つ昂い士気がうかがわれる。

守るは、木曾四天王の根井小弥太幸親、楯六郎親忠を大将に、部将の進親直、仁科太郎、諏訪光貞、高梨五郎などか。

兵数は、およそ千騎足らず、あきらかに、南岸の軍より少ない。

けれど、ここ宇治川は、京道第一の守りであった。その天嶮は、攻むるに難く、多くの犠牲も覚悟のまえでなければならぬ。――義経はしきりにその小柄な体を望楼の上でうごかしていた。肉疼き血の鳴る思いを包みかねているのであろう。やがて何かそこから味方の上へさけんだ。手のうごきから察するに「喧騒をやめよ。しばし、しずまれ」といっているらしい。しかし、東天の曙を見、対岸の敵を一望にした鎌倉勢は、もう自分らの昂ぶる血と、駒の悍気を抑えきれないものにして、鐙と鐙をぶつけあい、坂東訛りの喚きをあげて、凄まじい殺気を水際へ向けているのだった。

「太鼓、大八、太鼓を打て」
義経の声を耳にし、那須大八郎は、力のかぎりそれを打ち鳴らした。鼕々の音に、人馬の喧騒はやっと止み、千五百騎の兜の眉びさしが、一せいに、高櫓の上をふり仰いだ。
義経はそこから大声でいった。
「鎌倉殿の御家人の名を恥ずかしめず、その家子、舎人、雑色まで、名をあげ、功を立つるは、この曙の下にあるぞ。他人に劣るな面々」
すると、万雷のような声が、弓をあげ、長柄をあげて、かれにこたえた。顔の一つ一つが「いうにやおよぶ」と、かがやいた。
義経は、またいった。
「騎馬の将は心して、深瀬浅瀬を、よう見極めよ。まず、手勢のうちの剛なる徒士を瀬踏みに先へ河へ放て。——必定、敵は瀬踏みの者を狙うて一度に射浴びせん。敵の矢筈をそろえて待つものおよそ七、八百騎は見ゆるぞ。また、打物取って猛き者は橋口へかかれ。橋の桁を渡りつとうて、敵へせまり、敵の射手をかき乱せや」
ふたたび、川波も逆巻きそうな喊声がわいた。豆相の武者には水練の達者が多い。物具脱いだ男が、鎌、長巻、熊手など持って、諸所の渚からしぶきとともに川へはいって行くのが見えた。
乱杭、逆茂木へ蜘蛛手とかけてある太綱は、かれらの刃で、乱離と切りひらかれて行

ったが、矢は雨と降りそそぎ、早くも多くの犠牲が、綱や杭と一しょに流されてゆく。見かねたものか、われを忘れて、櫓の下から伊豆有綱、深栖陵助などが馳け出そうとするのをみとめ、義経がきびしくしかった。

「やっ、有綱、どこへ行く」

「おゆるしください。いささか、水練の覚えもある身なれば」

「たれが命じた。ならぬ、ならぬ。それよりは、大事な役へおことらを差し向けん。吾野余次郎、江田源三、横山相模介、その余の者もみな馳け向かえ」

「はっ、どの攻め口へ」

かれらは、奮い立った。

義経は指さした。遠い上流の方をである。

「ふしぎや、一艘の柴舟も見あたらぬ。察するに、敵は上流の見えぬ岸辺に柴舟を集めおいて、わが騎馬勢の渡河と見るや、いちどにそれを解き流して、馬の泳ぎを妨ぐる計かとおもう。おことらは、上流へ急いで、味方が馬を乗り渡すとき、妨げなきようにいたせ」

もちろん、かれらは服従した。主命、否やのいえるはずもない。けれど、情けなさは、どうしようもなかった。今し千載一遇のときではないか。眼前、晴れの戦場ではないか。それを後ろに、いずれは、狩り催された土地の土民や雑兵に過ぎまい柴舟流しの群れなどを追いくずしに向けられるとは——と、どの顔も思いを唇にむすんで馳け

た。

するど、うしろの方で、敵味方、ほとんど一つ声になって、わあっと、どよめくのが聞こえた。

かれらは、何事かと、振り向いた。

――見ると、平等院の東北、橘の小島ケ崎の辺から、遠目にも華やかな武者二騎が、宇治川へ乗り入れて、川幅の半ば近くにまで泳ぎ進んでいた。いやすでに、川面は先陣を競う全軍の騎馬武者でけむっていたが、人といい、馬といい、わけてその二騎が、敵味方の眼をあつめたようだった。

「おお梶原殿だ。一人は、梶原源太景季殿らしい」

「一騎は、佐々木四郎高綱殿よな」

「馬は、生唼、磨墨」

「さてこそ、途中の駿河路で、二人の意趣沙汰も聞こえていた。これや見ものぞ」

「なんの、ひと事。ただ見ているしかないおれたちの心の駒は、どこへやるのか」

「見るも癪。急ごう、急ごう」

かれらの一群は、上流の朝靄にかくれた。そのためか、柴舟は流されて来なかった。同時に、その日のかれらの働きも、宇治川の華々しい表面には、名すらどこにも聞こえなかった。

花筏

渡河は一せいに行われた。
敵前渡河である。
かの平等院の太鼓は、高櫓から義経のくだす総攻撃の命を、「今ぞ」と全軍へ告げていた。
〃――水早く、瀬は滝り落ち、底深し〃
といわれる宇治川もなんのその、どっと、おどり入る馬群のいななきと白波の狂いに、渚は一ときけむり立った。
日ごろ自慢の逸駿にものをいわせ、先陣の誉れを期していたものは、もとより佐々木、梶原の二騎だけではない。
秩父、児玉、丹、横山の諸党をはじめ、足利、千葉、三浦、伊豆、駿河の党や高家の面々も、なんで他人に譲るものであろう。「おくれはせじ」と馬を泳がせ、「きょう一番の高名をこそ」と、心に誓わぬ武者はないのだ。
だが、水馬の陣には、おのずから法がある。
――騎者はおのおの戦列を組み、強い馬は弱い馬を助け、馬が疲れたら、武者は鞍つぼから乗りさがって、馬の背に水を通し、馬の負担をらくにしてやるがよい。

もし、おぼれかけた味方を見たら、弓をさし伸べて助けてやれ。敵の矢かぜには、射向けの袖を翳してうつ向くがいい。河の中では、射られても射返すな。他人の馬にわが馬をもたせかけて、二人とも押し流されるなどは醜い。ひとえに水の性情に従い〝流渡〟に渡すべきである、というような心得だった。

で、全軍が川へ乗り入れた初めのうちは、見事に約束が守られて、馬と人との一体が、幾つもの隊伍を組み、それがまた、幾段にも分かれて戦列を押し進めてゆく状は、さながら無数の花筏がただよい浮かぶようだったが、たちまち、

「――あっ」

と、矢にあたったか、一瞬に、血の泡沫と消え去る者、

「しまった」

と叫びつつ、馬の脚を川底の綱に取られ、馬もろとも、ぐるぐる渦にまわされて、おくれる者、

「やあ、弓を伸ばしてくれ、武士の情け」

と、弱馬のため、おぼれて助けを乞う者など、まだ川幅の半ばにも達しないうち、はやくも水は紅を流し、花の筏も乱離となって、矢風の前に、かぶとの眉庇も上げられなかった。

まして他をかえりみているひまはない。法も約束も、生死の境では守りきれなかった。矢にあたるも運、おぼれるも運、助かるも運。前後左右、運か奇蹟かに漂わされて

いるだけのものに見える。
　運づよく、度胸もあるなら、徒士でも、深瀬は泳ぎ、浅瀬は水を分け、騎馬より前へ出て、矢にもあたらず進んでゆく豪の者さえなくはない。
　さらには、また。
　橋梁の骨ばかりな宇治橋の上を、これは、もとより徒歩で、馳け渡ってゆく捨て身な武者たちも望まれる。
　むろん、そこも烈しい矢ぶすまなのだ。怯めば的になり、進めば木曾勢の鉄壁にぶつかろう。見るまに、川へ落ちゆく者、這うて行く者、屈む者、それを跳びこえて、面もふらず躍りゆく者など、さまざまな勇姿の中に、名のりの声が、
「武蔵の住人、平山武者所季重」――と聞こえ、
「渋谷右馬允重助」
「猪俣小平六」
「糟谷藤太有季」
「熊谷次郎直実」
　と、呼ばわり呼ばわるのが、阿修羅の叫びを思わせた。そして直実のあとには、
「直実が一子、小次郎直家」
　と、年端もゆかない可憐な声まで交じっていた。

陸上の名駿も、水馬の駿足とはかぎらない。
それに、なお雑多な障碍物も、浮游しているし、中央ほど水勢はつよく、おびただしい落伍や犠牲者を見ながらも、河中の戦列は、苦闘を極め、ようやく、川の半ばにあった。
さきに、橘の小島ケ崎から乗り入れて、斜め斜めと流れを切っていた梶原、佐々木の二騎も、競い絡まる味方の馬群にさまたげられ、たれがどこやら、姿もわからないほどだったが、やがて、水面から首を上げている無数の馬の、どの首より前に出て、ただ一騎、巧みに水路をひらいてゆく者があった。
「や。あれは佐々木ぞ、馬は生唼」
後ろで、それを見つけた梶原は、おもわず鞍の前輪にのめった。無二無三、馬を泳がせようと焦心ったのだ。馬は鼻面を水にしとませ、平首を大きく振って、いなないた。
「しまった」
乗り損じに気付いたかれは、あわてて自分の腰を、馬の三頭(尾の付け根)まで乗り退げた。そして、甲冑の重さを、半ば水の浮力に逃がしながら、逸る心を沈め、手綱も寛やかに「ちっ、ちっ、ちっ……」と唇を鳴らすと、磨墨はほかの馬列を見事離して、生唼のすぐ後ろまで迫って行った。
前の高綱は、振り向いて、
「おう、来たな、梶原」

と、これも必死に水馬の手練をつくした。
けれど馬にも大胆と小胆があり、水に不得手なのと得手なのとがある。泳ぎにかけては天性磨墨の方が勝っていたのであろうか。ざ、ざ、ざ、と一馬身、また二馬身ばかり、磨墨は生唼を追い越した。
「やあ、梶原殿、梶原殿」
高綱は、あわてて呼び止めた。
なぜ呼んだか、なんの考えもない。ただ、「残念」と心が叫び、とっさに、頼朝の前で約した広言があたまをかすめた。いわば必死の出まかせだった。
「さすがは迅し、見事だぞ梶原殿。だが、余りに急いて鞍踏み返すな。敵にも味方にも笑われぬがいい」
「な、なんだと」
「それ、気づかれぬか。和殿の馬の腹帯が弛んで見ゆるに」
「あっ、そうか」
景季はすぐ手綱をつめ、弓の弦を口にくわえ、鐙のぞきに身を横へかがめた。しばし、流れの中にたゆたいながら、腹帯を締め直すのだった。
――が、「弛むと見えるほどには、弛んでいないが」といぶかって、咄嗟にはっとしたが、もう遅かった。
高綱はそのすきに、さっと、先へ泳ぎ抜けている。「欺かれたり」と、景季も覚った。

氷のような川水に、無知覚になっている満身も、憤怒にカッと熱くなった。何か意味もなさず、われにもあらぬ悪態を、二た声三声、かれは喚いた。

だが、その耳に応えてきたのは、

「佐々木四郎高綱、宇治川の先陣。きょうの先陣は、近江佐々木ノ庄の四郎高綱っ」

と、敵味方へ、誇りを謳う大音声であった。

「しゃっ、してやられたり」

と、景季も、そこの岸へ、滝のような飛沫とともに躍りあがって。

「二陣、梶原源太景季」

いかにも、無念そうだった。

梶原の不覚にも増して、後に惜しまれたのは、畠山次郎重忠である。かれも、秩父鹿毛に乗って、ひそかに、先陣を狙っていた一人だった。ところが、不運にも、馬を射られておぼれ沈み、前後の人びとは「あれよ、畠山殿、流れ失せぬ――」といい合った。

しかし重忠は、浅瀬に弓杖ついて息をつき、ふたたび水を潜り、瀬をさぐって、対岸へ近づいていた。

するとまた、射られた死馬につかまったまま、赤縅しの鎧を着た男が流されて来た。重忠を見て「助け給え」と、悲鳴に似た声を出すので、重忠は、

「うろたえ者かな。死馬は泳ぎもせぬ。死馬を離せ」
と、しかって、そのえりがみをつかみ止めた。
赤縅しの男は、緋鯉のように水中を重忠の腕に引きずられながら、
「やれ、かたじけのうござる。なお願わくば、それがしの身を、敵の中へほうり投げて給われい」
と、いった。
「虫のよいやつ。名のらば、投げてやる。名は」
「投げて給うなら、名のり申す」
「剽げた男よ。こうか」
また五、六間ほど水の中を歩いて、すでに近しと見えた岸へ、「えいっ」とばかり、その男をほうり上げた。
男は鞠のごとく宙へ身をまわし、岸の上にぽんと立つやいな、太刀を抜いて、眉間へ真っすぐに当て、大真面目に、
「武蔵の国の住人、大串次郎、宇治川徒歩渡りの先陣」
と、大声で名のった。
どっと、敵も笑い、味方も笑ったので、大串は勝手を失い、またあわてて、
「——徒歩渡りの一陣は、畠山次郎重忠殿。二陣、大串次郎っ」
と、いい直したという。

それも後の語り草であったが、もっとも印象的だったのは、橋桁を進んだ徒士武者中のひとりである。熊谷直実その他の猛者をも尻目に、金地の軍扇をひらいて、はらはらと高くかざしながら、先頭に馳け出してゆき、そのまま敵の中へとびこんで、
「橋口の先陣は、武蔵の住人、平山武者所季重。かくいう平山の小冠者ぞ」
と名のりをあげ、ただちに、むらがる敵と斬りむすんでいた姿だった。
――その平山につづいて。
橋口の二陣は、熊谷直実父子、三陣は庄五郎広賢と聞こえた。
そのほか渋谷、猪俣、土屋などの将士も混み渡って、木曾陣の一角を突破したころ、もう北岸一帯は敵味方、まんじの接戦となっていた。――そしてまた、大将義経も、一群の甲冑のなかに口輪を並べ、すでに川の半ばを進んでいた。

この朝、木曾方の主将の根井小弥太幸親は、靄の晴れ間に、東国勢の旌旗をながめて、
「敵ながら、まこと見事。さすが掟のある軍とは見えたり。大将九郎御曹司とやらの人柄もほぼわかる」
と、つぶやいたという。
防禦の兵力は初め約三百。その後、義仲からの加勢も来たが、それでも、寄手の三分の一以下である。

けれど、宇治川の険を恃みとするばかりでなく、なお必勝の望みがかれにないわけではなかった。
「もし敵が、川へ馬を乗り入れなば、その時こそ、敵の最後ぞ」
と、ひそかに、河中の殲滅を、心にえがいていたのだった。
——というのは。
つい二日前に、河内の石川城を陥して、士気さかんな友軍の樋口兼光から、「河内の兵は、野に潜ませておき、東国勢が宇治川へかかったとき、にわかにその後ろを襲って、義経以下を、川の半ばでみなごろしにせん」と、いって来たからである。
ところが、どうしたのか。
佐々木などの敵の渡河勢が泛び出しても、橋口の守りが危うくなっても、対岸に樋口の急襲隊が現われた様子はない。
「はて。いかがしたか」
幸親は、ようやく、焦躁し出した。
かれのみでなく、楯親忠、進六郎、仁科、諏訪、高梨などの部将もそれぞれに、
「いかがせしぞ。樋口ほどな者が？」
「よもや、事の前に、討たれもしまいに」
と、心をみだし、そればかりを、気にしていた。
その南岸の一端には、万一の奇襲に備えるかのように、義経と直臣の一軍が、まんま

るになって、さいごまで居残っているのが見られた。──そして、その義経たちも、駒をならべて、渡河して来たときは、もう、木曾全陣がみだれ立って、
「踏みとどまれ」
と、励ましても、
「恥を思え」
と叫んでも、潰乱また潰走を起こして、東国武士の馬蹄の前に、さんざんな敗北をさらしてしまった。
義仲の従弟の長瀬判官代義員とか、幸親の郎党藤兼助などの必死な奮戦も、こうなっては、もののかずではない。
勇なる者ほど、みな、討死をとげた。
すべて、奔流のまえの、芥に異ならなかった。方向さえ定めなく、八方へ逃げ争い、根井や楯の主将も、しばしば死地に陥ちかけた。そして心には「さいごの日は来た」と知り、「よい死に場所をこそ」と念じるのだったが、
「都の内の義仲公こそ、心許ない。木曾谷以来のお主、その御先途を見とどけないでは」
と、心残りにひかれて、血路をひらいていたのだった。

添い寝盗み

宇治川や瀬田の防ぎへ、主力のさいごのものまで、分散してしまったため、義仲の身辺には、わずか二百騎足らずしか残されていなかった。

「心細さよ」

と、木曾谷以来の強兵たちも、そぞろ、どこやらに落寞な影を湛えている。

しかし、十九日の夕、つまり宇治川敗れの前夜、義仲はなお強気だった。

情痴や酒の惑溺から立って、身に迫る戦気に吹き醒まされると、この天然の武人は、人間がちがったように、

「負けない。負けはせぬ。頼朝の代官ごときに」と、勝負の妄執に燃えるのだった。

その宵、巴にむかって、

「心をいたむな、士気を衰えさすなよ、巴。おれには勝算もある」

と、五条の館と一部の兵を、かの女にあずけ、自身は院へ赴いて、法皇の守護に当った。いや、監視の肚である。

前線、宇治川の急へも馳け向かわず、義仲が洛中に逡巡していたのは、冬姫への未練だけではない。

法皇の御策動こそ、油断ならじと、思ったのだ。日ごろの御言質も、信用はできない

し、このどさくさでは「――眼は離せぬ」と、考えたからである。
もしまた、最悪のばあいには、御意志に反いても、御輿に迎え、北陸へ奔るつもりなのだ。それを邪げる側近などをも、一と睨みにして遂行するには、おのれ以外の者ではできない芸だとおもう。――それもあるし、あの冬姫も連れて行きたい。――あれやこれ、義仲の心は乱打の鐘をついていた。
――とはいえ、なお、良い方に良い方にと、かれは一刻一刻を、観測していた。
瀬田へせまる蒲冠者範頼へは、伊賀方面の味方――大夫坊覚明らが――途中を撃つなり、追躡して、必ず脅やかすことであろうし、洛中からは、今井兼平をやってある。まずこの口が、にわかに敗れるはずはない。
さらに、宇治川方面は、より以上な天嶮である。
頼朝の弟、九郎とやらも、わが四天王の根井や楯のような、百戦錬磨の将ではあるまい。
それに、秘策もあることだった。
義仲はむしろ、敵の渡河を望んでいる。――敵を川へ誘いこんで、うしろを不意に、樋口兼光の伏兵が襲う。そして、義経以下を、河中で殲滅するという計だ。この案には「妙計、妙計」と、ひとり手を打ったものである。
けれど、さすが十九日の夜は、落ち着かないふうだった。自身、院の裏表を巡視したり、内門の辺りから、もっと奥まった御幽居の庭なども、跫音を忍ばせつつ見てまわっ

た。

　すると、深殿の廊の妻戸がすこし開いた。そして、外を怪しむかのように、臈たけた女房がその白い顔を半ば見せた。

「……？」

　庭面の人影に、びくとしたらしい。すぐそこを閉めかけた。義仲は、法皇の寵姫、冷泉ノ局と知ったので、

「世間、物騒がしきまま、まだ御寝に入らせ給わぬのですか」

と、ことばをかけた。

「いえ……」とかの女はぜひなげに、答えた。「こよいも、お上の御気色がすぐれませぬゆえ、小女房たちを起こし、お煎薬を火にかけておりまする」

「いつも御不予と聞くが、またいつも、さしたる御容子もなげに拝される。番の郎党どもは、御仮病ならんといっておるが」

「御幽居の外へは一歩も出で給わぬお上。たれが、まことを知りましょうや」

「真を知る者は、あなたか、基房公しかない。しかし、もっと真実を御存知なのは、院御自身でおわそうが」

「そうです。世の様やら、ままならぬお身を喞って、つねにお食もすすまれぬため、自然、宿痾に悩ませ給うのでございましょう。かかる都に住むよりは、いっそ、義仲が赴かんという北陸とやらへ宮居をかえ、しばし、世を避けていたら、どれほど、寿命もの

びようにと」
「たれに、そのような御述懐(ごじゅっかい)を」
「わたくしのみには」
「はて、うけとれぬが？」
「ま。お疑い深い大将ですこと」
冷泉ノ局は、あわれむような笑(え)みを見せて、そこの妻戸を閉めてしまった。
──さっきから、もれていたものだが、かの女の姿がかくれてから、義仲は気がついた。薬湯(やくとう)を煎(せん)じるあのつよい匂(にお)いである。それと、幽所のしずけき無異状とをながめあわせて「まずは無事」と、安堵(あんど)したらしい。やがてかれも、人なき下屋(しもや)の床(ゆか)にはいって、野陣に馴れた仮寝の寝ざまを横たえた。
そして、思いのほか、ぐっすり寝こんだ。
いや、かれ自身には、短い間にしか思えなかったろう。やがてかれは、がばと跳ね起きていた。夢かと疑うような眸(め)である。だが、眼の前に笑っている人間がいた。たしかに、その者が、自分の体に触れたにちがいなかった。ゆり起こされたのではなく、呼ばれたのでもない。寝ている自分へ頬をすりよせて来、腕をまわして、添い臥(ぶ)していたのである。
「こ、この物(もの)の怪(け)めが」
思わずかれはどなった。

坐したままだが、無意識に、手は太刀をにぎっていた。
一個の小柄な雑兵である。
手の甲を唇にあてて、姿態、おかしげに、
「ホ、ホ、ホ、ホ。物の怪とはあんまりな……。殿、わたくしはまだこの世の者ですのに」
と、いって笑いぬいた。姿は雑兵だが、その嬌笑も、くるりとした眸も、あの山吹ではないか。義仲は、声も出なかった。
「——巴さまに追放され、羅生門の外へつき出されました。あれは、二た月も前のこと。殿もご存知でございましたろう。ただの女でしたら、きっと尼にでもなったかもしれません」
山吹は、しずかにしゃべり出した。
義仲が眼をすえたまま、何もいわないでいるのを、むしろ好むようなしゃべり方だった。
「……けれどわたくしは、尼の生き方なぞ知りませぬ。女子の一念だけに生きる女です。巴さまにも、葵さまにも、それをいい切っておりまする。わたくしは、わたくしを愛して女として給うた殿を、鬼よ妄念よといわれようが、どうしても、忘れることができません。自分の体を殿へ捧げきった代りに、殿も、自分のものにせずにはおかぬ。

……そのように、いったのです、一念がいわせたのです。追放されたとて、殿への想いは募りこそしても、薄れはしませぬ」
「山吹、山吹」
「なんです」
「いったい、そなた、何しに、来たのだ。時も時」
「お供をいたしに参りました」
「供をしに」
「はい。もう戦もだめなのでございましょう。――いかに、殿がお強うても、あと幾日のおん命かと、羅生門に巣くう浮浪どもも申しますし、町の声もみな申しておりますもの」
「…………」
「不吉なと、おん眉をおしかめですか。だって、これが御運ならば仕方もありません。いいえ、殿はもうお胸では、きっと、お覚悟なのでしょう。華々と、死出の御陣のお身支度はなされているにちがいない。……そう思うて、あの世の旅に迷れぬよう、お側に参ったのでございます」
「では、そなたは、おれが最期となる日を、待っていたのか」
「だって、わたくしのような賎の女には、そうするしか、殿を自分のものにする道はありませぬもの。――生きている間の殿は、しょせん、冬姫さまのような高貴のお方のも

の。巴さまのような賢い御内室のもの。山吹などには手も届きません。……ですから、殿が何をなさろうとただ見ていました。わたくしの愉しみは御一しょに死ぬことだけです。死んでから先は」
「ちっ、魔性め。おそろしい魔女だ。そちというやつは」
「どうしてです。もし、わたくしという女子がいなくても、殿の今日の滅亡はまぬがれてはおりますまい。けれど、山吹が殿にあんなことをされなかったら、わたくしはまだ何も知らない乙女でいたにちがいありませぬ。木曾の殿こそ、魔ものでした。この山吹にとっても、故郷の人にとっても」
「ま、まだいうか」
「いいます。いま申さなければ、この世で語るときはない。故郷では、山吹にも、初恋の人はあったのです。親もゆるした嫁入りのたった二日前に、木曾衆の侍が来て、わたくしたちを、女兵の屯へ狩り集めてしまったのです。初恋の人も、兵に召され、それきりどこの戦で死なれたか、きょうまで会わずじまいでした。あげくのはて、伏木のお館では、殿に、あ、あんなことを……」
山吹は嗚咽し出した。なんとも激越な泣き顔である。涙を飛ばして口走るのであった。
女奴隷の宿命も、その卑屈感の習性なども、かなぐり捨てて、一個の凡の男へ、喚きかかった血相なのだ。義仲は何かぞっとした。

巴の恐さ、葵の恐さ。冬姫の恐さ。それらの女の種類が持つそれぞれの恐さともまったく違うおそろしさである。
義仲は思った。「これは夢だ。夢でもなければ、山吹が、こんな大胆なことを、自分へいえるわけはないし、また自分が、かかる恐怖を覚えるはずもない。たかが女兵の小むすめではないか。女奴隷ではないか」と。
しかし、どうにもならないふるえが、かれの歯の根を鳴らした。意志も体も縛られた人間のようでしかない。その蒼白な面は、ただかの女の怨嗟をあびるためにかの女の前にあるようだった。
──いうだけをいって、やっと、嗚咽をおさめると、山吹はまた前のしずかな小声に返って、
「殿、殿。お怒りにならないでくださいね。ほんとは、どう悶えても、山吹は殿が好きで好きでならないのです。──こよいは、最後の御愛撫を賜うてほしいものと、宵のころから、殿の影を慕いまわしていたのです。それも、命がけでした。そのうちに、おりようここにおやすみになったので、この世での、さいごのお添い寝を、盗むように愉しみました。思いのこすことはありません。……あとはただ、殿と一しょに、枕をならべて、戦場で死ぬばかり……。ああ、愉しい。わたくしにとっては、愉しい日が近づいた」
半ばは、ひとりごとに、夢みるような眸でいう。

義仲はその妖気に挑発されたかの如く「しゃつ」と満身の大声を弾き出すと、片ひざ立てて、抜き浴びせに太刀のさやを払った。太刀のえがいた光のなかで、ひっとかの女の声が斬れた。
だが、山吹の影は、妻戸のそばへ跳び退いていた。やみの中で光る小動物のような眼が、しばらく、自分の逃げたあとを、見すましていたが、
「いやです。殿と御一しょでなければ、いや」
かすかに、顔を振った。後ろ退りに、妻戸をあけ、そのまま、そうと外へ行こうとする。
「待てっ、山吹」
追っかけて、義仲も外へ出た。
外は、有明けの寂としたほの白さだった。まだ、物蔭は暗いが、いつか、二十日の朝を空は告げている。そして、かの女の影は、どこにも見えなかった。
「……おう、もう院の御勤行か」
いかなる朝でも、院の持仏堂に、後白河のおつとめの鐘と読経の声がしない朝はない。かならず暗いうちにである。
義仲の耳の一方にはまた、戞々と一群の馬蹄が近づいて来るのが聞こえた。それは南の門の篝火屋の辺に来て止まり、何か、騒然たる武者騒めきをよび起こしていた。
「……や。宇治川よりの早打か。瀬田の早馬か」

義仲は、われに返った。
かき消えた女など、一場の悪夢にすぎない。過去に悪夢をもたない人間などがあるものか。
しいて、かれは一笑に附した。いや、外の戦気にふれたとたんに、皮膚の毛孔から自然、霧消し去ったかのような眉でありその朝の顔だった、太刀、草摺の音など、鏘々と、身にひびかせながら、南門の方へ、大股に歩いて行った。

妻なりしもの

「いまの早馬は、瀬田の飛脚か、宇治川よりの使いか」
南の門へ出て義仲がこう訊ねていると、武者騒めきの中で「いや。早馬には候わず」と答えつつ、物井五郎、落合兼行などが早足に来て告げた。
「淀南方のお味方が、敵に不意をつかれ、傷負いどもが、逃げ争うて来たものでございます」
「なに。淀の味方が馳け崩されたと」
義仲は自分の耳を疑うように――
「では、敵の九郎の軍勢は、宇治川へ向かわずに、淀の南へまわって来た様子か」
「それとも思われませぬ。わずか三百騎ほどな小勢であったと申しますゆえ」

「ではなんだ。その三百騎は」
「おそらくは、敵の本軍とはべつな、隠し勢ではありますまいか。河内路から疾風のごとく馳け来って、いきなり野営の眠りをつき、味方は打物取るいとまもなく、撃ち破られたものの由」
「はて、解せぬことだ。逃げてきた傷負いどもを、すべてここへ呼んで来い」
それらの者から、義仲はなお直接、実状を訊きとった。
が、かれらの衆口も、さきの話と大差はない。ただ敵の中には、武蔵坊弁慶と名のる僧形の武者や、伊勢三郎義盛と名のった武士がいたということが、義仲に初耳だった。
しかし、弁慶という名も、伊勢三郎なる者も、義仲にはなんのひびきもない名である。ただ「それも九郎の郎党よな」とは、すぐうなずけた。
とはいえ、かれの胸は、穏やかでない。
作戦上、淀は重視していなかったのだ。ただ万一の平家にたいし、西方を開けっ放しにしておくわけにゆかないのと、一方、河内の遊軍樋口兼光への後詰にもと、志田義広へ百五十騎をさずけ、念のためおいた一軍にすぎないのである。
まだ前線の戦闘も聞かないのに、いきなり味方の後詰へ敵が潜行して来たのは、何を意味するのか。
「さては」
あるひらめきに衝かれると、かれは、愕然と、足踏みをあらためた。

「――樋口があぶない」
思わず口走った。
情痴なかれだが、しかし戦略に暗い愚将ではない。
敵の九郎は、さかしくも、おれの策を読んだなと、観たのである。河内平野にわが伏兵がいるのを偵知し、宇治川をあとにして、先に、伏兵の殲滅へ、全力を傾けて来たのではあるまいか。
「そうだ。樋口を助けねば」
不安がかれの眉を翳らす。
だが、院と五条の館をあわせても、手持ちの兵は二百ほどしかない。かつは、院の監視をすてて自分がここを離れる気にはどうしてもなれない義仲だった。事態、どうあろうと、法皇の御座は自分がじかに見ていなければ何か不安にたえないのである。
「巴をよべ。あれを加勢にやろう。いや待て、おれから命じる」
森隣りのわが館へと、義仲は自分で馳けた。
そして巴を呼びたて、
「おれに代って、すぐ樋口の加勢に急げ」
と、いいつけた。
たった今、巴もそれを耳にして、志田義広や兄兼光の生死を案じていたところであ

る。
　覚悟も、装いも、できていた。
「うけたまわりました」
　笑顔でうけて、すぐ郎党中に触れ、広場の馬出しへ馬をそろえさせた。
　日ごろ、すまないと思っているものが、この期となって、ありありと、良人の眸に、涙なく、あふれていた。
「駒は良いのを持てよ。身支度はそれでよいのか」
「はい。夜のうちに髪も洗い、都人のするように、よろいの袂に、香なども焚き染めておきました。いつ敵にまみえてもよいようにと」
「おう、さすがだ」
「久しぶりのお褒めをいただき、何やら、うれしゅうございます。これで思い残しもないような……」
「物井五郎、落合兼行、余田次郎など、屈強な者も、あらまし引きつれて行けよ。――あと、院の守りには、五、六十騎も残しておけばよい」
「いえいえ。それほどには及びませぬ。大将軍ともあるあなた様の御左右が、それでは、余りに少な過ぎましょう。いかにつらい戦となっても、御容儀にもかかわりまする」
「なんの、たとえ小勢になろうが、あとには一騎当千の輩のみだ。それよりは、樋口と

志田を力づけて、思うさま東国勢を馳け悩ませよ。宇治川までも追い落せ。根井幸親らが、手ぐすねひいて待っていよう」
義仲は励ましたが、しかしこれはまったくかれの作戦の読み違いであった。すでにこの暁から陽の高きころには、かれの怚れる義経の本軍によって、宇治川の先陣が争われていたのであるから――。
義仲がそれを察しきれなかったのは、諜報不足のせいだった。手薄のため、大物見も出せないし、伝令を待ついとまもなかったのである。
その不備から、義仲は、敵の義経が、前夜、弁慶と伊勢三郎に三百騎を附して、富野ノ庄から河内方面へ放ったものを、義経の主力のうごきと早合点し、いわゆる考え落ちしたものだった。
「さらばです、わが殿」
――やがて巴は、馬のそばへ寄ってゆき、あぶみを前に、もいちど、良人の姿を振り向いた。
薄化粧した顔の、どこやら、かえって淋しく、しいて笑みを見せたのが、義仲の胸をずきんと痛くした。
――ひょっとしたら、これが今生の別れかもしれない。
巴も思い、義仲もふと思った。
生きものであるからには、いつかはたれもが必ず身に知る別離の日を、その朝、二人

はおたがい長き年月を見馴れて来た姿ながら、特に眸をあらためて見合うたのであった。

巴のりりしい姿が、馬出しの門から馳け去ってゆき、将士のほとんどもまた、五条を出払ってしまうと、あとの館はまるで空家のしじまであった。

それに似たものが、義仲の心にも、大きな洞(うろ)となって残った。

否みようもなく、何かが自分から引き裂かれた感じである。人間のおかしな馴れだが、多年の妻を、とつぜん、意識にしたものであった。そして、それも自分の心や肉体の一部だったことを、巴が去ってから、義仲は退潮(ひきしお)のあとの砂地におかれたように気がついた。

「はて。おれとしたことが」

かれは、妻へ詫(わ)びたくなった。――ひと言、それをいうのであったと臍(ほぞ)を噛(か)んだ。

――自分がたまらない不完全な良人であり父であったと思わずにいられない。無性に淋しくなり、何かを思い探すように、津波田三郎丸(つばたのさぶろうまる)、中太能景(ちゅうたよしかげ)などの郎党をかえりみて、

「きのうから、酒の気(け)を忘れていた。酒をさえ忘れたとは、おれとしてないことだ。中太、かしこの広廂(ひろびさし)へ酒瓶(さかがめ)を置け」

と、にわかにいいつけた。

病鏡

院の森には炊ぎの朝煙がけむり始めている。大膳職の上にも望まれ、将士も朝の兵糧を取るらしい。義仲はやがて、ひとり広廂の大床にすわりこんで、中太が供えた酒を手ずから酌いでは、あおっていた。

その間に、瀬田から二度、伝令が来た。

「よし」

巴の影が抜けた心の洞へ、かれはあわただしい酒を流し入れて、ようやく、壮気を五体によみがえらせた。

「瀬田の防ぎは、今井兼平。夜前、加勢も増してある。よも、その口は破られまい」

さらに、幾杯。

まもなくまた、早馬が来た。

宇治からである。宇治の第一報だった。

「待ちかねしぞ」

と、使いを階下に引いて、

「どうだ、宇治川の備えは。敵はまだ対岸に影すら見せまい」

「なんの、鎌倉勢二千騎ぢかく、はや川向こうの平等院のあたりに陣し、夜半ごろか

ら、近くの民家を焼き払うておりまする」
「な、なに」
義仲は乗り出した。
手から落した土器が、ひざから階の下まで、ころころと、ころがって来て砕けた。
「そちは、宇治川の陣所をば、いつごろ、立ったか」
「丑ノ下刻（午前三時）でございました」
「対岸へ来た敵とは、敵の本軍ではなかろう。一部の小勢が見えたのとは違うか」
「深夜のこと。さだかに見えもいたしませぬ。したが火光にひらめく旗の数、水にひびく武者声などからも」
「たわけよ。小勢を大軍に見せるぐらいは、やさしい芸だ。かつて、倶利伽羅の合戦では、おれも擬勢は用いておる」
「いずれとも、まだ、その辺の儀は」
「よしよし。次の報らせを待とう」
そういったものの、それからの義仲は何か落ち着ききれなかった。安からぬものが心をたたく。
——ままよ。いよいよのばあいには、法皇をうながし奉って、院にも、この館にも、火をかけて立ち退くまでのこと。
平家も都落ちしたが、今や西国で盛りかえしているではないか。

たとえ、北陸へ落ちようが、法皇をさえお連れ申せば——と、ようやくいきり立つ酒気が自暴の快をさえそそるのだった。

「そうだ。いよいよ、かの法皇(きみ)に、眼は離せぬ」

ふいに身を起こしかけ、そして、立ちよろめいた。

しかし数歩にして、平然たるかれに返っていた。ずしずし奥の方へ歩いてゆく。いずれは焼き払う家、秘蔵の物は肌身にとでも考えたか、いちど、日ごろの居室へかくれた。そしてまたすぐ、うす暗い壁の間をもどって来た。

——すると、たれか、暗がりから、かれのよろいの袖をつかんだ者がある。

ぎょっとして、身を斜めに振り向いた。

同時にかれの腕が「たれだっ」とばかりその手を払ったが、木の枝を打ったような感じでしかない。袖の重みは離れもしなかった。そして局口(つぼねぐち)の簾(すだれ)だけが、がたと揺れた。人の影は、うす暗い簾の内にあるのだった。

「……あっ、葵(あおい)か」

「そうです。……でも、まだお忘れではございませんでしたか」

「おう、まっすぐにいおう。おれはときどき思い出すほか、そなたのことなど、正直、忘れていた。いまも忘れていたらしい」

「そうでございましょう。巴さまやら、執念ぶかい山吹やら、それに冬姫の君までおあ

りですから」

「そなたは、病み伏したきりなのに、冬姫のことまで、わきまえているのか」

「心だけは、針のようでございますから」

「ならば、告げずとも、義仲の運命もまた、よく分かっていよう。武者三人ほど附けてやる。いまのうちに、輿にでも乗って、どこへなと行け。落ちて行け」

「それほどならば、とうに、ここにはおりません」

「でも、まもなく、この館にも、火がかかるぞ」

「火や水がなんでしょう。そんなものを女は怖れもいたしませぬ。怖れるのは、殿と離れ離れになることです。……殿、葵もやがて後から御陣へ馳けつけましょう。過ぎし年、浅間の戦場を馳けたように、千曲の河原を、殿の駒と、わらわの駒で、敵勢の中へ馳け入ったように、どうぞ、最後の御馬前を仰せつけくださいませ」

「ばかな。そのからだでは、起ちもえまいに。あらぬ夢を病が夢見させるとみゆる」

「いいえ、病はひところよりも、はるかに癒えて来ておりまする。けれど、殿にも人にも、いまの姿は見られたくありません。見られるのがいやなのです。そのため、昼も局の蔀をおろしているのでした」

「それは、なぜだ。どうしてぞ、葵」

「あっ……。おはいりになってくださいますな」

かの女は、あわてて簾のすそを抑えた。そのまま、かなしげな面を伏せた。

部屋のうちは、一面の鏡らしい物が、帳の辺にほの青く光っているほか、何も見えない暗さである。そのくせ、黒髪の匂いや焚き香らしい漂いが、粘りつくほど面をおそうてくる。

「そうか……」と、うめくようにつぶやいて、義仲は、急に語調をかえた。

「いや、はいるまい。のう葵。伊那へ帰らば、身寄りの者もおろう。義仲がかたみぞ。これなと持って、故郷へ帰るがよい。帰ってくれい」

黄金の笄と、小さな革の嚢とを、ふところから取り出して、簾の下へおいた。

それを見ると、葵は烈しく泣いて、また綿々と恨んだ。

「ちかごろ、殿がわたくしをお忘れになられても、わたくしは、ちっとも、悲しいとは思わずにおりました。わたくしは、殿の男心というものを、知っていますもの。――もともと殿は、戦うだけに生まれて来たようなお人の権化です。ですから、殿にとれば、恋は血に飽いたあとのお遊びに過ぎないんでしょう。わたくしたち女は御陣の野の花と御覧になるだけでしょう。いいえ、そうなんです。おろかなわたくしもさとりました。病がさとらせてくれました」

「おお、また宇治川からの早馬だろう。外の方で駒音がする。――葵、おれはこうしてはいられないのだ。心がせく」

「ちがいます、あの駒音は」

「わかるか」

「東から近づいて来たではございませんか。宇治なれば、南から来るでしょうに」

「ああ、そなたの方が、落ち着いている」

「女はそうです。ただ、女の迷いには、男心の薄さよと知りながらも、なお死ぬならば殿のおそばと希わずにいられませぬ。この期になって、故郷へ帰れの、おかたみなどとは、それこそ、口惜しいかぎりです。お怨みです。こんな物が、女の命の値と思し召すなら」

簾のすそから、かの女の白い手が、いきなり義仲へ向かって、革の嚢を投げつけた。砂金であろう。嚢の口が解けたとみえ、義仲の姿が、金梨地の光に、さんらんと、染まった。

「おん大将、おん大将っ。宇治の様子が知れました。宇治川の防ぎが、危ういとのこと」

そのとき、遠い廊口の明りを人影がふさいで、郎党たちのわめくのが、洞窟で聞く声のように、無人の館をひびかせていた。

動座陣

早馬ではないが、けさ、伏見へ逃げこんで来た柴舟や荷舟の者のいいふらしが、羅生門の浮浪に聞こえ、またたくまに、市中へ撒かれたものだという。

その風説によると、もう合戦は始まっており、鎌倉勢の水馬陣が、川を渡しにかかったとある。
「おろかな沙汰よ。立ち騒ぐな」
義仲は、しいて一笑に附した。
「凡下ずれに、何が分かろうや。伊勢、伊賀の山々を越え、人も馬も疲れたらん軍勢が、夜半に着いて、すぐあの大河を渡せようか」
つよく否定はした。しかし、かれにも反証があるのではない。
ただ、うわさのようには、信じたくないだけだった。
院の四門をかたく閉じさせ、残る六、七十騎を内に配って、義仲自身は、正面の御庭のまん中に床几をすえた。自若と構えた。
陽がのぼる。――春浅い日和となる。
やがて、空腹をおぼえて来たか、
「糧を持って来い。米でも水粥でも」
と郎党へいいつけ、それに添えてきた小鳥の焼いたのを、何羽となく、手づかみでパリパリ食べ、また、
「白湯をくれい」
ともいった。
それらの間も、決して、床几を離れない。

たえず、何かに眼をはたらかせていた。

ながめやるに、法皇の御幽居にあてられている寝殿、対ノ屋、泉殿、添屋、中門廊、車宿、舎人屋、大膳職、釜殿など、どこからどこまで、人なきように、しいんと、潜まりかえっている。

時間としては、いくらも経過していないのだが、やがてこの物音もないしじまと無為に、義仲は、たまらない惰気にくるまれた。

酒のせいとかれは思っていない。

しかし、まもなく、それを破るものが来た。根井幸親からの第二報である。宇治川の苦戦の状を告げ、加勢を送れといって来たのだ。

来始めると、早馬は、矢つぎ早に来た。それから、わずか一刻(二時間)のまに、四、五たびも――。

けれど義仲は、もう、いかなる報らせを聞きとっても、自分のことばを、吐かなかった。ぎゅっと、唇一文字にしたままである。

「…………」

きれいな敷砂のうえを、かれは黙々と、ただ歩いてい、そしてまた、床几にもどり、なんとも、いらだたしい姿に見える。

いまは敵の行動を読みちがえた自分の錯誤が、余りにも、あきらかだった。

宇治川の根井へ、後詰を送りたいにも、すでに手もとの兵はない。

いったい、河内の伏兵は――樋口勢は、何をしているのかと腹立たしい。
なぜ、義経の軍勢の、うしろへ衝いて出なかったのか。
ああ巴は。――巴は遣るのではなかったにと、今にして、悔まれる。
地だんだを踏みたいほどに。
だが、こうなっては、もう及ばぬ悔いだ。時間の問題でしかない。
どれほどな支えを宇治口の味方が示すか。川を押し渡られたら観念ものだ。東国武者がくつわをそろえて洛中へ殺到するのは半日の間だろう。見切りをつけねばなるまいかとおもう。また、迷う。
ついに、肚をきめたか、
「やいっ、光弘はおるか。安経、成時もみな寄ってまいれ。車宿から院のおん輿と、女房輿とを担い出すのだ。そして、おれのあとに続いて来い」
不意にかれの一令が、あたりの耳をつんざいた。宇治川の敗報に、暗然とひそまっていた自失の群れも、義仲の声に衝かれて、「おうっ」と、自己を奮い、ひと所に馳け集まった。
また、石黒光弘、水巻安経、岡本次郎成時などは、かなたの車宿へ馳けてゆき、おん輿を舁ぎ出した。
義仲の姿は、もう、敷砂の道をザッザと踏み鳴らしつつ、先へ立ってゆく。中の御門をこえ、大庭の内をすすんで、寝殿の南階の下に、おん輿をすえさせ、そこで、

「よしっ」

と、郎党たちへ、猛々しくうなずいた。

そして、階を見上げながら、いかにも忌々しげに、ふたたび、郎党たちへいった。

「やあ、奇っ怪な。陽はすでに午とも思わるるに、蔀をおろし、妻戸妻戸も閉てこめて、声だにせぬわ。かまうことはない。そこらを打ちたたけ。打ちたたいて内へ告げい。――はや御用意なあれ、義仲、北陸へおん供申さんと」

義仲の声の下に。

武者ばらは、土足のまま、階を馳けのぼり、広廂から廊の横までむらがり立って、口々に内へわめきたてた。

「開け給え、ここ開けられよ」

「大事はせまって候うぞ」

「即刻、北陸へ御幸あらせたまえ。猶予はできぬ。おん輿はすえられたり。御用意あれや」

「急ぎ候え。内なるおん方」

あらしの音だった。かれらのこぶしは、ところかまわず打ちたたく。

弓、長柄なども、しとみや壁を打ちまわる。

なお内にはなんの応えもないので、義仲はいらだって、

「時移しては、前途の難儀だ。おう、かなたの対ノ屋には、公卿ばらもいるはずよ。対ノ屋へ、矢うなりを浴びせかけろ」

と、ののしった。

立ち並んだ十張ほどな弓から、西の長い建物へ向かって、矢かぜがうなった。矢はこの壁、妻戸、廂などに音を発し、たちまち、人びとの狼狽を屋内によび起こした。

――と、その辺りで、

「ああ、待たれよ。矢を休められい」

「木曾衆なれば、開くるものを」

あわただしく、一つの戸が開く。

また一つが開き、鼠走りに、廊へ出て来た二、三の公卿が、手を振っている。

矢がやむと、あちこちで、騒然たる跫音やら口走りが流れ、寝殿の大扉もやっと、それらの公卿が来てひらかれた。

内なる御簾の蔭には、さだかではないが、二つのお人影がうかがわれた。ほの白きは、院、後白河の御法衣にちがいなく、きらやかなるは、冷泉ノ局らしく思われる。

物々しいあたりの様もよそに、何かささやいておいでであった。おそらくは、切羽つまったこのばあいを、どう外らそうか、いや、いい逃げるすべも今はあるまいなどの、せわしいお諜し合いではなかろうか。

が、それは一瞬のこと。

眼前のものは、寸秒の時も藉すひしめきではない。
局は、御簾を離れて、すこし前へすすみ、
「木曾殿やおわす」
と、きれいな声で、かれを広縁へ呼びあげ、
「いかに、急のおりとはいえ、御座まぢかを、何事ですか。武者ばらを、追い下ろしてください」
と、求めた。
そしてかの女のきびしいほどな気品をもった眸が、あたりが静粛に返るのを見終わるまでは、そのまま、ものもいわなかった。
――そして、やがての、ことばである。
「昨夜も木曾殿へ申しましたように、お上にはここお体もすぐれ給わぬおりですが、事、今に迫るとあるなれば、お否みはありません。御幸の儀は、かねて早やお心にそなえておいで遊ばしたことでもありますゆえ」
「さらば、義仲も本望。何も申しあぐるいとまもない。いざ、すぐにお立ちを」
「と申されても、なんで野を立つように、御座をお立ちできましょう」
「いやいや、寸時をあらそいます。おん輿に移らせ給わば、義仲が自身、守護したてまつろう。――おん供には、義仲がおる。お案じなされまい」
「いいえ」

と、つよく弱く、女性の粘りをもって、
「それを案じるのではありません。御大切な文書やら、院ノ庁の御印やら、そのほか、抛てぬ種々な物のお整えもあることですから」
「な、なんの」
義仲は舌打ち鳴らした。
「行く先をもって院御所となし、庁となし給わば、自然、それらの物も無用。かえって一切が革まってよいかと存ずる。まもなく、ここは焼き払われましょうぞ。御危害のかからぬまに、疾う疾う、御座をお立ちあれい。――女御には、あの女房輿のうちへ」
「ま……。ちと、待って給われ」
「なお、何事をか」
「まいちど、お上の御意をも、よう、おうかがい申しあげてみますから」
重たげな裳や袂を、匂うばかり、ゆるやかに描いて、御簾の方へ戻ろうとするのを見、義仲の我慢は、もう、そのもどかしさに、怺えきれなくなっていた。
「しゃっ。その儀に及ぼうや」
声とともに、突っ立って、
「常とは事ちがう。いちいち奏聞や御諚にかかずろうてはおれぬ。とこうする間に、東国勢が、宇治川より鞭を上げて来たらんには、大事も終わり、臍を噛んでも追いつかん。女御には、すぐあれへ乗れ」

命じるごとく、女房輿を指さした。
御簾のうちの巨きなおん眼と、局の視線とが、せつな、ことば以上な何かを語った。
いま、義仲がふと不用意に口走ったこと――宇治川からここまでの距離の縮まりこそ、ゆうべから後白河が、おん眠りもなく待ちこがれているものなのだ。
異常なまでの義仲のあせりを見れば、あきらかにそのことは読める。
はや、宇治川の防ぎは、破られたにちがいない。
東国武者の尖兵が、すでに近くまで、来つつあるのではあるまいか。
後白河のお胸のうちを、その駒音が馳けている。冷泉ノ局も、おどるばかりな心地だったが、と分かれれば、なおさらここで、寸秒の時をも木曾に費やさせなければならない。
もともと、後白河がかの女にささやかれた窮極の策もそれであった。しかし今はなお、髪の毛一すじほどずつな時の刻みも、東国武者が飛ばして来る駒の一町にも二町にも値しよう。――かの女は、必死な祈りと大きな運命の境を身の中にもちながら、かえって、自分でも疑われるほど冷静になりえていた。
義仲は、また怒号した。
「乗らぬか、女御」
「でも、この身だけでは、いけないのでしょうに」
「知れたことを。――院のおみちびきは義仲が奉侍する」

「ほかの、御近習たちは」
「ち、公卿ばらとな」
あたりの顔を見渡して、いとも面倒くさそうに、
「供奉いたしたくば、供奉されよ。残りたくば、残るがいい。参るとて、馬ではころげ落ちてばかりおろう。堂上たちは藁沓を履かれよ。足に藁沓をば」
と、いい放った。
そして息もつかぬ早ことばで、また階下をさし、
「さ、輿へはいられい。武者ども、女御を乗せろ」
と、あえて無態をいいつけた。
いやおうなく、武者たちに囲まれて、かの女のすがたが、階の蔭に沈むと、御観念を見せて、御簾のうちの法皇もまた、ぬっくとそこをお立ちになった。
――すると、おりもおりだった。
後白河のお姿へのみ眼をこらしていた義仲やまた階の下にいた武者どもの兜が、一せいに、あらぬ方を振り返った。青天の霹靂とは、このときのかれらのかなつぼ眼や耳の驚きをいうのであろう、口々に、
「や、や、なんだと。敵だと?」
「敵だと叫ぶぞ。――門屋根の見張りの兵が」
総勢、そそけ立って叫んだ。

義仲は、広縁の角まで、よろめき出て、
「成時。見て来いっ」
と、どなった。
だが、その成時が馳けるまもなく、かなたから飛んで来た郎党とぶつかりあって、そこから火を噴くばかり急を告げた。
「七条の河原、大和大路のあたりに、一陣の東国勢がはや見えまするぞ。数は知れず、騎馬のみの一軍が」
義仲は、一瞬、茫然(ぼうぜん)とし——
「ちいっ。……来たか」
迅(はや)さよと、心に驚く。
また。
法皇におん輿をもって迫ったことの遅さよと、無念を嚙(か)む。
「ぜひもない」
今はと、ここのすべてに眼をとじて、義仲は階(きざはし)を跳び降りた。
命を下(くだ)すまでもなく、郎党たちは、駒つなぎ場へ馳けあらそった。そして、義仲を先頭に、六十余騎、院の門を奔河(ほんが)となって混(こ)み出し、七条河原の一角へ臨んだ。

片あぶみ

よくも悪しくも、東国武者のいつわらぬ姿、本然な性。
世に聞こえた宇治川も眼になく、先陣のしぶきを争って、対岸へ攻め上ると、四散する木曾勢を追っかけ追っかけ、それはなお、功名の騎虎と、誇りきった征士の権化となって、まったく、とどまるところがない。
「さは追うな。地の理も見、馬も休めよ」
義経は、声を嗄らして、味方を制した。
大河をこえたのみか、乱箭乱刃にも疲れている兵馬だ。ひとまず、息も休ませ、軍容のみだれも整えねばならない。
まして、京へはいるにも、道不案内な東国勢。かつは、洛中の民にも上にも、思わざる災禍やら無秩序を見せてはならぬと、万一をも、惧れるのだった。
だが、追撃にかかった部将は、思い思いに、馳けわかれ、義経の命令にも耳をかす者はない。
「まだ若いおん大将。何を知ろうや」
「鎌倉殿の御舎弟ではあるが、戦は御存知ない」
かれらの間には、義経への暗黙な軽視があった。またおのおのの自負も強い。

何しろ、歴戦の古強者が多いのだ。
それらの者の子弟は、みな、親どもにさえ負けまいとしていた。
親が討たれれば親の屍をこえ、子が討たるるも子にひかれず、兄弟とて叔父甥とて、戦の道ではかえりみするな、ただ名をこそ惜しめ、といいあった。
かつては、長い貴族政治の下に。
また、平家万能の下に。
何十年もの間、貧しい土におかれていた種族の歯がみが、いつか、そんな人間性をもこえた強烈な家訓を生み、それの雌伏していた野の環境も、自然、かれらをして年少から騎射や騎乗の術に長けさせて来た。それがきょうの風雲に会したのである。――まだ若い、それも、こんど初めて実戦に出た大将などの、指揮の手綱に、さばき切れる者どもではなかった。
「まこと、自分の用兵の未熟さもわかる」
義経は、自嘲のほかないものを唇の辺に見せて、
「――強いてかれらを呼び返さば、なおさら紊れに紊れ、軍の治まりもつくまい。どうしたものだろう、重国どの」
と、うしろにいた眉の白い老将へいった。
答えたのは、渋谷庄司重国である。
「ままよ、放っておかれませい。坂東武者のならい、鼻をつくまでは、止まりますま

い」
「木曾も、ここがこのような手薄では、都のうちも、知れておる。行くか、われらも」
「進みましょう。大和街道をとって」
この老将は、地理にも詳しい。
そのほか、義経のそばには、斎院次官親能がいた。
またきのう、河内へやった弁慶と伊勢三郎をのぞくのほかは、義経の子飼の郎党は、みな側を離れずにいる。
――で、この本軍は、麾下の諸勢にややおくれ、そして進路も、京への本道、大和街道から、都へ迫って行くのであった。
しかし、先駆した武者ばらは、鹿を追う猟師山を見ずの姿である。思い思いに、敵を追ってゆき、醍醐路へかかって、阿弥陀ケ峰の東をこえるもあり、小野ノ庄から勧修寺を飛ぶもあり、櫃川を渡し、木幡、深草の里を疾駆してゆくもの、伏見、尾山を越え、法性寺の一、二の橋へ打ってはいらんとするものなど、洛中目がけて、幾すじ道に分かれたことかわからない。
また、それらの面々にしても。
窮鼠の敵の烈しい抵抗に出会って、思わぬ足踏みを余儀なくされていたのもあるし、敵の敗走に釣られて、田舎道を迷うもあれば、敵にも出会わず、前後の連絡もなく、突然、洛中の一角へ出てしまった孤独の小部隊などもある。

さきに。

院の門屋根に登って見張っていた木曾兵が、七条の南辺に認めた敵というのも、そうした先駆の一群であったにちがいない。

——時しも陽の高さは、ちょうど、午ノ刻（十二時）まぢかであった。

院を捨てて、それへ馳け向かった義仲以下六十余騎の将士と、東国勢の先駆とのあいだには、相見えるやたちどころに、矢戦などはもどかしとばかり、激烈な白兵戦が、河原を朱にして演じられていた。

どの味方よりも先に、七条へはいって来て、「ここは、京のどこか」と眸を迷わせているうちに、義仲から猛撃をうけたのは、武蔵の住人塩谷惟広、勅使河原権三郎などの一手であった。

これも、百騎に足らない小勢。

数は、ひとしいが、さすが東国武者も、馬は疲れ、身も疲れぬいている。

血みどろな奮戦はしたものの、木曾方のため、さんざんに撃ちなやまされた。さらに屍へ屍をかさねる悪戦では、味方の後陣を求めて、一時、遠くへ逃げ帰るしかなかった。

「木曾が手なみのほども思い知ったろう」

義仲は、血に染みた姿を誇るかのよう、顔にも、しとどな汗を見せて、

「五条へ引っ返そう。もいちど院へ」
と、すぐ馬を北へ飛ばした。
そのとき、かれにつづいて行ったのは、わずか四十騎。
岡本成時が見えない。石黒光弘も見えない。
それらの味方も、あとの河原に残された屍の数のうちだった。
ふたたび、院の門前へ帰った義仲は、そこの巨大な門が、かたく閉められてあるのを見て、
「や。これは？」
と、たじろいだ。
部下の一兵も内には残っていないはずだ。
たれが閉めたのか。命じたのか。
郎党たちは、烈しくそこを打ちたたいた。たった今、殺し合いをやって来て、また殺戮へ向かうべき人びとだった。殺気にみちた権まくと血相で、
「木曾殿が帰られたのだ。開けろ、開けろ」
と、怒号し、また、
「火を放つぞ」
と、脅した。
かれらが、いきり立っているまに、義仲はほかの門を見てまわった。

開いている小門もない。どこも皆いかめしく閉まっている。五条館と院との、あの森道の通いにも、あらゆる障碍物を積み、防禦の構えがしてあった。

「…………」

茫然。――その姿は、もし内の公卿眼がのぞいていたら、おかしくもあわれな、戸惑い者に見えたであろう。

しかし今は、かれも知った。

「おれはばかだった」

声にも出して、自分を嘲った。

「ああ、底知れぬこのおろか者。なんじは、今になっても、まだ院が、おのれの何かになると思うて帰って来たのか」

自嘲は、また、おのれを憐れむ悲調になって――

「だが、仮面をすてて、明らかにこう旗色をお示しあるなら、それでよし、院も立派だ。何をか女々しゅう人を怨もう。すべては、おれの愚に帰する。――ただ、おれの覚りも遅かったが、院の御門の閉じかたも遅すぎたのだ。ハハハハ、あははは」

自分の唾に咽んだものか、がばと前へ身を曲げた。そして馬のたて髪に顔をすりつけながら、なお笑ったが、その胸を反らすと、院の大屋根を遠くに見て、

「ばかっ。ばかはどっちもどっちだわっ」

と、ある限りな声でどなった。

やりばのない鬱積のわずかをでも、放ち得たとしたのであろうか。——義仲は馬の歩様を小刻みに元の正門の方へすすめかけた。

けれど、ふとまた何か、後ろへ注意をひかれたらしい。院の森道の方を、きっと振り向いた。辺りのしじまを破って、たしかにガサガサッと人の気配がしたし、低い所の冬木の枯れ葉が、ハラ——とこぼれたのも見えたのである。

そこの木蔭に、色の小白い、しかし、小鷹のような眼をした者が潜んでいた。小柄な女雑兵である。

かなたで、義仲の姿が、駒をとめて、自分の方を振り向いたのを見、かの女の奴隷的な習癖に屈まされていた野性の愛は、とつぜん、火を呼んだものらしい。うれし気な容子を、ぶるると、その体で応え、道へおどり出て来て、

「——殿っ」

と、両の手を高く振った。

義仲は、たれかを、怪しむように、なお見ていた。

「殿、殿っ」

かの女は、走り出して来た。

地を摺る鳥影のように。

そして、走りながらも、

「きょうですよっ、殿。——愉しいお供を果たす日は」
と、さけび、
「きょうです、きょうこそです」
と、いいつづけながら近づいた。
義仲は、ぎょっとしたように、
「あっ、山吹」
顔いろまで変えて、急に馬を跳ばしかけたのだった。
「いけないいっ——」
かの女は、迅かった。
「いけないいっ。殿は、わたしの男」
女の命と、体そのものを、馬の横腹へぶつけて来、その鐙革へしがみついた。あぶみは外れて、片あぶみとなり、駒さえ横ざまにたおれかけた。
「御卑怯です、御卑怯です。今となってなんですかっ。離しはしません。あの世までも離すもんですか」
駒は、片あぶみ、狂いに狂って止まらなかった。——馬上の人の心のとおりに。
ひきずられ、ひきずられつつ、それでもまだ山吹は絶叫をやめはしない。
夜明け前、義仲が、刃を抜いて、魔でも追い払うように自分を追った仕打ちなど、恨みまじりに口走り、無知な涙を顔じゅうに汚しぬいて、

「もう、おしまいです。いくら殿がお強くても、鎌倉勢は眼のまえに来てしまいました。この世に殿のお味方はありません。死にましょう御一しょに。ね、ね、殿」
と、必死にすがった。憐れとひびくまで、その無知がさけばせた。
死は覚悟のもの。死神の手であろうと、それに義仲の肌はすくみはしない。けれど、なぜか山吹には恐さが先立った。憐れと思いながら、恐さがさせたのである。鐙を外していた片足で、
「しゃつ、まだいたか。執念よ」
と、かの女の肩を蹴放した。
——呀と、勢いよく山吹はよろめいた。
その影を、眼じりに見すてて、足をあぶみにかけた。とっさに、かれは、馬をあおり立てていた。すると、それからすぐであった。後ろで悲鳴が聞こえた。なんといいようもない生命の悶掻きをもった声だった。義仲の眸を、もいちど、自分の方へ振り向かせずにおかないとするかの如く、
「きゃっ——」と、かれの耳をつんざいたのであった。
——見れば。
山吹は、大地へ倒れ、四肢をまるっこくして、もがき転んでいる。
そして、その体のどこかには、一本の矢が突き刺さっていた。
たれが、どこから射た矢やら、わからない。そのほかに義仲の眼に映じたものは何も

なかった。

むしろ、道の茨が除かれたように、義仲はそのまま馬を遣って、もとの正門の方へ曲がって行った。

荒天

このさいである。部下心理でもあった。

わずかな間にすぎないのだが、ふと、義仲の姿が見えなくなったので、一時は「火を放て」「中の人間どもを炙り殺せ」といきり立っていた正門外のかれの部将たちも、

「いぶかしいぞ。おん大将には、いずこへ」

と、気づかい、

「もしや、事最後と見て、御自害でも」

と、べつな不安に立ち暮れた。

「見てまいろう」

とここを離れ去った三、四人もある。

ところが、その者たちも、二度とここへ戻らなかった。馬物具も辻へ捨て、命一つを大事に抱えて、身をくらましてしまったのである。

こういう例が決して稀有なわけではない。脱落しようとすれば、いつでも戦列を脱け

られる条件にあったのだから。

もともと、木曾群は、源氏再興の旗の下では生まれたが、質は、山野に生じた一種の自然軍だった。

組織、制規なども、素朴な観念の、主従眷族約束でしかない。

その点、鎌倉の建設的な歩みとは、趣をちがえていた。頼朝の下に、鍛冶されて、新風をもった軍隊には、次の時代を担う装いができていた。その抱負を異にしたごとく、組織も個々も、ちがっていた。

だから当初、木曾の大兵六万ともいわれたのが、わずか三月か四月のまに、落葉片々と散じ去って、孤木のすがたに返ったのも、義仲の都会知らずや用兵の拙だけではない。自然軍の自然な成りゆきだったといえる。

そして、それの持つ天の摂理的作用の使命は、人は知らず、すでに成し終わっていたものであろう。

そういう木曾勢、そうした宿命の士兵たちであったとすれば、季節の風の迫るにつれ、自然に従って散り去る落葉そのものには科もない。

いや、こうなってまでも、なおそこを去らじとしていた三十数騎の木曾武者こそ、悲壮だし、義仲との運命を、最後まで、ほんとに、踏みたがえなかった人びとだった。

その面々は、

「おう、あれへ参られた」

と、義仲の姿を、ふたたび見出して、正門の前にかれを取り巻くと、口々に、
「奇っ怪な公卿どもの仕方。ここの門は、はや意趣あって、閉じたものに相違おざらぬ。ここ乗り越えて、院中の輩（やから）をからめ上げ、院を砦（とりで）として、東国勢を待ち、さいごの一戦をなされては」
と、口々にすすめた。
義仲は、顔を振って、
「いや、さいごの一戦ならなおのこと、心ゆくまで、広々とやろう。由来、おれどもは、こんなせせこましい場所には馴れぬ者だ」
と、いった。
当然、心の常軌も失っていた人びとは、「ならば、院の四方に火を放て」と、ここの門への怨みに燃え、自暴的な仕返しに出ようとしたが、義仲は、許さなかったし、また、焼くべきはずの五条の館も、「やみなん、やみなん」とばかり、なだめて、思いとまらせた。
そして義仲は、かれらを五条の森にしばし休ませ、梅小路の方へ駒を飛ばした。
「おそらく、もう冬姫も、そこにはいまいが？」
心では、つぶやいている。
院の四門が閉められたさいに、親の基房が、第一に姫の身を院へ移しているにちがいない。また、法皇のおさしずも、「即座に姫を助け取れ」と、仰せあるべきはずである。

「姫はおるまい。だが」

義仲は、死出の前に、ひと目、そこの小館の外なりと見て馳け通りたさの思いに駆られた。――ところが、来てみると、思い出多いそこの門辺に、いつも姫に侍いてよく世話していた媼が、ひとりしょんぼりと佇んでいた。

昼ながら人影もない死の町に、駒音を聞き、馬上のかれを見出すと、媼は、

「オオ、おお」

と、狂喜のさまを見せ、

「姫ぎみの殿」

と、馳け寄った。

義仲のことばは、無意識に出たただ一つの声でしかなかった。

「姫は」

「いらっしゃいます」

「えっ」

――耳を疑い、さらに、もういちど。

「姫は」

「いらっしゃいますとも。どんなに、お案じしたり、もしやと、お待ち申しあげたり、けさからお悶え遊ばしていらっしゃるかしれません」

「げっ、まだいたのか」

「たとえ、この屋へ炎が来ても、去ぬまいぞと仰せられて」
「た、た、たれも、姫が身を、迎え取りには来なかったのか」
「はい。早う会うておあげくださいませ」
義仲は、門辺に駒をつなぐまも、もどかしげに、家の奥へ馳けこんだ。

荒天のあらしの下にも、どうかすると、籬の蔭などに、弱々とありながら、採み散らされもせず、自然の暴威のそとに、おき忘れられている花がある。
この家の奥の几帳は、ちょうど、あらしの下の籬だった。
冬姫は、その花に似ていた。
「姫よ。まだおられたか」
義仲は、そこに死に絶えているような五衣の人を見出すと、よろいの重さに耐えぬがごとく、どさっと腰をついてしまい、やにわに、かの女のからだを抱きしめた。
「姫。おれぞ、義仲ぞ」
「おお、木曾の殿」
「やはり御縁は深かった。もうこの世では、会えぬものと思うていたが」
「いいえ、いいえ……」
かの女は、泣き濡れながら、顔を振った。
「なお、まいちどは、お会いできる、かならずお目にかかれると、わたくしは信じてお

りました」
「では、義仲を、そのようにまで」
「いつわりのないお人。ほんとに、この身を愛しんで給うたお人。この世で初めてのお人にわたくしはめぐり会うた思いでした。けれど、もうこれきりでしょうか。これが長いお別れなのでしょうか」
「いずれは、武者の末路」
「ああ、はかない。余りにははかない……」
「むりはない。心細かろ」
さめざめと泣きおののくかの女のからだを通して、義仲は、それを思い遣らずにいられない。
院にしても、関白家の家人にしても、なぜ、姫の身を、助けに来ていないのか。
かれらが、この家へ、それをしに来ないのは、木曾を恐れてではあろうが、自分自分の一命と運命のほかは、他をかえりみるゆとりもないからに違いなかった。
それゆえ、姫とは、別れを惜しむこともできたが、しかし義仲は、よろこびよりも、院の無情さや、親の基房の卑屈さに腹が立って、義憤を覚えずにいられない。
さきに、部下の者どもが、火を放たんというのを止めたのも、狂える炎が、姫の身へ禍いしてはと、ふと、惧れたからである。――自分でさえ、そうすぐ気遣うのに、姫をあのように利用された院が、なぜ姫の身を助け取らずに院の門を閉じたのか。親の基房

までも捨てておくのか。

「姫は、やごとなき家柄にお生まれだったが、いわば園生の孤し児。義仲は山野の孤し児。思えば、似たような淋しい者同士だった。のう……そう思わぬか」

「ああ、そう承れば、なおさらお別れしたくありません」

「が、わずかな間でも、そなたと語りあえたことのみは、都へ上ったかいがあったというもの。義仲は、武者の末路を遂げるが、おん身は、元の園生に帰られよ。鬼のごとき者と出会うた悪夢の幾日と忘れてくれい」

「どうして、忘れられましょう。まして、あなたを鬼などと思えましょう。わたくしにも、ここにいた短い月日が、今生での……」

「どうか、倖せな日を、あとには持つように。……それしか、おん身に遺すことばがない。また、して見せることもいまはできない」

義仲は、身もだえした。生きる道を、人間の生き方を――おれは間違えたと、及ばない悔恨の悶掻きに、われにもあらず魂が嗚咽するらしかった。

するとそのとき、廊の口あたりに、どやどやと跫音がして、

「殿っ、殿っ。はやお立ち出でなされませい」

「法性寺の一、二の橋、七条の峰道、伏見、深草などから、さきの敵勢にもまさる鎌倉の軍兵が、ひた押しに迫ってまいりましたぞ」

「お味方の面々も、おん大将には、いかがなされしと、地だんだふんでおり申す」

と、口々に奥へ呼ばわった。
けれど、義仲の方に、答えもなかった。奥のつぼねの暗がりは、なお、しいんと潜まっていた。今を二人だけの一瞬として、何もものもない唇と唇とがむすばれていたのかもしれなかった。
義仲をうながしに来た武者ばらに、そこへの思いやりや仮借などあろうはずはない。むしろ、義仲の未練さに、腹を立てて、
「この期に、なんの御猶予ですぞ」
「さしも、木曾のおん大将がと、世の笑い草にもなりましょうに」
「疾う疾う、そこな姫ぎみなど蹴放して、われらの陣頭にお立ちあれい」
と、半ばののしるばかり、催促しているうちに、とつぜん、中なる武者の二人が、
「残念だっ、木曾谷にて旗挙げの日、ともに誓うたるを、お忘れありしか。かかる女々しき大将とも思わず、一つ旗の下へ、ともに生涯を賭けたることの無念さよ。これ見て、思い知り給え」
と、ひときわ、大きな声がしたと思うと、どたっと、廊の床へ、そのまま、たおれたような屋鳴りがした。
さすがその絶叫には、義仲も、胸をつき抜かれたらしく、
「――姫、さらば」
と、まつわる人をつきのけて、廊へ、おどり出てみると、床も壁も紅にして、二人

の郎党が、刺しちがえて、憤死していた。
一人は津波田三郎丸。もひとりは、越後中太能景だった。
すでに、六条河原には、畠山重忠、渋谷右馬允、糟谷藤太、河越小太郎などの七、八百騎が見えていた。南の岸から川を渡って、おのおのその姿に、都入りの晴れを誇りながら、
「木曾は、いずこに」
「武運あれ、義仲にこそ出で会わん」
と、堤の上だの、また大路小路にも分かれて、驟雨のごとく、やがて東へ馳けて来た。
義仲の三十余騎は、
「ござんなれ鎌倉勢」
と、五条の辻に、待ちかまえ、たちどころに、激戦となった。
白日、らんらんの下、もう生を考えていない木曾の部将は強かった。もちろん、義仲は今をさいごと奮戦した。かれの漆黒の馬は、敵の血にまみれ、血は碧光りに、その毛なみを染めていた。
「河原へ出でよ、敵に、退き口をとられるな」
義仲は多くの死者を出さないまに、味方をまとめて、四条河原へ馳け抜けた。
そのとき、羅生門から朱雀の方角に、一軍の味方が現われた。思いがけない味方であ

る。「もしや、淀から引っ返してきた巴ではないか。樋口の手勢ではないか」と思ったが、それと一つになる術もなかった。

鎌倉勢は、刻々に、ふえて来るばかりであり、義仲の旗本は、減るばかりである。

——高楯光延、宮崎太郎、手塚別当、南保家隆など、つぎつぎに、かれの馬前で討死してゆき、残るは十騎足らずだった。

その少ない味方の中に、いつ、どこから、馳け交じっていたのか、ひとりの女武者がいた。風にも耐えない細やかな体に、物具はいと華やかに着、容貌は上﨟のように化粧して、細薙刀を振い、精悍な坂東武者のあいだを、秋の蝶かのように、翻々と馳けめぐって、必死な働きをしているのだった。

「……あっ、葵よ」

義仲は、その姿に、すぐ、かつての信州浅間の高原を想い出した。

同時に、つい先刻。

五条の館の裏で、物蔭から射手の知れない矢が飛んで来て、突然、自分の駒のうしろで射たおされた山吹の声も耳底によみがえっていた。

「ああ、おれという男は」

戦陣での、かりそめの遊び心に、過去多くの、契ったり手折った花々の呪いに、義仲は今、いいしれない罪の意識に問われた。身をそそけたてた。

「それだけでも、死ぬべきだ。たくさんな郷党や兵たちをも死なせたのだ。もう一刻

も、生きている空はない。あわれ、木曾次郎義仲が死を見よや。義仲が討死こそは、罪の詫び、世の笑止ともならばなれ」

あえて、敵刃の危険な渦へ向かって、身を抛って行こうとするかれの容子が、乱軍の中にも、ありありと分かった。

それと見た部将の仁科盛家と、村上信国が、

「やあ、お命を惜しませ給え」

「味方の一軍が、敵のうしろへ出たものと思われる。今なれば、血路をひらいて、お落ちあるも難くはない」

「いざ、いざ。ここは打ち捨てて」

と、義仲を取り囲み、主従十騎ばかりで、ひた走りに、粟田口方面へ、落ちのびて行った。

葵の姿も、なお、そのうちの一騎であった。

九郎を見給う

義仲がそこの死地を脱し得たのは、さっき、羅生門から朱雀を馳けて来、そしてやがて、東国勢の背を突いてきた一陣の味方が、ちょうど、幸いしたのであった。

それは、淀から引っ返して来た巴であった。

「散々に果てんは口惜し。せめて、わが殿と死所は一つに」

と、遠くに見た義仲の人数を慕い、それに呼応して来たものである。

しかし、巴の手兵も、すでにこれまでの途々で戦いつかれ、残り少なになっていた。良人の命で、淀へ加勢に馳け向かったが、味方の志田義広は、もう逃げ落ちた後であったし、兄の樋口も、どこにあるのか、生死のほどさえ分からない。

「――遠方此方、見ゆる兵は、みな東国の武者ばかり。ああわずか一夜の間に」

女である。巴は淋しさに、馬上で泣いた。

明け方、五条を立つときは、良人とも、もう今生これぎりと思い絶って出たものの、孤軍孤影になってみると、やはり良人恋しさ、兄恋しさに、うしろ髪を引かれずにいられなかった。

兄の樋口のほか、もう一人の兄今井兼平は、瀬田の守りに向かっている。あるいは、良人の義仲も、今井の手勢と一つになり、北陸へ落ちのびて行くお心ではあるまいか。

巴は、そう思い、

「わが良人のおいいつけではあったが、もう敵は、洛中へ攻め入っている。しょせん、この辺りにいて戦うても、役には立たぬ。――引っ返して、殿のおあとを慕うて行こうと思うが、お許たちの思いはどうぞ」

と、左右の部将にたずねた。

巴を扶けてともにいた余田次郎、落合兼行、物井五郎なども、

「われらには否やはありませぬ。今は、御本望のままに」
と、いう。
そこでにわかに、引っ返したが、たちまち敵にへだてられて、義仲たちの影も見失い、かえってかの女の前へ、眼にあまるほどな敵勢が喚きかかっていた。
いくどとなく、巴は死地に陥ちかけた。信濃以来の余田次郎は、巴が、鎌倉方の勇者にかこまれて、あわや討たれんとした寸前に、かの女に代って、斬り死にをとげてしまい、
「あわれよ、次郎」
と、かの女の眼をおおわしめた。
落合、物井らは、
「われらが、殿軍いたします。疾う疾う、お先へ」
と、巴を落ちさせ、あとに残って、血の壁を作り合った。
大宮大路を、粟田口の方へ、巴は、ひた走りに馬をとばしていた。あとや先に、馳けつづいて来る味方は、わずか十四、五騎しか見えなかった。
そして、喘ぐまもなく、揺られに揺られている体のどこかに、なお、女ごころだけが、こうなるほど、一途なものになっていた。
どうその体を、鎧具足でつつんでも、男まさりの返り血に染められても、女は女以外なものではない。

道は驀しぐらに急ぎながら、その道は、生きる道とも死の道とも思わなかった。ただかの女の女ごころが馳けずにいられないで馳けていた。そしてあんなにも日ごろ、冷淡にされ、あきらめもしていた良人なのに、その良人の胸へ帰りたい気もちがまるで矢のようであった。――むかし、かの女も良人もまだ童髪のころ、駒ケ嶽のふもとを、馬で追っつ追われつしているまに、意地わるく隠れてしまう駒王丸の姿を、よく涙ぐみながら、日の暮るるまで馬を飛ばして探しぬいたものだったが、その木曾乙女と、いまの巴とも、年こそ変れ、心の相は、少しも変っていなかった。

義経の本隊が、七条大和口に見えたのは、未ノ刻（午後二時）ごろで、並木松にさやぐ陽影もやや移ろいかけていた。

この日の〝玉葉記事〟によると、義経の入京ぶりは、軍紀正しく、その兵には、秋毫の狼藉もなかった、としるしてある。

それと、かれの洛中到着も、思いのほか早かった。

まだ加茂河原や東山のどこかには、こだまする戦闘の雄たけびが熾んであった。――が、義経は「もう、戦は諸手の侍大将にまかせておかん」とするかのように、兵馬をそこに駐め、そして、

「さきに名ざしたる六人の者、装いを正して、この九郎とともに参れ。一刻も早く、院の御心を安んぜん」

と、五条御所の方へ馳け出した。
院の御所では、さっきから東の築土（ついじ）に登って見物していた大膳大夫成忠が、「義仲は、はや遠くへ、落ち終わって候う」と、内へ告げ、また「今は、木曾武者の影だに候わず、いずこに見ゆるも、鎌倉の白旗、坂東武者の影ばかり……」と、大声で呼ばわったので、院中の男女は、恐怖の底からよみがえって、にわかな歓声さえわき起こしていた。
すると、しばらくして、成忠の声が、再び、
「やや、浅まし。またまた、木曾武者が馳（は）せ参って候うぞ。油断あるな、人びと」
と、そこから転げ落ちんばかり、大あわてに怒鳴った。
それを聞くと、みな色を失って「あな、無情」「こんどこそは、焼き殺されめ」と泣き悲しんだが、たちまちまた、成忠は、
「やあ、やあ、しずまり給え。今のは成忠が早まって見違（みたが）えて候うなり。――かなた、五条の橋北より、射向けの袖を吹きなびかせつつ、馬上のみ、六、七人、砂けむりたててこなたへ馳（は）せ参るは、木曾とは小旗もちがい、笠符（かさじるし）も変って見ゆる。……オオ、近づくほどに、木曾にはあらず、きょう初めて、都へはいったる東国武士の大将とは覚えられて候うぞ」
といい直し、こんどは、両手を打ち振って、歓喜の様子をそこに見せていた。
その歓びを谺（こだま）して、院中、幾つもの大屋根の下からも、どっと、人びとの色めきがあ

ふれ、早くも、事の由を、法皇のお耳に達せんとするのであろうか、奥へ走る跫音やら、大庭へ出て、空を仰ぐ人影やら、狂喜、雀躍りといっても、なおいい足らないほどだった。

間もあらず、院の正門の外にあたって、駒のあぶみや、蹄の音が聞こえ、ひたと、気配が澄むと、いと若々しく、そして、すずやかな声が、声張りあげていっていた。

「内なる御近侍まで申し入れます。――これは、鎌倉の前右兵衛佐頼朝が弟の九郎義経と申すもの。宇治路の木曾勢を攻めやぶって、ただ今、洛中へ着きました。何はあれ、院の御安否こそいかがかと案ぜられ、戦装いのままなれど、御所守護のため、早々に馳せ参ってござりまする。ここお開け給われい」

はっきりそれを耳に聞いた院中の公卿女房たちは、うれし涙やら、どよめきをもって応え、成忠などは、築土から飛び下りて、したたかに腰を打ち、はってまわる有様だった。

義経院参――との奏聞に、たれよりも大きなしかも意味深い感動と蘇生の思いを抱かれたのは、後白河法皇であったには相違ない。

が、ただ一と声、

「開けよ」

と、奏者へ仰せ遣って、やがてまた、ほかの公卿へ、何事かを命じおかれた。

そのあとで、後白河は、

「冷泉」
と、しずかに呼び、
「よかったのう。ゆうべから、どうなる空かと危ぶまれたが、これで妖雲一過というもの。そもじも、もう胸なでおろしていたがよい」
と、慰められた。
冷泉ノ局も、あの濃艶な黛を、常のものに、よみがえらせて、
「まことに、ついけさまでは、世に亡きものとなるか、北陸の空をさまようことかと、胸もそぞろでございましたが、お上の御威徳でございましょう、まずまず、おめでとうございました」
と、御座の前へ出て、祝いをのべた。
後白河は、すぐお立ちになった。そして、局を振り向かれ、
「木曾武者は、見飽いた。見るもおぞましい者たちではあった。したが鎌倉の舎弟九郎とは、いかなる男か。東国武士とは、どのような者どもか、きょう初めて見ることぞ。そもじも、よそながら、見ておくもよからん」
と、いいのこして、中門廊へ、出御された。
木曾が入洛して、初の院参のときは、義仲、行家の二人を、御座の階の下まで近々と召し入れられたが、義経以下の者たちは、中門の庭までしか通されなかった。
義仲は、木曾の総大将たる者であったが、九郎義経は、頼朝の代官であり、その弟で

しかない、というためか。または、「とかく、武門の輩には、思い上がらせぬように躾けおくに限る」という思し召しか。

とまれ、義経を加えた七名は、中門の御庭に、武者ずわりして居流れていた。

そして法皇には、中門の櫺子（廊壁を切り抜いてある格子の窓）から、その様を、やはり簾越しに叡覧あったのである。

まだ西日というには早い浅春の樹もれ陽が、坪の内へ、光の斑を撒きこぼしていた。

――義経がその日の装束を御覧あるに、赤地錦の直垂に、紫すそ濃のよろい、鍬形打った兜の緒をしめ、鷹の切斑の矢を負うて、重籐の弓を、そばへおいていた。そして弓の一端を、白い紙で巻いたのは、総大将の符かとおもわれる。

年ばえは二十五、六、鳶色の皮膚、しまった唇もと、眉濃く、眼はつぶらであり、すずやかである。どことといって、険しさはない。

むしろその大鎧の装いにも似ず、小柄なのが、可憐でさえあった。義仲ほどな美丈夫とは見えないが、つつましやかなうちに、颯爽の気をふくんでいる。――後白河は、そう見て取られた。――しかしその、五尺すこしの小男の満身に、どんな多感と情熱が流れているか、野性の俊敏と、磨かれた知性が併せ持たれているかということまでは、もとより、そのとき、後白河の直視に映るはずもない。

――ずっと、以下六名の物ごしや装いまでを、おながめあって、やがて、

「遠くを攻め上りながら、よくも早く来つる。いずれも、ゆゆしげな者どもかな。皆に

名のらせよ」
と、かたわらの公卿をして、お旨を伝えさせた。
畏まって、まず義経から、名のって、
「――生年二十六歳」
と、聞こえ上げながら両手をつかえると、ふと鎧の袖に、南無宗廟八幡大菩薩と墨匂やかに書いてあるのが、お目にとまった。
以下、順に、
「武蔵国の住人、畠山次郎重忠、生年二十一歳」
「おなじく、武蔵の住、河越太郎重頼、生年四十四歳」
「一子小太郎重房、十六歳」
「相模国の住人、梶原源太景季、二十三歳」
「近江国の住人、佐々木四郎高綱、生年二十五歳」
「相模国の住人、渋谷右馬允重助、生年四十一歳」
と、ことば少なに、名のりつらねた。
後白河にはすぐ、中門の廊の櫺子から、奥の御殿へおひきとりになった。
代って、大膳大夫成忠が、一同へ、
「おん犒いの御酒を下される」

と伝えたが、義経は、
「まだ、義仲の首級も献じませぬうえ、将士はなお、諸方に戦うており、わけて義兄範頼もまだ瀬田よりこれに見えておりませねば」
と、断った。
成忠は、また、かさねて、
「ただ今、おのおのの志の由を、叡聞に達したところ、院にも、斜めならぬ御感であらせられた。さらばただ、かなたの広廂の際までまかり出られ、合戦の次第を、詳しゅう語れとの御諚である。そのまま大床の階の下まですすまれよ」
との沙汰だった。
義経たちは、畏まって、そこの砌（雨落）の辺まで行った。床には、成忠のほか、数名の堂上が見えた。そしてこもごもに、訊ね出したり答えたりした。公卿たちも、こうなれば、それらの実戦談を聞くことだけには興じるらしい。わけて、宇治川をどう渡したか、しきりに、義経を見て、話題を誘いかけた。
義経は、終始、誇る色でもなかったし、そのことでもまた、
「いや、宇治川のことなれば、そこの梶原と佐々木にお問い給わりませ」
とのみ、笑っていた。
笑うと、すこし歯並のわるい唇から、やえばがちらと見え、鳶色の頬に、笑くぼが浮いた。それが、公卿たちにも、こよなく愛でられ、何か、これが坂東武士を指揮して

来た武者大将とは思えもしなかった。
だが、佐々木や梶原も、義経にそういわれると、かねて、生唼、磨墨のいきさつも知られていることだし、大言も出ず、顔見あわせて、苦笑いしたのみである。
――一同のそんな様子を、後白河には、なお、よそながら叡覧あったのか否か。やがて、近臣を通じて、あらためての勅命であった。
「義経たちは、このまま、禁中に駐まって、四門の守護を仕れ」
それから、もひとつ、御下問があった。
「逃げ落ちたる義仲へは、どんな策が取られているか」
それには、義経自身が答えた。
「木曾は河原上りに、逃げ奔りましたが、かねて、叡山は鎌倉方に同心のことゆえ、龍華越えには出られません。道は一つ、大津へ出て行くでしょうが、わが与党も追っかけておりますし、瀬田には兄範頼の大軍もあれば、ほどなく、木曾は首級となって参るびょう存じられます」
「いや、それならば」
と、堂上はみな、一そう安堵した色だった。
義経は、ただちに、飛脚を立てて、鎌倉の頼朝へ、入洛と初院参の吉報を送っておいた。そして、かれが守護についたと分かると、諸方の兵も、追々と院の四門に馳せ集まった。ただ、いまだに見えないのは、河内平野へ向かった武蔵坊弁慶と、伊勢三郎だけ

であった。

死地の春風

巴は、義仲のあとを慕って、三条から粟田山のふもとを急いだが、途々も、畠山重忠や勅使河原権三郎の兵に囲まれて、何度、
「もう、これまでか」
と、死を観念したことか知れなかった。
そうかと思うと、先から射ても来ず、囲んで来る様子もないので、みすみす東国勢と知れていながら、その間を、澄まして、馳け通ってしまうことなどあった。
もっとも、討たれ討たれて、わずか五、六騎の小勢だったので、まさか、木曾の名だたる女将軍とも思わず、うかと、見過ごされたものかもしれない。
しかし、四ノ宮河原で出会った三十余騎の小隊は、いちど、通り過ぎてから、後ろを振り向き、
「いまのは、女武者ではなかったか。粧いも、美しいし」
「東国勢には、女武者などいないはずだ。もしや木曾の？」
と、いい騒ぎ始めたが、やがて興味半分に、幾名かが取って返して、道をふさいだ。
巴たちは、たちまち、その数名を斬って、奔り出した。——と見て、愕然と、ほかの

東国武士も砂けむりを揚げ、巴の姿を追って来た。
すると、まっ先に迫った二十八、九の若武者が、
「そこなるは、木曾殿のお内にて、巴御前とかいう世に聞こえたる女将軍にてはあらざるか。——ならば可惜(あたら)、醜(みにく)き逃げ走りはやめ給え。木曾殿もふくろの鼠(ねずみ)、はや今ごろは、お首となっておろうものを。——返し給え巴御前、敵として、御不足はなかるべきわれなり。——かくいうは遠江国の住人、内田三郎家吉にこそ」
と、呼ばわった。
巴は、先へ心も急いで、ただ、ひた走りだったが、そう聞くと、駒を向け直して、
「あな、すずやかな名のりかな。作法ある武者とは見ゆ。相手になって進ぜよう。身は、木曾殿が室の巴御前ぞ」
と、薙刀(なぎなた)を持ちかえた。
長やかな黒髪を後ろへ束(つか)ね、額(ひたい)には、星と耀(かがや)く白銀(しろがね)の天冠を打った細鉢巻(ほそはちまき)をし、おくれ毛止めに結んでいた。——直垂(ひたたれ)は紫格子に、菊とじを多く縫いつけ、萌黄(もえぎ)おどしの腹巻を着、駒は春風と名のある葦毛(あしげ)の駿足(しゅんそく)であったという。
死を決して来た黛(まゆずみ)の美に気圧(けお)されて、一瞬、家吉がたじろぐまに、かの女の薙刀は、葦毛の自由な乗りごなしを見せながら、息つくまもないほど、颯々(さっさつ)と、光を描いて迫った。
家吉は、あしらいかねて、幾たびか、組もうとしたが、組ませもしない。

そのうちに、巴の薙刀のため、太刀を絡み落とされたので、しまったっと叫びながら、馬もろとも、かの女の鞍わきへ打つかってゆき、ムズと、相手へ組みついた。人と人、馬と馬とが、絡み合って、異様なまでの姿態と喚きを躍らせ合っていたと思うと、それもごくわずかな間で、一つの馬は、まっ赤に染まって、逸れてしまい、地上には、内田三郎家吉の首のない体が、どうと、振り捨てられていた。

葦毛の春風も、紅になり、気が狂ったように馳け出してゆく。そして〝関ノ清水〟と旅人が称ぶあたりまで来ると、さすが、追いつく敵もなかった。が、同時にかの女とともにいたわずかな味方も、もう一人だに続いては来ない。

――ふと見ると、坂道の岩間から草むらへ走り流れている清水があった。その水音を聞き、かの女は急に焦けつくような渇きを覚えた。

いや、われに返ったからであろう。

気がついてみれば、薙刀はどこかへ打ち捨て、手綱と一つに握っていた髻は、小刀でかき切った敵の家吉の首だった。

「…………」

道ばたへ、ほうり捨てかけたが、ふと、さっきの優しい名のりを思い出して、敵ながら憐れとおもい、馬を降りた。

清水の下へ寄って、手を洗い、口へ掬い、馬にも水を飼った。そして、岩の上へ首をすえ「こうしておけば、やがて家吉の身寄りの武者が見出すであろう」と、手向けし

て、去りかけた。
——と、数歩の先に、また、一人の武者のうつ伏している死骸があった。
「あっ。もしや?」
巴は、そこの草むらを、しばし、息もせず見まもった。

およそ、敵味方の屍は、幾十、幾百見て来たかわからない。
が、かの女は、吸いつけられたように、寄って行った。
死者の着ている鎧の色、銀摺の見事なる錆朱の袴。さてはまた、自分とひとしく、黒髪の額に、胡蝶の天冠を結い締めている姿など、それは、浅間、千曲川、越後の戦場では、かならず味方のうちに見た——いや義仲のそばにあった、あの葵ノ前のいでたちだった。
「けれど、どうして、葵ノ前がここに?」
つねに、病帳深く垂れていた病人がと、巴は、眼に見てもなお、信じかねた。
けれど、その容貌をさしのぞくと、病み窶れを隠そうためか、白粉は濃く、口紅も濃く、あわれ黛さえ強くひいてあった。
「……おお。……数箇所に手傷は負うているが、肌は温かい。まだ、こと切れてはいないような」
巴は、葵の体を抱いて、駒の背へ移った。

いささかの間も、後ろが気づかわれるからだった。疲れた駒をいたわり、また、鞍つぼにかい抱いた葵の黛をさしのぞきながら、巴は、さまざま心がみだれた。

　かつての日の、ある夜々には、良人の愛を横奪りしてわがもの顔して誇る女、嫉しとうらみ、憎しと呪ったこともあったが——今は、そう思おうとしても、思いすら泛んでは来ない。

　かえって、自分以上にも、自分の良人義仲の犠牲になった女よと、巴は、気のどくになり、不愍な思いがわいていた。わけても、病顔を粧うてまで、侍いた男の死の道を追って来て、途中の敵や病のために、ここにたおれていたのかと考えつくと——

「憐れやの、女ごころ」

　と、身につまされ、

「一人の男が、幾人もの女性の運命を、このようにし、幾人もの女性が、一人の殿に侍いて、浅ましい瞋恚を燃やし合わなければならなかったのは、世の罪でのうて、たれの罪であろ。恨みは、あまた人の子を、みな地獄の子とする世の習慣にこそ」

　と、思われた。

　いずれにせよ、なんとか、助けとらせたいと巴は思ったが、身一つさえ、危ぶまれるおりだったし、さりとて、道の辺へ捨てて馳け去る心にもなれなかった。

「おお、それよ」

かの女は、木立の道を、横へ曲がった。
関ノ明神の玉垣が見える。
心が急ぐので、馬上のまま、
「み社の内へものを申しまする。社家の神人か、僧房のお人なりとおわさば、これまで立ち出で給え。決して、狼藉者には候わねば」
と、高らかに呼んだ。
そして、やがて何事かと、かの女の前へ馳けて来た神官と僧侶にむかい、
「――名は、はばかりあれば告げませぬが、この女武者は、決して、軍の敵にもあらず味方にもあらぬ者。かつは、つねより病の床にあったゆえ、いたく容体もわるく見ゆるが、手当てして給えば、一命は取りとめようかと思わるる。あわれ、明神のお心にもなって、助けて上げて給べ。これは、少なけれど、薬餌の料に」
と、物代を取らせ、葵の身を、そっと、駒の背からかれらの手へあずけた。
「……………」
そのとき、葵は、うっすら、眼をあいていた。
しげしげと、巴を見、何か必死にいおうとするのであったが、声にはならないで、ただ睫毛を浮かすばかりな涙となり、涙は、どんなことばより多くな、そして長い過去の一切を、語っていた。いや詫びていたといっても決して葵の心もちを過ってはいなかったであろう。

しかし巴は、すぐ、
「頼うだぞよ、明神の人びと」
と、いい捨てたまま、驀しぐらに、大津の方へ馳け去った。

＊

大津、石山、毘沙門堂のあたり、そこもまた、きょうの宇治や都に劣らない戦場となっていた。
おなじ日。
瀬田へかかった蒲冠者範頼の方は、いわゆる大手軍であった。
搦手軍の義経が、すでに宇治川を渡し、一気に、都へ突入したことは、幾刻かの後、範頼も耳にしたにちがいない。
喜撰、岩間山など、険しい山路はへだてているが、杣道の近道もあり、馬も通う下流十幾里の瀬田川である。
「九郎の殿に、都入りを先駆けられしか」
と、範頼以下、躍起となったに相違ない。
田上の貢御瀬から攻め、やがて戦場は、石山へ移っていた。
大手の軍勢は、一条忠頼、稲毛三郎、武田信義、千葉介常胤など、義経の軍よりは、はるかに多かった。といっても、四千を超えてはいない。
東国勢五万五千騎とは、古典の誇称である。しかし義仲が、「樋口の伏兵もあり、自

然の険もあれば、宇治川はまず、大丈夫」として、瀬田の守りに、重点をおいていたのは、まさしく、かれの誤算であった。

いや、義仲は義経を知らな過ぎた。知るよしもなかったこと、それが、かれの天命であったともいえよう。

——とまれ、瀬田の防ぎは、数も何倍という敵に押されて、その手の今井兼平も、戦い戦い、終日の悪闘をかさねつつ、孤軍無慙な影を、国分寺の毘沙門堂にたたずませ、「いずこへ、打って出るか」と、血路も知れぬ窮地にあった。

落日粟津ケ原

醍醐、山科などの山づたいを、思い思いに逃げて来た味方の声で、今井兼平も、今はただ一つしか残されていない自分の道を知った。その道を行き貫こうと決心した。

「頼重。残った手勢はどれほどか」

「なお六、七十騎はおりましょうず」

郎党の二河次郎頼重は答えた。

兼平はそこの毘沙門堂から、ふもとの瀬田川、膳所ノ浜、粟津ケ原の遠くまでを見わたして、

「よしっ、行こう。一つになって、おれにつづけ」

岡を降りて、石山道へ打って出た。

かれの考えでは、もう、大将軍義仲も北国落ちへ急いだにちがいない。「——ならば、生死をともに」と肚をきめたのだった。

けれど、それも容易なわざではない。東国勢三千余騎は、兼平が死力をふるって出たのを見、包囲に包囲を繰り返して、追いかぶさった。

兼平の部下は、次第に討ち減らされ、わずか十三騎になっていた。たったいま声のした二河次郎頼重も、いつのまにか、見えもしない。

「おう、いまのうちだ。敵はおれどもを見失うて、あらぬ方へ駆けたぞ。ただ走れ」

偶然な空隙を見出して、兼平らは、やや敵の重囲の外へ出た。

陽は傾いて、瀬田川の水も、湖面のさざ波も、朱金のようにギラギラと眩かった。そのため、山蔭の野や森は、かえって、早い暮色をたたえ、身を晦ますには、絶好だった。

するとかなたから数騎の影が馳けて来た。相互で「敵か?」と立ちすくんだ、——が、やがて先の者から、

「やあ、木曾輩ではないか。おれは義仲ぞ。——兼平はその中におらざるか」

と、呼ぶのが聞こえた。

「おう、わが殿か」

兼平と義仲は、馳け寄るなり手を取り合った。どっちも「——残念」とのみただ一

語、悲涙を見合うだけだった。
二人は竹馬の友だし、義の兄弟でもある。苦楽をともにきょうまで来て、木曾六万の兵もいずこ、無量な感に打たれずにいられない。
やがて、兼平がいった。
「無念は尽きませんが、かくお行き合いできたのも、まだまだ、天がわれらを捨て給わぬしるし。いざ、道を急ぎましょうず。時節を北陸の野に待って、きょうの辱を雪がいでは――」
「もとより、おれもその心ぞ。だが、この小勢では」
「いや、諸所の山道より、落ち来る味方もありましょうず。しばし、木蔭にてお憩いあれ」
兼平は、山の中腹から、小旗を振らせた。
あちこちで寸断された味方だの、また宇治川から醍醐の峰づたいを彷徨っていた将士など、やがて百余人も集まった。
けれど、馬も持たない敗残兵である。敵中突破は、みすみす無理だ。とはいえ、止まるもまた、自滅のほかはない。いわゆる運命の賽を、みずから投げて出るしかない。
果たして、そこの山蔭を出るやいな、つぎつぎに、強力な敵にぶつかった。
わけて、蒲冠者範頼の幕僚、稲毛三郎重成、榛谷四郎重朝、一条次郎忠頼などの手勢は、

「四天王の今井は、あの中ぞ」
と、いいはやし、さらにまた、
「木曾の大将軍義仲も」
と見つけたので、おのおの、その大功を取るのは、今ぞ、この時ぞ、と奮いあって、執拗に、義仲と兼平たちへ食い下がった。
木曾武者の死にもの狂いも眼ざましかった。しかし、馳ければ遠矢の的になり、迎えれば、眼に余る大軍の敵である。いつか義仲の前後には、幾騎の味方も見えなくなった。
このとき、多胡次郎家包も戦死した。
「兼平、もういけない」
敵を馳けちらして、ひと息ついた時、義仲は、心身ともに綿のような疲れを自分に知ったのであろう。――そのまま、馬のたて髪へうつ伏したいような息づかいをした。
「こは、お気弱な。いつものわが殿らしくもない」
わざと、兼平は、猛々といった。だが、かえりみれば、西日の地上に細長い影法師を寄せおうていた者は、前後、自分と義仲のただ二人きりでしかない。「――ああ」と、かれも内心、立ち暮れる思いを、どうしようもなかった。
「口惜しくは思うが……、この薄金の鎧すら、今は身に重とうなった。何か、辺りの夕

陽の色も眼に痛い心地ぞや。……兼平、死期は近づいたとみゆる」
「何を仰せられる。三軍の将たるお方は、たとえ、どんな苦境に立とうが、みずから、もうだめだなどと、軽々、お命を見かぎるものではありませぬ。——ここは兼平が防ぎますれば、殿には、先へお落ちなされませ」
「いや、あせっても、身も心も疲れ果てた。それに、いずこを見ても敵」
「やあ、ふがいないおん弱音。きょうの戦に、討死した味方はまだわずかです。樋口を始め、大夫坊覚明なども、君やいずこと、御生死を尋ねているやもしれません。もし、殿が北陸にありと分かれば、続々、お慕いして参りましょうず。そこまでの御忍苦もなしえぬ弱大将でもありますまい。木曾谷ごろの駒王が面だましいは、きょう、どこへ失うてしまわれましたか」
兼平は切々と、歯がみしていっていたが、
「——オオ、かなたからまた、敵が見ゆる。殿、殿。今のうちに」
と、急きたてた。
そして、大長柄の刃の平で、義仲の馬の尻をつよく撲った。
馬は義仲を乗せたまま礫のように飛んで行った。義仲は後ろ耳で聞いた。——そのあとに、わあっと揚がった喊声の嵐を。
振り返ると、夕陽の下に、真っ黒な一隊の鉄騎が、兼平一人を押っ取り囲んだらしく見える。

——その兼平は、なるべく、敵を他へ誘おうとするらしく、一角を突き破ると、さらに遠くへ遠くへと、敵勢を引き込んで行った。小さいその一点の人影は、冥途の府の熔鉱炉へ馳け込んで行くように、やがて、夕陽の果てへ淡れてしまった。

義仲は、ただ一騎となった。一騎となればまた敵の眼も避けやすく、松原の木蔭を縫いながら憩い憩い北へ急いだ。

——と、意外にも、また前方の野に、武者の咆哮が聞こえた。義仲は、道をかえようとしたが、ふと、自責に気も狂いそうになった。われも忘れて、「こうなってまで、まだ戦っている味方は、そもたれか」と、馬を向けた。

義仲の姿を知ると、そこの東国勢は、自分らの眼を疑って叫びあった。

「あれよ、大将軍の装いは、まぎれもなき木曾殿ではないか」

「おう、義仲将軍ぞ」

「敵の総大将」

たちまち、旋風は向きを変えて、義仲一人へ当ってきた。

甲斐の一条次郎忠頼、土肥実平、武蔵のなにがしと、続々、呼ばわりかかって来た。

死闘する義仲の耳には、それらの名のり名のりも、ただ肉声の怒濤としか聞こえない。けれどかれはふと、一人の味方の姿を、重囲の中に、はっきりと見た。

それは、黒髪長き女武者であったから、入り乱れる他の人馬とはすぐ見分けがついた。わけて白銀の天冠が、それを取りかこむ坂東武者のあいだに、生命の明滅を告げる

かの如くキラキラしているのがかれの眼を射た。
「おう、巴だっ。巴よ」
義仲の一と声は、かれがこれまでのかずかずな戦場で叫んだどんな場合の声よりも悲痛であった。
けれどおそらく巴の耳には、とどくまい。
間断ない馬蹄のとどろきは、かなたの巴を追っかけ追いまわしつつ、また、義仲の姿をも捕捉していた。相寄ることなど、不可抗力であった。
——が、義仲の死力は、一方を突きやぶっていた。馬も人もない狂奔の影がただ一文字に飛んでいる。そして、馬にも人にも、針鼠のように矢が立った。
——やがて脚力の限界が来、馬の早さは、急に落ちていた。
——淡ら陽の粟津ケ原を、その影は、よろめきよろめき、北をさしていた。兜の重さに、眉庇もうつ向きがちに、人も肩で息をし、駒の脚も、おぼつかなげに、縒れに縒れて行く。
——ふと、かれの頭のしんに、何一つ物音もせず、まるで氷界のような空間が生じた。その痛いような耳の奥で、自分の名を呼ぶ巴の声だけがありあり聞こえるような気がしたのである。
「…………」
義仲は、後ろを、振り向いた。

その眉、その眼もとは、すでに死相をおびている。仮面に見る夜叉のような、あの青さをたたえていた。

「と、巴……」

唇は、呼ぼうとするが、もつれて、声も声にならない。

しかし、かれが生涯に呼んだあまたな女性の、どの名よりは、心から呼んだ真実の一と声ではあった。

するとそのとき、何かにつまずいて、かれの馬は泥田のなかへ落ちこんだ。いや、それよりも、ひゅうっと、飛んで来た矢が、喉笛から内兜を射抜いたことの方が早かったかも知れない。

いずれにせよ、がぼと、大きな泥しぶきの音がした一瞬、さしもの木曾山の自然児、そしてわずかでも、覇を都に占めた朝日将軍義仲は、三十一を末期として、生命を終わっていた。

深田の泥へ、横顔の半分までも埋めたままのかれの死に顔は、白い夕星の下に、すぐ、比良の雪のような冷たいものに化していた。

それは、なんらの怨念の影もなく、むしろ、課せられた宿業を解かれて安らいだもののように見えた。

――たたたたと、たちまち、ここへ馳けて来る騎影があり、すぐ跳び降りた一人の武者は、義仲の首を持って、泥田の中からはいあがると、魔の踊りのように、その首を差

し上げて、体じゅうから怒鳴った。
「木曾殿の御首級を、われ揚げたるぞ。——相州三浦の住人、石田次郎為久、木曾将軍義仲殿のお首を取ったりっ。——木曾殿をば、石田為久が討ちとったり」

葉屑花屑

逢坂山を東へ下り、粟津ケ原へかかる途中、巴は、敵に見つかった。雄を見失った雌雉子のように、かの女の姿は、枯れ野や疎林を、逃げ奔った。戦は、かの女の本能のものではない。
もとより、名などは欲しない。よい敵に出会おうとも願わない。
ただ「良人よ、わが良人よ」と心がさけぶ。どうしようもない断末魔の胸が呼ぶ。
そのうちに、まわりの敵が、にわかに、あらぬ方へどっと馳け去った。それぞ、義仲の追撃へ転じていたものとは、かの女は知るよしもなかった。女の眦に、どうして、それほどなゆとりがあろう。
しかしなお、恐ろしい敵は、かの女の逃げ奔る先々に立ち現われた。
「武蔵の住人、御田八郎師重」
と、立ちふさがった勇者と、その部下の三十騎など、もっとも、かの女を苦しめた敵だった。

巴の勇は、いつも無我な姿にあった。日ごろ人がその大力や武技を賞め称えても、かの女自身は、さして、人なみすぐれた自分とも思っていないようだった。ただ、生まれつき、必死となれば、どこからか、そういう力のわくものと思い、猟人に追いつめられた窮鳥となれば、翻って勃然と、相手の影に血けむりを立たせた。

御田八郎師重の如きは、自信満々な豪の者であったから、

「いかに、木曾の女将軍巴であろうと、たかの知れた女武者」

とばかり、無造作に組みついて行ったのである。ところが、巴に身をかわされ、その鞍腰を浮かしたせつな、兜の錣をつかまれてしまった。

御田の郎党たちは「南無三、おあるじの大事」と、助けに馳けよったが、間に合わなかった。一瞬のまに、八郎は死骸にされて投げ捨てられ、巴の馬は、それを躍りこえてかなたへ馳けていた。

野面はいつか黄昏れかけ、虫の知らせか、かの女の胸を冷たいものが吹き抜けた。しかもなお、かの女の影には敵騎の影がつきまとっていた。

――後に思い合わせれば、その時刻、かの女の良人は、ちょうど、最期の一矢を真額にうけていたのである。巴はまだ知らなかったのに、急に髪の根がサアと冷たくそそけ立ち、なぜか、声を出して哭きたくなった。

戦い戦い、肉体から遊離していた魂が、卒然と肉体へ帰って来たかのような思いである。一月二十日のまだ寒い夕風と汗の冷えが、急にわれを呼び返したものかもしれな

い。

「おう……。新手の敵は、和田殿の手の者と名のったような。もし、和田義盛殿の兵ならば」

かの女は、迫り寄る敵影を見まわした。

さっきから二、三の武者が、前後で「和田小太郎義盛の御内」と呼ばわったのを、ふと、思い直したのだった。その一瞬からといっていい。かの女の眸には生への執着が、ありありとかがやいた。その眸はまた、死以外な、べつ道を、見つけ出したかのようでもあった。

とつぜん、われから敵の群へ向かって、馬を進めて行き、かの女は、母が子を呼ぶ絶叫にも似た声で、夕やみへ呼んだ。

「西浦とよぶ武者やある。和田殿の手勢なれば、その内に、西浦七郎も交じりおらん。巴が求め来つる望みの敵よ。見参あれ、西浦七郎っ」

「――おうっ」

という声がした。

たちまち、かの女の前に、一騎の武者が躍り立った。黒革のよろいに、鉢兜の緒をしめ、馬上、長巻をかい込んでいる。

夕明りの空の下に、かの女は、その敵の顔を見さだめた。見覚えのある眉目だった。

去年の晩秋のころ――

鎌倉方の諜者として捕まり、六条畷の竹藪で首切られるところを、自分が救って、放してやったあの顔にちがいない。

ただの諜者なら助けもしないが、その西浦七郎は、和田義盛の家人で、時には、「いま鎌倉におわす木曾殿の質子（人質）義高殿のお住居に、番士として立つこともある」といったので、巴は、わが子恋しさに、また、後の便りも得たさに、放してやったものである。

それを恩と感じてか、その後、七郎の才覚によって、義高のいじらしい文が、幾度か、都の母へ届いていた。

つれない良人、夜は自分のそばにいない良人。それに代るものとして、かの女は義高の文を、いつも胸に抱きしめた。

しかし、敵の府に人質として取られているわが子である。しょせん、この世で会うことはできないものとあきらめきっていたのだった。――が今、和田の手勢と聞いたとき、はっと、母の本性を衝かれたのである。道はそこと気づいたのだった。「生きたい」と自然に体じゅうが哭きふるえ、「――会いたい。ひと眼でもわが子に会いたい。そのためには、どんな辱でも」と、一途に変っていたのである。

しかし、敵の眼もあると思ったか、巴はわざと、

「いで寄れ七郎。巴が、今生の思い出に、眼にもの見せん」

と、挑戦した。

西浦七郎は長巻を振るってそれに応じた。馬と馬が相搏つばかり寄り合った。七郎はすぐ打物を投げ捨て、巴に組みついた。
——どうと、馬上から諸だおれに落ちたと見えたとき、七郎は巴を下にねじ伏せていた。巴は、望みどおり敵の手に生け捕られた。
蒲冠者範頼は、同時刻ごろ、その本陣を、大津まですすめ、叡山や園城寺の代表者らの迎えをうけた。また、ただちに鎌倉の兄頼朝のところへは、
〃——義仲、兼平らは、ただ今、討ち終つて候ひぬ。木曾の内室巴は生け捕り申して候ふ〃
と、概略の戦況を、すぐ早馬で、報らせておくことを怠らなかった。
範頼は、容儀、体つきも、小柄な義経よりは、はるかに堂々としていた。義経とは、母もちがう如く、その面だち性格も、ちがっている。
かれの生母は、遠江国池田ノ宿の遊女であった。源義朝の七男であり、義経よりわずか年上だった。「毒にも薬にもならぬ蒲殿」などといわれたが、それだけに、頼朝の命令には、唯々諾々たる人である。もちろん、頼朝には、気に入られた。
戦場の経験も、義経は初陣だったが、かれはこんどが初めてではない。——すでに治承五年、常陸地方の征野に立ったこともあり、その経歴、頼朝の信用、また、義経より

年上たる点からも、当然、義経以上、重く用いられていた。
けれど、その大手軍が、義経に一歩都入りを先んじられたので、かれの幕僚らは、残念がっていた。しかし、義仲と兼平の首を獲た後は、
「これで鎌倉殿への面目も立ったり」
と、全軍、歓呼に沸いて来た。
はや、篝火の宵やみとなり、大津の辻々から園城寺山門にかけて、不知火のような火光がながめられた。範頼は陣所の床几に倚って、今、血や泥を洗われて来た義仲と兼平との首二つを並べて実検していた。
「…………」
かれも、また、左右の諸将も。
二個の冷たい物体にたいして、凝視の唾をのんだまま、一言を発しる者もなかった。
――と、忍びよる夕風にそよと揺れている陣幕の下で、くっ……とのどをつき破ったような嗚咽を抑えた者がある。
「…………」
諸将は、そこを振り向いて、さらに、戦いの冷酷さを、きびしく知った。他人の身とも思えないものに心を衝かれ、涙せずにいられなかった。
篝火の光を恥じらう如く、そこに泣き伏していたのは、巴であった。
良人の首と、兄の首とを、ひと所に見て、生き残った身をかの女は悔いた。「なぜ、

死なかったか」と自分を責めた。しかしまたべつな身悶えが、否ともいう。
もし、良人や兄にいわせても「ともに死ね」とは仰せられまい。自分にも、「生きるは恥でない」とする一心はある。
日ごろの良人は、口にも出さなかったが、口に出さない男親の胸には、女親以上にも、またべつなわが子への思いがあったに相違ない。
質子として敵方に取られている一子義高のことを、忘れ去っているはずはない。そのことは男親の責任でもあった。今にして思えば、子を犠牲にしてなされた過った一時のがれの策だった。それだけに、男親の苦痛は深く、思い出すのも辛かったのであろう。自然、口にも出さないという逆な表情をとっていたのではなかろうか。
巴は、良人の日ごろを、そう解いていた。
——だから、自分が生きのびて、縄目の辱を忍んでも、子の行く末を見とどけようという一念は、分かってくださらぬはずはない。むしろ「よくぞ」といってくれると思う。
捕われの身となれば、いずれは、鎌倉へ差し立てられ、頼朝の前に引きすえられることになるに相違ない。そのときこそ、母の懸命な祈りをもって頼朝の前に出よう。頼朝夫婦にも子はあると聞く。母子の情に変りはあるまい。義高の助命は聞きとどけてくれるであろう。その願いさえかなえば、母の身などは、八ツ裂きになろうが、惜しくはない、恨みでもない。

——巴は、人前もなく、つい、泣き伏した一瞬、かきみだれる頭のうちで、それらの思いを、稲妻のように繰り返していた。そして、それなのに、「何を嘆くか、何を恥じるか」と、自分を打ち励ましたように、やがて、胸を上げた。泣きぬれた顔の涙をぬぐおうにも、両手はうしろに縛られていた。

おりふし、畠山次郎重忠が、義経の使いとしてここへ通った。都の情況を、範頼に告げに来たのである。そして、戦捷を祝し合うなど、雑談のうちに、重忠はふと、巴の姿に眼をとめた。

「ああ、巴ノ前も、捕われましたな」

何か感慨をもった語調だったので、範頼は、

「御存知か」

と、重忠にたずねた。

「いや、前身は何も存ぜぬが、きょう、加茂河原にて、その女将軍に行き合い申し、よい敵と、寄るやいな、鎧の袖を後ろより引っつかみました。すると巴ノ前は、片手で発矢と払い退け、一顧もくれず逃げ去ったのです。それがしの手には、なんと、草摺の半分だけが残っていました。げにや、うわさにたがわぬ大力かなと舌を巻くまに、つい逸したものでござる。——あれ御覧ぜよ、巴ノ前の鎧の片袖は、あの通り、綻びておりまする」

そう話した重忠の眼にも涙が光った。

――翌る二十一日。

諸門を開き、庁務を執り行わせ、院は、色めきたっていた。

法皇御自身も、義仲の前には深く被っておられた仮面を脱いで、昨夜から朗々たるお声がよくもれていた。もう御仮病を構えて、飲みもされぬ煎薬を冷泉ノ局に煮させるなどの御苦労も要らなくなった。

ともかく、ここを枢軸として、天下の形勢は、一回転したのである。

院の第一にやった政務は、鎌倉の頼朝へ、急使を派して、その功を賞されたことであり、翌二十二日は、さきに罷免させられた摂政基通を、もとの職に復し、徳大寺実定を、内大臣に還任されるなど、すべて、義仲によって壊された院の側近構成を、再び、以前のとおりに固め直したことだった。

*

二十一日の夜。まだ宵のころ。

東寺の辺で、残党の一軍と、味方との間に合戦が始まったと聞こえたので、院の守護についていた九郎義経はすぐ馬を飛ばして、召し捕りに向かった。

が、合戦のあった様子もない。

ただ木曾方の残兵数十人が、数珠つなぎとなってひかれて来、しばらく東寺の門前に縛られていたので、市中へ誤伝が飛んだのである。中には、木曾四天王のひとり樋口兼

光も縄目(なわめ)をうけていた。

「やあ、弁慶に伊勢三郎よな。今、洛内へ着いたるか」

そこにいた味方を見、義経は駒を降りて、われから二人の方へ寄って行った。

武蔵坊弁慶と伊勢三郎とは、あわててかれの前にひざまずき、

「せっかくの宇治川も見ず、あれより、河内近辺を戦い歩いて、ともかく、仰せつけの役を仕果たし、ただ今、ここに到着いたしました。――で、召し捕りの降人どもの処置など、いかにすべきか、使いを派してお指図を待たんとしていたところでございました」

と、答えた。

河内へ出たかれらの隊は、志田義広を襲い、樋口の伏兵に挑(いど)み、ついに、敵が予定の宇治川へ突いて出る機会を失わせたのみか、さいごに、兼光を捕虜として来たのであった。

その樋口兼光は、淀の大渡(おおわたし)まで来たとき、義仲、兼平の死を知って「万事は終わった」と、観念したらしい。

武蔵の児玉党(こだまとう)は、樋口家とは、旧縁のある間だった。そこでかれは、児玉党の扱いを頼みに降伏したのである。これ以上、部下を死なすにも忍びなかったものらしい。

「木曾の内でも、良き将と聞こゆる樋口。さらば、身柄は児玉党に預けてやらん。義経よりも、御助命の沙汰あらんように、院へお願い申しあげん」

義経は、兼光の身柄を、その場から、味方の児玉党へ渡してやった。
けれど、かれの願いも、児玉党の嘆願も、院の容れるところとはならなかった。「樋口は、法住寺殿焼き打ちの元凶の一人、かたがた、木曾への憎しみは、一朝には忘れえぬ」という公卿女房らの反対の声を理由にして、
「洛中を引きまわしのうえ、首は獄門に梟け、世の見せしめにせよ」
と、義経への厳命だった。

*

同月の二十六日は、いろいろな意味で、多事な日であった。
後白河は、早朝に、九条兼実（玉葉の筆者）を召されていた。何かと、今後についての御諮問があったらしい。
とかく、院のやり方には、不満のあった兼実であったが、こんどは、神妙に出仕した。善後策五箇条の政策を奉答し、やがて、月輪へ帰って行った。
それがすむと、法皇御自身、まもなく、御車に駕して、御出門になった。めずらしい御外出である。
大路小路の景色も、がらりと一変していた。まるで祭りのような人出である。法皇は、六条東の洞院に御車を立てて、見物人とともに、その日の、〃首渡し〃の列を待たれた。御出門は、義仲以下の首を御覧になるためであったらしい。
やがて。

範頼、義経、そのほか鎌倉武者の華々しい行列が、亡将義仲、兼平、根井、楯などの首級を掲げて、六条東獄の門へ向かって行った。

首は、そこの樗の木に梟けられる。

樋口兼光は、生身のまま引きまわされ、後に首切られた。そして、おなじ木に梟けられた。

また同夜、清水観世音の境内で、木曾の一将の高梨高信が捕まり、これも斬首されて、梟けられたし、そのほか、おなじこずえには、あとから、幾つもの首が、宿命の木に加えられた。

――ところが、数日のうちに。

いつ、たれが盗んで行ったのか、義仲の首だけが、こずえから失くなっていた。東獄の番卒たちは、責めを惧れて、仲間同士、

「人には語るな。もう数も分からぬ。相好も下からは見分けもつくまい」

と、固く他言を秘し合って、ただ、ふしぎな思いを抱いていた。

＊

鳥辺野の奥に、身を入れるばかりな萱を葺き、穴小屋の暗い中に、戦後、身を横たえていた一人の女雑兵があった。

ある夜、かの女は、山の落葉や枯れ木をかき集め、一個の首を、火葬していた。

「…………」

泣いて泣いて、泣きつつそれを、灰にしていた。

義仲がさいごの戦いに出てゆく朝、五条御所の裏道で、葵の射た矢に、深股を射られてたおれた、あの山吹であった。

射られた箇所は、偶然にも、倶利伽羅谷でかの女が毒矢をもって葵を射たところと同じ深股だった。

「恋も、悶掻きも、今は何もない。……ただ、人を憎しめば憎しまれる酬いだけは怖ろしい」

一と握りほどな人骨を抱いて、山吹は、窶れた眼もとをうつろに、土に寝ていた。

――やがて、傷も癒え、しばらくは鳥辺野に多い女乞食かと見られていたが、いつか、姿も小屋も失くなっていた。

かの女は、義仲の遺骨を抱いて、北陸へ行き、草庵を結んで、生涯、供養を余生の生活として、長寿もしたということである。

その地が、懺悔の谷の倶利伽羅であったか、あるいは、かの女にとって忘れがたい伏木の里か、俚言の伝説はまちまちである。さだかには分からない。

ただ、義仲の後を弔うた女性はもう一人あった。それは、関ノ明神でわれに返った葵である。

葵も、越前に帰り、また木曾谷をも訪うて、義仲の縁につながる諸国の人びとに、さいごの模様を告げに歩いたという。そしてかの女の晩年もまた、おそらく、草庵の清雅

なものではなかったろうか。

＊

義仲の死後、かれの周囲の女性たちは、巴をはじめ、みな余命だけはつないで行ったが、しかしここにもっとも可憐しい一人の犠牲がなお残されていた。

それは、冬姫である。

あの日のことなので、法皇はお忘れであったろうが、さすが、親と名のある基房は、義仲が敗れて大津へ落ちたと聞くやいな、従者をつれて、すぐ梅小路へ走って行った。

そして、家の奥へ馳け込んでゆくまも「姫よ、むすめよ」と呼びつづけたが、それらしき一間へはいってみたとたんに、腰を抜かしたようにすわってしまった。

冬姫は、経机に胸をもたせかけて、眠るがごとく、死んでいた。真っ白いのどにも胸の辺にも血よごれはなく、毒を飲んだものらしい。

遺書もなかった。

けれど、法皇のおさしずのもとに基房が姫へ書いた例の密書——「その身を贄とし て、義仲の獣欲に与えよ。その黒髪の力をもて義仲をつなぎ止めよ。やがて鎌倉勢の上洛は近きにあり。それこそが、院への忠義ぞ、親への孝ぞ」とあるあの薄葉の二つに裂かれた紙片が、継ぎ合わせて、机の端にのせてあった。

遺書はない。子の言葉としてはない。

けれど、その死と、文字そのものが、無言の抗議を、院と親とへ、烈しく叫んでいる

ようであった。

寿永の落し子

舞へ舞へ　蝸牛
舞はぬものならば
馬の子や　牛の子に
蹴させてん　踏み破らせてん
——おしとんど　おしとんど
舞へ舞へ　蝸牛
まこと美しう舞ふたらば
車にや乗せてん　花の園にや遊ばせてん
——おしとんど　おしとんど

池の向こうの遍照寺山の下あたりで、こう、声をそろえて歌うのが、池水にこだまして、こちら側の岸まで手に取るように聞こえてくる。よほどたくさんな子どもたちらしいのだ。

そこは東嵯峨の広沢の池。

何かぬしでもいそうな大池の水の面には、白い雲が、うごきもせず、浮いていた。
子どもらは、かなたの無人の境を行く淋しさを、唱歌で紛らわそうとするのか、それとも、みそさざいや、鶯や、駒鳥とおなじように、春さきの天地を躍っているのか、声はするが、渚の木々は深いので、かれらの影は見えもしない。

住吉四所のおん前にや
眉目よき女体ぞおはします
　チイタラ　トウタラ　トウタラリ
男はたれぞ尋ぬれば
松ケ崎なるすき男
　トウトウ　タラリ　チイタラリ

大人の罪とも、世間の悪さのせいともいえよう。かれらは、かれら独自な天真を発露するに適した、いい歌も持たなかった。
　その唱和は無邪気に声も澄んでいるが、季節の歌詞でもないし、童心に合ったものでもない。どこかで聞き覚えた大人のものを、わいわいと真似ているに過ぎないのである。
　それも初めのうちはまだよかったが、すこし途切れて、そして歌うタネもなくなって来ると、なおさら大人の領域へはいって、

鈴は　さや振る　藤太巫女(みこ)
目より上にぞ　鈴は振る
ゆらり　ゆらりと　舞ひ腰に
目より下にて　鈴振れば
懈怠(けたい)なりとて　あなゆゝし
神は　おん腹立てたまふ

と純然たる酒間の道化歌を合唱し出したり、また、

王子（王子の社）の　お前の笹草は
駒は食(は)めども　なほ茂し
主(ぬし)は来ねども　夜殿(よどの)には
床(ゆか)の間(ま)ぞなき　若ければ

などと大人ですらも、顔を赤らめそうな卑猥(ひわい)な俗歌を、平気でというよりは、むしろ余りにも人界に遠い感じの静寂(しじま)へ向かって何かへ逆らってみたいように、ありったけな声を張って、怒鳴るのだった。

やがてその実体らしい黒い群が池の北側に見え始めた。下はヨチヨチ歩きの幼童から上は十二、三の洟垂(はなた)れをかしらに三、四十人もの童(わっぱ)ばかりが、何をムシャムシャ食った

り、あばき合ったりしているのか、まるで小猿の群のようにちょっとの静止もなく行進して来る。

おそらく山を荒して何か食う物でも獲て来たのであろうか。春先では果実もないはずだが、小鳥の裂いたのを持ち、自然薯のような物をぼりぼり噛み、ともあれ皆、唇のまわりを、生々と濡らしている。そして腹の満ちた童は、棒切れでそこらをたたきまわったり、女の子のお尻を突っついたり、おそろしく愉快そうである。さながら太陽は自分たちのためにのみあるかのような、わが物顔の群だった。

「あっ、いけねえ」

中でも大きいのが、とつぜん、すっ頓狂に叫んだ。

「お内儀さんが来たよ。あの口うるさいお内儀が向こうからやって来たぜ」

「それ、畑へ行ってろ」

がさがさっと、そこらの灌木の茂みへ影をかくすと、まるで野鳥の素迅さである。大覚寺と池の中間にあたる山添いの傾斜な地へ、思い思い走って行った。

土の色も新しい山畑が、麦や菜の色をだんだらに綴っていた。かれらは鍬を持ったり、石拾いしたり、にわかに畑仕事をやり出した。

けれど間もなくそこへ来たかれらの恐がるお内儀さんなる者が、これまた、汚い幼子を両手に引いて、

「みんな今まで、どこへ行ってたの。分かってますよ」

山畑をながめ渡していった。広い地面はしいんとして答えもしなければ顔を上げる者もなかった。そしてお内儀さんのしかる声だけが流れて行った。
「それにまた、あんな歌をうたってはいけないよって、いつもいつもいってるでしょ。たれ、あんな淫らな歌を覚えて来て、みんなに教えたのは。——お師匠さまが、大きいのを連れて来いって、小屋で怒っていらっしゃるのだよ。さ、大きい者は、こっちへお出で、麻丸、おまえもお父さまの小屋へおいでなさい」

麻丸は、十二になった。
阿部麻鳥と蓬との仲の息子である。
去年。
平家一門が都を落ち、入れ代って木曾が進駐して来たさい、もう、疎開馴れしている京の庶民は、ほとんど洛外の山野へ蜘蛛の子と隠れてしまった。しかし、世間が少し落ち着くとまた、町恋しさに、それぞれの巣へ帰って行った。
あの当時から、麻鳥の一家は、嵯峨の片すみに、今のような生活の根を下ろしていた。例の柳ノ水跡の貧民街も、きれいに焼けてしまったので、それ幸いに、当の麻鳥は、すすまぬ気の妻を説いて、
「まだまだ、これですむとは思われない。またいつかは、おなじ騒ぎの繰り返しだろうよ。それに、大勢の子を抱えてもいるし、まあ、一、二年はここにいてみようじゃない

か」

と、腰をすえたものだった。

大勢の子といっても、その実、夫婦の間には、麻丸と、ことし十になる女の子と、二人だけがあるに過ぎない。

けれど、ここの夫婦の寝小屋から、辺りの子ども小屋には、蜂の巣みたいに、乳のみ程度の幼児から、生まれて間のない赤ン坊まで加え、およそ四、五十人にも達する小さい者たちが寄っていた。

それらはすべて、麻鳥が、戦禍の中から拾って来た捨て子だの、迷子だの、家なし親なしの野宿子ばかりだった。

「おまえも知っているだろう。わしの友達の仁和寺の隆暁どのは、治承の大飢饉のとき、洛中が屍臭にみちるほどな餓死者を見て、毎日毎夜、一つ一つの死骸を弔うてその額に阿字を書いて歩いたものだ。……けれど、死者に何をしてやったところで追いつきはしなかろう。というて、今の世間を、よそ眼には見ていられないし」

これはかれが、日ごろからの口ぐせ、いや宿願のようなもので——

「みんな食えないし、戦のなせる業でもあるが、こんな地獄へ生み落された子ほど憐れなものはない。放っておけば、捨て子はみすみす死ぬだけのものだし、宿なし子は、未来かならず、羅生門に巣食う浮浪か、盗賊になるほかはなかろう。……仁和寺の隆暁どののように死者何万の供養をしてまわるより、生きているうちの何人でも、わしら夫婦

の手で救い取ってやろうじゃないかね。ねえ蓬……。きっとおまえにも、愉しい仕事になるにちがいないよ」

と沁々、妻に説いたのが、事の起こりであった。

もとより、蓬は初めから良人の思い立ちに全幅の同意を寄せたわけではない。

近ごろの世間では、親子四人が口を糊するだけでもたいへんなことである。自分の子の腕白や悪戯だけでも持て余しているところへ、縁もゆかりもないちまたの子までを集めて来られたら、わたしの体は幾つあっても足りはしない、という。

それにまた、捨て子の孤児と一口にいうが、それも際限のない数ではないか。いくら拾ったって、拾いきれるものではない。人が聞いたら、物好きにもほどがあると笑うであろう。苦しんだり、笑われたり、これほどばかばかしいはなしはない。

「だいいち、赤子にはお乳をどうするつもりです。また、少し大きい子は、大人より食べるんですよ。その算段も考えないで——」

と、例によって、口は蓬の方が達者なので、良人を捲したてて、初めは、拒んだものだった。

けれど、麻鳥が、

「いやいや、糧集めは、おまえに苦労はかけないよ。また、赤子の世話には、家も身寄りも失った老婆もたくさんいるじゃないか。そんなのを連れて来て、子らの世話をさせればよいさ」

と、初志をひるがえす様子もなく、やがて麻鳥が外から帰って来るときには、かならず、フニャフニャ泣いているのを抱いて来たり、見るからに汚い素跣足の童の手をひいて帰って来たりし始めたのであった。

それがいつか、たまりたまって、老幼ここに六、七十人もの子ども天国ができてしまったわけだが、妻と約した糧集めには、麻鳥も容易でなかった。奥嵯峨から丹波路までの農家や社寺を訪うて、薬を売り、病人を診、灸術までもやって、稗粟ばかりでなく、牛を求めて来たり、また、山野の食える物を摘んだり、魚鳥を捕ったり、働ける童には耕作を教えなどして、この麦秋から先は、やって行ける自信もついてきたのである。

だが、やや落ち着きが見られると、べつな苦労も起こってきた。

乳児には、米の粉や牛の乳を与え、年寄りの手にまかせておけるが、山畑をやらせておく童たちの間には、だんだん、乱世の辻に培われたかれら特有なものを現わしてきた。山野を荒すだけならよいが、附近の農家や寺房を立ちまわって、見境いない悪戯や物盗りまでして歩くらしく、これには麻鳥もほとほと手を焼いていた。

なんとか将来に、悪いことをせずにも生きてゆける仕事とその道の楽しみも覚えさせ、文字の一つも教えておき、この不幸な乱世の落し子たちを健康な者として世へ送り出してやりたいというかれの念願も、このごろでは、かれの根気の方が負けてしまいそうだった。

その一例には。——多少、童学の躾もしたわが子の麻丸をも、自分の分身として、かれらの仲間に加え、そして、よい感化を見ようと試みたのだったが、かえって、麻丸の方が、悪童たちの悪風に染められてしまい、このごろでは、どうもいちばん悪いのが、麻丸ではないかと懸念されるふしさえあった。

「だから、わたしがいわないことじゃないじゃありませんか」

と、妻の蓬は、良人がそれについて、憂えたり怒ったりするたびに、これまた、かれの愚直な理想を揶揄するごとくいうのであった。

そして、今も——である。

子どもらの、子どもらしくない猥歌が、池ごしにかれの小屋へ聞こえて来たので、麻鳥が「麻丸を呼んで来い」と、父のきびしさを眉に見せて蓬へいいつけたのであるが、蓬は女親のつねとして「麻丸だけが悪いのではない」と心でつぶやき、麻丸だけを父の叱言の前にすわらせては可哀そうだとも考えて、ほかの大勢の洟垂れどもまで、一括してかれの小屋へ引っ張って来たのであった。

しかし麻鳥は、ガヤガヤと眼の前にやって来たそれらの小さい者を見ると、叱言どころではなくなってしまい、そのありのままな人間の子の振舞いや、ピチピチした生命に、むしろ自分までが共鳴しているような可憐さを覚えるのだった。

どこを探したって、かれら自身の性に、かれら自身が企んでいる悪質なものはない。みな世間や大人の悪風を、その天然な性に写しているだけのものである。叱言をいうな

ら世の辻へ立って世の大人どもへ、そして最もこの世をうごかす大きな力をもつ権力者へたいしていわなければならないであろう。そんなことをすればすぐ首が飛んでしまう。――麻鳥は自問自答に終わりながら、ただことば少なく、一応、息子の麻丸をしかって、それからほかの悪童たちへも、

「なあ、良い子になってくれ。悪い大人の真似はしないでくれよ。畑の仕事も、やがて稔る物は今にみんなおまえたちの糧になるんだ。腹いっぱい食べることだ。そして楽しく暮らそうじゃないか。そのうち、小父さんが、良い歌も教えてやろう。良い本も読んで聞かせてやろう。元気にやってくれよ。なあ、みんな」

と、かえって笑顔で宥ってしまったのであった。

かたくなっていた悪童たちの顔が急に解けた。おまけに、黍と蓬を搗きまぜた餅が山とできていた。仲よく分けて食べるのだよといわれ、かれらは乱舞して釜屋のまわりにむらがった。山畑に残っているほかのチビ仲間をも大声で呼び合った。

すると急にそのにぎわいが、しゅんと休んだ。

蓬が小屋から顔を出してみると、大覚寺の偉そうな坊官と法師武者が五人ほど近づいて来たのであった。中の法師の一人が、眼早く蓬の顔を見つけると、

「麻鳥どのはおるか、いたら、ここへ出てもらいたい。執行殿のお旨をうけて、円乗少僧都が見えられたのだ。粗略に思うまい」

と、何やら、むずかしそうに告げた。

不気味な客人

大覚寺は嵯峨帝ごろの開基で、寺格も高く、堂塔も広大だったし、もちろん、寺領は附近一帯にわたっていた。
また代々、法親王がおられたので「*守護不入」という治外法権の域でもあった。
麻鳥は医師として、寺中に二、三の知己があり、その伝手で寺領の山間に孤児小屋を許されたものだった。それには、守護不入のここは、子どもらにとって、絶好な安全場所だし、朝夕の鐘が聞こえるのもかれらの感化に悪かろうはずはないと歓んでいたのである。
ところが、今、麻鳥の前に立ちはだかった坊官の円乗は、
「即刻、小屋を取り払って、寺領の外へ立ち退けとの、執行殿のお沙汰である。猶予せば、法師らに命じ、小屋も釜屋も取り潰すゆえ、さよう心得よ」
と、頭からのいい渡しであった。
「これはまた、途方に暮れまする。どうした御都合でございましょうか」
麻鳥はいう通りな顔を曇らせて、心からその坊官に訴えた。元の住居は、焼け野原だし、洛中では、これだけの幼児を養ってゆく工夫もない。かたがた、数日前に、木曾殿は討死し、代って、鎌倉武者が洛内の治安に当っているとは聞くが、物騒と殺伐さは、

変ることもなかろうと思われる。どうか、ここ一両年は、憐れな子どものために、お目ざわりにならぬ山地の一隅にこのままおいていただきたいと、地にぬかずいて頼むのだった。

「いや、相ならん。一両年はおろか、一両日もここにはおけぬ」

坊官も下法師らも、そんな事情など知ったことか、と耳かたむける風もない。

法師の一人は、肩いからして、前の言よりも、もっと強いことばでいった。

「これこれ薬師。きょうまで、置いて給わったのさえ、並ならぬお慈悲なのだぞ。さるを、その不平面はなんだ不平面はよ。——またいかなる御都合でとは白々しい。おのれの飼っている餓鬼どもが、あちこちの農家で物盗りしたり、寺中に忍び入っては、御仏のお供物までを荒しているのを知らぬはずもあるまいが」

「…………」

「それみろ、夫婦ともに顔色を変え、恐れ入った態ではないか。近くの百姓どもの訴えでは、餓鬼らを使って、盗みをやらせているのは、薬師の夫婦だといっておる」

「こは、心外な仰せをば」

「なに、心外。心外ならば、とっとと立ち退いたらどうだ。ここらの山辺も浄地の内、虱たかりの餓鬼ばらに尿をさせておく所ではない」

「浄地は心得ておりまする。それに無断でいたわけでもありません。寺中数名のお方に願い出て」

「知らん、知らん。執行殿はそんなこと、お耳にもしておらぬ由だ。なお、左右申すは、このうえにも、餓鬼蜂を使って、甘い汁を吸おうがためか」

余りな暴言に、麻鳥も、むっとしたらしく、睨めつけると、その肩を、法師の高下駄が、

「なんだ、その面は」

と、蹴とばしかけた。

さっきから母親のそばに立って、ベソをかきかけていた麻丸が、それと見るや、いきなり法師の足もとへしがみついて、何か叫んだ。子どもの力ではあったが、不意を食って法師は後ろざまに引っくり返った。もちろん、怒号を発して起きるやいな、

「しゃつ、この餓鬼めが」

と、麻丸の首をつかみ、いやというほど、地べたへたたきつけた。

麻丸は蛙みたいに平たくなり、大声で泣き出した。ほかの童も一しょになってわんわん泣く。麻鳥は一そう途方に暮れ、起って、子を抱き起こそうとしたのを、相手へ食ってかかるかとでも間違えたのだろう、蓬が、後ろから抱きとめるし、法師たちも、法衣の袖をたくし上げて、「――小癪な」とばかり身構えを取った。

すると小屋裏の小道に最前から駒を立ててこちらをながめていた狩衣折烏帽子の五十ぢかい男が、馬をすこし進めて来て、

「円乗どの、円乗どの。えらい騒ぎのようだが、ちと、大人気ないではないか」

と、笑いながら声をかけた。
「おう、お客人か」
円乗はその人を振り返って、
「大人気ないといわるるが、どうしてどうして、洛中の人間どもと来ては、みな一と筋縄で恐れ入るやつらではない。こうでもせねば、立ち退きはしないのだ」
「まあ、まあ、そう息巻くことはなかろう。相手は力もない薬師夫婦」
「なんの、薬師やら盗み師やら知れたものではない。寺倉に穴をあけたり、供物を攫うたりする野鼠の巣はここと見て、追い払うているのでおざるよ。百姓どもの苦情もあっての」
「いや、その男が、薬師であることは、てまえが保証する。まあ、待たれよ、円乗どの」
男は馬を降りた様子である。「どなたであろうか」と、麻鳥は振り向いて待った。自分を知っているらしくもあるが、声柄にも覚えはない。
近づいて来た男は、円乗や法師たちには眼もくれず、麻鳥のいぶかり顔へ向かって真っすぐに寄って来た。そして「やあ……」と馴々しげに笑いかけて、
「久しぶりだの、麻鳥どの。そのせつは、――あなたは人なみには死ねないお人だ――とのお診立てを受けたが、御覧の通り、おかげでいまもって達者でおざる。ははは、……はて、お忘れかの。……五年前に、旅先の京の仮宿にて、御療治にあずかった奥州

の吉次と申す者。みちのくの金売り商人吉次でおざるよ」
やっと、思い出したかのようである。「おお、あのときの」と、麻鳥はその眼もとを和ませかけた。けれど同時にその人物の恐ろしい陰影をもあわせて想起したらしい。依然、疑いの色をつつんで、

「…………」

相手の馴々しさを、ただ、見ていた。

――が、吉次は、広い世間の中の一人に、自分がどういう人間に記憶されていたかなどは、問題でないし、また顧慮する風もまったくない。

「なんと、思いがけなく出会うたものだな。わしは去年の暮から大覚寺の一院に宿借りしていたのだが、ここにおぬしが住むとはつい知らなかった。以前、治療にあずかった誼もある。執行殿へは、わしからよいように扱うて進ぜる。お内儀も、もう心配せぬがよい」

かれは円乗たちの方へ歩みよって、何か小声で説得し出した。

客房に宿借りはしていても、大覚寺では下へもおかないかれへの応対ぶりだった。奥州平泉の客人と聞くだに、豊かな黄金力の背景を思わせるし、また実際に、吉次が寄進や金費いに物惜しみしないことはみな眼に見ていた。十余年前、よく鞍馬詣でをしていたころから、今もかれのその派手な生活ぶりは、ちっとも違っていない。

「……うむ。ではまあ、せっかく客人のお扱い、あなたへお任せしておこう。再び、訴え事など起こらぬように、あの夫婦には、よく申し聞かせていただきたい」

いずれは吉次の懐の砂金がものをいったのであろう。円乗と法師たちは、振り向きもせず立ち去った。吉次はそれを見送りながら、「やれやれ、金の威力は、仏の功力に勝るわい」といいたげに、鞍腰の疲れを自分のこぶしで軽くたたきながら、

「お内儀、湯でも水でも一ぱいくれぬか。きのうも五条まで行ってむだ足、きょうもむだ足、ちと気も腐ったが、のどもかわいてな。はははは」

と、問わず語りにいって、小屋の縁へ腰かけ込んだ。

そして、蓬が汲んで出した白湯を飲みながら、それを機に、

「ときに、お内儀。このまえ、柳ノ水のお住居を訪うたおり、ふと、話に出たと思うが、おもとには乙女のころ、常磐どのに仕えていたということだったの」

「…………」

蓬は、良人の顔ばかりうかがっていた。麻鳥もまた、めったなことはいうなと眼で戒めているのである。

「いや、それはどうでもよい。けれど、こういうわしも、源九郎義経の君とは、浅からぬ御縁を持つ者。そう、わしへの用心は要るまいが」

吉次は、いや味まじりの薄笑いをたたえ、

「じつは、きのうといいきょうといい、五条の院御所まで通うたのは、その九郎の君

へ、久しぶり、お目にかかりたさに伺うたわけだ。ところが、四門は武者の厚い陣。公卿車やら、使者、早馬の出入りなど、戦もかたづいたばかりなので、いやもう、たいへんな院の混雑ぶり。お取次ぎをと頼んでも、九郎の君のお耳へは、果たして取次がれたのか否かも分からぬ。きのうも、あす来い。きょう参っても、またあす来い、と追い返されてな……」

蓬はいつか釣り込まれたような眼をして聞き入った。

――こんど上洛した鎌倉勢の大将、九郎義経の君とは、十年前の牛若さまとは、かの女もうわさを耳にして、よそながら胸躍らせていたのである。

もし、ほんとに、その人ならば、ぜひ陣門へお訪ねしたい。おん母の常磐さまのことについても、お耳に入れておかなければならないこともある。そう、良人とも話していたのだが、麻鳥ときては、権門ぎらい、武門ぎらい、なんによれ、自分からそういう所へ足を運ぶのを好まない性なので、「まだ、その人と、はっきり分かったわけでもなし、戦も、木曾殿との一戦がすんだだけで、なお、平家というものが一方には厳としてある。女のくせに、御陣所などへ、めったに出しゃばるものではない」と、不興気にたしなめられ、風の便りだけに、耳尖らせていたおりだった。

――で、かの女は、良人の顔いろも思わず、後ろに置き忘れて、

「では、やはりこんど御入洛のおん大将は、源九郎義経さま、あの、むかし鞍馬では牛若と仰っしゃったお方に間違いないのでございましょうか」

と、ひざをのり出した。
「なんの、間違いがあるものか。——鞍馬の牛若さまかとは、なつかしいことばだ。その牛若ぎみのころを、お内儀も知っているのか」
「いえ、いえ。わたくしは、あの……」
「隠しなさんな。年ごろから見ても、お内儀は四十がらみ。まだ小娘の時から常盤どのに仕えていたといえば、平治ノ乱にも会っているはず。さすれば、常盤どのに抱かれていた乳のみ児ごろの牛若さまも知っていなければならないわけだ」
「……ほ、ほんとに、むかしを思えば夢のようです」
さまざまにつき上げてくる思い出を、おおい隠せるはずもない。蓬は、あわてて袂を顔に押し当てた。そして、懐かしさなのか、うれし泣きなのか、しばらくは縁に片手をついたままの姿であった。
「いや、お内儀、むかしを思えば、わしも同様、なんといっていいか分からぬ。あのおん曹司（ぞうし）が、宇治川の大将振りといい、都にはいっての、評判のいいことといい、何か、自分のことのように、うれしくてたまらないのだ」
「まったく、お偉くなったのでございますね。人のうわさに聞いても、きょうまでは、半（なか）ば疑うておりましたが」
「うむ、ただちと恨（うら）めしいのは、以前とちがい、武者輩（むしゃばら）がへだてているので、訪ねて行っても、おいそれとは、会えもしないという不自由さだ。さだめし、お許（もと）もお目にかか

りたいことだろうが」
「い、いいえ。わたくしなどは」
「そう、卑下しなさんな。九郎の君も、会いたがっているに違いない。何よりは、おん母の常磐どのが、その後、どうしているか、気がかりにしておられるだろうし」
そういうと、いよいよ、蓬が泣き濡れる様子なので、吉次はにわかに腰を上げて、
「どうだね。あすはかならず、わしはお会いする約束なんだが、お内儀も一しょに行かぬか」
と、かなたに繫いでおいた駒の方へ歩き出した。
そして、鞍の側から、夫婦の姿を振り向いて、もういちど、こういった。
「もし、九郎の殿に、お会いしたい心なら、あすの朝、山門の外へ来て、わしの姿を待つがいい。——きょうまでは、院中のお勤めの由だが、あすは六条堀川の館におられるとのことだ。どうだな、麻鳥どのもともに伺っては」

熊谷直実とその子

蓬はその翌る朝、小さい包みを抱いて、大覚寺山門の外にひとり人待ち顔していた。
郊外にはよく見られる図だが、殺伐な世に不似合な妓亭がこの近所にもあるらしく、客の法師と遊女たちが朝から、ふざけふざけ、木蔭を行った。——見ぬ振りして見送り

ながら蓬は「ああ、あの人たちの淫らな戯れ唄を聞き覚えたに違いない」と、山小屋の子らのきのうの歌を思い出した。
　そのとき山門を出て来た人があった。きのう約して別れた金売り吉次である。従者三人が、馬をひいて後ろにつづいていた。
「や、一人か」近づくなり吉次はいった――「なぜ、麻鳥どのも、ともに来ぬのだ。よいおりなのに」
　蓬は、きのう救われた礼を先に、そして、よけいいい難そうに、
「じつはわたくしも、きょうのところは、御遠慮いたしたいと思いまして」
「何。お内儀も、見合わせるのか。さてはおあるじに止められたな。何しろ偏屈人だからな。はははは」
「申しわけもございませぬ。せっかくの御親切を」
「なにさ、わしはどうでもいいのだ。ただ、九郎の君とも、何かと、話の花が咲こうと思うて、誘うてみたまでのこと」
「よそながら、よろしゅうお伝えおきを。そして、あの……」と、袂の下に抱いていた包みを託した。
「これはわたくしたち親子が、朝露のまに摘んでこしらえた蓬の餅でございますが」
「む。九郎の君へ、おなぐさみに差し上げてくれというのか」
「まだ春も浅いので、草もたんとは見つかりません。ほんの色ばかりの貧しい物でござ

いますが」

「よしよし。蓬どのから蓬の餅の土産苞とはおもしろい。どんな献上物よりも、およろこび召さるであろう。では、行って来る。偏屈どのへは、また会おうといいおいてくれい」

吉次の方もべつだん執着している風はない。そのまま、かの女を残して立ち去った。

やがて、幾刻かの後には、かれの姿をまた洛内の堀川辺に見出すことができよう。まだ柳並木の芽は浅く、脂粉の香はもとより、白拍子たちの影さえ見えないが、君立川の水はむかしのままである。この辺の、あの家、この家、吉次にとって思い出は少なくない。

「十年一と昔というが、まったく、世間も変ったものだ。あのころの、平家の全盛さ。君立川に映る夜々の紅燈の繁昌も。――そして」

と、かれは当時の牛若が、今日の源軍の総大将義経だがと、それをも、事新しく、思いくらべた。

鞍馬山から誘い出して後、一時、平家の眼をくらますため、白拍子の姉妹の家へ、名も龍胆と変えて、匿まっておいたものだが、その牛若が、源軍の総大将となって、十年後にここへ進駐して来ようとは、吉次にも、予想しきれなかったことである。

「こうなるものと分かっていたら、もすこし、大事にしておくのだったに」

と、いささか悔いがないでもない。
また何やら、後ろめたさもある。
「けれど、吉次の手引きがあったればこそ、首尾よく鞍馬を脱け出すこともできたのだ。おれは恩人、その恩義を、九郎の君とて、忘れてはおるまい」
院御所の門へ、二日もつづけて、義経を訪ねたのは、もとよりその旧恩に自負があるからだった。そして「ここでは会えぬ。堀川の私宅へ来い」との約束を得、きょうこそ、その人に会うことになっていた。
もちろん、それは、ただの懐かしさというだけのものではあるまい。戦乱は利得の市場と考えているこの男のことである。でなければまた、主家の奥州藤原家の密命をふくんで探りにでも行くか、窮極の目的は、そのどっちかに違いなかった。

当然なことだが、その後、義経は、公卿のなにがしが旧邸という六条堀川の一劃(いっかく)を、在京中の居館として院から賜わった。
そして、入洛当日からの院の警固も、さまで厳戒を要しなくなったので、きょう初めて、その堀川の私邸に自分の体となっていた。
――といっても、くつろぐほどな暇もない。
院との公卿往来やら、平家にたいする内々の作戦についてなど、のべつ門には客の車馬が繋がれ、またかれ自身も、蒲冠者範頼と打ち合わせのため、身軽に他出し、そして

今しがた帰ったばかりである。

その義経は、まもなくまた、負傷者の屯を見舞った。庭の遠くに小寺のような堂宇と一殿があった。宇治川から洛内戦へかけての負傷者がひとつに収容されている。

矢傷や刀傷を満身にうけ、重態なのもあり、軽い者もあった。中には、陣中病に多い下痢や大熱にうめく兵もいて、何しろ百人余りも、菅筵の上に、惨たる枕をならべていた。

「どうだ、みなの元気は、治療も手落ちなく届いているか」

義経は、堂の一隅へ声をかけた。

そこには、十名ほどの家臣が詰めていた。義経の姿を見、みな、廊へ出て、ひざまずき、

「おいおいとみな快方に向こうておりまする」

と、答えた。

「そうか」

と義経はうなずき、そして横たわっている大勢の方を見ていた。薬は、食事はなどと、いろいろ訊ねた。

「されば。きのう、官の廩倉より、わずかながら稲をお下げいただき、ここの人びとだけには、不足なき物を与えておりますが、ただ、医薬は、思うにまかせませぬ」

「典医寮へ申し出たのか」

「再々、願い出ておりますが、殿上医ぞと格式張って、埒は明かず、傷所には灸せよとか、下痢腹には何草を煎じてとか、その程度のお指図しかありません」
「典薬頭より医生を差し向けようとの仰せだったが」
「いっこう、見えもいたしませぬ」
殿上人の軽薄さを、義経は、ふと、あさましく思った。
――自分たち東国源氏が、入洛の第一に、院の御門をたたいたときは、あんなにも狂喜して、われらを迎えた人びとではなかったか、と。
「いや、*都人の常、気にかけるな」
義経は、たれへともなく、つぶやいた。
味方の中の犠牲は、味方同士の心と手を尽して、それを宥り合うほかはない。そう思い直したらしく、横臥の筵を一人一人見舞って、やがて廻廊の裏へと歩いた。
すると短い橋廊下があって、向こう側の廂につづいていた。義経は渡りかけたが、ふと後へ戻った。そして「あの小部屋の簾の内に見える二人はたれか？」と、家臣に訊ねた。
「されば、あれにおられるのは、宇治川合戦の日、平山季重殿につづいて、橋桁の徒歩渡り二陣と名のった熊谷殿でございまする」
「お。……直実父子か」
「はい。御子息の小次郎直家殿が、その日、太刀傷を負われましたので、父の直実殿に

は、あのように、子の看護に付き添うておられまする。寝食もお忘れのように」
「……親心よの」
義経は思わず見とれた。
そこの簾の内では、義経がここにいるとは気づかない様子であった。
子の小次郎に諸肌を脱がせ、その背へ向かって、直実も、後ろを見せてすわっていた。
小次郎は、痛がっている様子に見える。父の手は、乾いた血糊をふき、傷口に薬を塗布して、子の肩先からわきの下へかけて、斜めに繃帯してやっているのである。
それを施してやりながら、直実は「なんの、これしきの傷」といったり、「坂東武者の子が」と、たしなめたりしているのだった。
口では、そうしかりながら、子の深傷を、自分の肉体のもの以上に痛んでいる様が、その後ろ姿にも、ありありわかる。
「小次郎直家は幾つ？」
「十六歳と聞いております」
「十六とな」
義経は、そこを訪わずに、そっと戻った。
十六と聞けば、自分の過去にも振り返られる。鞍馬を脱して、奥州の吉次を案内とし、平泉の藤原秀衡を頼って行ったのが、自分の十六の春であったと思う。

「おう、ここにおいででしたか」
その時、庭づたいに馳けて来た佐藤忠信が、かれの姿を見つけて、こう告げた。
「きのう、院御所の方でお約言を与えられたそうで、奥州の吉次と申す者が、ただ今、御門を訪うてまいりましたが」
「え。来たか」
ふと、鳥影のように、遠い追憶の胸をよぎっていた過去の男が、現実にいま、門へ訪ねて来たというのである。たしかに、約束はきのう与えたことだが、奇妙な一致と思わずにいられない。
そしてまた、鞍馬脱出の十六の春といい、初陣の都上りのきょうといい、何か、自分にとって大きな運命の一転機ごとに、どこからか、自分の前へ出て来て姿を見せるふしぎな宿縁の男とも考えられたことだった。

忘れえぬ人びと

「や、お久しいことで」
さっきから客殿に控えていた吉次は、義経の姿を見ると、こう馴々（なれなれ）しい笑顔を向け、そして、あわてて平伏した。
「初の御陣から、宇治川では眼ざましい勝（か）ち軍（いくさ）。げにも世間の耳目（じもく）を驚かせましたな

あ。まずまず、何よりは、そのおよろこびも申し上げたく」
「吉次は、そのため参られたか」
「いや、それればかりでもございませぬが」
「では、何用ぞ。先ごろから再三の訪れは」
「久しくお目にもかかりませぬし」
「オオ、鞍馬を出て十年、みちのくを去って三年。その後、秀衡殿にもおかわりはないか」
「御健勝でいらせられます。御消息の聞こえるたび、やがて源氏の世ともなれば、九郎の君こそ、源家一門の上に愛で仰がるるお人であろうと、よくおうわさなど申し上げて」
「あ、何をいうぞ」
義経は、わざと、不きげんを示して、
「わしは兄頼朝殿の一代官にすぎぬ。兄の兵をもって、宇治川には勝ったが、なお、西海には平家のあること。そら世辞はやめよ」
吉次はちょっと口をとじた。といって、赤面するような男ではない。十年前の牛若を思いうかべたのだ。奥州下りの途中で、さんざん、手こずらされた当時のにがい経験から、「甘くは見られぬ」と、肚をすえ直したのである。
「吉次」

「はあ」
「世間ばなしや、過ぎ来し方のことなら、いずれ、西国より凱陣の後、また、ゆるりと話そうよ。九郎の心も、まだ忙しい」
「あいや、長くはお邪魔いたしませぬ。じつは」
「なんぞ、ほかに用か」
「その西国御出陣こそ、これから先、数年にもわたる源平の世を分かつ大戦場かと存じまする。ついては、秀衡様の公なお沙汰ではございませぬが、吉次として、なんぞのお手伝いでもしたいものと考えまして」
「ほ。そちも、参陣したいと願うのか」
「いえいえ。打物取っての戦など、吉次の任ではございませぬ。しかし、武者の強きばかりが勝目ではおざるまい。みちのくの黄金、あり余る穀物、馬匹、武器など、みな大事な戦力でございましょうが」
「おう、欲しい物だの。洛中、五畿内、このとおりな飢饉つづき」
「そこで、道ははるかのようでおざるが、奥州より船にてそれらの物資を差しまわせば、摂津の辺りに、続々荷上げすることもできまする。この吉次に、その役目を、おいいつけ給わりますまいか」
「かたじけない。……だが」
と、義経はほほ笑み出した。

「平泉では秀衡殿の家人。都へ来れば金売り吉次。そちは鵺の商人だ。よも、無償でそれほどな物を九郎に貢ぐはずもなし、また、理由もあるまい。——人にくれる物よりも、自身の欲しい物から先に申せ。そちの欲しい物はいったいなんだ」

「いや、てまえの心も、秀衡公のお心も、まったく、九郎の君にたいする義心一片に過ぎませぬ」

「ならば、断る。そのような物、九郎は受けるわけにゆかぬ」

「とは、なぜで」

「そちの申すが如き奇特なる心ならば、まず、鎌倉殿へ伺うて来るがよい」

「ところが、とかく鎌倉殿には、奥州藤原家なるものを、白い眼で見るお傾きがござりましょうが」

「それは、御むりもあるまい。鎌倉殿がお旗挙げのさい、秀衡殿と平家との間には、密約ができていた。——奥州の兵をもって、東国の背後をおびやかせという密約が」

「いや、それは世上のうわさと申すもので」

「うわさですんだのは、鎌倉殿が、疾くそれを見抜いて、東北の境に、油断なきお手当てをなされたためであろう。——さらに木曾が北陸へ働き出したおりも、同様な密約があったと聞く」

「はて。聞き及びませぬが」

「迂闊な。現に秀衡殿が、中央の乱を幸いにしては、その都度に将軍となり陸奥守と進

み、領土をも南へ拡げておるではないか。それらの取引や密使の役をした者は、すなわち、鵺の商人であろう。……吉次、そちならではできぬ役目だ。まことにそちは秀衡殿にとって、またなき忠義者ではあるよ」
「ははは。これはまた、先のそら世辞のお返しですかな」
吉次は、曖昧な笑いに紛らして、ひとまず、きょうは手を引こうと考えた。何も急ぐことはない。求めるものは気長でいいのだ。
月日をかけて見ていれば、源氏と平家の在り方も、もっと、はっきりして来ようし、義経の立場や心理も変ってくるにちがいない。「戦わずして、戦う人間たちから、漁夫の利をせしめる」というところに、自分たちの主眼があるのだから、辛抱は第一だ。遠大な計という肚が大切だ。そう、自問自答して薄ら笑いする吉次であった。
「いや何、仰せのごとく、一商人の身が、ちと、出過ぎた申し条であったかもしれません。けれどこれも昔からの御縁で、いわゆる九郎の君贔屓のなせるわざ。お気を損ねてくださいますな。……やれやれ、思わず長座、はや、お暇な仕ります」
「おう、帰るか」
「いずれまた、ごきげんのよい日に」
と、座を退がりかけた。
その動作、顔つきを、義経が見ていると、吉次はふと、自分のひざに触った物に気づいて、あわててまた、すわり直した。

その土産苞を、前に差し出して、
「すっかり、忘れておりましたが、これは蓬と申す人妻が、君のおなぐさみに差し上げて給べと申して、頼まれて参った物でございますが」
「蓬？　……。おう、それは麻鳥と申す医師の妻ではないか」
「御存知で」
「うむ。会いたいと思う者の一人ぞ。して、その麻鳥夫婦は、いま、どこにおるのか。なつかしいことではあるよ。住居は、どこに」
単なることばだけのものではない。
吉次に対していたそれまでの興もなげな風とはちがって、その容子には、会いたいと希う真情が出ていた。
何か、嫉ましいような気もちで、吉次は、
「されば、広沢の池の辺に、世間の餓鬼を拾いあつめ、そこの山小屋に、土蜂のような暮らしをしておりますが、いやもう変った夫婦もあるもので」
と、半ば嘲笑的に、多くも語らず、さっそく暇を告げて、立ち帰ってしまった。
吉次が帰った後で、義経は、蓬の土産苞を開いてみた。
草の香のする蓬餅は、幼いころを思い出させた。これを吉次にことづけて来た人妻を「どんな女房か」と、かれは、なつかしまずにいられない。

蓬という名は、幼いころから、深く心にきざまれていたが、しかし、顔容（かおかたち）などは覚えもない。

ただ、自分が母の常磐（ときわ）の乳を離されて、鞍馬にやられるまでの間、母に仕えていた女童（めのわらべ）だったということで、多年「忘れえぬ人びと」であったに過ぎないのである。

けれど、その蓬の良人の麻鳥とは、たった一度、鞍馬の山で会ったことがある。——母の常磐の手紙と、かたみの銀の小観音を、自分へ届けに来てくれた者だ。その麻鳥もまた、義経にとっては「忘れえぬ人」の一人だった。

こんど、軍をひきいて、都にはいるやいな、義経は、すぐそれらの人びとを、胸にえがいた。

かれが夢寐（むび）のまも忘れていない母の常磐につながっている人びとでもあるからだった。

「麻鳥夫婦に訊けば、その後、母上がどこにおいでやら、知れようし、御無事か否かも、詳しく分かるにちがいない」

進駐の総大将として、ままならぬ今の身ではあったが、人知れぬ思いだけは、都の土を踏んだ日から、胸のうずきとなっている。

その母には、十年前のあらしの一夜、いよいよ、奥州へ落ちてゆくときまった前の晩、一条の大蔵卿長成という者の古館へ忍んで行って、そっと、お目にかかったきりである。

ひざに抱かれ、甘い涙に濡れながら「わしは、この人の腹から生まれたのか」という母の体温と、人の子のよろこびを、その夜、初めて味わったのだ。

そのおり、自分の耳へ、母がささやいたことば。自分が母へ誓ったことば。今もそのまま、一語も違わず、思い起こすことができる。

（――成人の後、自分が、源氏の一将として、都へ上る日が来たら、母君をお迎えに参ります。母君とともに暮らしましょう。それが、わたくしのたのしみです。母君もそれ愉しみに、世に耐えていてくださいまし）

どこかで、母は、そういった自分の姿を、今か今かと、待ちこがれていることだろう。

母と一つ家に暮らそうなどの望みは、なお遠い先を待たなければなるまいが、陣務の余暇、寸時でも、せめて御無事な姿を見たいものだ。またこの姿をお見せもしたい。――かれは今、蓬の土産苞を開きながらも、そうした一途な母恋しさに囚われて、苞のうちから出て来た餅の草の色を、ただ涙の眼で見てしまった。

すると、南の庭さきへ、伊勢三郎、伊豆有綱など三、四人の者が馳け込んで来て、義経の姿へむかい、

「すぐ、壬生へお急ぎください。時遅れては、大事に及ぶやも知れませぬ」

と、口々に急きたてた。

「壬生とは、隆職卿のお館へか」

「そうです。何か、こなたの使者と、同家の者との間に口論を生じ、こちらの武者どもが、同家の文庫を打ち壊して、乱暴狼藉を働いておるとかの聞こえです」
「なに、乱暴に及んだと」
「九条殿からも、早馬があって、すぐ取り鎮めよとのお沙汰ではあり、何か、容易ならぬ騒動をひき起こしたかと思われまする」
「使いには、たれが行ったぞ」
「武蔵坊どの」
「ちっ、また、あの坊の腕立てか」
「ほかに、江田源三、那須大八郎、吾野余次郎なども参りましたが」
「すぐ行こう、馬をひけ」
蓬の土産を、手ずからわが居間へ仕舞って、義経は中門の方へまわって行った。
壬生の*大史隆職の家の近所は、黒山のような人だかりだった。
合戦とまではいえないが、大きな喧嘩があったのだ。
事の起こりは。
六条堀川の義経の家臣が、
「院のおさしずなれば」
と、家探しに臨んだのである。

隆職(たかもと)を始め、家人たちは、
「院からさようなおさしずの出るわけはない。なんじらも、木曾武者の類(たぐい)か。木曾のような理不尽をいたすか」
と、強硬に拒んだ。
弁慶以下が、ここを検(あらた)めに来たわけは、平家の密使が、何か、書状をたずさえて、今暁(こんぎょう)、ここへ隠れたという疑いによるのであった。
たれかが、院へ密告したのか、目撃者でもあったのか、疑惑の出所などは、弁慶たちのあずかり知るところではない。ただ、事実をつきとめればいいのである。
「面倒な、踏み込め」
とばかり、かれらは、屋内へ上がって、家人との間に、乱闘を起こし、そして官の文書が詰め込んである文庫を破壊して、検めたりしたのであった。
隆職(たかもと)は、使いを飛ばして、九条兼実に、この騒ぎを訴え、兼実からまた早馬で、義経に、すぐ制止の命が来たのであった。
で、義経が馳けつけて来たときは、もう騒動は終わっていた。そして結果は、何もなかった。平家の使者が潜伏していた様子もなし、文庫の内から怪文書なども見出されはしなかった。
「なんたることぞ」
義経は、弁慶をしかって、

「都に着くや、たちまち、このような乱暴をするにおいては、そちを義経のそばに召し使うておくわけにゆかぬ。ふたたび、あの叡山の西塔谷へ戻るなり、紀州へ帰って、亡母の供養でもして世を過ごせ」

と、堀川のやしきへ帰ってからも、きびしく戒めた。

「ゆるされませい。以後、粗暴はつつしみまする」

弁慶は、詫びた。

が、心外な顔もして、こう、後からいいわけした。

「乱暴は悪かったかもしれません。しかし、きょうのことは、まったく、院の御命令によるものです。何者か、院へ密告した者の言を信じられて、われらへ、お申しつけあったことかと思われ申す。あながち、われらの落度のみではおざりませぬ」

「いうな」

義経は、抑えた。

こんなことでも、公卿同士の葛藤も察しられる。院の内状も複雑だ。——そしてこれは、やがて間近にせまりつつある平家と源軍との対決に早やおののきつつある者の一飛沫と見られないこともない。

この小事件は、うやむやの裡に終わった。けれど、その始末や、部下の釈明のために、義経は、憩いの半日も、つぶしてしまった。院から九条兼実の邸をまわって、堀川へ帰ってきたのは、深更であった。

「……そうだ、あすの朝は早くに起きて」
かたくなった蓬の餅を食べて寝た。
そして、かれは、夜のしらしら明けに、もう六条堀川の門を馳け出ていた。
あとに続いて行く二騎は、那須大八郎と佐藤忠信の二人だった。徒士も口取も連れていない。
朝がすみの辻や田舎道には、まだ人通りも少なかった。陽が出るころには、もう、嵯峨の東へ行き着いていた。
「おう、あの山小屋であろう。後ろの山畑にも、たくさんな子どもらが見える」
広沢の池を半ば巡って来た辺りで、義経は、駒をとめ、鞍の上から伸びあがった。虹のような、山峡の朝日をうけて、霞の中に浮き出している遠くの山畑と小屋を指さした。
「まず、訪うてみましょう」
忠信と大八郎とが、先に馳けて行く。
二人は、山小屋の前で、駒を捨て、
「もと柳ノ水におられた阿部麻鳥どののお家は、こなたであろうか」
と、垣もないので、ずかずか、小屋の前まで行って内をのぞいた。
「あ。……どなたか、お人が」
と、小屋の横から、蓬が顔を出し、内では、医書の積んである破れ壁の蔭から、麻鳥

が出て来て、

「何か、わたくしに御用でも」

と、竹縁をへだてて、両手をつかえた。

「和殿が、薬師（くすし）の麻鳥どのと仰せられるか」

「はい。わたくしですが」

「では、こなたのお方が、御内儀（おうち）の蓬どのか」

「よう御存知でございますが、して、あなた方は」

「まこと、突然なれど、それがしどもは、鎌倉殿のおん弟、九郎義経殿の家臣です。じつは九郎の君が、ぜひ和殿たちにお会い申したいとの御意にて」

「ほ？　……。九郎の君が、わたくしたちをお召しだと仰っしゃるのですか。そのお迎えに」

「いやいや、そうではない。九郎の君御自身が、ここを訪ねて、もう、あれまで来ておいでなのでござる」

「えっ、御自身で……。こんな、山小屋へ」

麻鳥も蓬も、何か、ありえぬことのような面持ちだった。けれど、やがてすぐ小屋の前に来て、馬を止め、手綱をそこの樹に繫ぎながら、ふと、こっちを振り向いた義経の姿を見るなり、夫婦ともに、顔じゅうをたちまち涙にしてしまった。その濡れ睫毛（まつげ）に朝の陽がこびりつき、近づく人の姿までが眩（まばゆ）かった。

常磐の果て

麻鳥はあわてて小屋の外に出、蓬と姿を並べて、地へぬかずいた。

夫婦は、ただうろたえた姿である。このような時に、尋常な辞儀や、あいさつは、自分を偽るようであった。といって、ほんとの思いをいい現わせることばも急には見つからなかった。

釜屋の横に、柴が積んであった。黙然と立っている義経の後ろへ、その一把を持って来て那須大八郎が置いた。義経は腰をおろした。

「きのうは……」

その義経も、やっと、話のいとぐちを、こう見つけて、

「草の餅を、ありがとう。忙しさに、つい、夜になってから食べたが、美味しかったよ……。珍しくて」

と、こころもち頭をさげた。

そして、この四十がらみの女が、乳のみころの自分を背に負ってくれた者かと、蓬の油気もない髪や貧乏に耐えきっている皮膚の小皺までをしげしげと見入る義経でもあった。

「……あんな、つまらない物を」

ようやく、蓬がいったので、麻鳥も初めて面を上げた。
昔は昔、今はさだめし厳めしい御大将にちがいない。何よりは、そうした恐れが邪魔していたのである。けれど、義経のどこにもそんな威勢振りはないので、夫婦とも、ほっと気もちを解いて来たらしい。
「あとにも先にも、お目にかかったのは、鞍馬の由木神社の拝殿で、それもつかの間、ただ一度きりでございましたが」
麻鳥のいうのを受けて、義経も弾んでいった。
「あのおりのこと、忘れはせぬ。――そのせつ、そちが届けてくれた亡父のかたみと母の手紙は、いまも失うてはいない。肌には持たぬが、紀州熊野のさる家柄の者に預けてある」
「十年。思えば、なんという御成人……」
「麻鳥は、たいそう、老けたの」
「以後十年の都の土は、何十遍の業火や兵乱に焼けただれたか知れません。どんな者でもその土に住んでは、こう、髪の毛も苧のように白けずにおられませぬ」
「ささこそ……」と、義経はうなずいた。同時に、その同じ土に置き残され、同じ恐怖の十年を生き喘いだであろう母の常磐をも思わずにいられなかった。
「その後、母の常磐どのにも、一条のお館を焼かれ、あちこち、変られたであろうが、近ごろはどこにお住まいであろ。まれには、そちたち夫婦が、お訪ね申していると、以

前は聞いていたが、以後はどうぞ。……おつつがなくお暮らしか、どうか。蓬よ。わしの母君のこと、そなたは知ってであろう。教えてほしい」

　ふと、気づくと、蓬は肩をふるわせ、汚い袂でその顔をつつんでいた。「さては、何か母君の身の上に？」と、義経はなお強要むように繰り返して、それを訊ねた。

　けれど、麻鳥も答えず、蓬も泣いてばかりいた。その間、何か不吉が予想され、義経は一瞬、たまらない不安にくるまれた。その焦躁は麻鳥にも見えたにちがいない。麻鳥は妻の耳へ何か諭した。蓬もうなずいて見せ、そして、重たい口をひらきかけた。

　――だが、気がつくと、辺りには山小屋の孤児が物珍しげな顔を集め何十人も輪を作していた。もちろん、仔細を知るわけでもないし、人の見さかいなどもない。義経主従の太刀服装を見まわしたり、蓬が泣くのをクスクス笑ったりしているのであった。

「あ。これ」

　麻鳥は起って、その童たちの人垣へ、手を振って歩いた。

「あっちへ行け、あっちへ行け。行かぬと、お侍さまに怒られるぞ。わしもほんとにしかるぞ。さあ、遊ぶなら、あっちで遊べ」

　かれらにとって、麻鳥は怖い人らしい。木の葉のように散らかって行った。

　ここ数年ほど、無常を人に見せつけた月日はない。

　よく人が嘆じていう「きのう見た人もきょうはなし」という言葉通りな世間の変り方

だった。

蓬夫婦も、常盤のことは、日ごろ、心にかけないではなかったが、ちまたのけわしさばかりでなく、かの女とは住む世間も身分も違い、めったに、訪うこともできないままに、ただおりおりの便りを人づてに知るのみであった。

太郎焼きといわれた治承の大火のとき、一条二条の辺も焼け野原と化し、もちろん、常盤が再縁した先の大蔵卿長成の古館も、あとかたさえ失くなってしまった。

常盤が再婚した長成はそのころもう世にない人で、長成との間に生した一女子を抱えて、その後、どこへ移り住んだやら、知る人もなかった。

すると、そろそろ、木曾の都攻めが伝わり、物情騒然となり始めた養和の年の暮のころ。

（——常盤どのによう似たお人を野宮の有栖川の辺でお見かけしたが）

という者があった。

（さては、そんな山里にお暮らしか）

と、蓬夫婦は知ったが、何しろたいへんな飢饉年で、道に餓死者が積まれ、追剝ぎ強盗が大手を振って歩く世間なので、さて思いつつも、なかなか訪ねもできずにいた。

それでも、心がけて、ある冬の一日、わずかな食糧を夫婦して背に負い、野宮の辺りを、いずこの門かと、訪ね歩いた。

だが、どこを訊き歩いても、そのような人を知る者はない。また何よりは、公卿の家

らしい構えもないのである。
（やはりお人違いであったのかもしれぬ）
と、がっかりして、夫婦が道のべに腰を下ろしていると、十二、三の女童を連れ、菜籠を提げて、近くの社家の背戸へはいって行った被衣の人があった。
いと寒々しい女房姿ではあったが、どこやら、みやびな風が見えたので、
（もしや、今のが）
と、そこの小社へ訪ねて行ってみると、果たして、その人は、常磐であった。
かの女は夢かと驚いた容子で、
（何から話してよかろうぞ）
と、涙ばかりが先だった。そして、その夜は貧しい榾火を焚き明かし、来し方のことや、これからの思いに語り明かして帰ったのだった。
それからも一、二度は、蓬一人で訪ねて行ったが、常磐の境遇も、まったく、以前と変り果て、その日の糧にも困っている様子だった。
女同士のことではあり、だんだん立ち入って訊いてみると、ともかく、長成の家へ再婚した当時から、その長成が死んだ後までも、平相国清盛が在世中は、常磐の化粧料という名で、丹後附近の田領から、若干の稲が陰扶持として年々贈られていたらしい。
が、その収入も、清盛の死後は、途絶えてしまい、地券は持っていても、田領その物は、たれの所有に移ってしまったやら分からない始末であった。

それからの困窮は、いうまでもない。長成の親戚なども、常磐を邪魔もの扱いにし、多少、公卿の端に、地位を保っている者はなおのこと、木曾の入洛が避け難い情勢になると、

（むかし、入道相国に愛された女などが、身内にあっては、どんな累をうけるやも知れぬ）

と、保身上からも、みな、かの女を忌み始めた。

そうした内輪の悩みもかかえ、居所の移り変りも一再でなく、とうとう、その年の夏ごろから、今の山里へ家借りして、「人にも知られたくない」と、隠れ住んでいたのである。

といっても、生業のすべもないかの女なので、持ち残していた衣や持物をたずさえては、物乞いじみた恥をしのんで農家へ行き、ささやかな穀物と代えては露命をつないでいるにすぎない。――そう常磐が話すのを、蓬は、九条院のむかしや、平相国の世の盛りを思い出しつつ、身も世もない涙になって聞いたのであった。

（……でも、ひところのように、世をはかないものとは思うていない。この身にも、何か愉しい行く先はある心地がして）

と、常磐は、その後でいった。

その愉しみとは、どんなことを？　と蓬が覚束なげな顔をすると、常磐は、問うもおろか、といわぬばかりに、

「——近ごろ、あの渋谷金王丸が来てのはなしには、九郎の君には、みちのくの藤原秀衡どのの許を去って、おん兄君の鎌倉殿へ身を寄せているそうな」

と、明るい黛をふと見せた。

蓬には、初耳だった。

まことに、もし、それが本当ならば、九郎の君の生みの御母として、確かに大きな曙光ではある。待たるる無上の生きがいにちがいない。——蓬もそのときは、一しょになって昂奮したものである。そして、

(いまにきっと、九郎の君が、源氏方の御大将となって、都へ上られる日も参りましょう。それまでは、どんなおつらい御辛抱にも耐えて、どうぞ、お身だけを大事にお暮らしくださいませ)

と、よろこび合って、別れたのだった。

——が、それを最後に、つい、常磐の姿を二度と見る日もなかったのである。

そのうちに木曾軍の洛中侵入が始まった。

平家は、一門の家々を焼き払って、西海へ落ち、暗黒時代そのもののちまただけが残された。洛外までも、木曾の軍兵が、飢えた狼のように、物を漁り、女を追い、乱暴してまわった。

あらかじめ予測していた麻鳥は、町の貧民たちと力を協せ、稗、黍、粟などを耕作し

つつ「土を信じて頑張ろう」と励ましあっていたのだが、木曾兵の眼にかかると、たちまち、蝗の襲来に遭ったも同様、荒されてしまい、「しょせん、これでは」と、かれもついに洛外へ逃げるほかはなくなった。

けれど、麻鳥の手には、前々から拾いあつめていたたくさんなちまたの孤児もかかえていることだし、それらの疎開騒ぎにごった返していると、その朝、どこかの雑色みたいな思いがけない人が訪ねて来、

（お忘れか知らぬが、わしはむかし渋谷金王丸と申していた男ぞ）

と、小声で告げた。

義朝の童武者で、義朝の死後、常磐が敵将の清盛に身をまかせたのを憤り、常磐をつけ狙って、殺そうとしたことのある、武者骨一徹な人である。

それだけに、常磐の心が分かってからは、こんどは陰の保護者となって、長年、常磐を力づけ、常磐のために、世情を探って来たり、また、細々な生活までを扶けて来た真実者であった。

その金王丸が、にわかに来て、いうには、

（どうも、御方のお身の上も、木曾に知られて危うくなった。たれいうとなく、鎌倉にある九郎殿の生みの母御と分かって来たらしい。おりおり、お住居のまわりを、木曾の狼どもが、うろつき出して、油断もできぬ）

とのこと。

そこでにわかに、常磐さまのお供をして、鎌倉へ下ることになった——と金王丸はいうのであった。

もとより、九郎の君のおられる鎌倉へ行きたいとのお望みは、かねてからのお志でもあったことゆえ、このさい一時お行方をくらますが、決して、案じることはない、ともいう。

また。——いずれ、鎌倉へ着いた後には、さっそく便りをしようし、金王丸も都へ返す。くれぐれ、そなたたち夫婦も、このはげしい世を、つつがなく暮らすように。

そういう常磐の言伝もあった。

（それは何よりなお考えで）

と、蓬夫婦も、胸撫で下ろしたことだった。そしてその日から、鎌倉までの旅の日数を指おって、「無事に着いた」という常磐の便りを、待ちぬいた。

ところが、以来、二た月たち、三月たっても、音沙汰はない。

いつか、年も越えてしまった。

金王丸の姿もあれきりである。杳として、消息はない。

それればかりでなく、この正月、江州伊吹のふもとに住む薬草売りの男が、長年の懇意とて、麻鳥の疎開小屋をたずねて来、何かのことから、ふといやな話をしゃべって帰った。

気のせいか、それから夫婦とも、不吉な夢を、ふた晩も見つづけた。

薬草採りの男がいうには、去年の秋ごろ、伊吹から関ケ原の道で、旅の男女が、あの辺に多い野盗の大群に襲われ、むごたらしく殺されたことがある。――後でその持物から分かったことだが、女性はむかし九条院に仕えていた常磐御前という五十路にちかい年ごろのひとであり、男はその郎従で、大勢の賊を相手に戦ったらしいが、衆寡敵せず、斬り死にしたものだという。

しかし、盗賊の仕業にしては、持物や衣類などが、そのままだったのはいぶかしい。おそらく、鎌倉へゆく途中を、木曾兵の手に討たれたのではなかろうか。――と、土地の田舎法師やわけ知り顔の老人の間では、そういうべつな解釈もくだされて、「何せい、あわれなことよ」と、その場の路傍には、いつたれとも知れぬ手で、小さい塚石が置かれ、往来の里人が、香華を供えたり、称名をとなえる姿も、よく見かけられるという。

…………。

義経を前にして、蓬夫婦が語った常磐の消息とは、以上のようなことだった。

「もっと、詳しく知らせてほしいと、再度、伊吹の薬採りに頼うでやりましたところ、それ以上は何も知れぬといい、ただ、相手は、賊ではのうて、どうもあとの方が真ではないかと、かさねて、おなじことを告げて来たのみでございました」

――こう長々、語り終わってから、蓬はまた涙にくれたが、しかし、いちどは義経に告げねばならない辛い思いを吐きつくして、やっと、胸もうつろな姿に見えた。

陣医拝諾

——たえず義経は凝然と聞いていた。
大きな望みの一つが絶え、あらゆるものへの張り合いも失せ、この朝のすべてが、光もない暗さに見えもして来たであろう。
「……ああ」と、口のうちでもらし、「……そうだったか」と、また間をおいて、つぶやいた。
けれど、蓬夫婦のはなしを、もう一度も二度も、冷静に繰り返してみて、そのうえでなお、確かな判断をもちたいと努める風であった。
同時に、信じられない気がし出した。「何かの、まちがい」と思いたくなった。
それはおろかな人間が事実に眼をつぶろうとする浅慮な欲望にすぎない、と一方では考えながらも、「たれが、それを眼に見たしろう。里人のうわさというにすぎないではないか」とする方の気持が胸をいっぱいに占めてくる。
そのくせ、ついに怺えきれぬ涙が、かれの頬にも流れていた。ぬぐおうともせず、涙に顔をまかせていた。
かたわらにいた佐藤忠信と那須大八郎も、肱を曲げ、両眼をおおって、泣いている。
この二人にも国元には母がいた。自分らの母も思うて泣くのである。

「いや、蓬よ、麻鳥よ」
片手をひざに、片手を涙の顔に当てながら、義経はやがて身を屈めて、
「——長いこと、よう、わしの母君に、心からな訪れを続けてくれた。この冷ややかな世、けわしい世間にあって、母君は、どんなに、そちたち夫婦のおりおりな便りに心をあたためられていたか知れまい。……旅路での非業な御最期とやら、嘘とも思わぬが、真とも信じきれぬふしもある。真偽のほど、なお詮議させて、確かめよう。……が、お礼をいう。子の義経もせぬことをわが母君へしてくだされた」
「め、めっそうもない。これが、めでとうお会いできたものならば、わたくしたちも、どんなに御一しょに歓べたかしれませぬが」
「いやいや、母君に会う望みはなお絶たぬ。それ失うては、義経、馬上に返る力も失せる」
と、そこを立ちかけたが、
「さきほど、辺りに群れていたたくさんな子らは、みな戦のために親や家を失うた子らか」
「はい」
「あわれだの。身にひきくらべても、胸が傷む。しかも義経は、なお、その戦いを西海までもしつづけて行かねばならぬ。……そうだ、せめて院へ申し出て、どこぞに、それらの子を置くよい場所を請うてつかわそう」

「ありがとうぞんじまする。けれど、ここを追われることは、奥州の吉次殿のお扱いで、どうやら大覚寺の執行にも聞き届けられそうな様子でございますゆえ、それまでの御配慮には」

「吉次は、大覚寺の内に、滞在してか。はてな、あの男の扱いが、どれほど心からなものか？」

義経は、忠信をかえりみて、大覚寺の僧を呼びにやった。寺中の僧は驚いて、執行以下、数名して、さっそくにやって来た。

義経から「この孤児らを、よく世話してほしい。また、この薬師の妻に、何かと、合力してやるように」と、あらためて頼んだ。

木曾に懲りているので、何事かと畏怖して来た僧侶たちは、一も二もなく承知した。

義経はまた、奥州の吉次について、その行動を訊ねてみたが、きのう洛中から帰るやいな、急に商用ができたといい、行く先は告げず、供の同勢と一団になって、どこへともなく宿立ちして去ったという。

「そうか」

とのみ、義経は気もとめない風だった。

それよりも、僧たちが帰ってから、あらたまった調子で、こう麻鳥へいい出したことの方が、熱心であった。

「お願いがある。おり入ってのことだ。ぜひ、聞き届けていただきたいが」

「わたくしに」
「御辺ならでは、頼みとうもない」
「なんでございましょう」
「義経の宿所には今、宇治川からの多くの傷負いがうめいておる。それらの者に、治療を施して給わるまいか。……さらにこれからも、西国出勢のうえには、おびただしい傷負い病人も出ることであろう。陣医として、義経の戦う先々へともに来てくださらぬか。御辺の人柄を見込んでお頼みするわけだが」
「…………」
麻鳥は、はたと、当惑顔だった。
招かれれば、平家の太政入道殿のお脈を診に行ったことさえある。
貧民であろうと、富者であろうと、また、源平いずれの族であろうと、麻鳥にとっては、ひとしい人間以外なものではない。
その心が、ついちまたの孤児や捨て子らにも向けられ、こんな山小屋にもなったのである。
その自分が、ここを離れたら、あの子らが、父を失ったように淋しがるであろう。自分の愛着もそうしたくない。
けれど、義経のいんぎんな頼みに、かれは、拒む理由が見出せなかった。ここの子ら

の世話は、義経の令をもって、大覚寺の僧侶に合力させせ、蓬にあずけておけというのである。そして自分の戦いは、ふたたび、このようにみじめな犠牲を都のちまたに出さないためにも戦うであろうというのだ。

「……どれほどなお役に立ちましょうか。ちと、空怖ろしゅうございますが、ともあれ、御意におまかせいたしまする」

麻鳥はついに、そう答えてしまった。

蓬が願っていた返辞とは、それは、あべこべであったらしい。かの女はちょっと結果を怨んだ。良人を奪われたような眼いろがそれを語っていた。しかしこれから先は、住居や生活の苦労はしないですむし、陣医というなら、人を殺したり殺されたりの戦場へは立たなくてもよいのであろう。そう考えると、こんどは、うるさい良人が留守になり、かえって気ままでいいような気もしてきた。

——陽は高くなってきた。供の那須大八郎と佐藤忠信は、そろそろ気を揉み出して、

「はや、お帰りになりませぬと、けさお催しとうけたまわる院の御集議に間に合いかねるやも知れませぬ」

と、義経へ注意した。

それへうなずきながら、義経は駒の手綱を解きつつ、麻鳥と蓬の顔へ、

「さっそくの承諾、かたじけない。ではあすからでも、堀川の館へ参ってくれよ」

「お伺いいたします」

「蓬も、留守は淋しかろうが、なんなりとすぐ堀川へ訴えるがよい。家人どもへは義経からよく申しておく。また大覚寺へも、かさねて申し渡しておこう」
かれも従者の二騎も、夢のような顔して見送る夫婦の視野をたちまち小さくなって行った。

途中まで来ると、家臣の五、六騎と行き合った。院議の時刻に遅れるのを案じて、義経を迎えに馳けて来たものである。
ざっとした朝餉（あさげ）をすませ、装束（しょうぞく）をかえ、すぐ院御所へ出向いて行った。
かれの装いも供の武者も、すべてまだ武装のままだった。木曾の党類は亡び去ったが、その日から次の合戦へ、しかも、さらに大きな敵との合戦へ、つづいていた。
わけても、院中の空気は物々しい。
連日の集議、連夜の御密議であった。
後白河にとっても、今ほど、お力をそれにそそいだ例（ためし）はない。「もし、範頼（のりより）、義経らの源軍が、平家の軍に打ち負けなば」という御心配が多分だった。
いかに法皇が、もちまえの御奇略を恃（たの）まれても、もし平家がふたたび都へ還って来るような羽目になったら、こんどこそ、御位置を保つことはおろか、その神通力もはぎ取られてしまうにちがいない。
だから、次の平家との一戦は、源平の争覇（そうは）であるばかりでなく、後白河にとっても、

御自身の戦争だった。——お腰を入れて、昼夜の御軍議もむりではない。けれど、それには、大きな障碍が横たわっていた。

法皇もお心をなやまし、諸卿にもよい対策はないのだった。ただ、大弱りのまま、

「いかにせば、平家を討ち、かつ、平家の持てる三種の神器を、つつがなくこなたへ迎え取ることができるか」

を、繰り返しているのみであった。

むずかしい。じつに、むずかしい。

平家は亡ぼしたい。神器は安全に迎え取りたい。という御希望なのだ。

「——ならば、ひとまず、平家追討の軍をひかえさせ、特に、院のお使いを遣わされて、お諭しあっては」

というのが、九条兼実の献言であり、衆論も、また法皇のお考えも、きのうきょう、そこへ傾きかけて来たようにうかがわれる。

おそらく、きょうの院議では、即時決戦か、政治的折衝か、どっちか最後の決定を見るにちがいない。——義経の乱れぬいた早暁の失望も、胸にひいている後の思いも、そこへ向かって、一歩一歩近づいてゆくにつれ、べつな不安と、鉄の意志に変っていた。

「もし、公卿流の弄策などに日を過ごして、時を逸したら一大事よ。後に悔ゆるとも及びはせぬ」

憂いつつ院の門まで来ると、もう集議は始まっているのかもしれない。公卿の車、武

将の駒など、敷砂も見えないほど並んでいる。
義経には、昇殿の資格はない。範頼も同様である。
――で、源軍の総大将ではあっても、直接、法皇のおん前で軍議にあずかるわけではない。
はるか橋廊を隔てた平人の一殿、つまり武者の床にひかえて、何か、御諮問があれば答え、なければ、黙って議席の推移にただ心を煩っているほかなかった。
しずかに、義経がそこへ通ってゆくと、はや、床には、蒲冠者範頼を始め、一条忠頼、梶原平三景時、河越重頼、安田義定、大内惟義、畠山重忠などの侍大将までが、詰め合っていた。
「…………」
咳声すらも慎んでいる静粛な人びとの眼が、黙って、義経を上座の範頼の隣へ迎えた。――遅れたらしいと義経は恐縮して、隣の範頼へ、そっと会釈しながらすわった。
範頼もそっと会釈を返し、諸将もみな目礼した。
だが、範頼をへだてて、その次にすわっていた梶原平三景時の眸だけは、うごきが違っていた。
形式だけの目礼はしたが、その眼もとは、人を嘲侮するときの意地悪いものを現わし、いうならば「この大事な院議の日、御遅刻とは何事か。しかも大将たるものが」と、とがめているかのような顔つきだった。

夜目の綾衣

院の集議は、終日にわたったが、その日も、議決はみなかった。
範頼、義経らの武者床の面々も、むなしい退出を余儀なくされ、おのおの、別れ別れに帰った。
「まこと、公卿評議とはこのことか」
堀川までの途すがらも、義経は、そのもどかしさ、その憂いを、抱きつづけた。
「かくては、日ましに、平家の勢いをつのらせ、その上洛を招いて、糧食も要害もないこの都に、われら源氏が籠らねばならぬ羽目に立ちいたろうに」
そしてまた、「こんどは自分らが、木曾義仲とおなじ立場に置かれかねない。知りつつそんな愚は待てない」と固くおもう。
「さるを……心得ぬは、蒲殿（範頼）の煮えきらぬ御態度。また、梶原の見えすいた諂い」
口惜しいのは、きょうのそれであった。
武者床の者へ、院の御下問があったさい、義経は率直に、所信をのべたが、範頼と梶原景時は、とかく迎合気味で「院の御方策もござりましょう。緩急、いずれとも、われら武者は」などと生ぬるいお追従の辞を奉答してしまった。

もってのほかと思い、義経はかさねて「平家追討の急は、一日とて延引すべきではありますまい」との理由を、つい激すまで、いい張ったのである。——が、梶原は、他人事のように、取りすましていた。
むしろ、かれには、不快であったものかもしれない。
——自分は鎌倉殿より特に付けられて来た軍奉行だ。
こういった自負心が、かれにはある。かれの体臭にいわず語らず、にじみ出ているものだった。
鎌倉殿の寵をかさにきた梶原の〝軍監かぜ〟とは、東国軍の中では通り言葉である。特に、きょうばかりの態度だったわけではない。
けれどきょうばかりは義経もかれに譲っていられなかったものである。あえて梶原を無視し、そのいやな顔つきを意識しつつも、自説を主張したのだった。
といっても、それが、院議の決定となったのではない。なお、あすに持ち越されたのである。こうして一日一日、重大な機は去りつつあるのだと惜しまずにいられない。
「そうだ。良いと信ずることに、なんの梶原へ気がねがいろう。坐して敗れを待つよりは、わしはわしの思いどおりを」
——いつか、駒は堀川の門前にとまっていた。
出迎える郎党たちへも、どこか冴えない眉の義経は、奥にはいると、やがて、直臣たちを一室に招き入れ、灯ともす宵となったのも忘れて、何事かを、諜し合わせていた。

その宵——

伊勢三郎義盛、伊豆有綱、佐藤兄弟、江田源三、那須大八郎など、股肱の直臣たちは、思い思い、いずこともなく騎馬で散らばって行った。

また、義経自身も、忍びやかに外出した。

かれの訪うた先は、院の近臣、中納言朝方の館であり、次に、藤原親信を訪ね、そしてさいごに、参議藤兼光の門を辞したころ、もう真夜半をすぎていた。

「御首尾、いかがでござりましたな」

その夜の供は、武蔵坊弁慶。

馬の口輪を取りながら、主君の姿を振り仰ぎ、ともに案じ顔である。

「おう、幸いに、御三卿とも快く会うてくだされた。義経が心からな訴えも、御理解あって、お聞き届け給うたぞ」

「すれや、御奔走効いがあったと申すもので」

「とはいえ、まだ院の御意向が固まったわけではない。ただ御同意あって、次の集議には、義経が願いに、力を添えんと、お約束くだされたまでのこと」

「……が、こよい密かに、諸所へ分かれた御家中の面々によって、宵に授けおかれた御秘策が、首尾よく図にあたれば」

「あ、弁慶」

義経は、かれの声高な調子を制して、
「深夜の往来とて、滅多なことは口走るまい。その儀は、かたく内緒事ぞ」
と、口を封じた。
すると、その戒めに、符節を合わせたかの如く、数歩の後ろで、供の郎党たちが、
「あっ？」
と、何か物の怪でも見たように立ちよどんだ。
義経も駒をとめ、弁慶も振り返った。そして、
「何事ぞ」
と、後ろへ訊ねた。
大きな公卿館の前だった。破れ築土の見えるそこの横に、じっと、美しいものが屈み込んでいる。
夜目にさえわかる女房衣だった。紫かなんぞのむら濃染めに、銀摺の小桜模様が、玉虫色の妖しい光を放って見える。それを頭から打被いた人間は、物蔭に身をちぢめ、義経たちを、やり過ごそうとしていたらしい。
「はて。どこの女房？」
「いや、女性とは思われませぬ」
郎党たちは、口をそろえて告げた。
「――たしかに今、そこの築土の内より跳び下りたのを眼にいたしました。出合いがし

らに、われらが通りかかったため、あわててまた、路地へ身を伏せたものでござる。引っ捕えてみましょうや」

「待て待て、由緒あるお人の姫君でもあったらなんとする。そこの路地は行き止まりか」

「されば、袋路地のようで」

「弁慶。無礼のなきよう、側へ参って、まず物問いしてみよ」

「かしこまりました」

義経の駒わきを離れて、弁慶が寄って行こうとしたとたんである。女房衣の人影は、不意に起って、身をひるがえし、郎党たちをつき飛ばして、あざやかな迅さで逃げかけた。

あつもりの君へ

郎党たちは、あっといって、よろめき惑った。しかし、脱兎の勢いをみせた女房衣の人影も、多くを走りきらないまに、後ろから投げられた薙刀の柄に足をからまれ、路面へもんどり打っていた。

「こは、男ぞ。疑いもない曲者」

躍って行った弁慶は、かれに起つひまも与えず、ねじ圧えて、

「平家のものであろうず。名を申せ」
と、その女房衣を引き剝いだ。
十六、七の公達だった。狩衣に胴巻だけをよろい、美しい太刀を佩いていた。
「平家には相違ないが、名ある者ではない。名はいえぬ」
「さてこそ。さらば名のあるないにかかわらず、容赦はならぬ」
「運悪く捕われたからには、逃げ隠れはせぬ。なんとでもせよ」
「ははは、上わずったる言葉かな。年端もゆかぬ容子ゆえ無理もないが、斬るか、縄目かは、あれなる御主君のお胸にあること。こう参れ」
きき腕を取って、義経の馬の前に、公達を引きすえ、
「昨今、平家の者が、旧縁を頼って、洛中に忍び入り、あちこちに出没するとのうわさ、しきりでしたが、これもその一人か、自身の口より平家なりと申しまする。堀川までひき連れましょうや」
「どこやら、いやしからぬ人柄よの。年もまだうら若い」
義経は、じっと、見まもった。
悪びれもせず、少年の眼も、その人を見上げている。
いっこう、憎む気になれなかった。義経は、あらぬ方を振り向いて、
「そこの館は、たれのお館か」
と、訊ねた。

公達は無言だったが、郎党のうちでいう者があった。
「院の御近習、右大弁親宗卿のお住居かと思われまする」
「そうか……。右大弁殿のお住居か」
院の集議でも、平家追討を急にすることには、つねに反対をとなえているお人――。
根を洗えば、その右大弁親宗は、今は屋島にある平大納言時忠の弟御と聞く。
三種の神器だけは、どんな犠牲の下にも、無事迎え取りたいと念ずる後白河のお心をつかんで、親宗が、院と平家との和解の緒を見出そうと努めているのもむりはない。
あるいは――と人はいう。かれと屋島の平大納言との間には、もっと深い交渉があるのではないか、と。
義経は、公達の姿へ、眸を返して、
「和殿が家と、親宗卿とは、いかなる間柄ぞ。縁者でもあるか」
「いや」と、公達は面を横に振って――「縁者ではない。縁者の家なれば、忍んでは通わぬ」
「では、何しに忍んで行かれしぞ」
「恋人の家なれば」
夜目にも察しられるほど、公達の顔は、羞恥いに染まった。
嘘でない容子が、はっきり分かる。いうまいとする誓いと、いっていいこととを、覚悟の中にも、固く分別しているらしい。

「ほ、恋人の家とな。……うらやましいことよ」
揶揄(やゆ)ではない。思わず見せた義経の微笑だった。
「そして、和殿の家は、そもいずこか。いずこより恋に通い給うのか」
「おろかなお訊ねかな。平家と名のるからには、この都に住居はない。木曾が上洛のおり、一門ことごとく館を焼き払うて落ちのびたこと、御存知ないはずはなかろう」
「では、その遠き西海から、密かにこの都の内へ」
「恋ゆえには、百里の海山も遠いとはせぬ。また、いかなる敵方の関も恐ろしいとは思わなんだ」
「ただその君に、会いたさのためにか」
「いうまでもないこと。去年(こぞ)、都落ちのさいには、余りにも急なため、契(ちぎ)りし人との別れすら惜しめなかったものぞ。以来、筑紫(つくし)の果てや、潮路(しおじ)を漂う夢にも、それのみが、忘れがとうて、今生(こんじょう)、生ける間には、もうひとたび逢わでは死にきれぬ心地であった……。だが、その望みもとげて、こよい元の陣所へ立ち帰らんと、別れてここまで立ち出たところ、運や尽きけん……」
切々(せつせつ)な想いをこめて、自分の恋を語ることに、この公達はなんの怯(ひる)みも知らなかった。なおまだ、いま別れて来た恋人の髪の香を瞼(まぶた)に夢みつついうのである。
どういう家柄の、どういう育ちの人であろうか。余りにも素直な——と、義経は、東国武者の間には見られない優雅な人柄を、あわれとも、美しいとも、見るのであった。

「今より、元の陣所へ引っ返すところといわれたの。陣所とは、いずこの？」
義経が、かさねて、糺しかけると、公達は、急につよく顔を振った。
「それはいいとうない。軍に触るることは、何を問わるるも、唖と思われよ。たとえここで斬らるるまでも、口は開かぬ」
「名もいわず、帰る陣所も告げたくないとか」
「…………」
「ならば、強いては問うまい。したが、ここで果てんよりも、和殿も平家の陣にある者なれば、戦場で果てたいのが、望みであろうに」
「もとより、われとて武門の子、願いはそこにあれど、運の末なれば、ぜひもない」
「いや、放して上げよう」
「え？」
「弁慶。郎党ども五人を添えて、淀の遠くまで、この公達を、送ってつかわせ。途中、再び源氏の眼に怪しまれて、からめ捕らるることのなきように」
「や、わざわざ、お味方まで添えて、摂津境へ、放しておやりなされますか」
「都へ潜り入ったのが、軍務なればゆるし難いが、恋ゆえと聞いては、余りの優しさに」
「はて、お気の弱い」

「いやいや、この者一人ぐらい助け取らせたとて、軍のうえに、どれほどな違いがあろう。――いざ、夜明けぬまに」

と、なお疑っているらしい公達をうながして、追い立てるように、放してやった。

その影を、見送ってから、義経はふと、かれの捨てて行った女房衣と、そして文殻のような物を、道に見て、弁慶の手に拾わせた。

それは、美しい女文字の恋文だった。あきらかに、男のあて名もある。

「何、あつもりの君へ。……あつもりの君へ」

義経は何度も口のうちでつぶやき、そしてもう一度、遠くを見た。けれど、その影は、もう見えなかった。

「弁慶」

「はっ」

「この女房衣と、御文とを携えて、そこなる右大弁殿の御門をたたけ」

「いかなる御意を」

「夜陰なれどもと、慎しゅうお取次ぎを仰ぎ、直々お目にかかって、ありしことども、ありのままに、お告げ申せ。――そして、姫君の御手蹟やらこの女房衣など、万一、他の源氏武者の手にはいらば、後日、鎌倉殿へのお聞こえも悪しかりなん。御当家のおんため、秘めおかるるよう、義経が心くばりに候うと、この二品、お返し申しあぐるがよい」

「心得まいた。したが、だいぶ時刻も費えましょうず。その間、わが君には」
「先に堀川へ立ち帰る」
「供人もなく、ただ御一騎では」
「一人こそ、かえって心やすい。そのうちには、かねての計が行われ、洛中にも、やがて一と騒ぎ起ころうず」

大江山待ち

――一月二十六日の未明。
それは義経が、密かに各家の門を訪い、一方、部下をして、前夜から何事か画策させていた翌暁である。
「平家の大軍が来るというぞ」
「一ノ谷、生田などより、一せいに都の方へ向かっているとか」
「丹波には、はや、おびただしき平家の旗も見ゆると申す」
「すわや、事こそ」
たれがいい出したものやら、よくは分からない。
ただ流言は流言の怪しいまでの作用をもって、都人の暁の夢を驚かせた。
もっとも、木曾滅亡の血なまぐさい日から、まだ幾日も過ぎてはいない。人心はなお

不安な底波の中にあったし、事実、平家上洛の取沙汰は、去年から再々なことでもあった。

「こんどこそ、真やもしれぬ」

人びとは、暁闇を東西に飛ぶ馬蹄のとどろきにもあわてたし、わけて院の公卿たちの動揺はひどかった。

が、しかし。――やがて朝陽とともに、それは虚伝と知れ、人びとは胸なで下ろした。

摂津の武庫川方面からの早打ち、また、亀山地方からはいった情報などの誇張とは分かった。

けれど――

平家の大軍が、屋島から福原へ兵を上げ、東は生田川から、西は一ノ谷まで三里の間、海上に数千艘の兵船をうかべ、陸には柵、櫓、楯を構えて、高地低地、いたる所に、へんぽんたる紅の旌旗がながめられる――といったような伝えは、あながち誇張とのみは思われない。

どの方面からの情報もほぼ同様であり、特に、この二十六日の朝、淡路鵜島ノ御厨から院の大膳職へ着いた御厨ノ下司のいうところも、まったく、一致していた。

「此方ばかりが、追討をさしひかえ、神器の受授を計られても、平家方が威を誇って、武力の上洛を遂げんとするのでは、和解の道は見いだせぬ。とこうして、後手を踏む

な」

自然、院中には、そうした声が高まった。

その日も、院議は開かれたが、空気はまるでちがっていた。かの右大弁親宗からして、「大勢の赴くところ、今は抗し難い」と見たか、いつものようには粘りもしない。

それに反して、中納言朝方、参議兼光、藤親信など、口をそろえて「何は措くも、追討宣下の儀は、御猶予あるべきにあらず」と主張しあった。

法皇のお胸も、前日までは、和戦半ばしていた。といって、平家へのお憎しみは依然たるもので、和平は、一時の手段、三種の神器さえ取り上げてしまえばという方便の和であった。

だが、それも望みなしとすれば、即時、出兵に御異存はない。まちがえば、今の御位置も危ういこと、万々御承知なのである。

政略の交渉は捨て、ただちに、平家追討の挙に出よと、院議は、にわかな決定を見、

「範頼、義経には、いかなる勝算やある？」

と、上卿の議座から、武者床の方へ、御下問があった。

二人は、つつしんで、

「事々、大事に候えば、篤と両名にて談合のうえ、こよい亥ノ刻（午後十時）、再び院参な申しあげて、しかと言上に及びまする」

と答え、ひとまず退出した。

このさいも、梶原平三景時は、まったく口を閉じ、不本意な色を露骨にしていた。
これまでに、梶原が述べて来た意見では、
「宇治川で傷ついた兵馬をここで充分に養い、なお鎌倉の援軍をえてから戦うも遅くはない。蒲殿のお考えもまた、そこにある」
としていたのである。
覆された気がしたのであろう。景時は、院の座を立つとき、じろと義経を白眼で見た。その眼は、「ても、すずやかなお答えなどして、なんの方寸が胸にあるのか。平家は木曾ごときものではないに、＊黄口の御曹司、まだ真の強敵を知らぬそうな」と、どこやらに嘲侮の色さえもっていた。

その夕、義経と範頼とは、相互から出向いて、二条大宮の一寺院で落ち合った。
出陣の期、兵数の割り当て、食糧の輸送調達の方法。――またあらゆる作戦上の打ち合わせなど、評定するためだった。
もちろん、ここでは、梶原景時も、軍奉行として、座にあったし、安田義定、畠山重忠、大内惟義、三浦義澄、和田義盛、土肥実平、熊谷直実、渋谷重国など、およそ一方の将は、もれなく同座だった。
蒲殿が主座である。
だが、その範頼は、どっちかといえば、凡将型であった。ふっくらした容態のとお

り、円満ではあるが、定見のある人ではない。

自然、平三景時が、蒲殿以上にも、重きをなした。鎌倉殿の信任を背光とし、容易にその首をたてにも横にも振らない貫禄ぶりである。

軍議の劈頭に、その梶原がいった。

「味方内の勝ち算用は、えて当てにならぬ。――敵を読むことが大事だ。一ノ谷、生田にわたる平家の総勢は、そもどれほどな兵力か」

その問題一つでも、景時と義経との見方には、大きな食い違いのあることが表面に出た。

景時は座を見まわして、

「およそ、三万」

と、明言した。

世上、六万の大軍といわれている。だが、よもそれほどはと、景時にしても、少なく見ての勘定らしい。

そこでかれはまた、

「九郎殿の御推量は」

と、義経へ問うた。

義経は、言下に、

「一万五、六千騎、二万はくだり申す」

と答えた。
「わははは」
梶原は、笑った。
「井の蛙は大海を知らぬと申すが、九郎殿には、まだ平家の大を御存知ないとみゆる。いや、東国の小合戦しか、見聞きしておられぬゆえ、むりもないが」
「平三殿には、何を証拠に」
と、義経も譲らなかった。
激論になった。
けれど、義経の推定は、梶原のように、単なる経験による勘ではない。
かれは、ここ数日に集めた各地からの情報と、そして、兵船の数やその積載量などから割り出したところを、反駁の余地もないまで、ことば静かに説明した。
梶原も、ついに、黙った。そして、
「では、中をとって、二万と見るか」
と、つぶやいた。
そして、わが味方の総勢は、と次の議に移ったが、これは分かりきっている。洛中の源氏は、三千を超えない有様である。
これで、どういう勝算が立つというのか。軍に老功な平三景時は、元の持論に返って、

「ややもすれば、追討追討と、事もなげな揚言を人は好むが、堂上方に軍は分からぬ。たとえ院宣あればとて、勝算なくば、勝算なしと、明白にお答え申してこそ、真の武門だ。べつに策を立てればよい。第一、用兵に性急は禁物」
と、範頼を見て、同調を求めた。
「いかにも」
と範頼は、一も二もなくうなずいて、
「鎌倉の兄君が、軍奉行として付けおかるる平三殿のことば。わしも、もっともぞと思う。なんと九郎殿、こよいのお答えには、そのように申し上げようではないか」
「いや」
と、義経は、きっぱり、拒んだ。
「何よりは、時が大事です。今です。今を外さば、悔ゆるとも及びません」
「と申して、勝目のない戦いは」
「どうして、勝目がないといい切れましょう。東国の勇士は、平家武者の比ではありません。しかもその精鋭三千騎をここに持ちながら」
「でも、敵は何倍もの兵」
「寡をもって、衆を討つこと、幾多の先例が教えています。努めて、計を密にし、奇略を用いて、敵の虚を突けば」
すると、平三景時が、口をゆがめた。

「奇略とな。おもしろい、どんな奇略」

「おう、平三殿にも、ともに、よりよき智恵を貸し給え。軍奉行をさし措くには似たれど、義経が思案はこうぞ。人びとも座を近う寄せ合うて、まずこれを見候え」

義経は、一面の軍絵図をそこへ展げた。

一ノ谷、福原、輪田ノ岬、生田川、摂津丹波境までをふくめた敵地の仮想図なのである。

それについて、かれはかれのいだく作戦の秘を打ちあけた。渋谷重国のような老将すらも、その奇謀には耳傾けて、一語一語に、深くうなずいた。

梶原との間には、異論も出、けわし気な意見分かれにもなりかけたが、さいごには、かれも同意するしかなかった。諸将みな義経を支持して、「九郎殿のお考えこそ、われらも望む戦い」と、それに傾いたからである。

もう亥ノ刻という深夜、範頼と義経とは、打ちそろって、院へ伺候した。

後白河は、お待ちかねであったらしく、奏者を通して、出陣の期日、源氏の配備、作戦の要点などを聞こし召され、「可し」という御諚だった。

そのうえ、さらに、

「万一にも、平家がこのことを探り知ったら、なんじらの計も悉く破れ去らん。大事なここ幾日を、平家方に油断させおくため、近日、院より和平の使節が遣わされんと、

わざと平家の内へ申し触らしておくであろう。こは極秘の計ぞ。流説と混同して、戦の機を誤るな」

との内示もあった。

義経たちの作戦を扶けて、後白河もまた、院のお立場から政略的な奇手を用い、平家を騙し陥そうとの御腹中を、それとなく、もらされたものである。

こうして、すぐ二十九日。

範頼、義経らの源氏は、総勢三千、洛外の西北、大江山*（丹波境、今の老ノ坂）へ移り、そこで二月にはいった。

大江山に鳴りを潜めていた数日間に、敵状のさぐり、馬匹、軍備の吟味など、あらゆる用意が進められていた。また絶えず、院との間には機密な往来もあったことはいうまでもない。

そのうちに、院の方から〝二月七日早暁〟という暗示めいた通達が来た。「その朝をもって、福原一帯の平家へ総懸りせよ」との意味とうけとれる。この一事――日と時刻との諜し合わせこそ、大江山に踏みとどまって、かれらの待ちぬいていたものだった。

「今は」

とふるい起ち、総勢を二つに分けた。

一軍は、範頼を大将に、摂津の昆陽野（伊丹西方）から西の宮、生田川への平野を進もうとする大手軍の二千騎。

また一方の義経は、搦め手軍一千をひきいて、丹波路を亀岡、篠山、小野原とすすみ、さらに山路の深くを迂回して、鵯越えから、敵地の真上へ、攻めかかろうというのである。
　そこまで出るには、およそ山坂二十里の上はあろう。途々とて、敵にも出会おう。強行軍を覚悟せねばならない。
　で、範頼の方は、二月四日の寅ノ刻（午前四時）に立ったが、義経は前夜の三日の夜から、すでに大江山を発足していた。
「やれやれ、死のうも生きようも、これで戦場へ出る張り合いもある」
　暗夜を行く一千騎の中で、ふと、こういったのは、畠山次郎重忠であり、それに笑顔を振り向けて、うなずいたのは土肥実平だった。
「いかにも、何やら、さっぱりしたな。蒲殿には相すまぬが、あの平三の権柄面が、そこらに、ちらちらせぬだけでも」
「あはははは」
　二人は、一しょに笑った。
　こう二人はもともと、鎌倉を立つときから、範頼麾下の部将であった。
　けれどその編成も、瀬田、宇治川辺からすでに乱れがちで、こんどの福原攻めに当っては、いよいよ、はっきり表面に出た形である。「蒲殿はよいが、梶原ごとき者の下風にいるのは」と、忌避したのだ。もちろん、談合のうえではあったが、大江山からは二

人とも範頼を離れて、義経の手に従うことになり、兵数も少なく、その使命も決死的な搦め手勢の中に投じて、むしろ喜々と馬を打たせて行くのだった。

とかく、軍監の梶原景時をきらって、義経の麾下に付きたがる者は、この二人以外にも多かった。これは果たして行く末、義経にとってよいことだったか、悪かったか、それまでのあすの前途は、考えもしない騎虎の面々ばかりであった。

皇室関係略系図
後三条天皇 71
聡子内親王 仁和寺一品宮(出家)
白河天皇 72
篤子内親王 斎院 堀河中宮
実仁親王 白河皇太子
俊子内親王 斎宮
佳子内親王 斎院
輔仁親王 三宮
源有仁 花園左大臣
敦文親王 一宮
覚行法親王 法親王の始 中御室
媞子内親王 郁芳門院
令子内親王 斎院
堀河天皇 73
善子内親王 斎宮
禛子内親王 斎院
恂子内親王 斎宮
官子内親王 斎院
覚法法親王 仁和寺
悰子内親王 大宮斎院
藤原璋子 待賢門院 崇徳・後白河両天皇の生母
鳥羽天皇 74
藤原得子 美福門院 近衛天皇・八条院の生母
最雲法親王 星子座主の始 宮法印
喜子内親王 斎宮
崇徳天皇 75
源行宗養女
統子内親王 上西門院
後白河天皇 77
本仁親王 五宮
覚快法親王
暲子内親王 八条院
近衛天皇 76 (体仁親王)
姝子内親王 二条后 高松院
禧子内親王 斎院
妍子内親王 斎院
頌子内親王 斎院
重仁親王 一宮
二条天皇 78 (守仁親王)
亮子内親王 殷富門院
守覚法親王 仁和寺
以仁王 高倉宮
式子内親王 斎宮
円恵法親王 園城寺 八条宮
高倉天皇 80
道法法親王 仁和寺
覲子内親王 宣陽門院
承仁法親王 梶井宮
好子内親王 斎宮
休子内親王 斎宮
惇子内親王 斎宮
僐子内親王 斎院
六条天皇 79
王子某 北陸宮
道尊 宮僧正
範子内親王 坊門院
安徳天皇 81 (生母は平徳子)
守貞親王 持明院宮
惟明親王 三宮
後鳥羽天皇 82

桓武平氏略系図

桓武天皇
葛原親王
高見王
高望王 賜平姓
国香
繁盛
維茂
貞盛
維衡
正度
維将
維時
直方
聖範
時直
時家 北条四郎大夫
時方
時兼
時貞
時政
義時
正衡 出羽守
正盛 讃岐守
忠正 右馬助
忠盛 刑部卿
清盛 太政大臣
貞衡
貞清
清綱
季衡
盛国 主馬判官
盛信
盛俊 越中前司
盛嗣
盛康
盛範
盛光
貞光
家房
家貞
貞季
兼季
盛兼
信兼
兼隆
正季
範季
季房
家貞
貞能
季宗
宗清 弥兵衛
維盛
貞度
盛房
業房
淡路守
知度 三河守
重衡 本三位中将
知盛 新中納言
知忠 伊賀大夫
知章 武蔵守
宗盛 内大臣
能宗 （副将）
清宗 右衛門督
基盛
行盛 左馬頭
重盛 小松内府
宗実 土佐守
忠房 丹後侍従
師盛 備中守
有盛 小松少将
清経 左中将
資盛 新三位中将
盛綱
維盛 権亮少将
女子
六代

高棟王 賜平姓
惟範
時望
直材
親信
良文
宗平
宗遠
実平
良将
将門
行義
行親
定家
時範
実親
範家
親範 参議
範国
経方
知信
時信
滋子 建春門院 後白河院妃
時子 二位尼 清盛妻
親宗 中納言
女子
親長
範国
時忠 平大納言
夕花 源義経室
時宗
時実 讃岐中将
忠度 薩摩守
頼盛 池大納言
為盛
光盛
仲盛
保盛
家盛
教盛 門脇宰相
忠快 中納言律師
業盛 蔵人大夫
教経 能登守
通盛 越前守
経盛 修理大夫
敦盛 無官大夫
経俊 若狭守
経正 皇后宮亮
徳子（建礼門院） 高倉天皇中宮
女子 花山院兼雅室
清貞 尾張守
清房
盛子 白河殿 近衛基実室
女子 冷泉隆房室
女子 近衛基通室
女子 坊門信隆室
女子 後白河院女房
女子 花山院兼雅家女房

清和天皇
貞純親王
経基王
満仲
満政
頼国
頼光
頼親
頼信 伊予入道
頼平
頼弘
頼綱
国房
光国
光信
明国
仲政
行国
頼政 源三位
頼行
光重
頼盛
仲綱 伊豆守
兼綱
仲家
頼兼
光基
光重
光長
光義
頼房
頼俊
頼遠
有光
(四代略)
親治
(二代略)
頼基
有治
清治
俊治
義治
頼義
頼清
仲宗
顕清
(二代略)
基国
行綱
知実
宗綱
有綱
義家 八幡太郎
義綱 賀茂二郎
義光 新羅三郎
義業
義親
義国 足利式部大夫
為義
(義綱の子)
義時
義信
為義
義重 新田太郎
義康 足利陸奥判官
義朝 左馬頭
義賢
義憲
頼賢
頼仲
為宗
為成
為朝 鎮西八郎
仲家
義仲 木曽冠者
仲光
義高 志水冠者
義宗
義範
義俊
義兼
義兼
義清
義行
義成
義房
義氏
義範
義平 悪源太
朝長
政子
頼朝
義門
希義
範頼
全成
(今若)
義円
(乙若)
百合野
忠義
大姫
頼家
実朝
一幡
公暁
千寿

藤原氏(北家)略系図
道長
頼通
師実
師通
忠実
忠通
(法性寺殿)
頼長
近衛
基実
(中殿)
基通
九条
基房
(松殿)
師家
冬姫
兼実
(月輪殿)
兼房
慈円
聖子
(崇徳中宮)
育子
(二条中宮・藤原実能の娘)
呈子
(近衛中宮・藤原伊通の娘)
兼長
師長
多子
(近衛皇后・藤原公能の娘)
満季
満快
頼範
頼明
頼賢
頼季
満実
頼任
義政
遠光
光平
光長
光盛
盛光
忠光
清和源氏略系図
義清
盛義
親義
有義
義信
惟義
朝信
清光
為仲
新宮十郎
行家
太郎
光家
三郎
行宗
為家
昌義
義定
武田太郎
信義
忠頼
兼信
有義
信光
遠光
光明
長清
義定
義輔
義成
義季
山本冠者
義経
義高
義兼
義季
親義
義宗
隆義
夕花
静
義経
(牛若)

義経進路
篠山
山城
小野原
丹波
京都
播磨
亀岡
三草山
土肥実平進路
摂津
義経進路
範頼進路
三木
淀川
河内
昆陽野
生田森
尼ヶ崎
藍那
鵯越
大坂
明石
淡路島
一ノ谷
一ノ谷の合戦
播磨
京都
摂津
備前
姫路
尼ヶ崎
岡山
明石
大坂
神戸
藤戸
河内
和泉
児島半島
小豆島
淡路島
高松
和歌山
丸亀
大和
讃岐
鳴門
徳島
紀伊
阿波
田辺
新宮
土佐
白浜
串本
高知

屋島の合戦
播磨
摂津
渡辺
大坂
明石
義経軍進路
和泉
小豆島
屋島
古高松
牟礼
志度
津田
大内
白鳥
淡路島
讃岐
三木
引田
大坂越
鳴門
板野
吉野川
徳島
勝浦
阿波
源平合戦要図
石見
備後
備中
安芸
広島
長門
周防
山口
三田尻
赤間関
柳井
倉橋島
今治
新居浜
松山
伊予
豊前

註解

＊11 **捲土重来**（けんどちょうらい）
（中国の杜牧の詩句から）一度負けた者が、また勢力を盛り返して来ること。けんどじゅうらいとも。

＊15 **卿相雲客**（けいしょううんかく）
卿相と雲客。昇殿を許された官人。公卿殿上人。卿相は、天子をたすけて政治を執る人々で、太政大臣、左大臣、右大臣、内大臣及び大・中納言と参議など。けいそうとも。

＊42 **悪七兵衛景清**（あくしちびょうえかげきよ）　?～建久六?（一一九五?）
平安末期の武士で、通称悪七兵衛・上総七郎兵衛尉。父は上総介藤原忠清、母は不詳。「平家物語」では、越前前司平盛俊の二男とされているが、盛俊には盛継という二男があるので、どうやら藤原忠清の二男説が多数派。従って平藤二説でその行動も二説がある。

＊45 **嫌厭**（けんえん）
きらっていやがること。いやになること。

＊75 **口**（くち）**さがなき**
批評がましく口うるさい。口うるさく言いふらす。

＊100 **主典代**（しゅてんだい）
中古、院の庁で出納（すいとう）をつかさどった官人（役人）。「代」は禁中の官と区別するため。

＊102 **長袖**（ちょうしゅう）
武士に対して長い袖の衣服を着た人々をさす語。公卿・僧・医師・神官など。ながそでとも。

（三）

＊145 **円恵法親王**（えんえほっしんのう）　仁平二～寿永二（一一五二～八三）
後白河天皇の第五皇子で、母は兵衛尉信重の女（むすめ）坊門局、通称八条宮。無品（むほん）ながら天王寺別当の地位にあったが、治承四年（一一八〇）六月、以仁王・源三位頼政の挙兵事件に連座して、検校職を停止（ちょうじ）中のところ、寿永二年（一一八三）十一月十九日、義仲のクーデターに遭い、華山寺付近で殺害された。

＊151 **捨**（す）**て小舟**（おぶね）
乗る人もなく、置き去りにされている小舟の意から、頼るもののないあわれな身の上のたとえ。

＊153 **意馬**（いば）
意、すなわち心の働きの移りかわりを奔馬の動きの激しさにたとえた語。「意馬心猿（いばしんえん）」といえば、煩悩（ぼんのう）のために情（じょう）が動いておさえがたいことを、走る馬・さわぐ猿にたとえた仏語。

＊158 **傀儡**（かいらい）
他人の手先になって思いのままに使われること。

＊161 **下世話**
世間のうわさ。世俗のよく口にする言葉。

＊184 **えならぬ**
言うに言われぬ。すばらしい。

＊371 **麦秋**
陰暦四月の別名で、麦の実り熟する時季のこと。ほとんどの穀物は秋に熟するが、麦だけは初夏に熟する。「秋」という字がはいるので「麦秋」は秋のことだと勘違いすることが多い。むぎあきとも。

＊374 **守護不入**
守護使不入とも言い、中世、守護の検断使が入部するのを禁ずること。不可侵の地にも。

＊387 **都人**
都に住んでいる人。都の人。とじん。都人士など。また、風流な人、風雅な人のこともいう。

＊397 **大史**
太政官・神祇官における主典で、少史の上に位するもの。中国・古代の官名に由来し、史官・暦官の長。国の法規や、宮廷内の記録などをつかさどった。

＊426 **右大弁親宗卿**　康治一～正治一（一一四二～一一九九）
平安末期から鎌倉初期の公卿・平親宗のこと。兄に時忠、姉に清盛の妻で二位尼の時子、妹に後白河院妃で建春門院の滋子がある。治承四年（一一八〇）、つまり頼朝が石橋山に敗れた年の十二月には、早くも頼朝に通ずるなど、平家の血をうけながら、極めて微妙なものがあったが、文治三年（一一八七）には中納言・正二位にすすみ、堂上平家の中心となり、後白河院の近臣として活躍した。

＊433 **黄口**
鳥の雛のくちばしの黄色なことから、年齢が若く、経験が足りないこと、またその人のこと（黄口児）。

＊438 **大江山**
丹波と丹後の境、福知山市と与謝郡加悦町と加佐郡大江町の境の山で、別称千丈ケ岳。「土俗の説に丹波の国大江山の凶賊酒呑童子の族、茨城童子は普甲の一峰千丈岳に栖めりとつたふ」とあるとおり、酒呑童子の根拠地と伝えられている。

＊439 **鵯越**
「御曹子三千余騎にて一谷後鵯越を落さんとて、丹波路より搦手へこそ向はれけれ」云々とありて其言ふ所文飾に過ぎ実すくなし逆落の一段最地理にそむく、唯其大意を採るべし——とあるように、平家物語はいささか張扇的な誇張にすぎ、実際は、神戸市兵庫区内、六甲山脈を越えて北区山田町藍部付近に通じる山路で一ノ谷の背後には位置していない。

「一壺の茶」

早乙女貢（さおとめみつぐ）

私たちの世代は大半そうだろうと思うが、幼年倶楽部、少年倶楽部、キングあるいは講談倶楽部と成長に従って読書のランクが上ることに決っていて、そのことに何の疑念もなく、むしろ成長の具体的認識と喜びを抱いたものだ。

私の記憶では、幼年倶楽部から少年倶楽部へ進んだときが最も嬉しかった。そして、そのときが吉川英治に接した最初だった。

正確には何年だったか記憶にないが、当時接したのは「天兵童子」だった。むさぼるように読んだ。大佛次郎の「花丸小鳥丸」や山中峯太郎の「敵中横断三百里」や佐藤紅緑の「英雄行進曲」などがその前後にあったように思う。

「天兵童子」の挿絵は伊藤彦造だったたか。どうしてか「宮本武蔵」は当時読んでいない。世代が違うのだろう。

「天兵童子」から急激に話が飛ぶことになるが、たしか十六、七のころ「三国志」を夢中で

読んだ。これは単行本でそう厚くはなく、恩地孝四郎の鶯色に巻雲の浮遊している装幀が悠々たる古代中国の夢を表現していたようだ。挿絵は矢野橋村で、サインは知道人になっていたように思う。

　第一巻の終章だったか、桃園に義を結ぶところや、開巻劈頭の黄巾賊の章で、劉備玄徳が大江の岸で中国の広い天地の中に大いなる夢を馳せるところ、そして老母への土産に一壺の茶ノ葉を持ち帰りながら、そのために家宝の剣を黄巾の賊に奪われてしまったのを知って、母はかれを誘って崖から、茶の葉を壺ごと投じて、何が最も大事かを諄々と諭すところなど、胸をしめつけられるような感動を味わった。

　他の人が書いたら三国志は単なる戦乱絵巻に過ぎないのを、吉川英治の手にかかると、ぐっと身近な話になって引き寄せられる。たしかに、戦前の日本の母は、大方が、玄徳の母のように身を以って子の教育をしようとしていた。吉川英治の小説は、その意味でも、以前の日本の、日本人の小説だったと思う。

（作家）

解説　国民作家と国民文学(二)　その生い立ちの重さ

粕谷一希（評論家）

吉川英治の波瀾に富んだ生涯は、今日ではかなり明瞭になってきている。ひとつは池島信平氏が慫慂したといわれる「忘れ残りの記」（昭和三十年）という氏自ら筆をとった「詩と真実」によって、もうひとつは尾崎秀樹氏の「伝記　吉川英治」（昭和四十五年）によって。とくに後者は、尾崎氏の丹念な取材と調査によって、それまで曖昧な霧のなかにあった世に出るまでの生い立ちが、繊細な文学的造型を得ている。

国民文学と呼ばれるものが、どのような資格要件を備えなければならないか、はかなり難しい問題だが、その文学が広く国民の各層にわたって広い共感を呼ばなければならないこと、知識階級や政界・財界の指導者を含めた範囲に説得力をもつことが一方の条件であるが、同時に広く庶民階層の支持と共感がなければならない。

そのためには、作家の側にそれにふさわしい生活体験が必要になってくる。とくに明治以降、敗戦までの近代日本には、構造的に固定された貧困階級、下層社会が厳として存在した。貧苦のなかに生きること、そのなかの刻苦勉励の物語がいかに大量に生産されたことか！　吉川英治の生い立ちはそうした逆境のなかを生き抜き、何度も絶体絶命に近い立場に立たされながら、その稀有な文才を発揮することで、苦境を切り抜け、ついに作家として立つことになる、ひとつの典型的物語である。しばらく、尾崎氏の「伝記」に沿ってその跡を追い、そこに含まれる問題を考えてみよう。

吉川英治は明治二十五年、横浜に生れている。父は直広、母はいく、父方の家は小田原藩の下級武士、母方の家は佐倉藩の上級武士である。この小田原と佐倉の間に古くから人的交流があったということも面白い現象だが、父直広という人物は、維新の変革後、武家の商法で転々と職業を変え、没落してゆく典型の一人である。

母いくは、攻玉塾女子科という当時としての高等教育を受けながら、仲人口に騙されて前歴のある、職業も定かでない直広に嫁いでしまった。

それでも開港地横浜の開かれた雰囲気と活気は、吉川家にも及んだ。県庁の酒税官、牧場経営、家塾、魚市場の書記を転々とした直広は、居留地の商館や税関に出入りし、ブローカーめいたこと

をしているうちに、高瀬理三郎と識り、横浜桟橋合資会社を創業することになる。これで吉川家は小康を得て、英治が十一歳のときまで、かなり余裕のある生活を送ることができた。家の近くにあった植木商会の花畑、根岸の競馬、中国人の葬儀など、横浜ならではの風俗、風物が幼い英治の脳裏に刻みつけられ、また貸本屋に熱中する読書好きの少年を育んだのである。

けれども不幸は突然やってくる。小学校四年を終え、高等小学校一年生の秋、英治は父に呼ばれて——もう学校へ行く必要はない、ことを告げられる。父直広に即して考えると、この破局は彼自身の性格悲劇に由来しているように思われる。誇り高い武士気質、酒色に溺れやすい性向、移り気で焦点の定まらない志向、劣等感と背中合せの虚勢など、不幸に追い討ちをかけられてゆくうちに、多くの美質も逆の裏目に出て、先輩高瀬理三郎に背き争うことで、訴訟事件を惹き起しそれに負けたのである。

吉川英治の奥行きのある性格形成は、この父親を凝視し、自らの内にも潜む性格の矛盾・相克を克服していったところにあるのではあるまいか。そして絵筆を取ったという父の芸術家気質と、おそらく母のなかにあった読書好き、作文好き——母いくの書いた直筆の手紙が記念館に飾られているが、その巧まぬ真情の披瀝は胸を打つ——の資質が、逆境のなかで、何百万分の一の可能性として、現実化し、実現したところに、作家吉川英治の原質があるように思われる。

以後、川村印章店の住込み店員、印刷所の少年工、小間物行商人、ヨイトマケ、税務監督局の給仕、日雇い、按摩、雑貨商続木商店の住込み店員、そして横浜ドックの工員と、転々と職を変えながら、悲惨のどん底にあった吉川家の家計を支えるために、英治少年がなめた辛酸の数々は言語に絶する。もちろん、これに類した悲惨な物語が今日でも絶無ではあるまい。けれども十数歳の子供の肩に、一家の生計がかかり、貧困のなかで妹を死なせ、あるときは金がなくて一昼夜以上、食べるモノがなかったといったどん底の生活は、今日あるまい。

おそらくこのどん底で一家離散と最後の崩壊（ほうかい）を免（まぬが）れたのは、英治少年の家を想う心と、母いくの人間業を越えた忍従であったろう。その英治少年が、最後に自由意志を表明できるためには、横浜ドックで、いわゆるかんかん虫（自由労務者）に等しい境遇で、九死に一生を得る事故を惹き起し、病院にかつぎこまれるという事件を経験しなければならなかった。英治少年はそこまで悲運のどん底に降りてゆかねばならなかったが、そのどん底で命を取りとめるという強運をも有（も）っていたことになる。

この強運こそ、無数の多くの同じ境遇の少年たちのなかから選ばれて、国民作家として自らを実現してゆく神の配慮でもあったろう。

病床から立ち直ったとき、彼が上京の希望を述べると、——苦学も楽ではないぞ、といいながら、父もその上京を許し、母は一円七十銭の金を出してくれたという。そこまで家のために勤めた

少年を、自由にさせることは、その時点で両親の義務として両親に映じたことであろう。逆に英治少年にはそう感じさせる犯しがたい尊厳が備わっていたように思われる。そのとき英治は十九歳であった。

上京は新しい世界を拓(ひら)いてくれた。ラセン釘工場、手提金庫製作所と移りながら、やがて金属象眼の下絵描きの徒弟となる。その徒弟生活から独立したのは大正二年のこと、大正三年、二十二歳にして、浅草の新堀端に一戸を構え、上京以来はじめて両親、弟妹と一緒に住むことになる。

十一歳で始まった苦難は、二十二歳にして微かな前途への光明と多少の安定をもたらすことになった。二十二歳といえば、今日、大学を卒業する年齢である。戦後の日本は、子弟を大学へという親の願いを反映して、四十%の青年が大学教育を受けている。豊かな社会で過保護に育った青年たちは、むしろ〝悩みなき〟生活を歎いている。明治以降、辛酸をなめた貧苦のなかの青春が培(つち)かった貴重な美質と美徳はいまはない。ないことの幸福に拍手すべきか。幸福のなかの不安は、失われた美徳に代って人間の根性を養うものは何かという現代のパラドックスであろうか。学校教育は子供たちに、何を与えているのであろうか、という根本問題がそこにある。

ともあれ、戦前の日本で、大衆文学という名で呼ばれた文学の世界が、長谷川伸、吉川英治、山本周五郎と、貧苦のなかに生きる人生への共感として成立していることは、一考に値いする問題で

ある。それに比べれば、純文学の世界とは、精巧なる閑文字の世界にすぎない。閑文字には閑文字の存在理由と責任があるのだが、その両者を突きつめなければ国民文学という主題は浮かびあがらない。

吉川英治は、この十二年間の辛酸のなかでも、読書と作文への趣好を手放していないが、上京して、象眼細工師として多少の安定を得ると同時に、「日本新聞」の川柳欄に投稿し、その選者井上剣花坊との個人的接触が始まる。剣花坊を介して、柳樽寺川柳会の同人となる。この同人となることで、吉川英治の文学的青春が開花することになる。吉川雉子郎の誕生であり、シュトルム・ウント・ドラングの時代の開始である。

そこでの交友が、彼の文学的感受性と表現形式を錬磨し、自由を満喫し、酒を覚え、女を識る。そしてより大切なことは、同人正木十干棒たちと箱根の山を越えて、初めて関西に旅をしたことであろう。彦根、琵琶湖、京都、須磨、明石、姫路、堺、奈良、と巡歴したことは、それまで抑圧されていた吉川英治の世界を一挙に解放し、広い視野を養う上で決定的な効果をもったことであろう。歴史文学の作家誕生への転機は、この旅にあったと推測される。

もう一つ重要なことは、「古川柳隅田川考」というエッセイの結実である。それは川柳を単に楽しむのではなく、川柳を介して歴史と風土への省察に昇華させる作業であり、学問である。

文学的青春の開花、交遊と旅と省察と、不幸であった十代の少年時代の後に、社会人の自立と文学への志向を満たす環境と基盤を、運命の女神は与え賜うたのであろう。

吉川英治歴史時代文庫の表記について

吉川英治歴史・時代文庫の表記は著作権者との話合いで、児童作品を除き、次のような方針で行っております。

一、作品は新かなづかいを原則とする。ただし、引用文は原文のままとする。

二、送りがなは改定送りがなに準拠する。ただし、原文が許容されている送りがなを使用している場合は本則によらず、そのままとする。

　（例）引揚げる。打明ける。

　また、辺の場合など、ヘンかアタリか、親本のルビを基とし、ルビなく、どちらともとれるときは、辺のままとする。

三、原文の香気をそこなわないと思われる範囲で、漢字をかなにひらく。ただし、作品別、発表年代別に慎重を期する。

　（例）然し→しかし　　但し→ただし（接続詞）
　　　噫→ああ　　呀→あっ（感動詞）
　　　迄→まで　　位→くらい（助詞）
　　　凝っと→じっと　　猶→なお（副詞）
　　　儘→まま（形式名詞）
　　　　例外の場合
　　　御机→お机（御身→御身（おんみ））（接頭語）

四、会話の『　』は「　」にする。

五、くりかえし記号　ヽ　ゝ　〱　々は原則として使用しない。

　なお、作品中に、身体の障害や人権にかかわる差別的な表現がありますが、文学作品でもあり、かつ著者が故人でもありますので、一応そのままにしました。ご諒承ください。

ISBN4-06-196556-5

C0193 P660E (1)

定価660円(本体641円)

平家追討の院宣ならびに朝日将軍の称号を賜わり、生涯最良の日々を味わう義仲。だが、彼の得意満面の笑みも次第に歪(ゆが)み始める。牛車の乗り方ひとつ知らない田舎そだちだから、殿上づきあいは苦手だ。相手は老猾な後白河法皇。義仲の凋落は水島合戦から始まった。反撃の平家、背後から襲いかかる鎌倉勢、加えて院方――と義仲は四面楚歌。一世の風雲児も、流星の如く消えてゆく。